

広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所
合同庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書

松江城下町遺跡
(母衣町68)

平成27(2015)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所
合同庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書

松江城下町遺跡
(母衣町68)

平成27(2015)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団



SK01 一括出土磁器 (1)



SK01 一括出土磁器 (2)

例 言

1. 本書は、平成 23 年度から 24 年度に実施した、広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所合同庁舎新営工事に伴う松江城下町遺跡（母衣町 68）の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、最高裁判所から松江市教育委員会が委託を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。

3. 本調査地の名称・所在は以下のとおりである。

（名 称） 松江城下町遺跡（母衣町 68）

（所在地） 島根県松江市母衣町 68 番地

4. 現地調査・報告書作成期間

発掘調査 平成 23 年 11 月 1 日～平成 24 年 11 月 31 日

報告書作成 平成 24 年 12 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日、
平成 26 年 4 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積 10,410m² 調査面積 2,674m²

6. 各年度の調査組織は以下のとおりである。

[平成 23 年度] 本発掘調査

依 頼 者 最高裁判所

主 体 者 松江市教育委員会

事 務 局 松江市教育委員会文化財課

調 査 指 導 島根県教育庁文化財課

実 施 者 財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課

教育長 福島律子

課長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則

専門企画員 曾田 健、副主任 徳永 隆

文化財保護主任 松尾充晶

理事長 松浦正敬

課長 藤原 博、調査係長 中尾秀信

専門企画員 後藤哲男

主任（調査員）落合昭久 [調査担当者]

嘱託（調査員）園山 薫

嘱託（調査補助員）門脇祐介、福光龍治、

渡邊真二

[平成 24 年度] 本発掘調査

依 頼 者 最高裁判所

主 体 者 松江市教育委員会

事 務 局 松江市教育委員会文化財課

調 査 指 導 島根県教育庁文化財課

教育長 福島律子

課長 錦織慶樹、調査係長 赤澤秀則

専門企画員 曾田 健、副主任 徳永 隆

企画幹 今岡一三

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団 理事長 松浦正敬
埋蔵文化財課 課長 藤原 博、調査係長 古藤博昭
専門企画員 後藤哲男
主任(調査員) 落合昭久
囑託(調査員) 秦 愛子[調査担当者]
囑託(調査補助員) 門脇祐介、福光龍治

[平成 26 年度] 報告書作成業務

依頼者 最高裁判所
主体者 松江市教育委員会 教育長 清水伸夫
事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 安田賢治
文化財統括官(埋蔵文化財調査室長兼務) 錦織慶樹
まちづくり文化財課 まちづくり文化財課長 永島真吾
埋蔵文化財調査室 調査係長 赤澤秀則
専門企画員 宍道 元、主任 徳永 隆
調査指導 佐賀県立九州陶磁器文化館 名誉顧問 大橋康二
大田市教育委員会教育部 石見銀山課 西尾克己
財団法人米子市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 佐伯純也
実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 清水伸夫
埋蔵文化財課 課長 三島秀幸、調査係長 古藤博昭
囑託(調査員) 秦 愛子[調査担当者]
囑託(調査補助員) 北島和子

7. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の機関や方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい(敬称略、五十音順)。

阿部賢治(島根県埋蔵文化財センター)、大矢幸雄(松江絵図地図研究会)

澤田正明(島根県立古代出雲歴史博物館 学芸員)、下村奈穂子(筑波大学 人間総合科学研究科)

鈴木裕子(株式会社四門 文化財事業部 文化財研究室主任研究員)、西田宏子(根津美術館 副館長)、乗岡 実(岡山市教育委員会)、松尾信裕(大阪歴史博物館 研究主幹)、

村上 勇(広島県三次市立奥田元宋・小田女美術館 館長)、渡邊貞幸(出雲弥生の森博物館 館長)

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書・整理、遺構の浄書は、以下の者が行った。

内田洋子、小原明美、金坂 昇、木村由希江、須藤佳奈子、角 優佳、高島孝子、千代田絵美、藤原智美、細田純子、松本祥子、北島和子、秦 愛子

9. 出土遺物のうち文字資料の判読については、内田文恵氏、和田美幸氏(松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課史料編纂室)のご教示を得た。

10. 本書の執筆・編集は松江市まちづくり文化財課の協力を得て、秦が行った。

11. 本書における方位は、平面直角座標北を示し、座標値は世界側地形に準拠した平面直角座標系第

Ⅲ系の値である。また、レベル値は海拔標高を示す。

12. 本書における遺構記号は以下のとおりである。

SA = 塀・柵 SB = 建物 SD = 溝 SK = 土坑 SP = 柱穴 SX = 不明遺構

なお、遺構番号は、調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直した。

13. 本書における土器区分・分類・編年は 陶磁器編年：九州近世陶磁学会『九州陶磁器の編年—九州近世陶磁学会 10 周年記念—』（2000）を参照した。なお、肥前陶磁器の時期区分は以下のとおりである。なお本文中では、佐賀県立九州陶磁器文化館 名誉顧問 大橋康二氏による詳細な年代観を指導頂けた遺物については、その年代観を（ ）内に記した。

I 期 1580～1610 年代

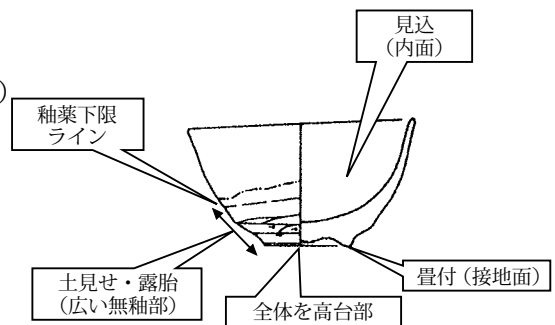
Ⅱ期 1610～1650 年代(磁器の場合は 1610～)

Ⅲ期 1650～1690 年代

Ⅳ期 1690～1780 年代

V 期 1780～1860 年代

14. 遺物の部位名称は、右記の図を参照。



15. 本書における「土層の色・質」は、調査時の記載をそのまま使用している。

16. 掲載した遺構図の縮尺については、各図に縮率とスケールを明記した。掲載した遺物の実測の縮率は、原則、陶磁器・土師器・土器・金属製品・石製品・漆器は 1/3、木製品・瓦は 1/4、銭貨は 1/2 とした。漆器の塗色及び陶磁器の釉薬範囲（鉄釉・青磁釉）、土師器の油煙痕はトーンで表現している。

17. 出土遺物、実測図および写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

18. 科学分析については以下の機関や方々からご協力をいただいた（敬称略）。

土壌・植物：渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、動物遺存体：石丸恵利子（広島大学 総合博物館 埋蔵文化財調査部門）

本文目次

例 言	
第1章 調査の経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 城下町絵図に見る調査地	6
第3章 調査の方法と基本層序	
第1節 調査方法	8
第2節 調査概要	8
第3節 基本層序	10
第4章 屋敷境	
第1節 はじめに	12
第2節 屋敷境A・B	13
第3節 屋敷境C	47
第4節 屋敷境D	60
第5節 屋敷境E	66
第5章 北西屋敷	
第1節 基本層序	73
第2節 第1遺構面	74
第3節 第2遺構面	86
第4節 第3遺構面	91
第6章 南西屋敷	
第1節 基本層序	106
第2節 第1遺構面	107
第3節 第2遺構面	119
第4節 第3遺構面	126
第7章 北東屋敷	
第1節 基本層序	143
第2節 第1遺構面	144
第3節 第2遺構面	146
第4節 第3遺構面	148
第8章 南東屋敷	
第1節 基本層序	155
第2節 第1遺構面	156
第3節 第2遺構面	157
第4節 第3遺構面	161
第9章 総括	
第1節 はじめに	168
第2節 第1期	168
第3節 第2期	169
第4節 第3期	171
第5節 第4期	172
第6節 第5期	174
第7節 第6期	176
第8節 結語	177

挿図目次

島根県・松江市位置図	第50図	SD06 出土遺物	59
第1図 調査地の位置	第51図	屋敷境D 変遷図	61
第2図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図	第52図	屋敷境D 土層断面図	62
第3図 松江城下町の絵図の変遷	第53図	SD08 出土遺物	62
第4図 調査区配置図	第54図	SD09 出土遺物(1)	63
第5図 調査グリッド配置図	第55図	SD09 出土遺物(2)	63
第6図 基本層序模式図	第56図	SD10 出土遺物	64
第7図 屋敷境溝 変遷図	第57図	SD12 出土遺物	65
第8図 屋敷境A・B 配置図	第58図	SD13 平面図・土層断面図	66
第9図 SD01 土層断面図	第59図	SD13 出土遺物	66
第10図 SD01 出土遺物	第60図	北西屋敷 基本層序土層断面図	73
第11図 SD02 平面図・断面図	第61図	北西屋敷 第1遺構面遺構配置図	74
第12図 SD02 土層断面図	第62図	SK10・11 平面図	76
第13図 SD02 出土遺物	第63図	SK10・11 土層断面図	76
第14図 SD03 平面図・断面図	第64図	SK10 出土遺物	76
第15図 SD03 土層断面図	第65図	SK11 出土遺物	77
第16図 SD03 出土遺物(1)	第66図	SK12・13 出土遺物	79
第17図 SD03 出土遺物(2)	第67図	SB01 平面図・断面図	80
第18図 SD03 出土遺物(3)	第68図	SB01 出土遺物	80
第19図 SD03 出土遺物(4)	第69図	SB02 平面図・断面図	82
第20図 SD03 出土遺物(5)	第70図	SA02～04 平面図・断面図	83
第21図 SD03 出土遺物(6)	第71図	北西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物	84
第22図 SD03 出土遺物(7)	第72図	北西屋敷 第2遺構面遺構配置図	85
第23図 SD03 出土遺物(8)	第73図	SB03 平面図・断面図	86
第24図 SD03 出土遺物(9)	第74図	SK15 平面図・断面図	87
第25図 SD03 出土遺物(10)	第75図	SK15 出土遺物	88
第26図 SD03 出土遺物(11)	第76図	北西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物	89
第27図 SD03 出土遺物(12)	第77図	北西屋敷 第3遺構面遺構配置図	91
第28図 SK01 出土遺物(1)	第78図	SB04 平面図・断面図	92
第29図 SK01 出土遺物(2)	第79図	SB05 平面図・断面図	93
第30図 SK01 出土遺物(3)	第80図	SD14 平面図・断面図	94
第31図 SK01 出土遺物(4)	第81図	SD14 出土遺物(1)	95
第32図 SK01 出土遺物(5)	第82図	SD14 出土遺物(2)	97
第33図 SK01 出土遺物(6)	第83図	SD14 出土遺物(3)	98
第34図 SK01 出土遺物(7)	第84図	北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(1)	100
第35図 SK01 出土遺物(8)	第85図	北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2)	102
第36図 SK01 出土遺物(9)	第86図	南西屋敷 基本層序土層断面図	106
第37図 SK01 出土遺物(10)	第87図	南西屋敷 第1遺構面遺構配置図	107
第38図 屋敷境C 変遷図	第88図	SB06 平面図・断面図	109
第39図 SD04 平面図・断面図	第89図	SB06 出土遺物	110
第40図 SD04 土層断面図	第90図	SK06・07 平面図・土層断面図	111
第41図 SD04 出土遺物	第91図	SK06 出土遺物	112
第42図 SA01 平面図・断面図	第92図	SK07 出土遺物	112
第43図 SD05 平面図	第93図	SD15 平面図	113
第44図 SD05 土層断面図	第94図	SD15 土層断面図	113
第45図 SD05 出土遺物(1)	第95図	SD15 出土遺物	114
第46図 SD05 出土遺物(2)	第96図	SB07 平面図・断面図	116
第47図 SD05 出土遺物(3)	第97図	SB07 出土遺物	117
第48図 SD06 平面図	第98図	南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(1)	118
第49図 SD06 土層断面図	第99図	南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(2)	119

第100図	南西屋敷 第2遺構面遺構配置図	120	第125図	SK17 出土遺物(1)	150
第101図	SB08 平面図・断面図	121	第126図	SK17 出土遺物(2)	151
第102図	SX03 平面図	121	第127図	北東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物	152
第103図	SX03 出土遺物	123	第128図	南東屋敷 基本層序土層断面図	155
第104図	南西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物	125	第129図	南東屋敷 第1遺構面遺構配置図	156
第105図	南西屋敷 第3遺構面遺構配置図	127	第130図	SB11 平面図・断面図	157
第106図	SB09・10 平面図・断面図	129	第131図	南東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物	157
第107図	SB09 出土遺物	131	第132図	南東屋敷 第2遺構面遺構配置図	158
第108図	SB10 出土遺物	132	第133図	SB12 平面図・断面図	159
第109図	SK16 平面図・断面図	133	第134図	SB13 平面図・断面図	159
第110図	SK16 出土遺物	133	第135図	SX06 平面図・断面図	160
第111図	SX04 平面図・土層断面図・立面図	134	第136図	南東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物	160
第112図	SX04 出土遺物	134	第137図	南東屋敷 第3遺構面遺構配置図	161
第113図	SX05 平面図・断面図	135	第138図	SK18 平面図・断面図	162
第114図	SX05 出土遺物	135	第139図	SK18 出土遺物(1)	163
第115図	南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(1)	136	第140図	SK18 出土遺物(2)	164
第116図	南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2)	138	第141図	SB14 平面図・断面図	165
第117図	南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(3)	139	第142図	SX07 平面図・断面図	165
第118図	北東屋敷 基本層序土層断面図	143	第143図	南東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物	166
第119図	北東屋敷 第1遺構面遺構配置図	144	第144図	屋敷地と屋敷境溝の変遷図(1)	168
第120図	北東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物	145	第145図	屋敷地と屋敷境溝の変遷図(2)	170
第121図	北東屋敷 第2遺構面遺構配置図	146	第146図	屋敷地と屋敷境溝の変遷図(3)	171
第122図	北東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物	147	第147図	屋敷地と屋敷境溝の変遷図(4)	173
第123図	北東屋敷 第3遺構面遺構配置図	148	第148図	屋敷地と屋敷境溝の変遷図(5)	175
第124図	SK17 平面図・土層断面図	149	第149図	屋敷地と屋敷境溝の変遷図(6)	176

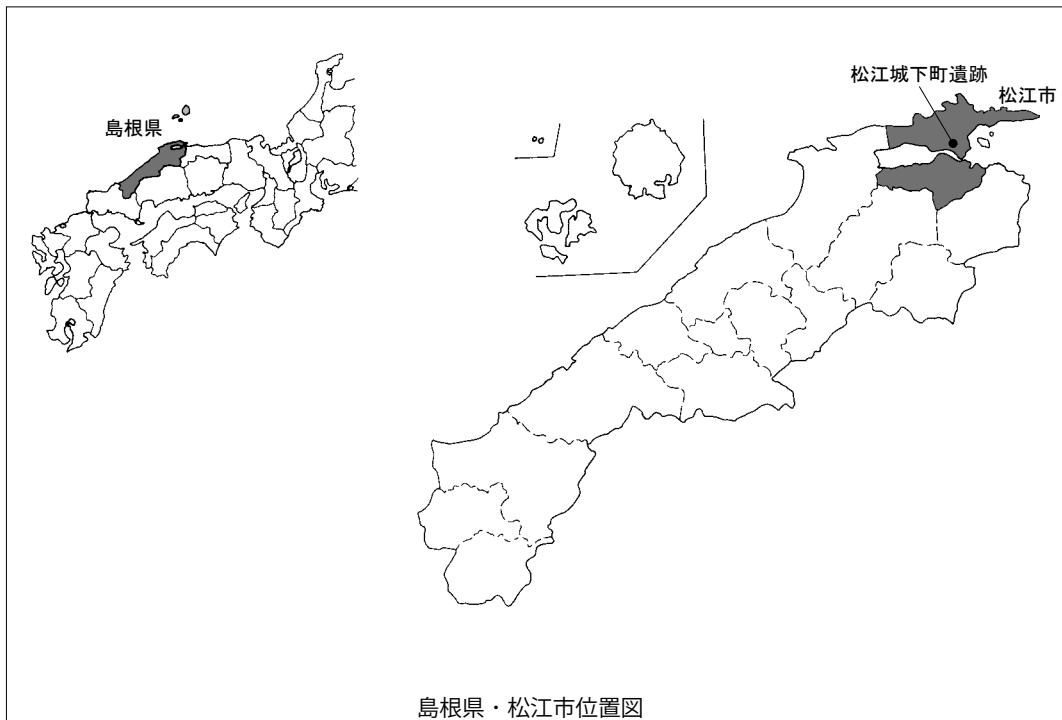
表 目 次

表1	屋敷境 陶磁器・土師器・土器観察表	68	表15	南西屋敷 金属製品観察表	142
表2	屋敷境 銭貨観察表	71	表16	南西屋敷 石製品観察表	142
表3	屋敷境 金属製品観察表	71	表17	南西屋敷 木製品観察表	142
表4	屋敷境 石製品観察表	71	表18	南西屋敷 瓦観察表	142
表5	屋敷境 木製品観察表	71	表19	北東屋敷 陶磁器・土師器観察表	153
表6	屋敷境 瓦観察表	72	表20	北東屋敷 銭貨観察表	154
表7	北西屋敷 陶磁器・土師器・土器・土製品観察表	103	表21	北東屋敷 金属製品観察表	154
表8	北西屋敷 銭貨観察表	105	表22	北東屋敷 石製品観察表	154
表9	北西屋敷 金属製品観察表	105	表23	北東屋敷 木製品観察表	154
表10	北西屋敷 石製品観察表	105	表24	北東屋敷 瓦観察表	154
表11	北西屋敷 木製品観察表	105	表25	南東屋敷 陶磁器・土師器観察表	167
表12	北西屋敷 瓦観察表	105	表26	南東屋敷 銭貨観察表	167
表13	南西屋敷 陶磁器・土師器・土器・土製品観察表	140	表27	南東屋敷 石製品観察表	167
表14	南西屋敷 銭貨観察表	142	表28	南東屋敷 木製品観察表	167

写真図版目次

図版1	調査地遠景 調査地遠景	SB06礎石・栗石検出状況接写 SB06栗石検出状況接写
図版2	調査地遠景 調査地全景	図版19 南西屋敷 第1遺構面SD15 SD15土層断面 SD15全景 南西屋敷 第1遺構面SB07 SB07柱穴・礎盤石検出状況接写 SB07柱穴・柱材検出状況接写
図版3	屋敷境A SD01 屋敷境A SD01土層断面	図版20 南西屋敷 第1遺構面SX02 南西屋敷 第2遺構面 南西屋敷 第2遺構面SX03
図版4	屋敷境B SD02 屋敷境B SD02土層断面 屋敷境A・B SD03	図版21 南西屋敷 第3遺構面 南西屋敷 第3遺構面SB10 南西屋敷 第3遺構面SB10 南西屋敷 第3遺構面SX04
図版5	屋敷境A SD03 屋敷境A・B SD03 屋敷境B SD03	図版22 北東屋敷 第1遺構面 北西屋敷～北東屋敷 第1遺構面 北東屋敷 第2遺構面 北東屋敷 第3遺構面 北東屋敷 第3遺構面SK17 北東屋敷 第3遺構面SK17
図版6	屋敷境A SD03土層断面 屋敷境B SD03土層断面 屋敷境A・B SD03漆器椀(25-7)出土状況	図版23 南東屋敷～北東屋敷 第1遺構面 南東屋敷 第1遺構面 南東屋敷 基本層序土層断面
図版7	屋敷境C SD04遠景 屋敷境C SD04土層断面	図版24 南東屋敷 第1遺構面SB11 南東屋敷 第2遺構面 南東屋敷 第3遺構面
図版8	屋敷境C SD05 屋敷境C SD05 屋敷境C SD05	図版25 SD01 出土遺物 SD02 出土遺物 SD03 出土遺物(1)
図版9	屋敷境C SD06 屋敷境D SD07・08 屋敷境D SD10 屋敷境D SD10 屋敷境D SD10石垣除去後	図版26 SD03 出土遺物(2) 図版27 SD03 出土遺物(3) 図版28 SD03 出土遺物(4) 図版29 SD03 出土遺物(5) 図版30 SD03 出土遺物(6) 図版31 SD03 出土遺物(7)
図版10	屋敷境D 土層断面 屋敷境D 土層断面 屋敷境E SD13	図版32 SK01 出土遺物(1) 図版33 SK01 出土遺物(2) 図版34 SK01 出土遺物(3) 図版35 SK01 出土遺物(4)
図版11	北西屋敷 第1遺構面SB01 北西屋敷 第1遺構面遠景	図版36 SD05 出土遺物(1) 図版37 SD05 出土遺物(2) 図版38 SD05 出土遺物(3)
図版12	北西屋敷 第1遺構面SD01・SK10・SK11 北西屋敷 基本層序土層断面 北西屋敷 第1遺構面SX01	図版39 SD06 出土遺物 SD08 出土遺物 SD09 出土遺物 SD10 出土遺物
図版13	北西屋敷 第2遺構面 北西屋敷 第3遺構面	図版40 SD12 出土遺物 SD13 出土遺物 SK10 出土遺物
図版14	北西屋敷 第3遺構面SB04 北西屋敷 第3遺構面SB05	
図版15	北西屋敷 第3遺構面SD14 SD14 出土遺物(81-5) SD14 出土遺物(81-14) SD14 出土遺物(82-10) SD14 出土遺物(83-10)	
図版16	南西屋敷～北西屋敷遠景 南西屋敷 第1遺構面	
図版17	南西屋敷 第1遺構面SK06 南西屋敷 第1遺構面SK07 南西屋敷 第1遺構面SK04	
図版18	南西屋敷 第1遺構面SB06 SB06近景 SB06栗石検出状況接写	

- | | | | |
|------|---|------|--|
| 図版41 | SK11 出土遺物
SK12・13 出土遺物
SB01 出土遺物 | 図版52 | 南西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物 |
| 図版42 | 北西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物
SK15 出土遺物(1) | 図版53 | SB09 出土遺物
SB10 出土遺物(1) |
| 図版43 | SK15 出土遺物(2)
北西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物(1) | 図版54 | SB10 出土遺物(2)
SK16 出土遺物
SX04 出土遺物
SX05 出土遺物 |
| 図版44 | 北西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物(2)
SD14 出土遺物(1) | 図版55 | 南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(1) |
| 図版45 | SD14 出土遺物(2) | 図版56 | 南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2) |
| 図版46 | SD14 出土遺物(3) | 図版57 | 南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(3)
北東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(1) |
| 図版47 | SD14 出土遺物(4)
北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(1) | 図版58 | 北東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(2)
北東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物(1) |
| 図版48 | 北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2)
SK06 出土遺物
SK07 出土遺物
SB06 出土遺物
SD15 出土遺物(1) | 図版59 | 北東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物(2)
SK17 出土遺物 |
| 図版49 | SD15 出土遺物(2)
南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(1) | 図版60 | 北東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物 |
| 図版50 | 南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(2) | 図版61 | 南東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物
南東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物
SK18 出土遺物(1) |
| 図版51 | SX03 出土遺物 | 図版62 | SK18 出土遺物(2)
南東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物 |



第1章 調査の経過

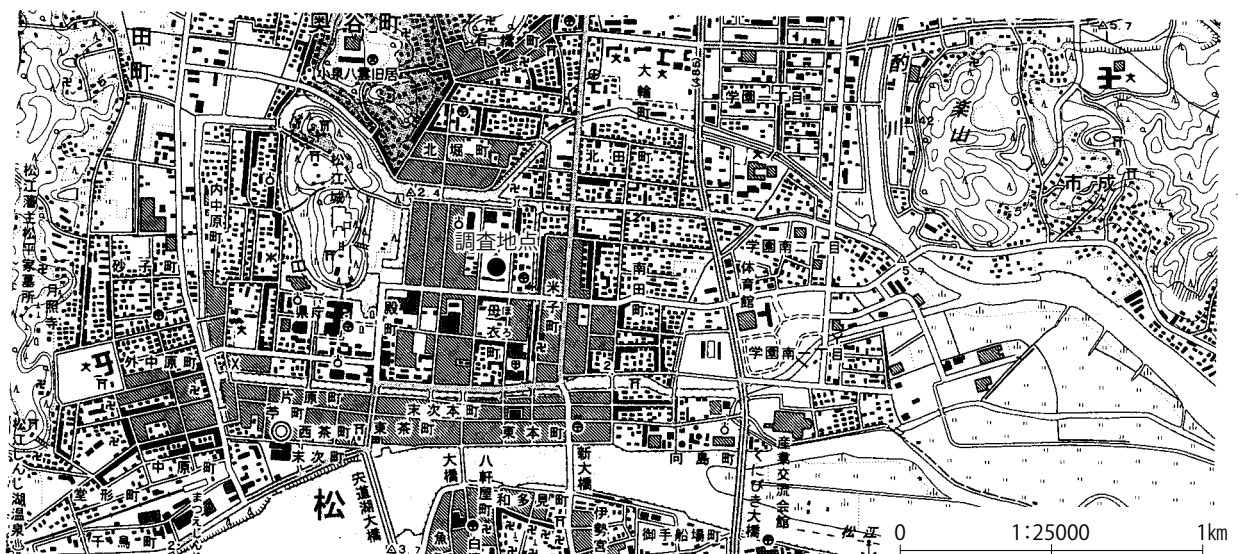
第1節 調査に至る経緯

平成15年8月、松江地方裁判所から松江市教育委員会文化財課（平成26年4月から松江市まちづくり文化財課）へ、現裁判所庁舎の老朽化等に伴う庁舎建替え工事が計画されたことから、当地における埋蔵文化財の有無について照会が行われた。これを受け、同年9月に敷地内の試掘調査を実施したところ、近世城下町遺跡の存在が確認された。また、平成17年9月にも裁判所敷地南側における道路拡張工事に伴う試掘調査により、城下町遺跡の存在が確認されたことから、平成17年11月に遺跡の発見通知が提出され、敷地の一部が「松江城下町遺跡（母衣町68）」として周知されることとなった。その後さらに、平成21年7月に庁舎建て替えに伴う仮設庁舎建設範囲において実施した試掘調査と、平成23年5月に実際の新営庁舎範囲において実施した試掘調査により、裁判所敷地全域に、近世の嵩上げ造成によって形成された複数の遺構面が、良好な状態で包蔵されていることが確認された。

以上の結果を踏まえ、事業者と度重なる協議を重ね、付帯的な工事において遺跡への影響を極力抑えるよう協力を得たものの、最終的に新営庁舎と車庫新設部分については遺跡まで掘削が及ぶことが避けられず、平成23年11月に当該事業にかかる遺跡の発掘通知が提出されることとなった。この発掘通知の内容について、島根県教育委員会と協議した結果、新営庁舎と車庫部分については本発掘調査が必要との勧告を受けることとなり、当発掘調査が、平成23年11月～平成24年11月に実施されるに至ったものである。

第2節 調査経過

本調査は、遺跡に影響が及ぶ新営庁舎と、その北側にある車庫の新設範囲において実施されることとなった。ただし、事前協議の段階で、新営庁舎の建設範囲にある既存庁舎の基礎内部にも相当部分の遺構が残存する可能性が予想されたため、既存庁舎の解体は現地表面までとし、この基礎内部につ



第1図 調査地の位置

いても調査ができるように残置した状態で、本調査を開始することとした。

まず、周辺が掘り下げられる前に、前述の基礎内部の調査を行うこととした。調査は柵状に区切られた範囲を順次掘り下げて実施したが、予想以上の攪乱のために得られた成果は少なかった。しかし、本文で説明するとおり屋敷境にかかる貴重な情報を得ることができた。

次に、基礎部分を除く新営庁舎範囲について調査を開始した。しかし、この範囲も調査開始当初は厚い攪乱層の除去と、予想外に広範囲にわたる近代建物基礎の解体に終始することとなった。その上、攪乱の合間に残る近世遺構・遺物についても記録する必要があるため、最終的に純然たる近世遺構面に至るまでにかなりの時間を要することとなった。その後、本格的に近世遺構面の調査に入ったが、必然的に最初の遺構面は攪乱層下面という意味合いのもので、消失した上層面からの深い遺構や、攪乱を受けた深さの違いにより検出レベルも異なり、さらに幾重にも重複する遺構が存在するなど、その解釈は困難を極めるものとなった。このため、県・市教育委員会等との指導会や検討・協議を重ねながら問題点を整理し、順次遺構面を掘り下げて調査を進めることとなった。

最終段階では、近世以前の遺構等がさらに下層に存在しないか確認するため、部分的に断割り調査を実施し、車庫新設部分の調査を含め、平成24年11月に現地調査を終了している。

なお、遺跡の全容が現れ始めた段階で、近年注目されている城下町遺跡の調査成果を広く周知する必要があると判断されたことから、事業者を含めて関係者間で協議し、平成24年10月6日(土)に現地説明会を実施した。これには多数の方々に参加いただくことができ、調査現場の貴重な資料を紹介することができた。

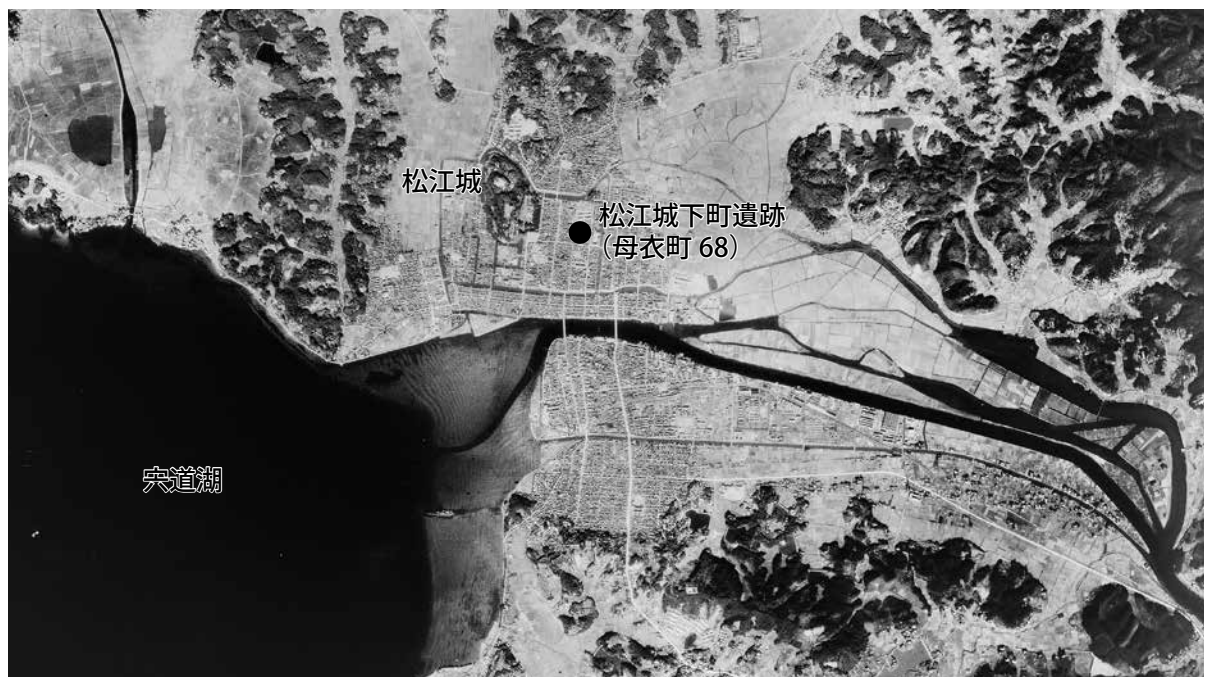
以上の経過を経て、平成24年12月に島根県教育委員会とその取扱いについて協議した結果、適正に発掘調査が行われ、当該範囲について記録保存の措置は止むを得ないとの判断を受け、現地調査を終了することとなった。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、島根県北東部にある松江市街地内に所在し、当該遺跡を含めた近世城下町の推定範囲は、この現市街地とほぼ重なっている。この城下町推定範囲は、東を中海、西を宍道湖に挟まれた松江平野上に立地しているが、この松江平野は、朝酌川と中海・宍道湖を結ぶ大橋川の堆積作用で形成された東西約4.0km、南北約2.5kmの範囲で、標高1.0～3.0mを測る低湿な三角州平野で、宍道湖に面して小規模な砂州（末次砂州・白潟砂州）が形成されているため、後背湿地が広いものである。松江平野の北東には標高297mの嵩山、同261mの和久羅山からなる峻厳な山地が存在し、中海まで続く。また、北方も白鹿山等からなる湖北山地が占めている。北西には平野部が続き、佐陀川が形成する沖積地に接続する。今回報告する松江城下町遺跡（母衣町68）は、この松江平野中央に位置する。

城下町が形成された松江平野は、大雨や河川の氾濫等に起因する洪水に幾度も見舞われていたことが文献に見られる。近年の松江城下町遺跡発掘調査成果⁽¹⁾からも、江戸時代を通して大規模な屋敷地造成が数回行われたことや、江戸時代から現在までの間に平均約1.50mの嵩上げ造成を行っていたことが明らかとなってきており、上記の水害がその契機になった可能性が推察される。



調査地周辺の航空写真（1947年11月3日撮影：国土地理院）

第2節 歴史的環境

本遺跡は、松江城本丸から東へ約200mの地点に位置する近世城下町遺跡である。さらに広域に見ると、松江平野の北西部に位置しているが、この平野部には周知されている原始・古代の遺跡は少ない⁽²⁾。ここでは、周辺部を含めた中世の松江と中世～近世の城跡について触れることとする（第2図）。

1. 中世の松江

この頃の出雲国の政治・経済的中心地は、出雲国の東端に当たる広瀬（現：安来市広瀬町）にあり、そこから約17km離れた松江周辺に関する文献資料は少なく、不明瞭な部分が多いのが現状である。

中世以前の松江平野周辺は、8世紀頃からあまり変化が無く、沼や浅い湖が残る湿地帯が広がっていたと思われる。中世になると、宍道湖沿いの砂州上に「末次」「中町」「白潟」といった3つの町場が展開していたとされている。近世城下町が形成される直前の周辺一帯は「末次郷」といわれ、「中原」「黒田」「奥谷」「菅田」「末次」の5名（村）が存在し、城下町形成のために約3000石の田畑・屋敷地が潰されたと言われている⁽³⁾。

戦国時代の「末次」は末次氏が治めていた場所で、永禄6年（1563年）に毛利氏から末次森分や市屋敷等をあてがわれていることから、末次荘内に定期市が立ち、市場集落が形成されていたと思われる⁽⁴⁾。また、永禄12年（1569年）の尼子再興戦では、尼子・毛利氏両軍の争奪戦の舞台となった。

「白潟」は、中国の明代に著された『籌海図編』（明の嘉靖41年：1562年）の中に、出雲地方の港湾のひとつとして「失喇哈喇（白潟）」と記され、日本海から宍道湖内奥部に至る水運ルートの重要な港湾であったと考えられる。また、毛利氏が河村又三郎なる人物を白潟・中町・末次の磨師・塗師・鞆師の司に任じていることから、この地に商人・職人の集団が残存し、町場が形成されていたと思われる⁽⁵⁾。

2. 周辺の城館跡

以下では、戦国期から近世に松江平野縁辺に展開した城跡を概観することとする。

松江城（2）は、松江平野北西部に位置する標高約28mの亀田山に築かれた、輪郭連郭複合式平山城である。関ヶ原の戦い後、慶長5年（1600年）に堀尾忠氏が出雲・隠岐両国24万石を拝領し、父・吉晴と共に富田城（現：安来市広瀬町）に入った後、慶長12～16年（1607～11年）にかけて築いたとされている。縄張りは亀田山の最高所に本丸があり、五層六階の望楼式の複合天守を持ち、本丸周縁には櫓を配置して高石垣を巡らす。天守東側に二之丸、二之丸下ノ段、南側に三之丸、西側に腰郭を配置し、これらの外側に内堀を巡らす。中世において亀田山には末次城があったとされる。

白鹿城跡（3）は松江城から北西へ約3kmの地点に位置し、松江平野北西部の北側に広がる北山山脈から派生する白鹿山に築かれた中世山城である。戦国時代には出雲の戦国大名尼子氏の重要な支城であり、安芸の戦国大名毛利氏との雲芸攻防戦の舞台となる。城は白鹿山頂上部の平坦地を主郭とし、険しい地形を活用した大小の郭を設置する。

真山城跡（4）は白鹿城跡（3）の北隣に位置し、『雲陽軍実記』によると平安時代末期に築いたとの伝承がある。毛利元就が白鹿城を攻めた時に、元就の次男吉川元春が向城として陣を置き、白鹿城陥落後は毛利氏による周辺支配の拠点となる。その後、尼子再興戦では尼子軍の手に落ちるが、尼子

氏の出雲出国後に再び毛利氏の手に戻り、江戸時代を迎え破却される。城は尾根伝いに郭が築かれ、土塁や石積みも見られる。

和久羅山城跡 (5) は松江城から東へ約 5km 地点に位置する、標高約 262m の和久羅山に築かれた中世山城である。当初、城主は原田氏 (尼子方) で、一度毛利氏の手に落ちた。その後、尼子再興戦で再び尼子方の羽倉氏が城主となり、最終的に尼子氏が出雲を出国した後に、再度毛利氏の手に帰した。城は、中海・宍道湖をはじめ松江市街が一望できる和久羅山の最高所に 4 つの郭を持ち、腰郭や虎口がある。

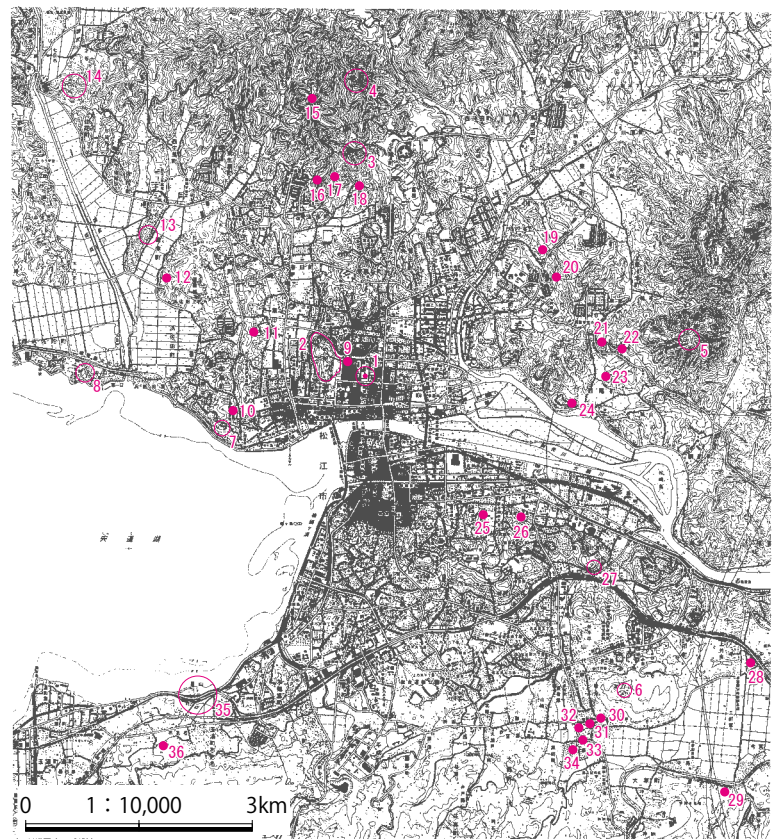
茶臼山城跡 (6) は松江城から南東へ約 6km 地点に位置する標高約 172m の茶臼山に築かれた中世山城である。築城年代や城主は定かではないが、『雲陽誌』には雲芸攻防戦の際に村上伯耆守が拠ったとされている。城は、茶臼山の最高所に主郭を持ち、その東西を別の郭で囲まれ、さらにその外側の東西に尾根を遮断する堀切が掘られ、山の斜面には連続竪堀群がある。

荒隈城跡 (7) は松江城から西へ約 1.5km 地点に位置する荒隈山に築かれ、雲芸攻防戦における毛利軍の前線拠点として築かれた中世山城である。宍道湖北岸沿いに築かれたこの城は、宍道湖一帯の水運や流通機能を掌握して取り込んでいたとされている。

満願寺城跡 (8) は松江城から西へ約 3km 地点に位置し、宍道湖北岸に接している。宍道湖の水運を握る水軍拠点であった湯原氏 (尼子方) の居城であったが、毛利氏の出雲進出により毛利方に属した。城の主郭部分には横堀があり、宍道湖に面する斜面には階段状遺構も認められる。

周辺の中世以降の主な城館・遺跡

- 1.松江城下町遺跡 (母衣町68)
- 2.松江城 (末次城) 3.白鹿城跡
- 4.真山城跡 5.和久羅山城跡
- 6.茶臼山城跡 7.荒隈城跡 8.満願寺城跡
- 9.松江城下町遺跡 (殿町287・279)
- 10.荒隈城跡 (小十太郎地区)
- 11.舎人遺跡 12.薦津殿山城跡
- 13.高柳城跡 14.海老山城跡
- 15.大高丸跡 16.高つぼ山城跡
- 17.小白鹿城跡 18.コゴメダカ遺跡
- 19.堂頭山城跡 20.川津城跡
- 21.稲葉山城跡 22.二保山城跡
- 23.城処城跡 24.城山城跡
- 25.西城ノ前遺跡 26.東城ノ前遺跡
- 27.石台遺跡 28.中竹矢遺跡
- 29.天満谷遺跡 30.市場遺跡
- 31.黒田館跡 32.下黒田遺跡
- 33.黒田畦遺跡 34.出雲国造館跡
- 35.布志名焼窯跡群 36.布志名城山城跡



第2図 周辺の主な中世以降の城館跡・遺跡位置図

3. 松江藩主の移り変わり

慶長5年（1600年）、関ヶ原の戦いで武功を上げた堀尾忠氏は、徳川家康から出雲・隠岐両国24万石を拝領し、遠江国浜松（現：静岡県浜松市）から父・吉晴と共に富田城に入った。その後、富田城が出雲東部に位置すること、城郭が急峻な山頂にあり、城下が狭隘であること、軍事的観点、物資輸送のより良い利便性を求めることなどの理由により、城地移転を考えた⁽⁶⁾。そして、領国支配のため、出雲国の中心に近く、城下が広く取れ、海上輸送を掌握できる宍道湖岸の松江に新しい城地を求めた。

慶長12～16年（1607～11年）、父・吉晴が、早世した忠氏の遺志を受け継いで亀田山に松江城を築き、城下町を形成した。吉晴が孫・忠晴や家臣らと共に富田から松江へ移転したのは慶長13年（1608年）とされる⁽⁷⁾。堀尾氏はこれ以降の33年間出雲・隠岐国を統治し、松江城下町建設の基礎を築くが、嗣子無く2代で断絶となった。

続いて、寛永11年（1634年）、徳川家光から出雲・隠岐両国26万4千2百石を拝領した京極忠高^{ただたか}が、若狭国小浜（現：福井県小浜市）から出雲へ入国して松江藩主となる。しかし寛永14年（1637年）に逝去、わずか1代で断絶となる（半年後に播磨国龍野^{たつの}6万石で再興）。忠高はわずか3年余りの統治であったが、その間に治水工事や殖産興業を行うなど、その治績は大きかった。

寛永15年（1638年）、徳川家光から出雲国18万6千石（隠岐国は預り地）を拝領した松平直政が、信濃国松本（現：長野県松本市）から入国して松江藩主となる。

明治時代を迎え廃藩置県が実施されるまでの233年間、松平氏は10代に渡り藩政が続いた。

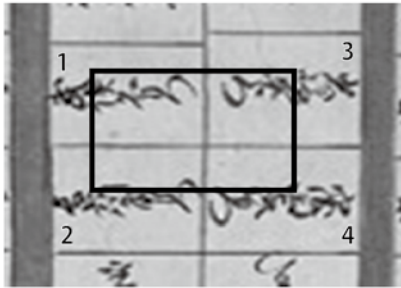
第3節 城下町絵図に見る調査地

現存する近世古絵図から復元される松江城下町の全体構造は、松江城本丸が位置する亀田山を中心にして、北側に寺社や武家地、東西には主に武家地を配置して左右を固め、その南側に町人地を東西



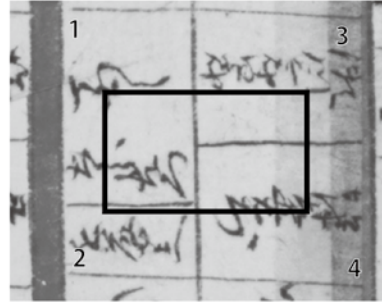
に展開させている。また、城の東側には家老級の重臣屋敷が数多く並び、さらにその東側に上級・中級家臣が居住するものである。なお、この城下町一帯は、その区画が現在でもほぼ踏襲されており、道路や堀の位置などは江戸時代からほぼ変わらない。本遺跡も、古絵図同様、大手前から東に延びる通りの北側にあり、松江城から東へ3つ目の南北に長い町割り区画内に該当し、容易にその位置を絵図と対比できる。このことから、本調査地は江戸時代初頭～幕末期に至るまで上級・中級クラスの家臣が住まう武家屋敷が存在していた場所であることが推察され、予想される位置関係から4つの屋敷地にまたがる可能性が想定された。第3図では、各時期の絵図における調査地の想定範囲と、そこに見える屋敷主名を紹介する。

堀尾期松江城下町絵図
（島根大学附属図書館所蔵）



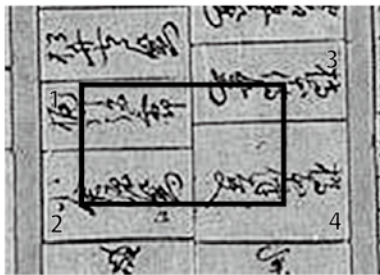
堀尾期松江城下町絵図(1620～33年)
(島根大学附属図書館蔵)

1. 北西 武侯久左衛門 3. 北東 岩崎平右衛門
2. 南西 長谷川角左衛門 4. 南東 窪田与次郎左衛門



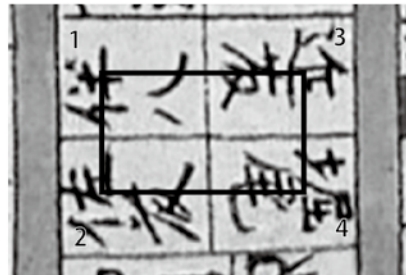
寛永年間松江城家敷町之図(1634～37年)
(香川県丸亀市立資料館蔵)

1. 北西 百々太郎左衛門 3. 北東 瀬川三郎四朗
2. 南西 近藤才兵衛 4. 南東 塩津左近右衛門



松江城絵図(1736～48年)
(島根県立図書館蔵)

1. 北西 梶川弥三郎 3. 北東 橋本傳左衛門
2. 南西 小倉源左衛門 4. 南東 橋本半太夫



松平期松江城下町絵図(1825～51年)
(島根大学附属図書館蔵)

1. 北西 伴八 3. 北東 近藤
2. 南西 佐藤 4. 南東 堀尾弥税

第3図 松江城下町の絵図の変遷

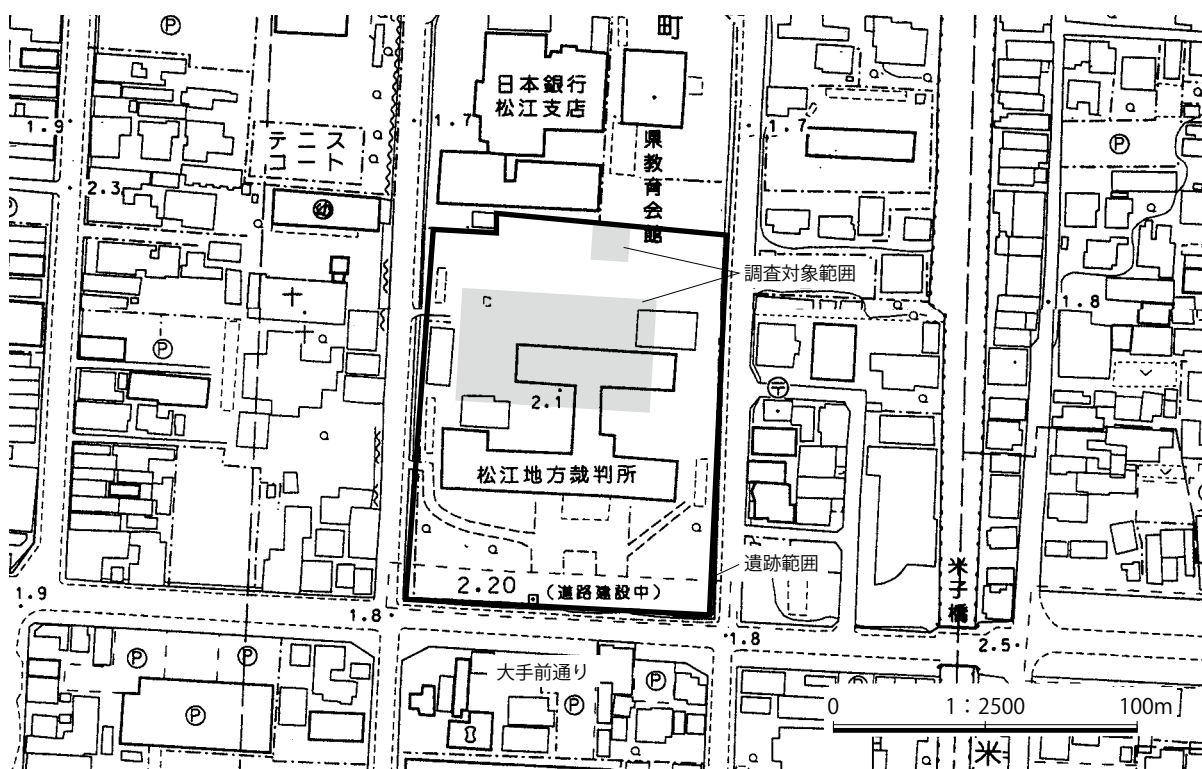
第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査方法

調査の掘削は、調査区壁面に安全勾配を確保しながら行い、現地表面以下の攪乱層は重機で掘削し、以下の包含層の掘削や遺構面の検出は人力で行った。検出した遺構は、その性格に合わせて断面観察等を実施しながら、図化と写真撮影を行った。なお、平面図化においてはトータルステーションを用いて測量を行い、写真撮影は35mm、120mmのリーバサルフィルムとモノクロームフィルム及びデジタルカメラを用いた。検出された全ての遺構には順次遺構番号を付して整理し、図面や写真・出土遺物との対応を図った。ただし、現地で遺構番号を付したもののうち、性格を検証した上で本書では掲載を見送った遺構（攪乱や性格不明の小ピット等）が多数あるため、本書中では煩雑さを避けるため再度遺構番号を連番で振り直している。また、調査区は国土座標（平面直角座標第Ⅲ系）に則った10m角のグリッドを設定し、グリッド東西行に北から南に向けて「A」～「G」、グリッド南北列に西から東に向けて「1」～「8」と名称を付け、「A」行の「1」列の区画であれば「A1」として各区画に名称を付した（第5図）。遺構外出土遺物等については、基本的にこの区画ごとに取り上げを行っている。

第2節 調査概要

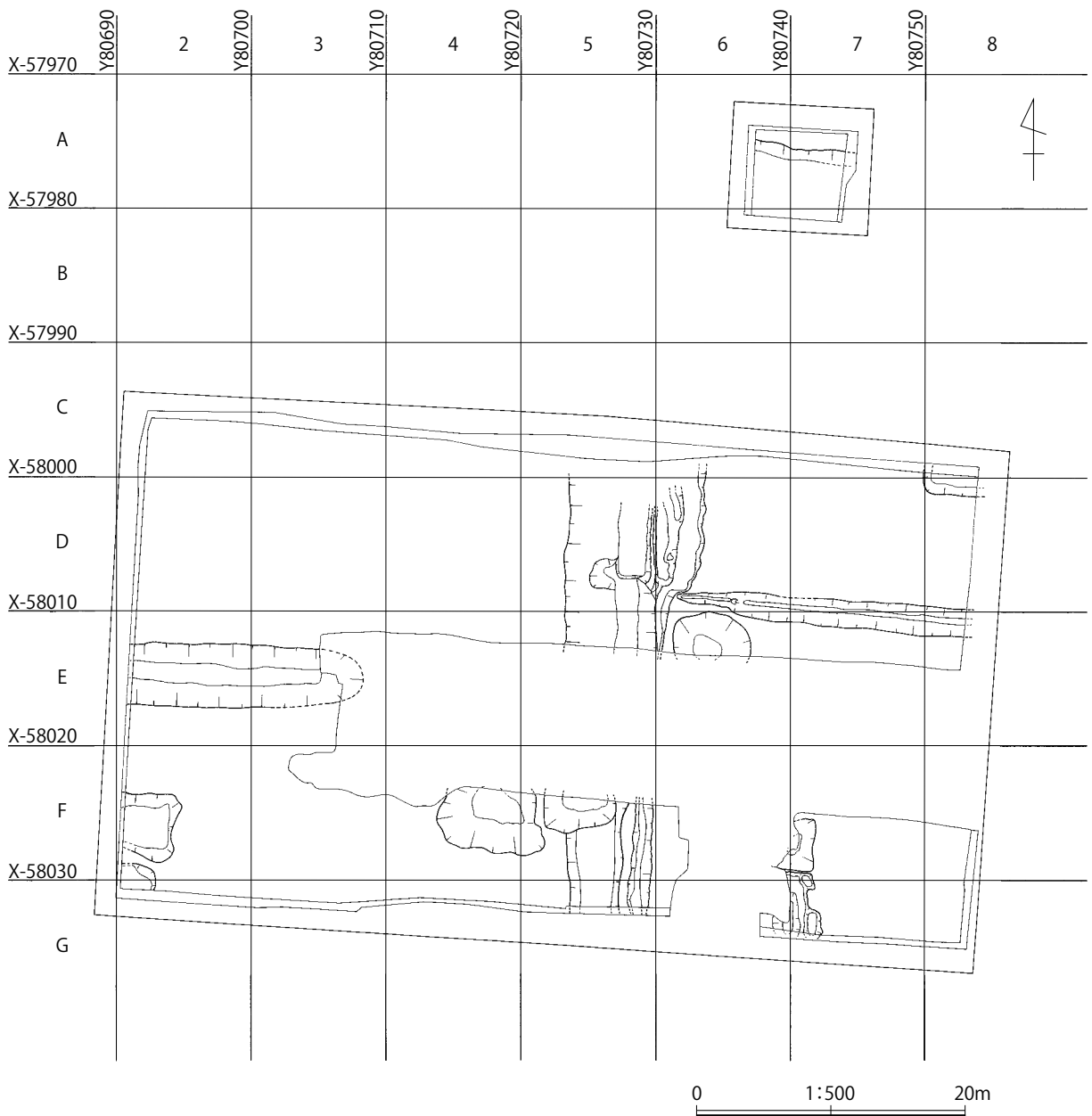
調査範囲は、遺跡範囲のほぼ中央北寄りに当たる新営庁舎建設予定範囲と、北東側に当たる車庫建設予定範囲の2ヶ所が対象となった。新営庁舎予定地は東西約66m×南北約40mの区画で、調査面積は2,674㎡であり、車庫予定地は、東西約10m×南北約9.5mの区画で、調査面積は95㎡である。



第4図 調査区配置図

ただし、新宮庁舎範囲内には、T字状の既存建物基礎が東西約52m×南北約8mの範囲で調査区東側から突き出ており、約624㎡はほぼ攪乱を受けた状態であった。以下では、主要な調査範囲となった新宮庁舎範囲の調査について、その概要を述べる。

まず初めに、調査区壁面沿いを先行して掘り下げ、土層堆積状況を確認した。その結果、城下町が造成される以前の自然堆積土層が標高約0.2mで検出され、そこから段階的に嵩上げ造成が行われて現地表面に至る様子が観察された。各造成土上面では遺構の存在が窺え、調査地全体に複数の遺構面が存在することが予想された。ただし、北東側を中心に全域が深く攪乱を受けており、かなりの遺構が消失している状況も確認された。このことを踏まえ、調査は攪乱層の除去から始まり、各遺構面の検出・記録・掘り下げを繰り返し、最終的な遺構面の調査と、それ以下に遺構が無いことを確認するための断割りを実施して現地調査を終了している。この調査において、調査区を4つに分割する屋



第5図 調査グリッド配置図

敷境と想定される遺構が検出された。これは絵図との対比（第2章第3節）から予想された通りの成果であり、各遺構面ではほぼ踏襲されていた。このことから、調査地はこの屋敷境により区分された4つの屋敷地に分けられることが判明し、本報告では、その方角などから便宜上「北西屋敷」「南西屋敷」「北東屋敷」「南東屋敷」と呼称して取り扱うこととした。この各屋敷は、基本的に屋敷境で分断されるため、各々で嵩上げ造成されており、屋敷ごとの遺構面は屋敷境を挟んで相互の整合が難しい状況であった。このことから、次章以降の成果報告では、まず各時期・各所の屋敷境の説明を行い、次にそれによって区画された屋敷地ごとの変遷を詳述することとする。なお、遺構面は下層の古い面から「第1遺構面」と呼称し、時代が新しくなるにつれて数字を大きくすることとした。また、屋敷境も古い順からその遺構番号を付し、本文の報告も古い順から行うこととした。

第3節 基本層序

松江城下町は、初期造成時から何度も行われた嵩上げ造成によって、現在の生活面の高さ（標高約2.2m）となっている。松江城下町の土層については、松江城下町遺跡検討会において、城下町の層序を表す上で、下層から、Ⅲ層・Ⅱ層・Ⅰ層（Ⅰa層・Ⅰb層）・A層・B層・C層の考え方が示されている⁽⁸⁾。以下、この提示に当てはめ本調査地の基本的な層序を概観する（第6図）。

1. Ⅲ層（自然堆積層）

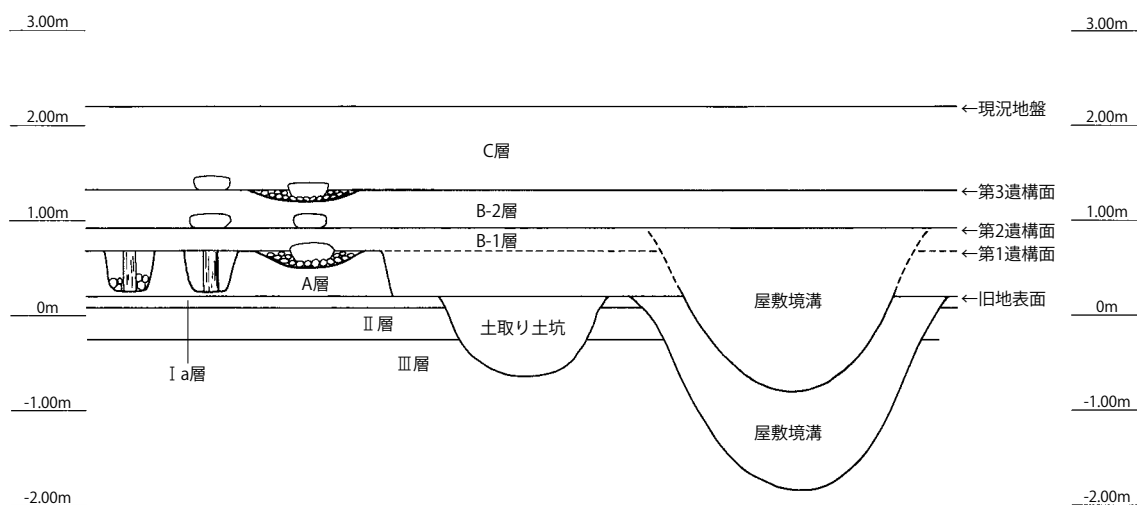
Ⅲ層は、自然堆積層の青灰色細砂層である。標高は-0.2～0.4mの位置で、層厚50cm以上を測る。

2. Ⅱ層（自然堆積層）

Ⅱ層は、自然堆積層の灰色細砂層である。Ⅲ層の上に堆積し、Ⅲ層と区別しにくいほど類似した土層であるが、僅かな土色の違いにより分層した。標高は0.05～0.1mの位置で、層厚約25cmを測る。

3. Ⅰ層（旧地表面：自然堆積層）

Ⅰ層は、基本的に自然堆積で形成された粘性のある腐植土（有機質土）で、黒褐色系や茶褐色系を呈する。Ⅰ層は現段階で松江城下町遺跡のほぼ全域で確認している土層であり、城下町遺跡における



第6図 基本層序模式図

鍵層となっている⁽⁹⁾。I層の検出標高は、松江城下町の東西軸で見た場合、松江城に近い西側では標高0.2～0.8mであるのに対し、松江城から離れた東側では標高－0.3～0.5mの位置である。この東西間で、流動的な水面があったと思われ、水面上の乾燥状態で有機物の分解が進んだ土層を「I a層」、水面下で有機物が未分解な土層を「I b層」と呼称している。

本調査地では、標高0.1～0.2mの位置で「I a層」を確認していることから、旧地表面は水面上である程度は乾燥していた場所であったことが想定できる。なお、I a層は層厚15cmを測る堆積土で、基本的に自然堆積層であるが、場所によっては水田耕作土として利用されていたことが近隣の調査例から判明している。

4. A層（城下町初期造成土・第1遺構面）

A層は城下町建設の初期段階の造成土で、各屋敷地に共通する第1遺構面の基盤層である。A層は、先に示したI a層・II層・III層の混和土で構成されており、後述する城下町初期造成段階に掘られた屋敷境溝や大形土坑の掘削土を利用したと思われる。

本調査地のA層は、標高0.7～0.8mに位置し、場所によっては層厚が約50cmを測る厚い造成土である。A層を基盤として形成された第1遺構面では、調査区を4分割する屋敷境の溝や、各屋敷地で土坑・建物跡等の遺構が検出されている。なお、このA層は、検出された建物跡の範囲に特に厚く盛られており、屋敷建築に際しての地業としても用いられている（「島状整地」として後述する）。

5. B層（屋敷地造成土）

B層は、第1遺構面の廃絶後に順次行われた嵩上げ造成に用いられた土砂の総称である。松江城下町遺跡の場所・時期によって様々な土砂が用いられており、一様に共通する土層はない。初期造成後は、各屋敷地単位で造成が行われてきたと思われ、使用された土の質や層の厚みなどが、屋敷地によって異なることが現時点までの調査で分かってきている。本調査地でも何度も嵩上げ造成を繰り返していることから、それぞれの屋敷地ごとに遺構面を構成する造成土を、下から「B-1層」「B-2層」と呼称する。

なお、各屋敷地において遺構面ごとに多数の遺構・遺物が確認されている。

6. C層（近現代の攪乱土層）

C層は、調査区全域に広がるもので、近代、松江地方裁判所建設工事に伴う攪乱土坑などが顕著である。標高は現地表面の2.2mまで上がり、層厚は最大で約90cmを測る。

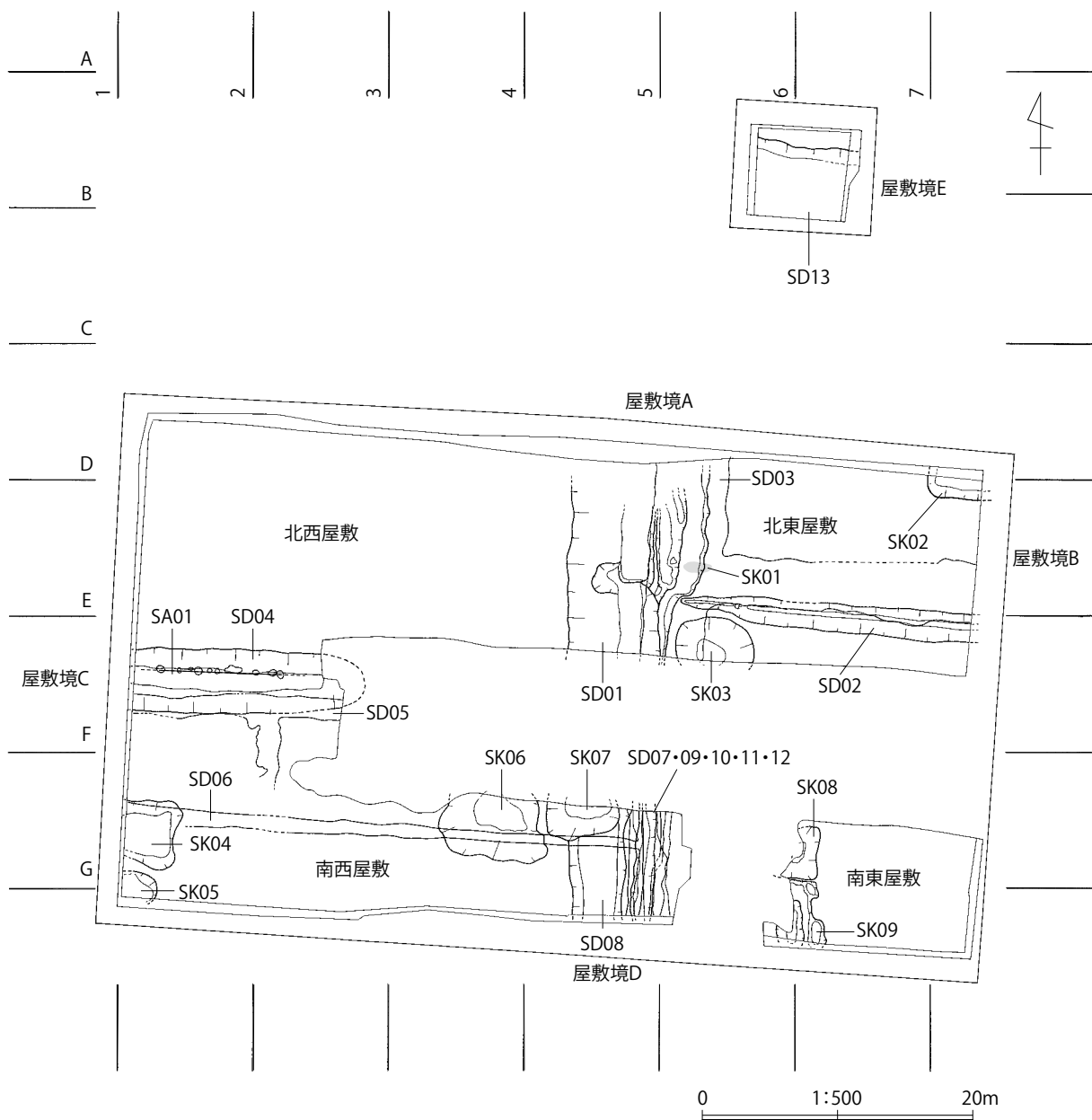
本調査地においては、特に北東側で深い攪乱があった。

第4章 屋敷境

第1節 はじめに

概要で述べた通り、新宮庁舎及び車庫範囲から、各屋敷地を区画する溝・柵列を検出した。これらは城下町絵図との照合からも予想された通り、屋敷境として機能したものと理解でき、本章ではこれらの遺構について詳述するものである。

なお、調査区を分断する旧庁舎基礎により明確に断言はできないが、城下町形成当初から十文字に連結する画一的な溝ではなく、各屋敷間で完結する形態である可能性が高いものであった。このため、以下の説明も各屋敷間に区切って行うものとする。各屋敷間は5ヶ所存在しており、それぞれ名称を付けて説明する。



第7図 屋敷境溝変遷図

まず、北西屋敷と北東屋敷を区画する部分を「屋敷境A」、北東屋敷と南東屋敷を区画する部分を「屋敷境B」、北西屋敷と南西屋敷を区画する部分を「屋敷境C」、南西屋敷と南東屋敷を区画する部分を「屋敷境D」、そして、北東屋敷の北側を区画する部分を「屋敷境E」と呼称する。この各所には、造成初期段階で屋敷境となる溝状遺構が造られて以降、嵩上げ造成と共に屋敷境溝が造られ続けている。溝の位置は多少動いているが、その軸と方向はほぼ変化していない。

各屋敷境の構造と規模は、幅が広くなったり狭くなったりを繰り返すもの、溝から杭列に変化するものなどが見られる。いずれにしても、溝の位置は踏襲されていると考えている。ここでは、屋敷境A～Eごとの変遷を追うとともに、各遺構から出土した遺物の詳細にも触れていきたい。

第2節 屋敷境A・B（第8図）

屋敷境A・Bの変遷は、まず造成初期段階に掘り込まれた溝状遺構SD01（第9図）・SD02（第11・12図）があり、その後、SD03（第14・15図）が東側にずれた状態で掘られる。SD01は南北方向の大形溝で、溝の幅・深さともに非常に大形で、今回の調査で最大規模を持つ溝である。また、SD01と直角に掘られた東西方向の溝SD02は、その西端がSD01にぶつかる手前で終息しており、南北方向のSD01と東西方向のSD02が結合しない様子が明確に見て取れる。これらの埋没後にSD03が掘り込まれるが、SD03は南北方向と東西方向の溝がT字状に結合している形状を呈する。SD03はSD01・02の位置関係を踏襲する形で造られた溝であろうと思われる。

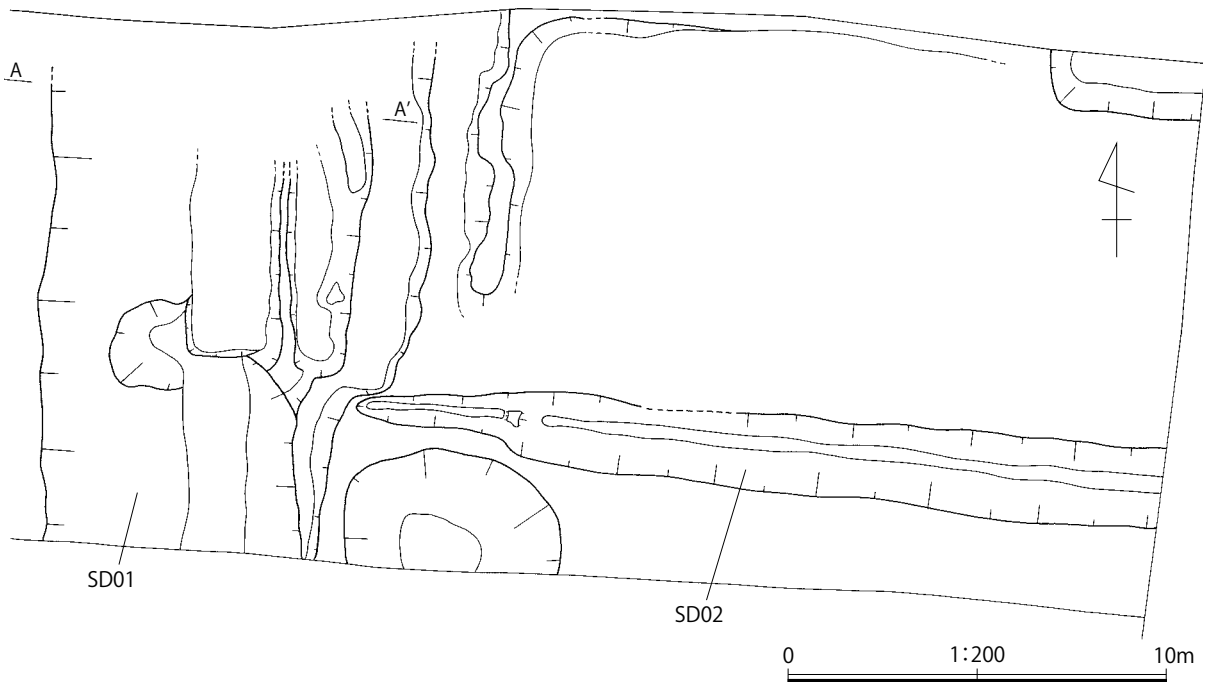
また、SD03の南北溝と東西溝の連結部において、調査状況からはどの屋敷地にも帰属させられないSK01（第14図）を検出した。SK01は、後述するように大量の磁器片（第28～37図）を伴うものであったが、その性格については、攪乱層の除去面で検出されたものであり、調査時はSD03の埋没過程でその埋土内に集中的に廃棄されたものとの解釈をしていた。しかし、SD03の埋土中遺物である可能性を否定するものではないが、その他SD03出土遺物との接合関係もなく、範囲も限定されることから、ここではSK01として取り扱う。また、攪乱により消失した新しい段階の屋敷境に区画された、いずれかの屋敷地に帰属する廃棄土坑であった可能性も考えられるが、検出状況から当節「屋敷境A・B」で取り扱う。

第1項 SD01（第9図）

SD01は、北西屋敷と北東屋敷を区分する南北方向の溝である。溝の北側は調査区外へ続くものと思われる、南側は現代建物基礎部分の中へ続いている。建物基礎部分を挟んだ南側（屋敷境D）では、SD01のような大形溝の痕跡は見られなかったことから、建物基礎部分内で終息した可能性が考えられる。

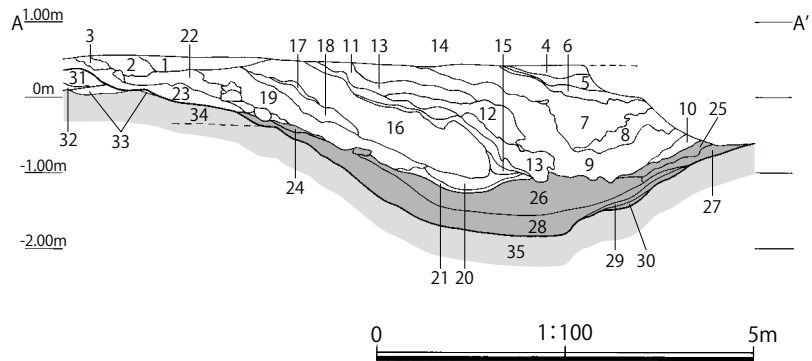
SD01は、南北残存長14.0m、東西最大幅10.2mを測り、最深部は2.3mの深さを持つ大形のものである。SD01の東側肩部分は後述するSD03（第14・15図）の掘り込みで破壊されていた。

SD01の埋土は大きく2段階に分けることができる。まず、第24～30層はSD01前段の掘り込みラインとその埋土で、黒褐色粘質土層I a層（第33層）、灰色細砂層II層・青灰色細砂層III層（第



第8図 屋敷境A・B配置図

34・35層)の自然堆積層を切って掘られている。第24～30層はいずれも黒色系の土色で、土質は粗い砂状を呈する。これらの堆積状況は、溝底面に沿うような緩やかなU字状を呈する。第24～30層の上層で、これらを覆うように堆積するのは、そのほとんどがシルト質の山土である黄色砂質土層(第4・5・7・9・

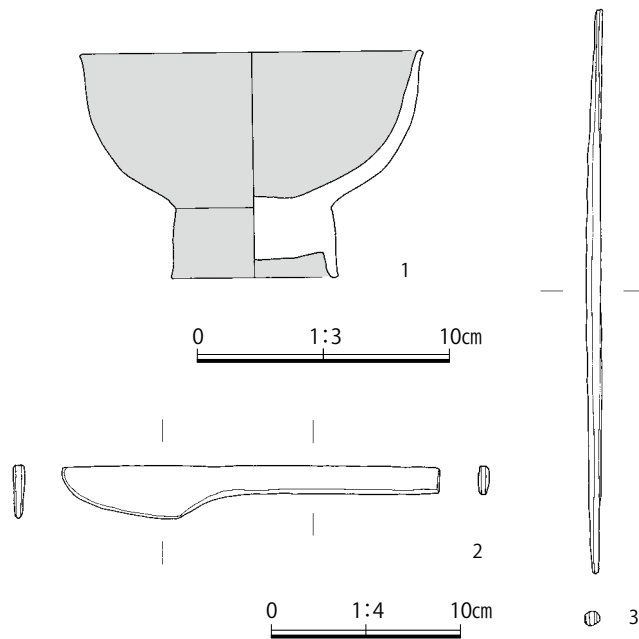


第9図 SD01土層断面図

- | | | |
|---------------------|------------|------------|
| 1 黄色土・黄灰色土の混合土(山土) | 13 黒色土 | 25 オリーブ黒色土 |
| 2 明黄褐色土・黒色土の混合土(山土) | 14 灰色土 | 26 オリーブ黒色土 |
| 3 灰色土 | 15 灰色粘質土 | 27 オリーブ黒色土 |
| 4 淡黄色土(山土) | 16 黄色土(山土) | 28 オリーブ黒色土 |
| 5 淡黄色土 | 17 暗灰色土 | 29 灰色土 |
| 6 黒色土 | 18 灰色土 | 30 オリーブ黒色土 |
| 7 黄色土(山土) | 19 黄色土(山土) | 31 暗褐色粘質土 |
| 8 黒色土 | 20 灰色粘質土 | 32 灰色砂質土 |
| 9 浅黄色土(山土) | 21 灰色粘質土 | 33 I a層 |
| 10 黒色土 | 22 黒色土 | 34 II層 |
| 11 黄色土(山土) | 23 黄色土(山土) | 35 III層 |
| 12 黄色土(山土) | 24 灰オリーブ色土 | |

11・12・16～19・23層)である。これら山土層の間に黒色土層(第6・8・10・13～15・20～22層)が入り込むが、山土が埋められる際にも入り込んだ土であろうと推定する。

SD01の土層堆積状況から、第24～30層と第4～23層の土層の様相は異なっていることから、ここである程度の時間差があったと考えている。特に後者は、黄色砂質土と黒色土が重なり合って堆積している土層に終始しており、また、いずれも北西屋敷側から入れられたように見える。これらのことから、第4～23層は人為的にほぼ一度で埋められたものと捉えることができる。



第10図 SD01出土遺物

SD01の年代観を決定づけるための遺物はごく少量で、第24～30層からの出土である。いずれも木製品で、陶磁器や土師器は出土していない。このうち、漆器碗10-1は高台が高いタイプで古手であることから、17世紀前半代の遺物と思われる。

SD01 出土遺物 (第10図)

10-1～3は木製品である。10-1は口径13.6cm、高台径6.5cm、器高9.0cmを測るやや大形の漆器碗で、高台が高く垂直する形状である。また、口縁端部がわずかに外反する。外内面ともに朱色の漆が塗られており、無文である。

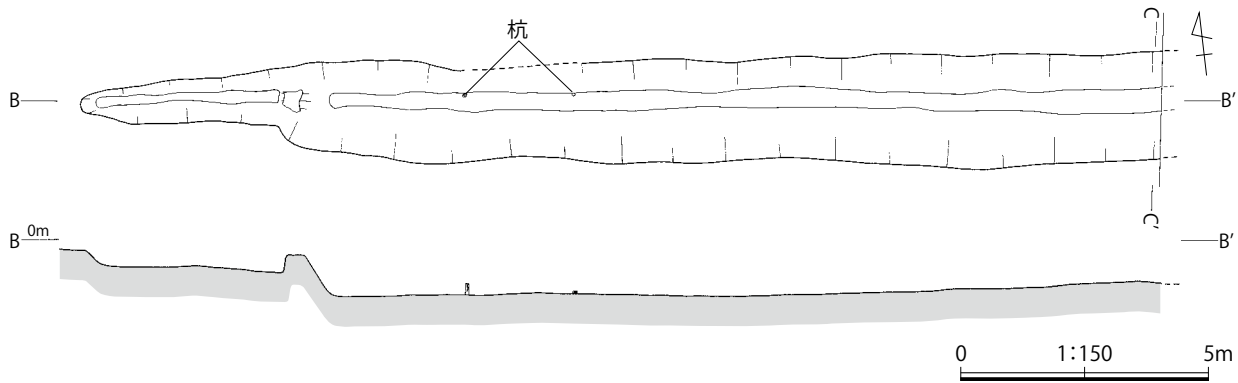
10-2は片刃篋で、刃・柄部分ともに精巧な面取りが施されている。最大長20.0cm、刃幅2.8cm、柄幅1.6cm、厚み0.6cmを測る。10-3は白木の箸で、長さ30.1cm、直径0.8cmを測る。両先端は先細り、面取りで加工されている。

第2項 SD02 (第11・12図)

SD02は、北東屋敷と南東屋敷を区画する屋敷境B地点に掘られた、東西方向の溝状遺構である。SD02の東側は調査地外へ続き、西側は隣接する南北方向の溝状遺構SD01(第8・9図)と連結しない状態で存在する。SD02は、東西最大長21.3m、南北幅2.2m、最深部は1.2mを測る。断面形はV字形を呈し、底面はわずか12cmの平坦面を持つが、ほぼ逆三角形形状である。東西方向の断面図では、西端付近で一度終息し、そこからさらに西に向かって浅いくぼみ状の落ち込みができるが、やがて先細り無くなる、という形状を呈する。

SD02の埋土は大きく2段階に分けられる。まず、第4～7層は溝が機能時に流入したと考えられる前段の埋土である。第4～7層はいずれも灰色系の土色である。これらは黒褐色粘質土層Ⅰa層(第8層)・灰色細砂層Ⅱ層・青灰色砂層Ⅲ層(第9・10層)の自然堆積層を切って掘られている。埋土の堆積状況は、溝底面の断面形に沿うようにU字状に重なっている。第4～7層の上層に堆積するのはSD02の廃絶時に人為的に埋められたと考えられる後段の埋土第1～3層である。第1・2層は黄色砂質土層で、前述のSD01(第9図)にも見られた山土層である。第3層は黒色土層で、第1・2層の下層に敷かれるように薄く堆積している。SD02はSD01と同様に2段階の埋設時期が考えられ、これらは特に溝が廃絶される段階で同質の埋土が用いられていることから、SD01とSD02はほぼ同時期に埋められた可能性が高いと考えている。

出土遺物もSD01同様に少量であるが、破片ではなく完形品に近いものが多い。陶器・磁器・土師器などが出土しており、その中でも13-3は中国磁器(龍泉窯)の青磁香炉で、年代は16世紀以



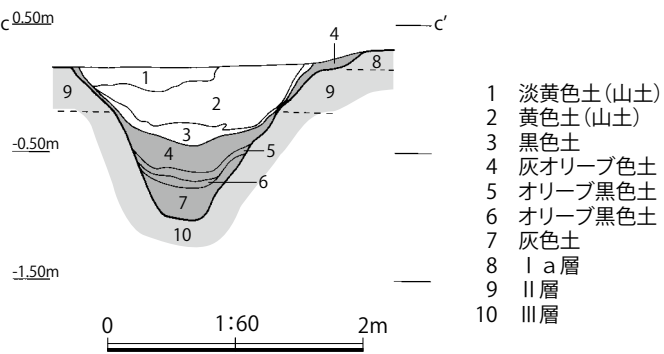
第11図 SD02平面図・断面図

前の遺物である。その他の遺物の年代観が c.0.50m
17世紀初頭～前半頃でおさまることから、
13-3は伝世品の可能性が高いと考える。

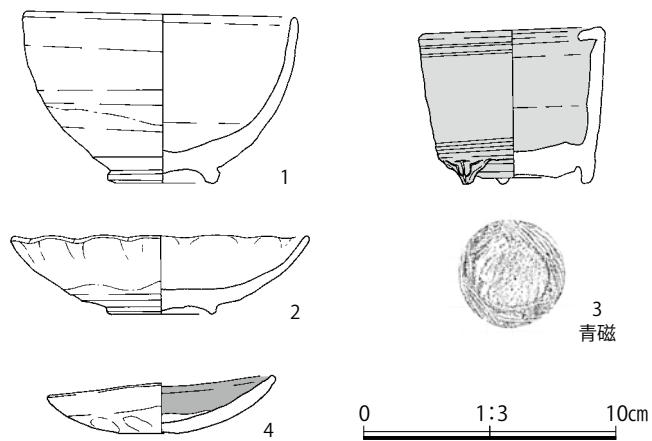
SD02 出土遺物 (第13図)

13-1・2は肥前陶器である。13-1は丸形中碗で、胴部～口縁部まで丸みを帯びた形状を呈する。13-2は丸形小皿で、口縁部が波打つなぶり口を呈する。いずれも藁灰釉が掛かる器で、年代は九陶Ⅱ期(1610～50)に該当する。

13-3は中国磁器(龍泉窯)の青磁香炉で、口径7.0cm、器高6.3cmを測る完形品である。胴部～口縁部にかけてわずかに外傾しながら垂直に立ち上がる形状で、口縁端部は内側に向けて屈曲する。底部3ヶ所に足が付き、外面はヘラ彫りによる沈線が口縁部、底部付近に2条ずつ巡り、足にはヘラ彫りによる簡単な装飾が施される。底部外



第12図 SD02土層断面図



第13図 SD02出土遺物

面のみ無釉で、その部分には不定方向の工具痕が残る。また、青磁釉の色は暗緑色を呈する。形状の特徴や、香炉にしては小形であることから、⁽¹⁰⁾ 聞香用香炉の可能性が指摘されている。年代は15世紀末～16世紀初頭のものと思われる。

13-4は京都系の土師器で、口径9.0cm、器高2.3cmを測る極小皿である。底部外面に手づくね成形による等間隔の指痕が残る。また、内面全面に油煙痕と煤が付着していることから、灯明皿として使用されたものと考えている。

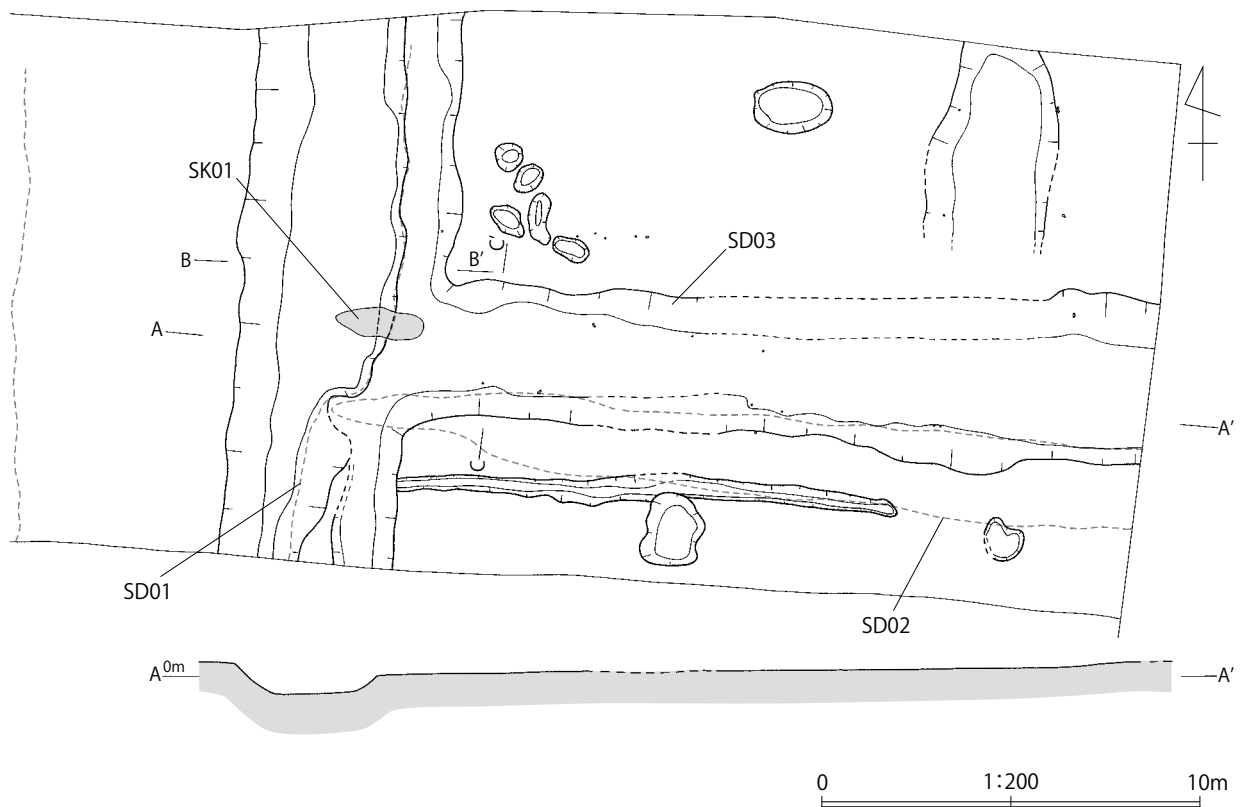
第3項 SD03 (第14・15図)

SD03は、SD01(第9図)・02(第11図)が存在した位置の上面で検出した屋敷境溝である。SD01・02に沿うように掘り込まれたT字状を呈し、南北溝と東西溝から構成されている。

南北溝は、南北残存長14.7m、東西最大幅5.6m、最深部は1.1mを測り、東西溝は、東西残存長19.0m、南北最大幅4.5m、最深部は0.5mを測るT字状の溝である。南北溝と東西溝はほぼ直角に交わっており、それぞれの溝底面は、南北溝は南→北へ、東西溝は東→西へ傾斜しているのが確認できた。また、南北溝が東西溝より底面が深くなっていることから、東西溝から南北溝へ向かって水が流れる構造になっていたと思われる。

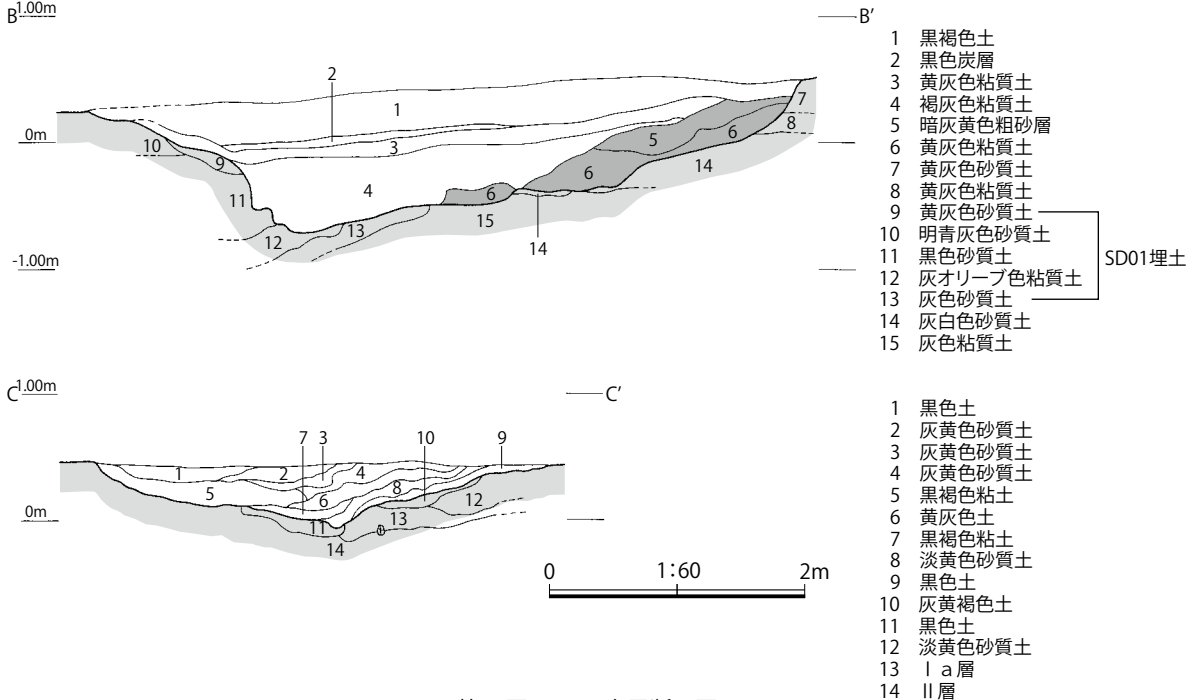
南北溝の埋土(第15図・B-B')は、第5・6層が前段の堆積土で、第1～4層が後に埋まった堆積土である。第1・2層は黒色系土層で、第3・4層は黄褐色系の粘質土である。第9～13層はSD01(第9図)の埋土であり、SD03がSD01を破壊している様子が見て取れる。SD03の東肩部分に見られる第7層は第1造成土(A層)である。しかし、SD03はA層が造成された第1遺構面で掘り込まれたものではない。本来ならば、SD03が掘り込まれた遺構面を検出するはずだが、この場所は近現代の大規模な攪乱を受けており、SD03が造られた面は既に削平されていたものと考えている。遺構面及びSD03の掘り方ともに失われており、本調査で検出した面は、削平が行われた標高ということになる。よって、SD03は第2遺構面以上の時代に造られた溝という判断を下している。

東西方向部分の埋土(第15図・C-C')は、第1～9層までが堆積する浅い溝である。また、後述



第14図 SD03平面図・断面図

B' 1.00m



第15図 SD03土層断面図

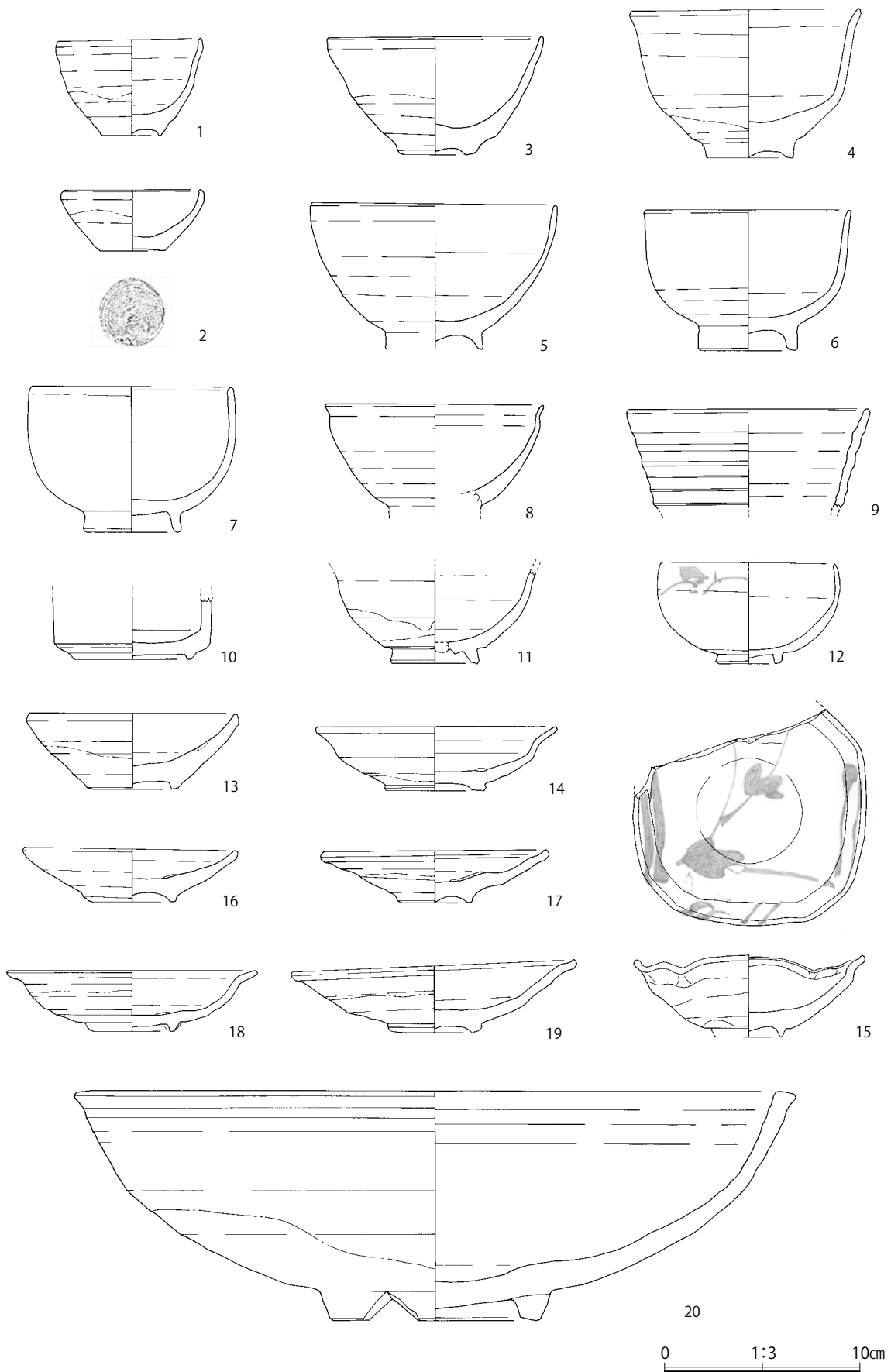
するが、溝上層で大量の磁器片を包含した土坑 SK01 が検出された。

SD03 からは大量の遺物が出土しており、陶器・磁器・土師器・土器・金属製品・石製品・木製品・瓦などその種類は多様である。遺物は主に B-B' の第 1～4 層から出土した。幅広い年代の遺物が出土しているが、概ね 17 世紀中頃～18 世紀代のものに集約されると考えている。以下、遺物の種類ごとにまとめて詳述する。

SD03 出土遺物・陶器 (第 16～18 図)

16-1～20、17-1～10、18-1～4 は陶器で、このうち 16-1～7・13～20、17-1～7 は肥前陶器である。16-1・2 は小坏で、口縁部がわずかに湾曲する形状である。16-2 は底部に回転糸切り痕が残る。16-3～7 は中碗で、16-3 は天目形状をわずかに残す。16-4 の胴部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。底部の器壁は 1.5cm の厚みを測る。見込みに擦痕が残ることから、茶道において茶筌が当たった痕跡ではないかと考えている。16-1～4 は九陶Ⅱ期 (1610～50) のものである。16-5 は肥前 (内野山) で、口縁部～胴部の器壁は薄く華奢である。底部は兜巾・三日月高台で、釉薬は薄肌色で高台に砂目痕が残る。これらのことから、九陶Ⅱ期 (1610～40) に生産された呉器手碗の創成期の器と考えている。また、胎土が朝鮮半島の製品と酷似しているとの指摘を受けており、上記の製作技法を模倣して作られた可能性も考えられる。16-6・7 は呉器手碗で、16-6 は高台が高く饅頭芯状であること、黄色釉であること、高台に砂目痕が見られることなどから、九陶Ⅲ期 (1650～90) に量産されるものである。16-7 は腰部分が丸く張り出す形状で、口縁端部はごくわずかに内湾する。豊付は無釉で砂目痕が残る。九陶Ⅲ～Ⅳ期 (1650～1780) に該当する。

16-8・9 は福岡 (上野・高取) の中碗である。16-8 は天目碗で、釉薬は暗赤褐色と青色が混じる複雑なものである。16-9 は胴部に太い沈線が何本も入る形状で、黒色釉が掛かる。16-10 は瀬戸・美濃 (志野) の向付である。胴部下方～高台部の残存で、全面に白色釉が掛かり貫入が見られる。16-8～10 の年代は 17 世紀前半頃である。



第16図 SD03出土遺物（1）

16-11 は山口（萩）の中碗で、藁灰釉と鉄釉の掛け分けが見られ、高台内には萩特有の渦巻き状削り出し痕が残る。16-12 は京都・信楽系陶器の中碗で、口縁部外面に鉄絵で草花文が描かれる。いずれも 18 世紀代のものである。

16-13 ～ 19 は肥前の小皿である。16-13 は碁笥底高台、16-14 は折縁形で、見込みに胎土目痕が残る。16-15 は隅切方形の向付で、内面に鉄絵で草花文が描かれる。見込みに目跡痕が無いことから、窯入れの際一番上に積まれた可能性が考えられる。16-13 ～ 15 は九陶Ⅰ-2 期（1594 ～ 1610）のものである。16-16 は丸形、16-17・19 は溝縁形、16-18 は折縁形である。いずれも見込みに砂目痕が残るもので、年代は九陶Ⅱ期（1610 ～ 50）である。

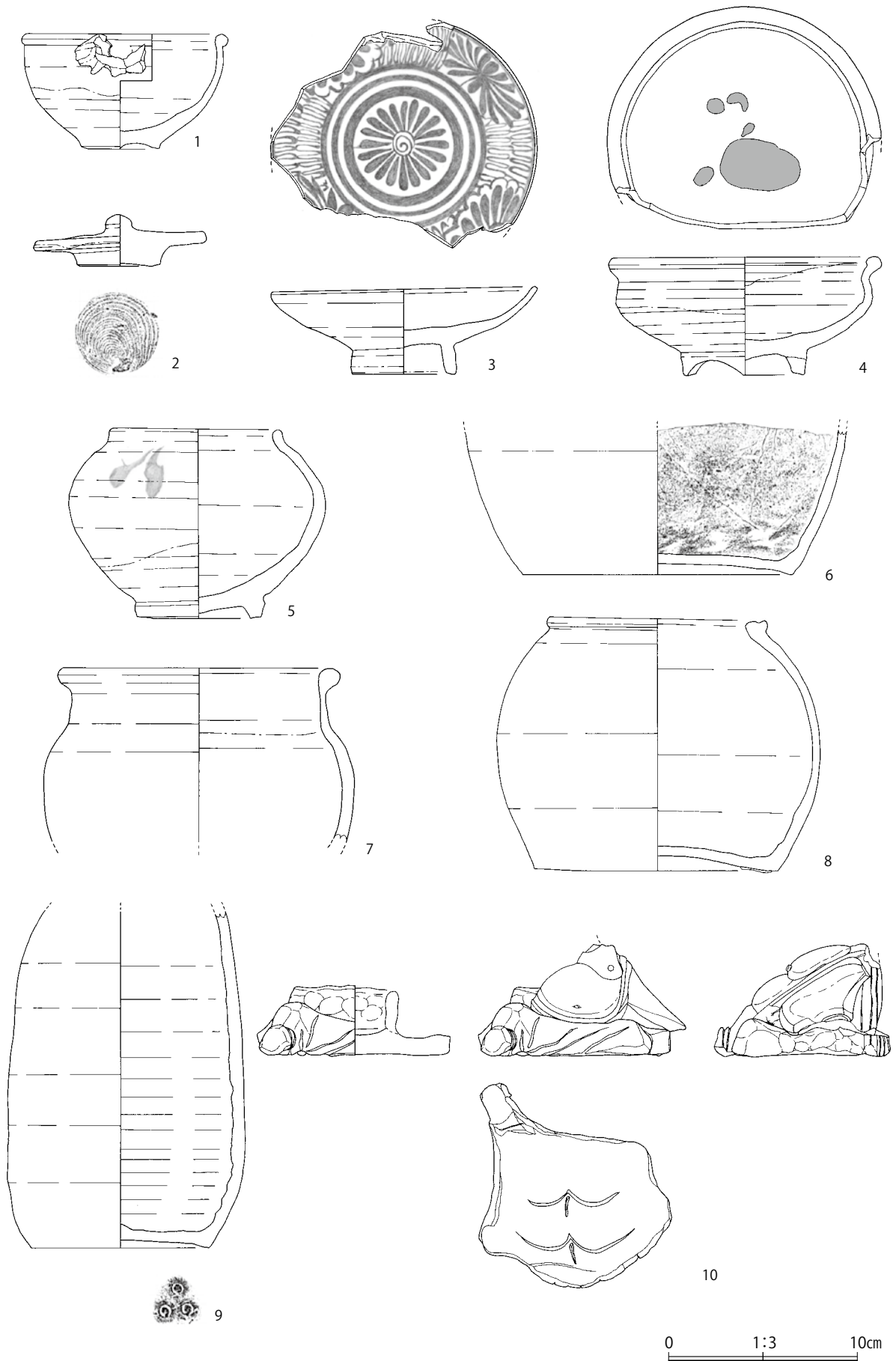
16-20 は肥前（内野山）で、口径 35.4cm、器高 11.8cm を測る大鉢である。口縁端部上面は平坦面を持ち、外側にわずかに突出する。外内面は銅緑釉と鉄釉の掛け分けが施される。また、高台の 3ヶ所に三角形の抉りが入る。年代は九陶Ⅲ期（17 世紀中頃～末）のものである。

17-1 は片口で、注口部分は欠損している。口縁端部は玉縁状を呈し、高台には砂目痕が残る。年代は九陶Ⅲ期（1650 ～ 90）のものである。17-2 は壺の蓋である。つまみは乳頭状で、体部は直線的で水平に突出する。内面は無釉、底部は回転糸切り痕が残る。年代は九陶Ⅱ期（1610 ～ 50）に該当する。17-3 は台付皿で、高台が 1.5cm と高い。内面には鉄絵で菊花文をモチーフとした絵柄が描かれる。見込み中央に直径 5.0cm の菊花文を配し、その周囲に 3 条の太い圈線、さらに外側に 4 つの変形菊花文と網目文が交互に描かれる。17-3 は磁器窯で焼成されたもので他遺跡でも出土例のある器である。⁽¹²⁾ 17-4 は火入れで、口縁部は湾曲して立ち上がり、端部は玉縁状を呈する。底部は兜巾で、高台の 3ヶ所に半月状の抉りが見られる。外面は二彩手様式で、白色と緑色の釉薬が掛け分けられている。また、見込み中央に焦げたような痕跡が残る。年代は九陶Ⅲ期（1650 ～ 90）のものである。17-5 は短頸形の壺で、口縁部はわずかに立ち上がる。口径 8.8cm、胴部最大径 13.6cm、器高 10.1cm を測り、^{そろぼんだま}算盤玉状に張り出す。肩部分に鉄絵が描かれ、高台に胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2 期（1594 ～ 1610）のものである。17-6 は大瓶で、胴部～底部の破片である。叩き成形によるもので、内面には同心円状当て具痕が残る。また、底部外面に貝目痕が残る。年代は九陶Ⅰ期（1580 ～ 1610）のものである。17-7 は甕で、口径 14.4cm、胴部最大径 16.5cm を測る。年代は九陶Ⅲ期（1650 ～ 90）のもものと推定する。

17-8 は福岡（上野・高取か）の胴丸形壺で、口縁部は短く端部上面に溝が切られることから、蓋が付いていたものと思われる。口径 11.4cm、胴部最大径 17.1cm、底径 13.1cm、器高 13.5cm を測り、卵形を呈する。外面は黒色釉が掛かり、内面は無釉である。年代は 17 世紀前半代と推定する。

17-9・10 は備前陶器である。17-9 は胴部最大径 12.4cm、残存器高 18.1cm を測る細い筒形の壺で、底部外面に窯印が見られる。口縁部が欠損しているが、花器として使用したものか。年代は 17 世紀前半代のものである。

17-10 は蓋付き香炉である。備前焼の布袋香炉^{ほていこうろ}と呼称されるもので、七福神の布袋神坐像をモチーフとしたものである。17-10 は頭部及び背中部分が欠損しているが、約 80% は残存している。蓋となる部分は布袋神の頭部～上半身部分で、蓋を取ると内部が器状になっている。また、下半身部分は



第17図 SD03出土遺物（2）

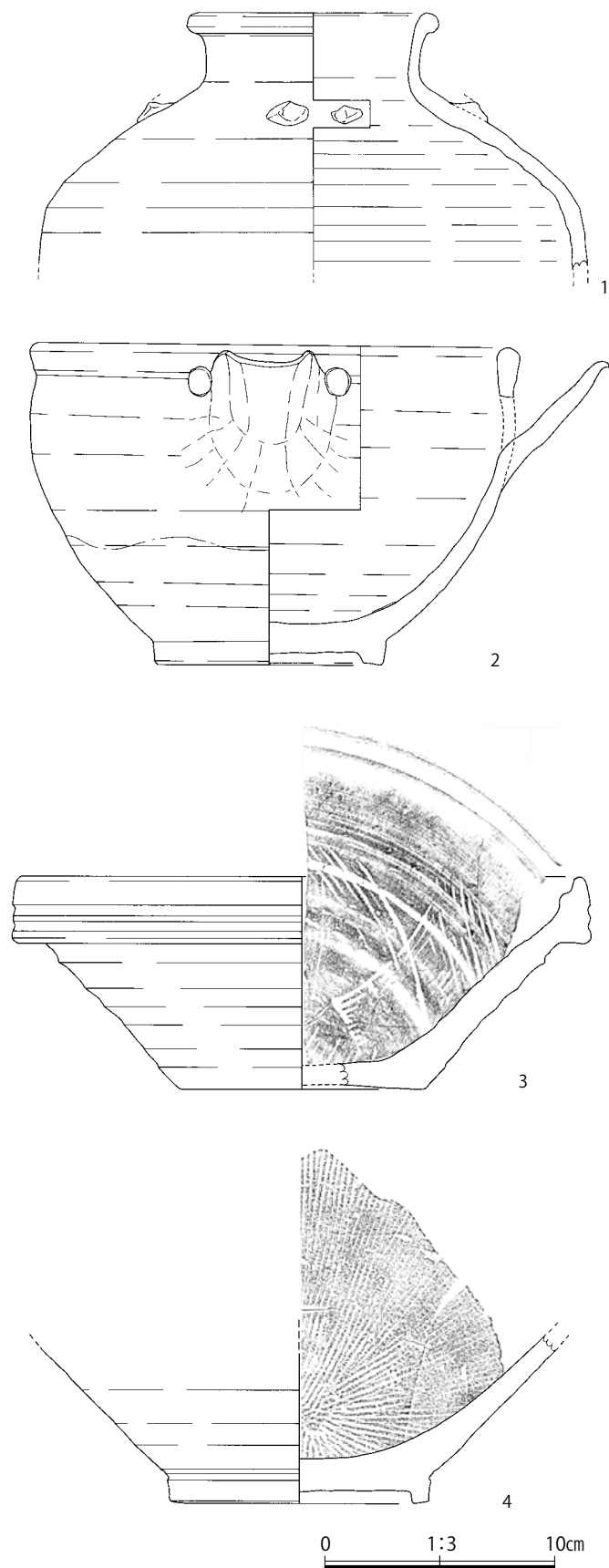
香炉の土台として残り、右足を立て膝にした布袋神の姿が象られている。上半身・下半身ともに精巧に作られており、赤褐色の着物の皺などが忠実に再現されている。また、上半身左脇に0.5cmの切り込みが入れていることから、中で香を焚いた際に煙が出る部分であったことが分かる。底面にはへら彫りで同じ文様が2ヶ所に彫り込まれているが、これが窯印かどうかは不明である。年代は17世紀中頃～後半頃に作られたものである。17-10は、伝世品として古くから存在するが、遺跡から出土した例は今までに無いとの指摘を受けている⁽¹³⁾。

18-1は信楽の壺である。口縁部～胴部の破片で、肩部分には横向きの耳が4ヶ所に付けられる四耳壺である。口径10.0cm、胴部最大径24.0cmを測る大形壺で、年代は18世紀代のものである。

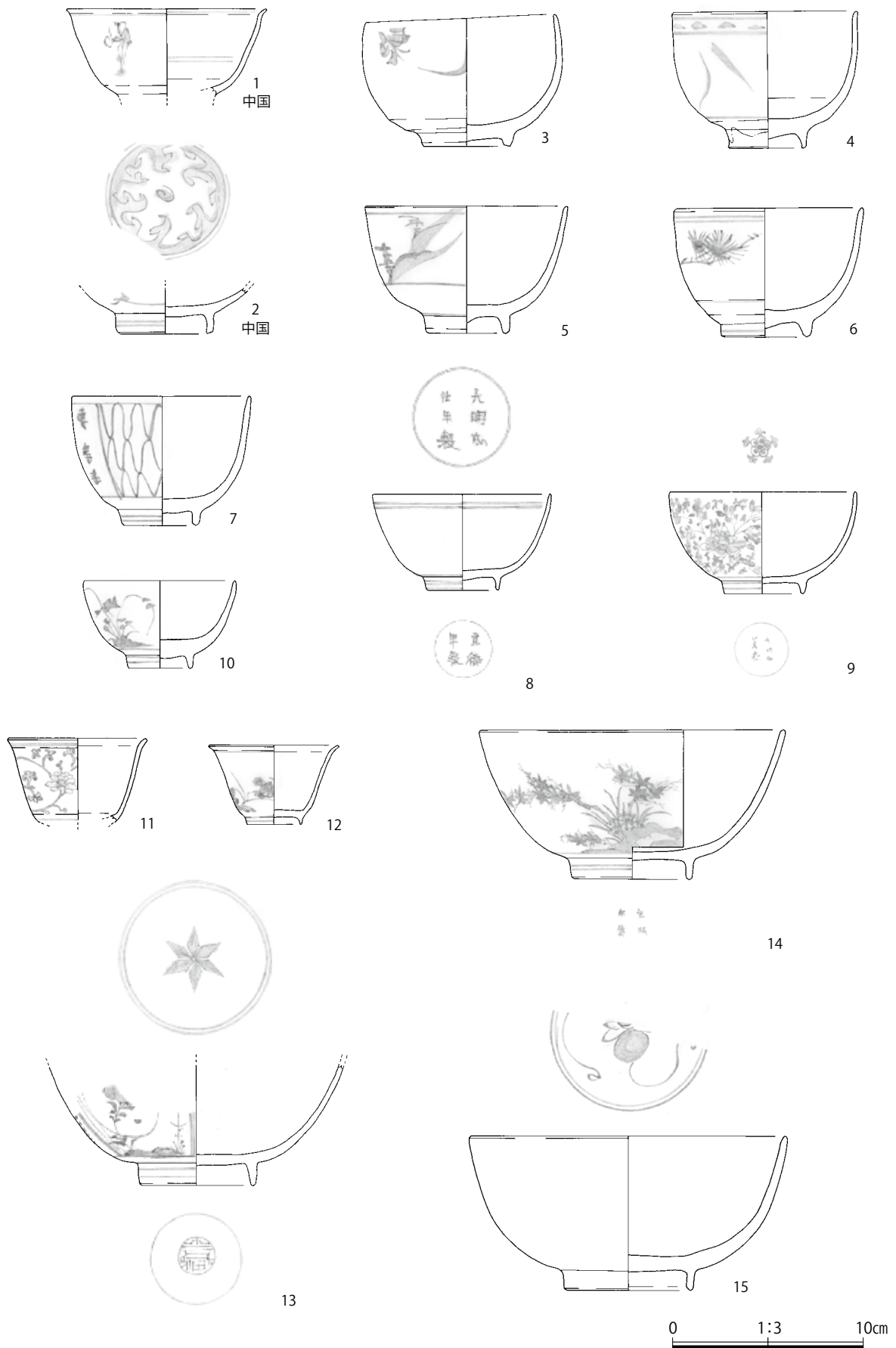
18-2は山口（須佐）の片口鉢である。口径20.6cm、器高14.1cmを測る大形の片口鉢で、口縁端部は玉縁状を呈する。片口の両脇には、須佐特有のボタン状装飾が貼り付けられている。また、底部内面には目跡が4ヶ所残る。年代は18世紀代のものと思われる。

18-3は備前の播鉢で、口径24.6cm、底径10.7cm、器高9.3cmを測る。器壁は厚く、また、口縁端部の幅は2.9cmあり、2条の太い沈線が引かれている。内面には放射状に付けられたスリ目が残るが、かなり磨り減っていることから、比較的長期間使用されていたことが窺える。年代は17世紀代に生産されたものであろう。

18-4は山口（須佐）の播鉢である。体部～高台の残存で、見込み中央から放射状に



第18図 SD03出土遺物（3）



第19図 SD03出土遺物 (4)

スリ目が付けられている。18-2と同様、18世紀代のものと思われる。

SD03 出土遺物・磁器（第19～23図）

19-1・2、22-3は中国磁器で、いずれも漳州窯である。19-1の外面には唐子文が描かれる。19-2は底部～高台の残存で、見込みには漳州窯特有の文様が描かれる。いずれの染付も景德鎮窯のものとは違って、青色が薄く曖昧な絵付けである。年代は17世紀前半頃のものである。

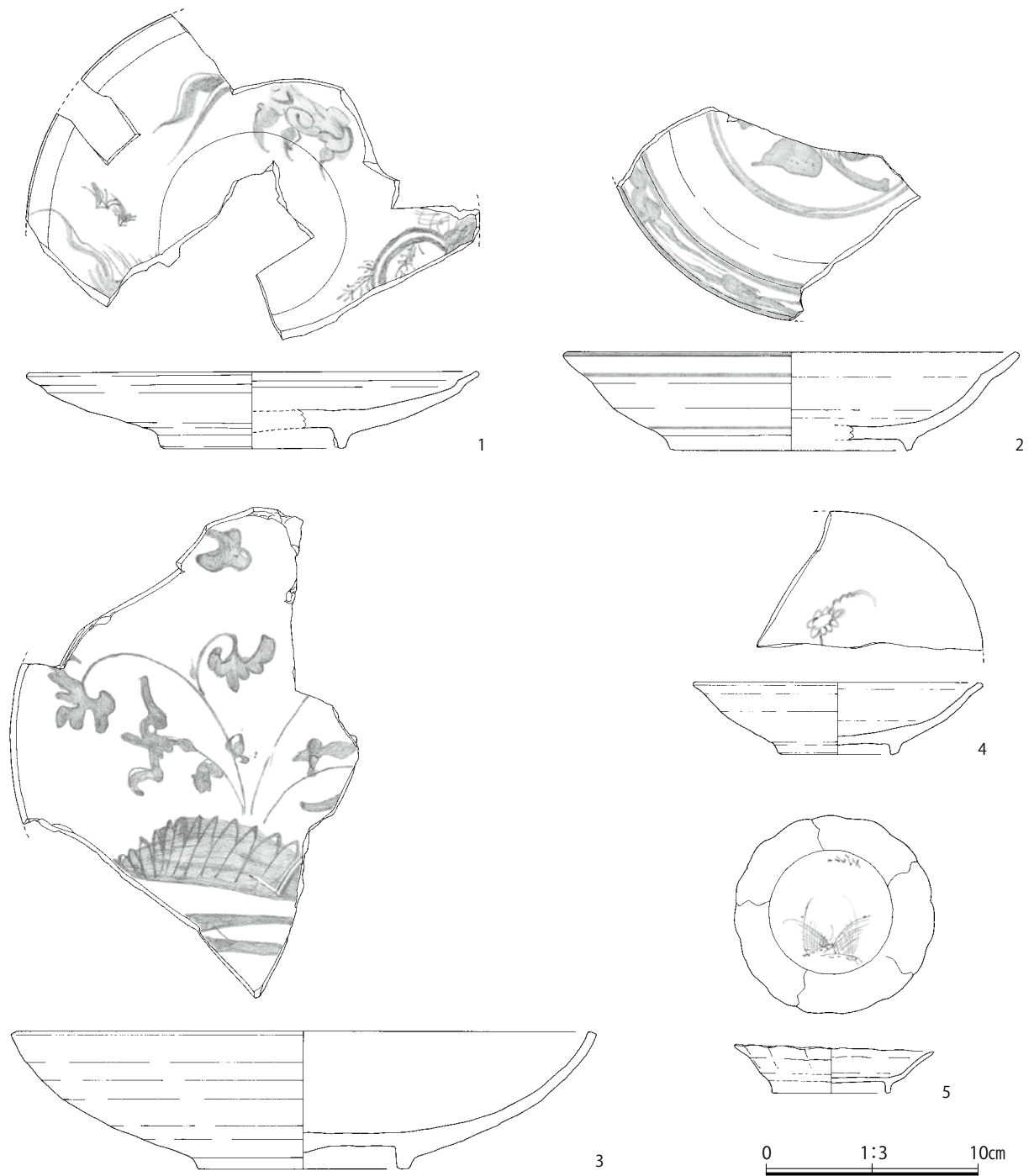
19-3～15、20-1～5、21-1～3、22-1・2・4～12、23-1～3は肥前磁器である。19-3～9は丸形中碗で、このうち19-3～6は九陶Ⅱ-1～2期（1610～40）に当たる。19-3～6はほぼ同一形態の中碗で、胴部が深めで重量感のある器である。口径9.6～10.6cm、高台径4.0～4.6cm、器高6.7～7.2cmでおさまる。19-3は腰部分が丸く張り出し、口縁部は若干内湾する形状である。素地が白色ではなく灰色に近いことから、化粧掛けを施されていない粗製状態の製品であると考えている。口縁部外面に草花文が描かれるが、通常の染付よりも黒い発色であり、陶器に描かれる鉄絵のようにも見える。19-3は陶器に近いもので、磁器出現初期段階に作られたものである可能性が高い。19-4は草花文、19-5は山水文、19-6は松文が描かれる。

19-7は3段の網目文と寿文が描かれる。畳付は無釉で、粗い砂が付着する。年代は九陶Ⅱ-2期（1630～40）のものである。19-8は外内面に圏線のみを引き、見込みに1条の圏線と「大明成化年製」銘、高台内には1条の圏線と「宣徳年製」銘が入る。また、断面には漆継ぎ痕が残ることから、補修して使用していた様子が窺える。年代は九陶Ⅲ期（1650～60）に該当する。19-9は外面全面に連続する牡丹唐草文が描かれており、見込みには手描きの五弁花文が入る。高台内には1条の圏線と「大明成化年製」銘が入る。有田の高級磁器で、年代は九陶Ⅲ～Ⅳ期（1680～18世紀初頭）のものである。

19-10～12は小坏である。19-10は丸形、19-11・12は端反形で、いずれも外面のみに草花文が描かれる。19-11は連続する牡丹唐草文が描かれており、有田の高級磁器である。19-10・12は九陶Ⅲ期（1650～90）、19-11はより絞って1660～70年代のものである。

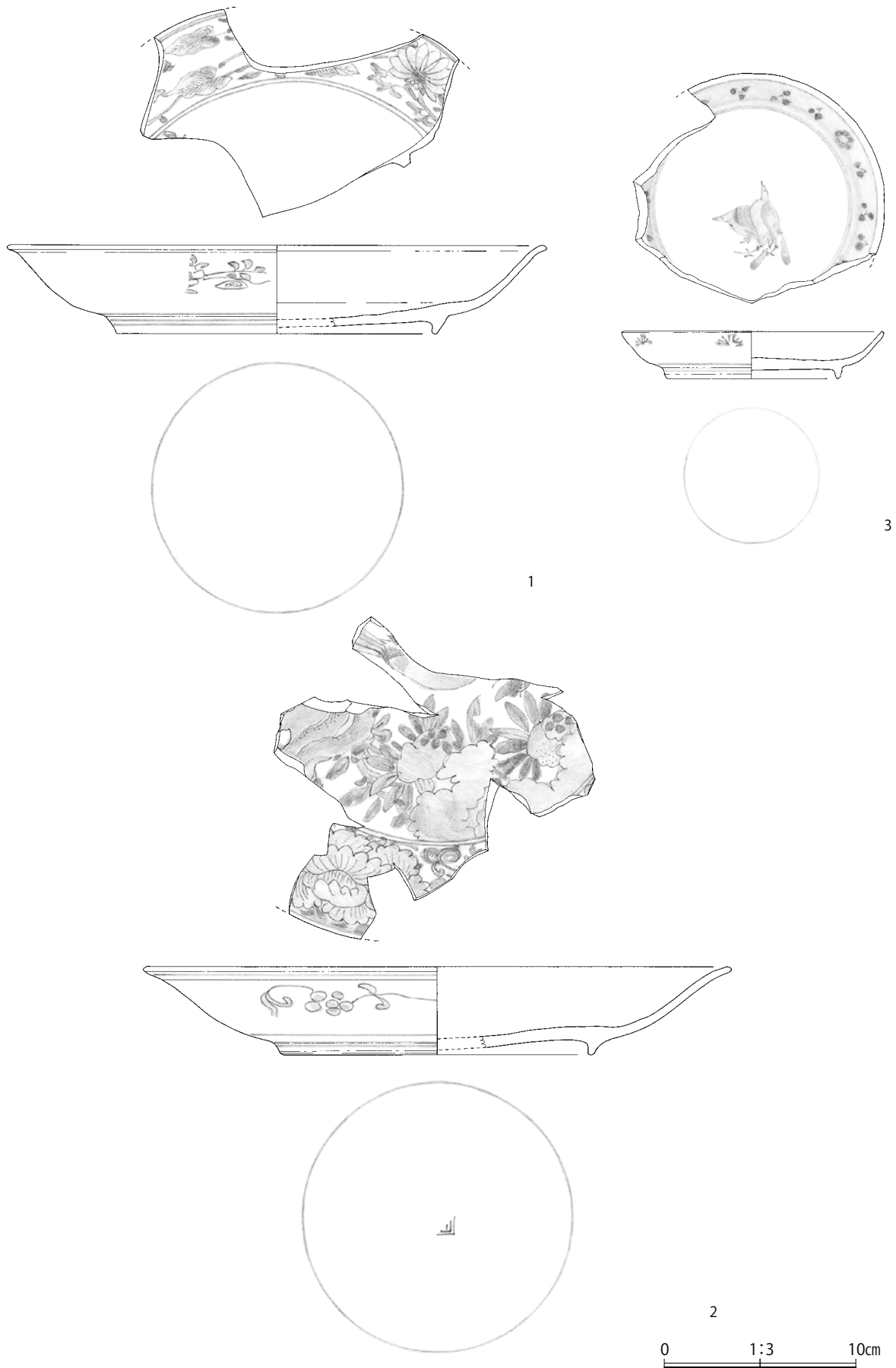
19-13～15は丸形鉢である。19-13は有田で、外面は区画文で区切られ、それぞれに草花文が描かれる。見込みには2条の圏線と特徴的な草花文、高台内には1条の圏線と変形「福」銘が入る。年代は九陶Ⅲ期（1650～60）に絞り込むことができる。19-14も有田の高級磁器で、口径16.0cm、高台径6.1cm、器高7.9cmを測る。染付はやや滲みながらも繊細で、草花文が大きく伸び広がる配置で描かれる。高台内には「宣明年製」銘が入り、内面は無文である。年代は九陶Ⅲ期（1660～80）である。19-15は見込みのみに染付が描かれるもので、外面は白磁のようである。見込みに2条の圏線と花か野菜が描かれる。年代は九陶Ⅲ期（1650～90）と思われる。

20-1～5は肥前磁器の皿である。このうち20-1～4は九陶Ⅱ-1～2期（1610～40）に該当する初期伊万里である。20-1・2は折縁形中皿で、20-1は口径21.4cm、高台径8.8cm、器高3.7cmを測る扁平な形状で、見込みに明確な段が付く。染付は内面のみに見られるが、何のモチーフが描かれているかは不明瞭である。20-2は口径21.4cm、高台径11.0cm、器高4.7cmを測る。染付は内外面に見られるが簡素なもので、口縁部内面と見込みに草花文、外面には3条の圏線が巡る。20-3は



第20図 SD03出土遺物（5）

丸形大皿で、口径 27.2cm、高台径 10.1cm、器高 6.6cm を測る大形品である。口縁部～体部にかけて緩やかに湾曲し、口縁端部上面は 0.4cm の平坦面を持つ。染付は内面のみに見られ、大振りの草花文が荒々しく描かれる。20-4 は口径 13.4cm、高台径 5.6cm、器高 3.5cm を測る小皿で、見込みには菊花文らしき花文が描かれる。20-5 は有田で、端反形小皿の完形品である。糸切細工、型押成形によるもので、貼付高台である。見込みには魚らしき文様が描かれているが、形骸化していて明確ではない。九陶Ⅲ期（1650～90）に大量生産された小皿である。



第21図 SD03出土遺物(6)

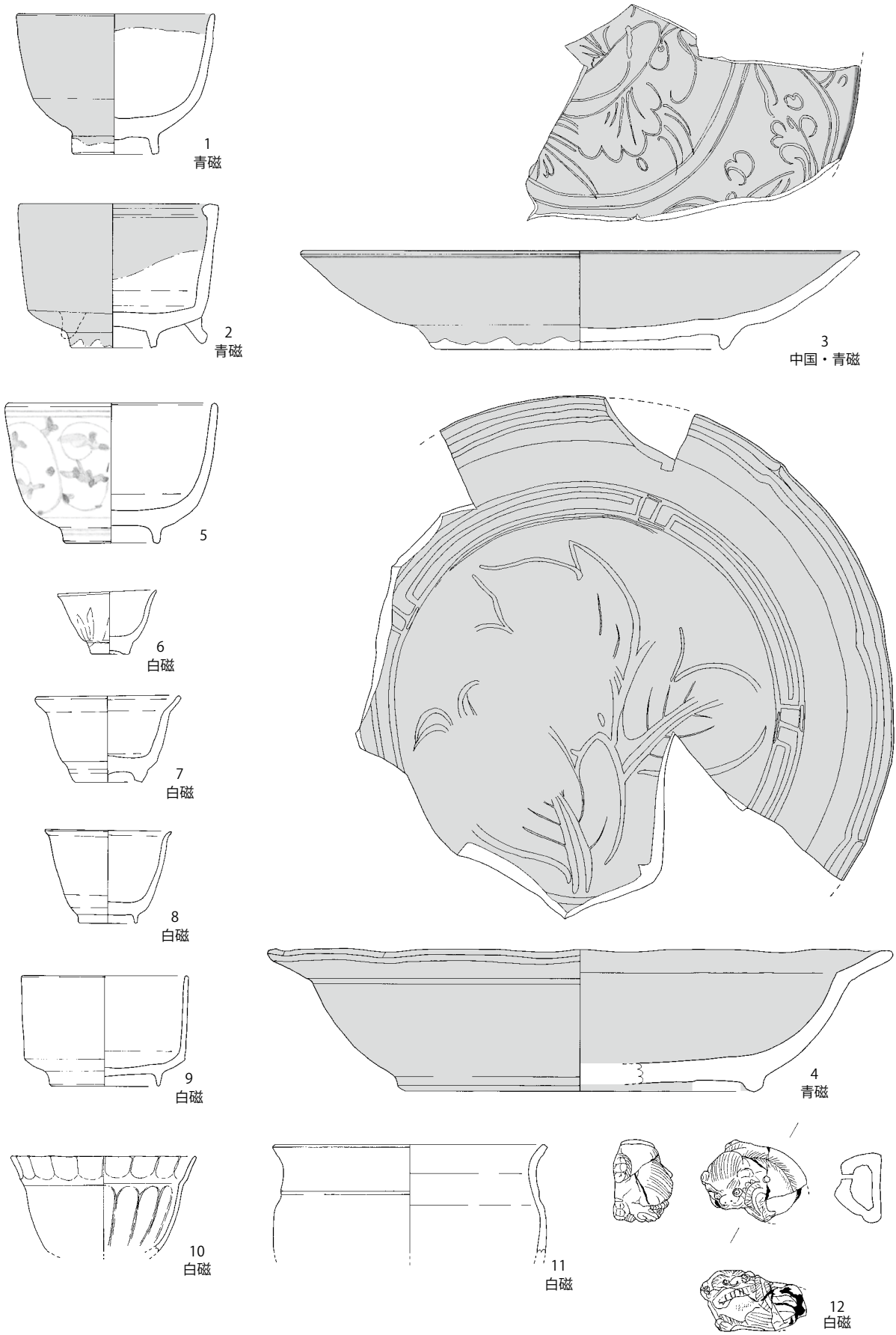
21-1～3は有田・柿右衛門窯の高級磁器である。21-1・2は端反形の大皿で、いずれも口径28.0cm以上の大形品である。21-1は復元口径28.0cm、高台径17.0cm、器高4.7cmを測るもので、染付は口縁部内面に連続する牡丹唐草文が描かれる。見込みは無文で、外面にも花唐草文が描かれる。また、高台内には1条の圏線が巡る。21-2は復元口径30.6cm、高台径16.6cm、器高4.7cmを測り、見込み・口縁部ともに隙間無く染付が描かれる。見込みには鳥と草花文、外面にはやや形骸化した花唐草文が見られる。高台内には1条の圏線と銘が入り、ハリ支え痕が残る。いずれも九陶Ⅲ期（1660～70）のものである。21-3は、口径13.7cm、高台径9.0cm、器高2.5cmの丸形小皿である。口縁部内面には墨弾き技法による連続花文が描かれ、見込みには2羽の鳥（雁か）のみが描かれる。また、高台内には圏線1条が巡り、ハリ支え痕が残る。年代は九陶Ⅲ期（1670～80）に絞り込むことができる。

22-1～4は青磁である。このうち、22-3は中国（漳州窯）の青磁大皿である。復元口径29.6cm、高台径16.0cm、器高5.3cmを測る大形品で、体部は直線的で逆ハ字状を呈する。青磁釉は全面施釉で、口縁端部には鉄釉を塗り、口さびとしている。体部内面・見込みには線彫りによる草花文が描かれる。畳付と高台内には粗い砂が多量に付着しており、年代は17世紀前半頃のものである。

22-1・2・4は肥前の青磁で、22-1は青磁丸形中碗で、外面に青磁釉が掛かる。高台内が無釉であることから、九陶Ⅱ-2期（1630～50）に該当する。22-2は青磁香炉で、形骸化した足が3ヶ所に付くものである。高台内は無釉である。年代は九陶Ⅲ期（1650～90）である。22-4は青磁の折縁形大皿である。口径33.6cm、高台径19.6cm、器高7.6cmを測る大形品で、口縁部は明確に折れ、体部は丸みを持ち、高台には蛇ノ目釉剥ぎの鉄漿が塗られる。印花などによる算木文や陰刻圏線文で区画した見込み中央部に、へら彫りによる葉文が描かれ、口縁部上面には連弧文の陰刻が施される。22-4は肥前・波佐見地方で生産された青磁大皿の代表的な器であり、年代は波佐見Ⅳ期（1650～80）のものである。

22-5は陶胎染付の中碗で、腰部分が直角気味に張り出す形状を呈する。全体的に器壁も厚く重量感がある。染付は外面のみに描かれ、連続する唐草文が描かれる。年代は九陶Ⅳ期（1690～1780）である。

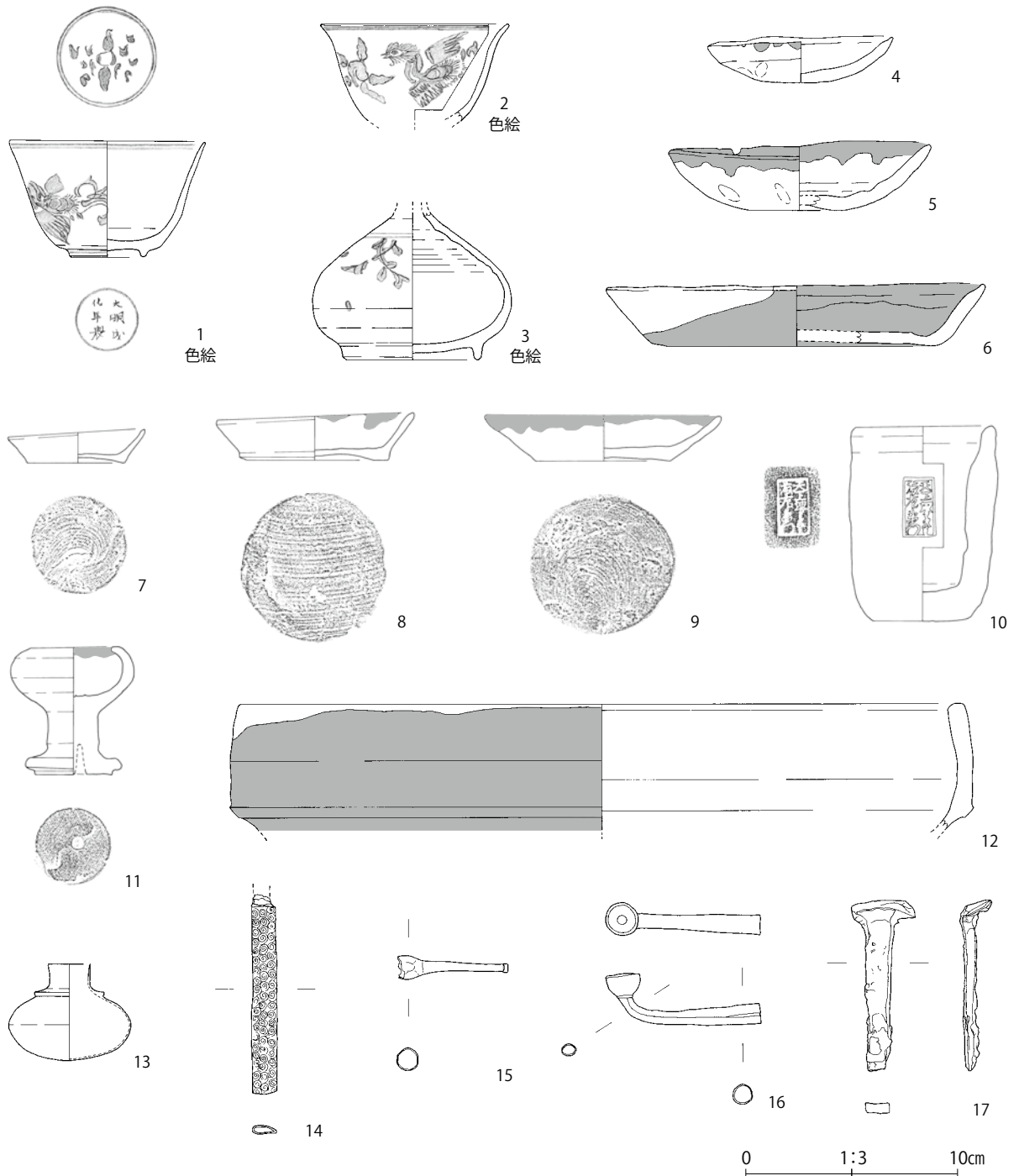
22-6～12は白磁で、22-6～8は端反形小坏である。22-6は外面にへら彫りで鎬文が施されるが、不定間でやや雑である。22-7の口縁端部は、端反形というよりも折縁形に近い形状である。いずれも九陶Ⅱ-2期（1630～50）のものである。22-8はやや黄色がかかった素地で、九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。22-9は口径8.8cm、高台径5.8cm、器高5.9cmを測る有田の白磁筒形中碗で、胴部は垂直に立ち上がる。年代は九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。22-10も有田の白磁変形小鉢で、型押成形により口縁部・胴部は菊弁文状を呈する。22-11は端反形の鉢で、口縁部は緩やかに外反し、胴部に明確な段が付く珍しい形状である。22-10・11の年代は九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1700）のものであろうと推定する。22-12は白磁の水滴で、型押成形により獅子坐像が象られたものである。最大長5.8cm、最大幅4.4cm、高さ3.3cmを測る小形品である。獅子は寝そべり上方を見上げるようなポーズを取る。右耳部分と胴部中央上面に、孔が1個ずつ開けられている。また、



第22図 SD03出土遺物 (7)

断面から漆継ぎの痕跡がはみ出るように残っていることから、破損したものを再度補修して使用していたことが分かる。年代はおそらく九陶Ⅲ期（1650～90）頃のものと思われる。

23-1～3は有田の初期色絵である。23-1・2は同一器種であり、2客を確認している。色絵の端反形小碗であり、外面に花文と鳳凰文が描かれ、見込みには2条の圈線と宝珠文、高台内に1条の圈線と「大明成化年製」銘が入る。使用されている色絵が赤・緑だけではなく青色も確認できることから、かなりの優品と思われる。年代は九陶Ⅲ期（1650年代）にほぼ断定することができる。23-3は油壺で、肩部分に色絵で描かれた葉が見られる。鮮やかな緑色をしており、上記の2点と同一年代のものと思われる。油壺は中国では生産されない器種なので、有田で初期色絵として作られ始めた



第23図 SD03出土遺物（8）

頃のものである。

SD03 出土遺物・土師器、土器、金属製品（第23図）

23-4～9は土師器で、23-4～6は手づくね成形による京都系、23-7～9は底部に糸切り痕が残る在地系である。23-4は口径8.3cmの極小皿、23-5は口径12.5cm、底径4.8cmを測る小皿、23-6は口径18.0cm、底径12.7cmの大皿である。23-4・5は口縁端部の内外面に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたものとする。23-6も外内面に煤や油煙痕が見られるが、口縁端部には見られない。これは灯明皿としてではなく、底部から火を受ける調理器具のようなものとして使用された可能性を考察することができる。23-7は口径6.5cmの極小皿、23-8・9は口径9.3～11.2cmを測るほぼ同一サイズの小皿で、体部～口縁部の形状は直線的なものである。また、口縁端部には油煙痕と煤が付着している。23-7・9の底部は回転糸切り痕、23-8は静止糸切り痕が残る。

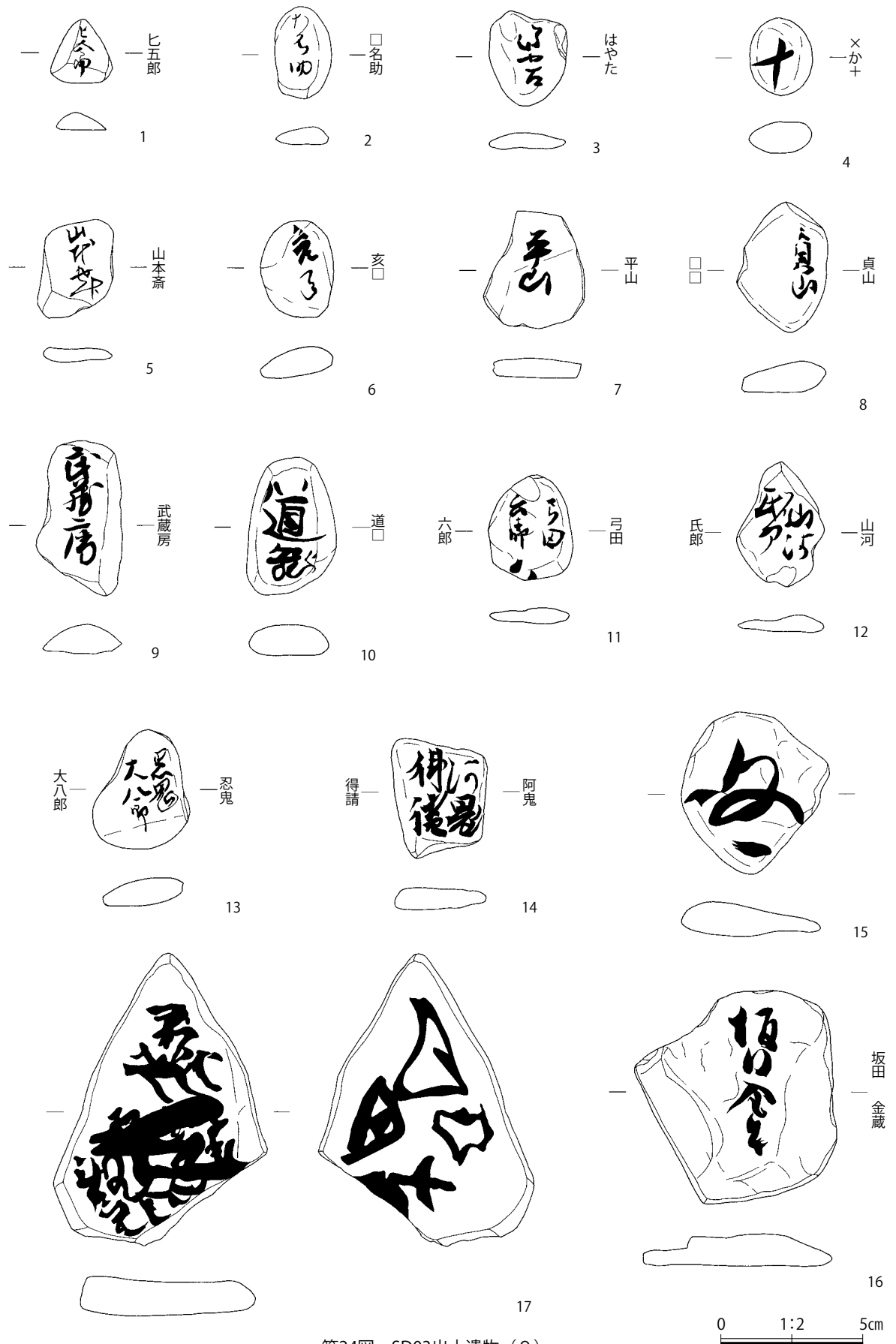
23-10～12は土器である。23-10は焼塩壺で、口径6.5cm、底径4.4cm、器高9.3cmを測る。形状は筒形で、口縁端部は若干先細る。胴部外面には「天下一堺ミなど藤左衛門」の刻印が押されている。このことから、年代は1654～79年に製作されたことがほぼ断定できる⁽¹⁴⁾。23-11は灯火具の一種である。器高6.1cmで、受部と脚部から成る。受部は強めに内湾する形状で、深さは2.3cmである。脚部は直径2.4cmを測る円柱状を呈し、接地面は底径3.7cmを測る。底部は回転糸切り調整で、貫通せず先細る穿孔が1ヶ所開けられている。また、口縁端部には油煙痕が付着している。底部に開けられた孔は、釘などに固定するために設けられたものである。23-12は焙烙で、復元口径34.5cmを測る。底部は残存していないため不明であるが、口縁部の形状は直線的で、わずかに内傾する。外面全面に煤が付着していることから、調理などで使用されたものと思われる。

23-13～17は金属製品である。23-13は壺形容器で、口径2.0cm、胴部最大径5.8cm、器高4.6cmを測る。断面の厚みは約1.0mmに満たないもので、薄手の作りである。使用用途は不明である。23-14はこつか小柄で、柄部分の残存である。柄の表面には直径約4mmの渦文が縦方向に隙間無く刻み付けられている。23-15・16は煙管で、23-15は吸口、23-16は雁首である。23-17は断面が長方形を呈する釘で、最大長8.2cm、頭部幅3.0cmを測る大形のものである。

SD03 出土遺物・墨書石（第24図）

24-1～17は、墨書文字が書かれた小石（24-17のみ摩滅した須恵器片）である。いずれの石も小形で扁平であり、24-15～17を除いて、長さ2.3～5.3cm、幅2.0～3.6cm、厚み0.4～1.1cm程度の小石である。これは、石の平らな面に墨書文字を書くことを前提として選別されたものと理解できる。

24-1は三角形の小石で、「さじごろう七五郎」という名が書かれている。24-2は「□名助」とある。これも名であろう。24-3は「はやた」と平仮名で書かれている。名字か名のどちらかであろう。24-4は正円形に近い小石で、「×」あるいは「十」とある。24-5は「山本斎」という氏名が書かれている。24-6は丸みを帯びる楕円形の小石で「亥□」とある。24-7は「平山」という名字が明確に読み取れる。24-8は「貞山」という名字が書かれており、その左側が空白になっているため、ここに名前が書かれていた可能性が高い。24-9には「武蔵房」と書かれているが、これは人名か場所か、もしくは通



第24図 SD03出土遺物 (9)

称などの可能性が考えられる。24-10は「道□」、24-11は2行に渡って「弓田六郎」と氏名が書かれている。24-12は「山河氏郎」という氏名が見られる。24-13は「忍鬼大八郎」とあるが、この「忍鬼」とは実際の名字とは考えにくく、呪^{まじな}い的な意味合いの言葉であった可能性が高い。24-14には「阿鬼得請」とある。「阿鬼」は「悪鬼」の当て字か。「得請」とともに、いずれも仏教用語である。24-15は最大長5.7cm、最大幅4.9cm、厚み1.2cmを測るやや大形の扁平石で判読できなかったがおそらく一文字が書かれている。24-16は、最大長7.4cm、最大幅7.0cm、厚み1.2cmの大形石で、「坂田金蔵」という氏名が大きく書かれている。24-17は須恵器の甕片を転用している。摩耗が顕著で、須恵器甕本来の叩きや当て具痕などがほぼ消えていることから、他の石と同じような扱いで意図せず選別されたものであろう。なお、この1点のみ両面に墨書が書かれているが、どちらの面も判読不明である。

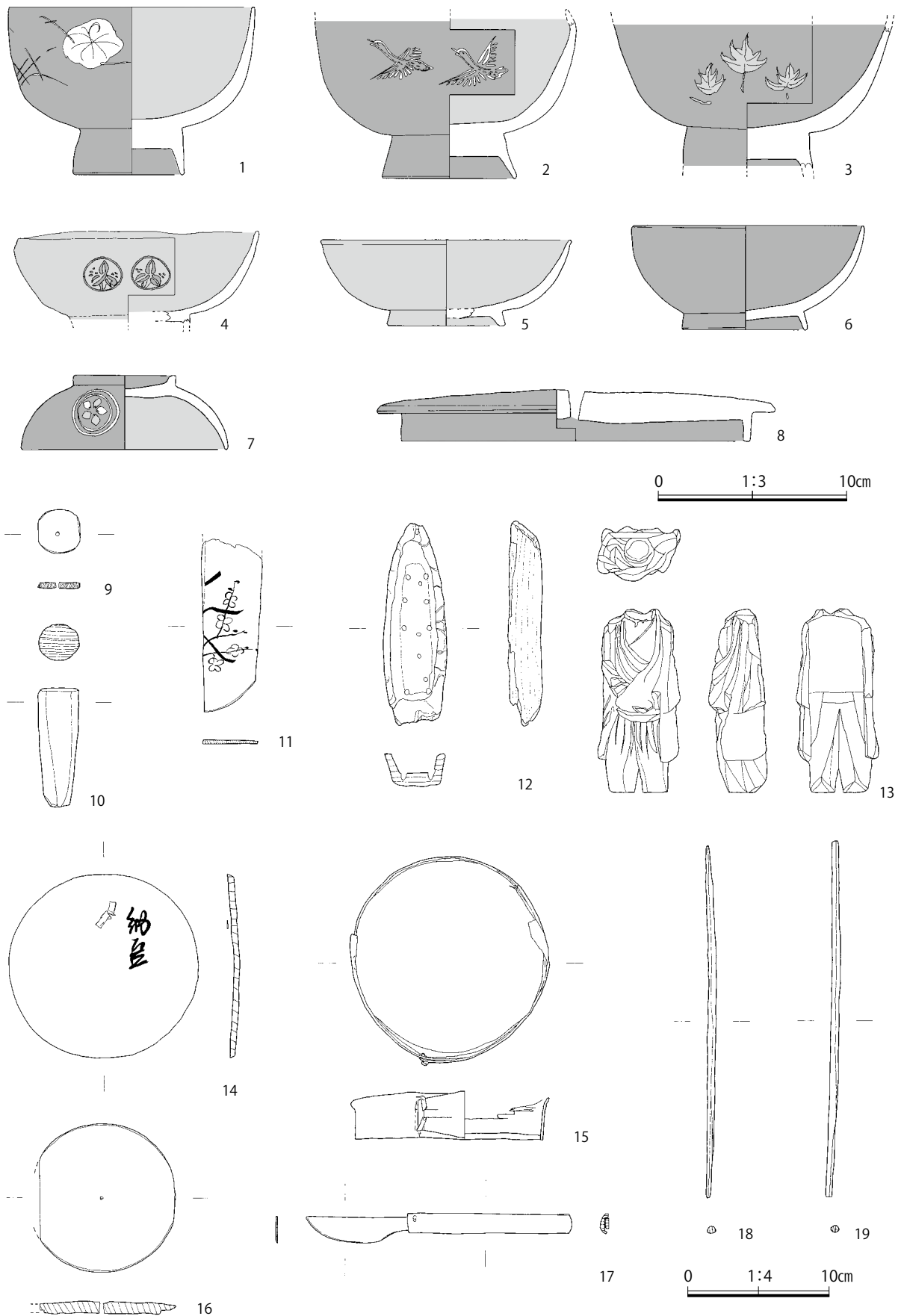
17点中10点に人名と思われるものが書かれており、名前のみ、名字のみ、氏名揃ったものなど様々である。24-4は記号のようなものか。また、24-13・14には「鬼」という文字が入っていることも特徴的であり、これら墨書石が何らかの呪いに関わるものの可能性が高いものと判断される。

これら墨書石に書かれた人物や場所などを特定することは困難であり、また、書かれた理由も判然としない。屋敷境SD03への廃棄が、祭祀による一時的な結果なのか、あるいは別の場所にあったものが二次的に持ち込まれたのかは、検討の余地があると考えている。

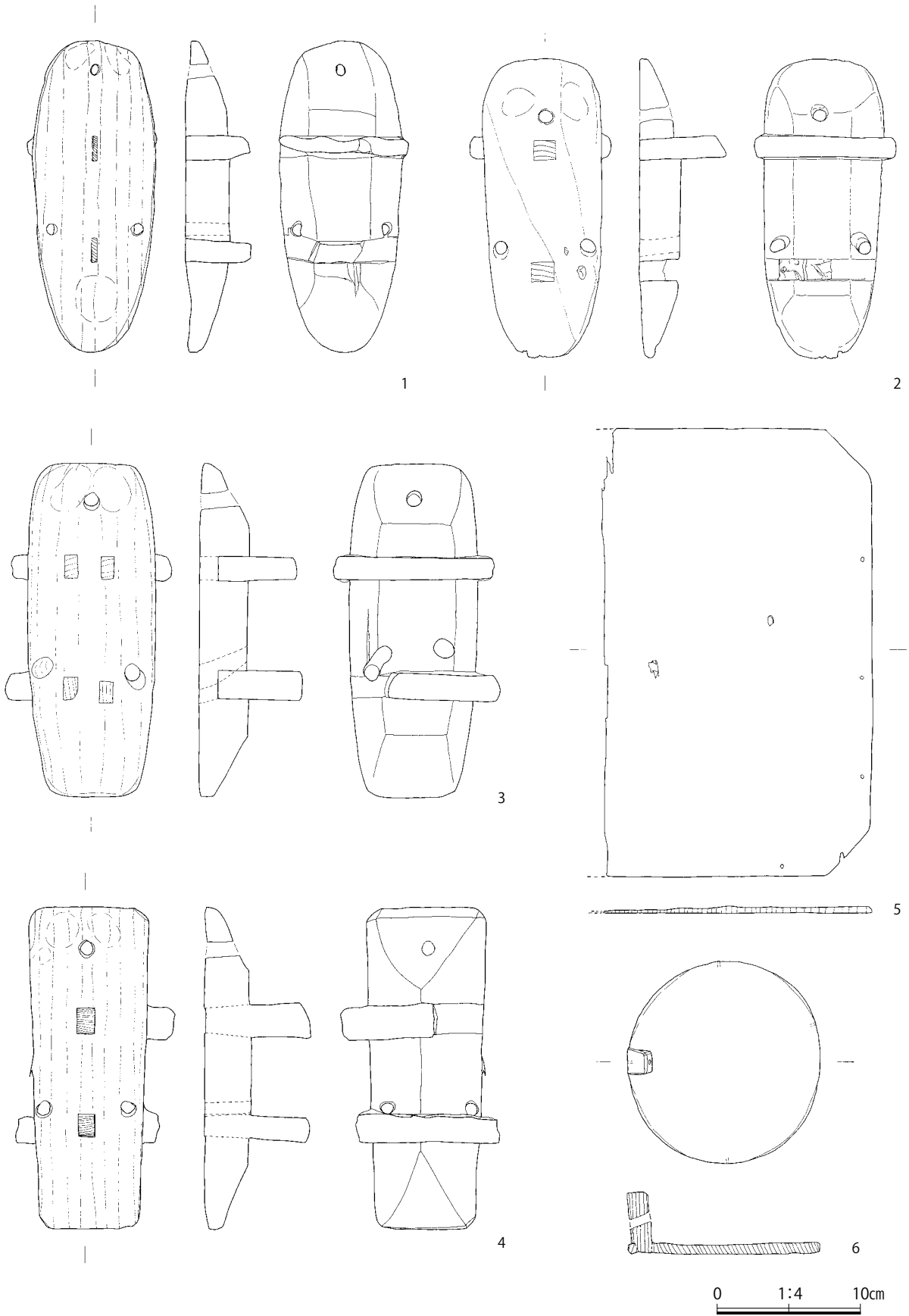
SD03 出土遺物・木製品 (第25～27図)

25-1～8は漆器製品で、25-1～3は高台が高いタイプの漆器椀で、いずれも口径14.0cm前後、器高9.0cm前後を測る。25-1は、外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られている。外面には草花文が黄色と朱色で描かれる。25-2は外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られており、胴部外面には2羽の鳥(雁か)が羽ばたく様が朱色で描かれる。25-3は外内面ともに黒色の漆が塗られており、外面に紅葉文(楓文か)が朱色で描かれる。25-4～6は高台が低いタイプの漆器椀である。25-4・5はいずれも外内面ともに朱色で塗られている浅形漆器椀で、25-4は外面に沢瀉^{おもだか}文が2個黒色で描かれ、25-5は無文である。25-6は外内面ともに黒色の漆が塗られており、無文である。25-7は椀の蓋で、外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られている。外面には黄色の二重丸内に花文(桜文か桔梗文)が描かれた家紋風の文様が3ヶ所に配される。花文の5枚ある花びらのうち、2枚が黄色、3枚が朱色で塗られている。25-8は桶などの蓋と思われ、口径18.7cmを測る大形品である。外内面ともに黒色の漆が塗られている。

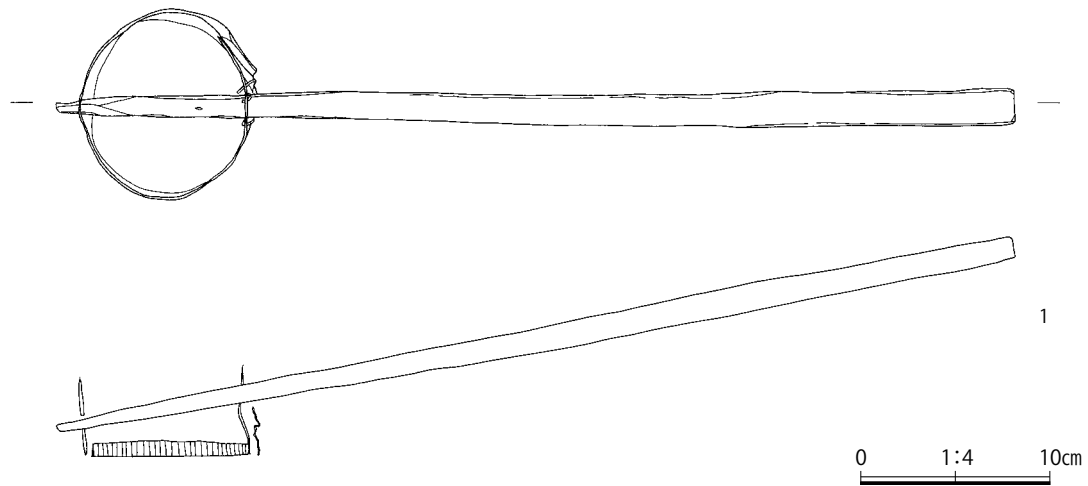
25-9は直径約3.0cm、厚み0.4cmを測る隅丸方形の木製品で、中央に穿孔が1ヶ所見られる。紡錘車のようなものであったことを推定している。25-10は円柱形の栓で、最大長8.4cm、直径2.8～1.7cmのやや大形品である。25-11は曲物の蓋と思われる破片で、片面に墨書で梅の花が描かれる。25-12は舟形状木製品で、最大長14.4cm、最大幅4.5cmを測る製品である。底面12ヶ所に貫通・不貫通の穿孔が施されている。25-13は武士を象った人形である。最大長13.0cm、最大幅5.8cm、厚4.0cmを測るもので、頭部は残存していないものの、首部分に差し込みの加工が成されている。胴部は精巧に彫り出して成形されており、武士の着物姿を忠実に表現している。前面・後面・側面い



第25図 SD03出土遺物（10）



第26図 SD03出土遺物 (1 1)



第27図 SD03出土遺物（1・2）

ずれから見ても立体的に彫られており、着物の流線形が丁寧に作り込まれている。足部分は鋭利に切り取られているようにも見えるが、最初から無いものとして製作された可能性も考えられる。25-14・15は曲物容器の身と蓋のセットで、25-14が蓋、25-15が身である。いずれも直径14.0cm前後で、器高3.5cmの扁平な容器である。蓋の表面右側には墨書文字が書かれており、「納豆」と読める。納豆を入れた容器だったものであろうか。25-16は曲物容器の蓋で、端部内面に段状の加工が施されており、中央に直径0.2cmの小さい穿孔が1ヶ所見られる。25-17は柄と刃が別作りで合わせてある精巧な作りの片刃篋である。25-18・19は白木の箸で、25-18は24.9cm、25-19は25.2cmを測る。25-18は両先端が先細る加工が施されているのに対して、25-19は全体通して直径0.5cmを保つものである。26-1～4は下駄である。26-1・2は丸型差歯下駄で、26-2は隅丸形状の形状を呈する。26-3・4は角型差歯下駄で、26-3はやや丸みを帯びる形状、26-4は角張った長方形を呈する。いずれの下駄にも指の痕跡が顕著に残る。26-5は折敷の底板で、隅切正方形である。正方形の長さは31.4cm、厚み0.5cmを測る。26-6は柄杓の底板で、柄を差し込むパーツが残存するものである。この部分には直径0.6cmの穿孔が斜めに開けられている。27-1は柄杓の完形品で、柄・曲げ物部分ともに完存するものである。最大長50.7cmを測り、柄の長さは50.6cmで、桶部分に差し込まれる部分は先端が尖る。桶部分の直径は約9.0cmを測る。

第4項 SK01（第14図）

SD03の南北溝と東西溝の連結部においてSK01を検出した。SK01は東西に長い長楕円形状を呈する土坑で、東西長2.3m、南北幅0.8m、深さ0.2～0.4mを測るものとして復元できる。

SK01からは肥前磁器・中国磁器の破片がおびただしいほどかたまって出土し、土が見えないほど破片がぎっしり詰まった状態であった。SK01は近現代攪乱層を除去した面で検出した遺構であり、調査時はSD03の埋没過程でその埋土内に集中的に廃棄されたものとの解釈をしていた。しかし、SD03の埋土中遺物である可能性を否定するものではないが、その他SD03出土遺物（第16～27図）

との接合関係は見られなかった。

SK01 出土遺物は、20 枚のセット品であることが判明し、セットと考えられるものは少なくとも 19 種類出土している。肥前磁器では初期伊万里の中皿（第 28 図）、有田・柿右衛門様式の小皿・中皿・大皿（第 29～32 図）、初期色絵の大皿 3 点（第 33・34 図）などが出土し、中国磁器では景德鎮窯の手塩皿・小皿・中皿（第 35・36 図）、漳州窯の大皿（第 37 図）が出土した。

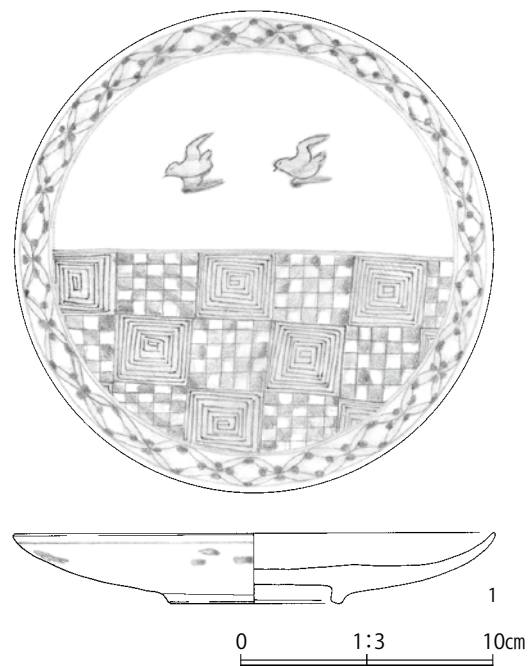
SK01 出土遺物・肥前磁器（第 28～34 図）

28-1 は口径 19.2cm、高台径 6.8cm、器高 2.9cm を測る中皿で、口径に比べて高台径が小さい形状である。口縁端部に口さび、染付は外内面に見られる。口縁部内面は連続する七宝文が巡り、見込みの絵柄は中央で 2 つに区切られている。その上方は 2 羽の鳥（雁か）が羽ばたく様が描かれ、下方には 3.0cm 四方の雷文と市松文が、市松文様の配置で交互にあしらわれている。雷文の内部、及び 3.0cm 四方の市松文も細かく交互に塗り潰されている。外面には草文が 4 ケ所に配されている。20-1 は少なくとも 10 客以上の同一器種を確認しており、その半数以上に被熱痕が残る。年代は九陶Ⅱ-2 期（1640 年代）のものである。

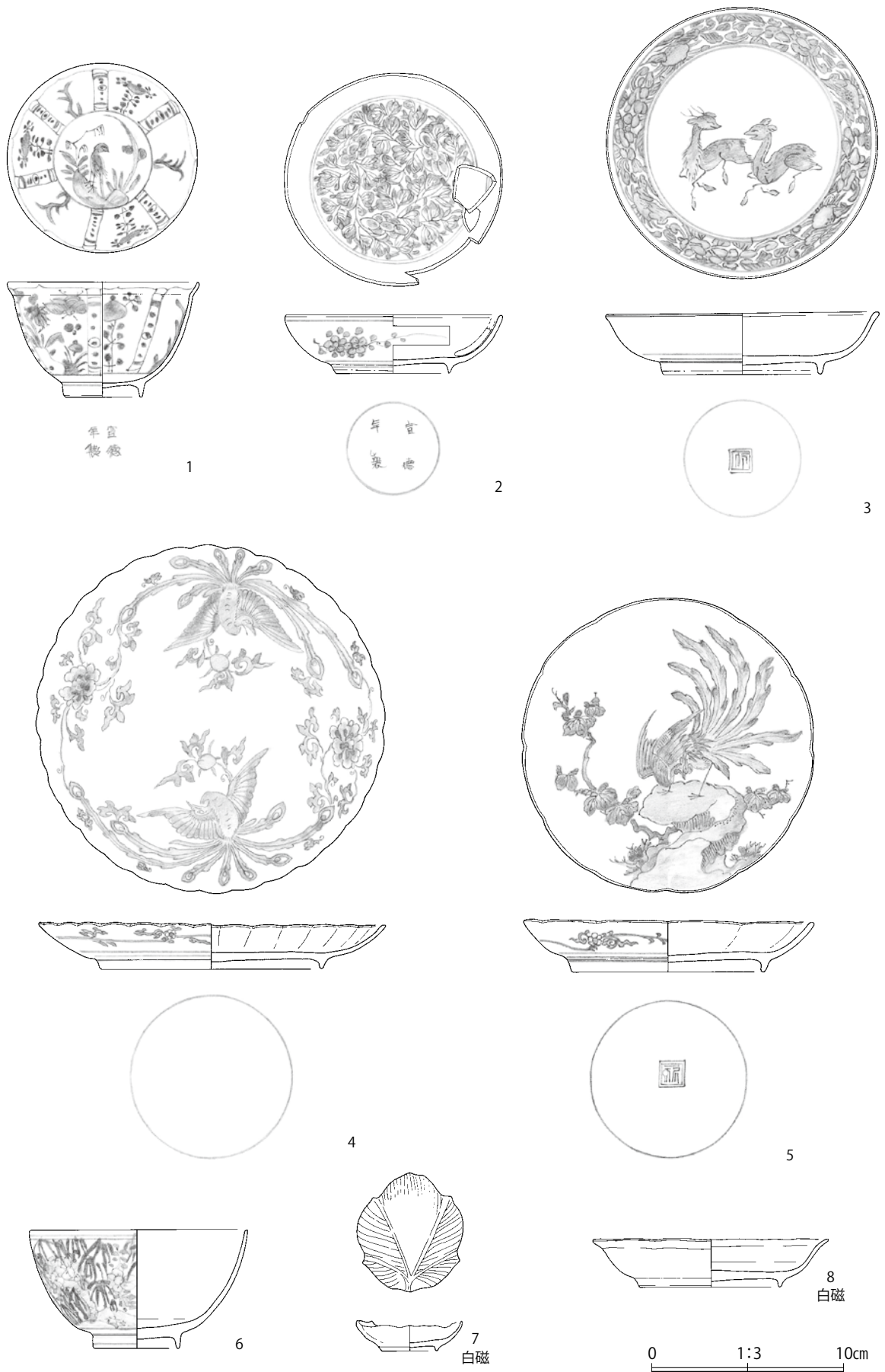
29-1 は向付で、「芙蓉手」と呼ばれる中国磁器（景德鎮窯）に多く見られるモチーフを模倣して国内生産されたものである。型押成形による口縁端部の形状、染付の様相、高台内の銘など、中国製品を忠実に模している。見込みには 1 条の圈線内に木の枝にとまった鳥が描かれる。内面全面は 6 区画に区切られ、その中に草花文と草文が交互に描かれる。外面も内面同様の絵柄配置で、6 区画に区切られた中に草花文・草文が描かれ、これに昆虫が羽を広げて飛ぶモチーフが追加されている。高台内には「宣徳年製」銘が入る。少なくとも 7 客以上の同一器種を確認しており、半数以上に被熱痕が見られる。年代は九陶Ⅲ期（1660 年代）にほぼ特定できる。

29-2 は有田の丸形小皿で、口縁部は緩やかに丸みを帯びる。口径 11.3cm、高台径 6.0cm、器高 3.1cm を測る皿で、器壁は薄く精巧な器である。染付は外内面に見られ、見込みは圈線 2 条内に花唐草文が描かれ、花唐草文の花・葉部分ともに細やかな濃淡が付けられている。外面は対角となる位置に梅枝文が描かれ、高台内に 1 条の圈線と「宣徳年製」銘が入る。高台内底部にハリ支え痕が 1 ケ所残る。少なくとも 18 客以上の同一器種を確認しており、その半数以上に被熱痕が見られる。また、29-2 内面には同一器種・別個体の口縁部破片が溶着している。年代は九陶Ⅲ期（1660～70）に絞り込むことができる。

29-3 は丸形小皿で、体部付近でやや強めに曲がる形状である。口径 14.2cm、高台径 8.2cm、



第28図 SK01出土遺物（1）



第29図 SK01出土遺物 (2)

器高 3.3cm を測る皿で、口縁端部がわずかに外反する。染付は外内面に見られ見込みには、圏線 2 条の内側に雄鹿と雌鹿が並んで駆ける絵柄が描かれており、2 頭は向き合い、雌は口を開け、雄は閉じている。口縁部には全面に連続花卉文が巡り、外面には圏線のみが描かれる。高台内には「析」銘が入る。また、高台内底部にハリ支え痕が 1 ケ所残る。少なくとも 15 客以上の同一器種を確認しており、その半数以上に被熱痕が見られる。29-3 は有田・柿右衛門窯の製品で、年代は九陶Ⅲ期（1660～70）に該当する。

29-4 は口径 18.2cm、高台径 11.6cm、器高 2.5cm を測る中皿である。型押成形により菊花状を呈する。染付は外内面ともに秀逸で、内面には 2 羽の鳥（鳳凰）が対角となる位置で配され、それらの間に牡丹唐草文が入り、鳳凰の尾と唐草部分が連続するように繋がられている。外面は全面に連続花唐草文が描かれ、高台内には 1 条の圏線のみが巡る。29-4 の染付は、他のセット品と比較してもかなり精度の高いもので、非常に丁寧な描かれる。また、高台内底部にはハリ支え痕が 1 ケ所残る。少なくとも 15 客以上の同一器種を確認している。29-4 は有田・柿右衛門窯の製品で、年代は九陶Ⅲ期（1660～80）に該当する。

29-5 は 29-4 より一回り小さい中皿で、口径 15.1cm、高台径 10.1cm、器高 2.8cm を測る。29-4 同様な型押成形による花状で、内面には 1 羽の尾長鳥（鳳凰）が岩の上にとまり、頭部を下げるポーズで描かれる。その背後には左右非対称に伸びる枝振りが描かれる。外面には連続する花唐草文が描かれ、高台内に圏線 1 条と「二重角福」銘が入る。また、高台内底部にはハリ支え痕が 1 ケ所残る。少なくとも 15 客以上同一器種を確認しており、その半数以上に被熱痕が残る。年代は九陶Ⅲ期（1660～70）に該当する。

29-6 は丸形中碗で、口径 11.4cm、高台径 4.5cm、器高 6.3cm を測る。染付は外面のみに描かれる。外面全面に連続する笹の葉（竹）が描かれ、その合間に松と梅の木が描き込まれる松竹梅文である。少なくとも 15 客以上の同一器種を確認しており、その半数以上に被熱痕が残る。年代は九陶Ⅲ期（1660～90）のものと思われる。

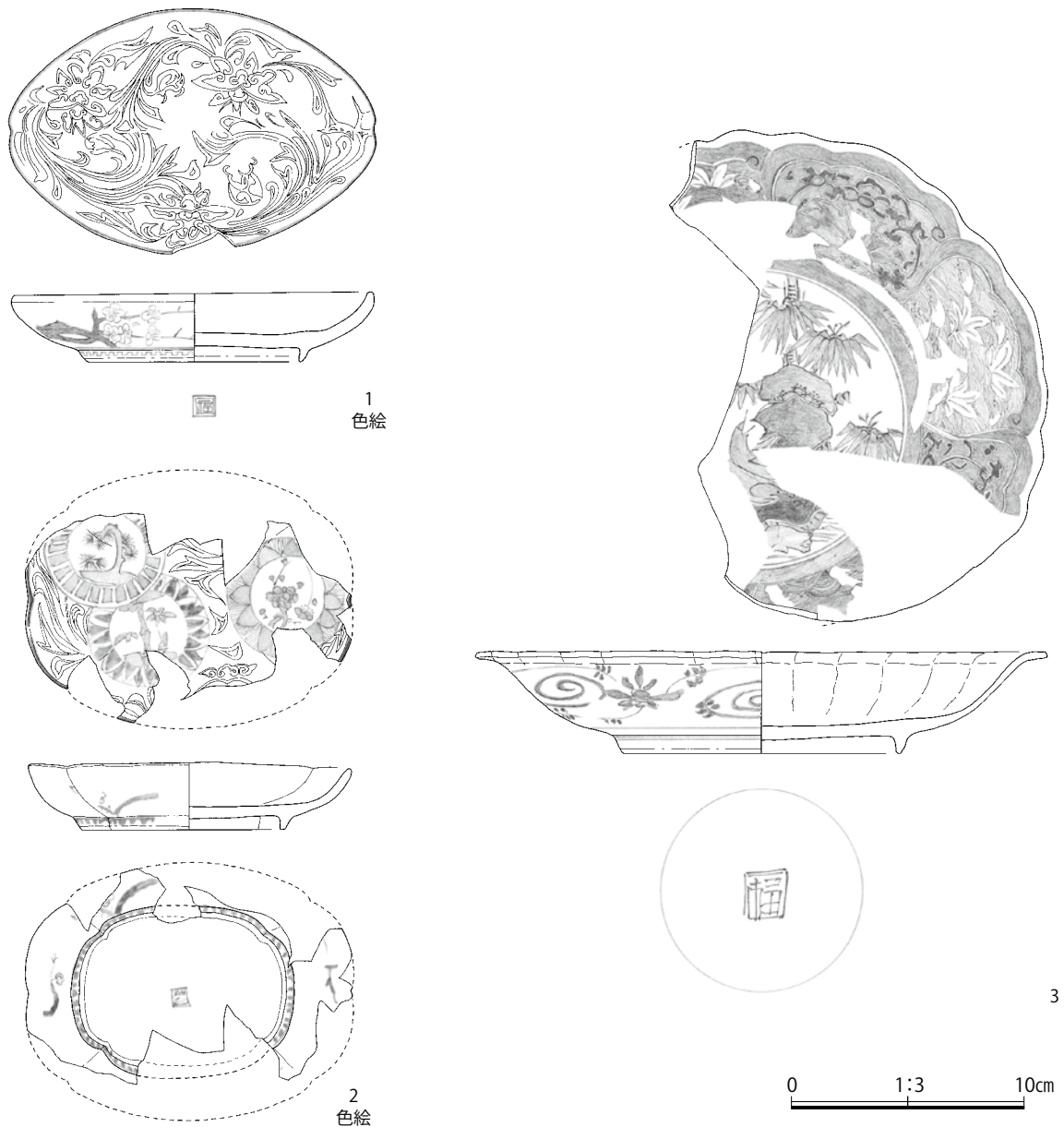
29-7 は有田の葉形を呈した白磁手塩皿である。最大長 6.2cm、高台径 3.0cm、器高 1.6cm の小さな皿で、型押成形で葉脈なども表現されている。年代は九陶Ⅲ期（1650～60）に絞ることができる。少なくとも 4 客以上の同一器種を確認しており、その半数に被熱痕を確認している。

29-8 は有田の端反形白磁小皿である。口縁端部は外反し、型押成形によって波打つ形状を呈する。年代は九陶Ⅲ期（1650～90）のもので、少なくとも 10 客以上の同一器種を確認している。また、他の遺物よりも被熱痕が顕著に残っており、皿の形状に沿って放射状に割れている個体が数多く見られる⁽¹⁶⁾。

30-1・2 は色絵変形皿である。いずれも型押成形による不定楕円形状の変形皿で、器壁は厚手、糸切細工による貼付高台である。口縁端部には口さびが塗られる。内外面の装飾については、両個体ともよく似た部分が見受けられることから、おそらく同じ窯元による製作と思われる。30-1 は内面に型打陽刻による花唐草文が配され、3 個の花とそれらを繋ぐ唐草文が象られている。30-2 は、染付・色絵・型打陽刻による装飾が施される。染付と色絵による丸文が 3 個配され、それぞれ中に松竹梅

が描かれる。丸文以外の空白部分には30-1と同様の型打陽刻が見られる。30-2のような丸文が配される器を「祥瑞手⁽¹⁷⁾」という。いずれの外面上にも染付で梅の木が描かれ、花部分は赤色や黄色の色絵が施される。高台付け根に描かれる文様がわずかに異なっており、30-1は圏線1条と線描きの櫛歯文、30-2は塗り潰す櫛歯文が見られる。この場合、櫛歯文を塗り潰すものがより貴重であり、高級品と⁽¹⁸⁾言われている。高台内にはいずれも「二重角福」銘が入る。30-1は少なくとも15客以上、30-2は⁽¹⁹⁾少なくとも5客以上の同一器種を確認しており、その半数以上に被熱痕が顕著に残る。どちらも有田の初期色絵で、年代は九陶Ⅱ-2期(1640末～50)に絞り込むことができる。

30-3・31-1(第31図)・32-1(第32図)は、いずれも有田・柿右衛門窯の染付大皿であり、この3枚は絵柄違いのセット品であるという指摘を受けている。⁽¹⁹⁾成形・染付ともに緻密な作業で製作されたものと思われ、高級品であることを示している。これらはいずれも日常的ではなく、特別な行



第30図 SK01出土遺物(3)

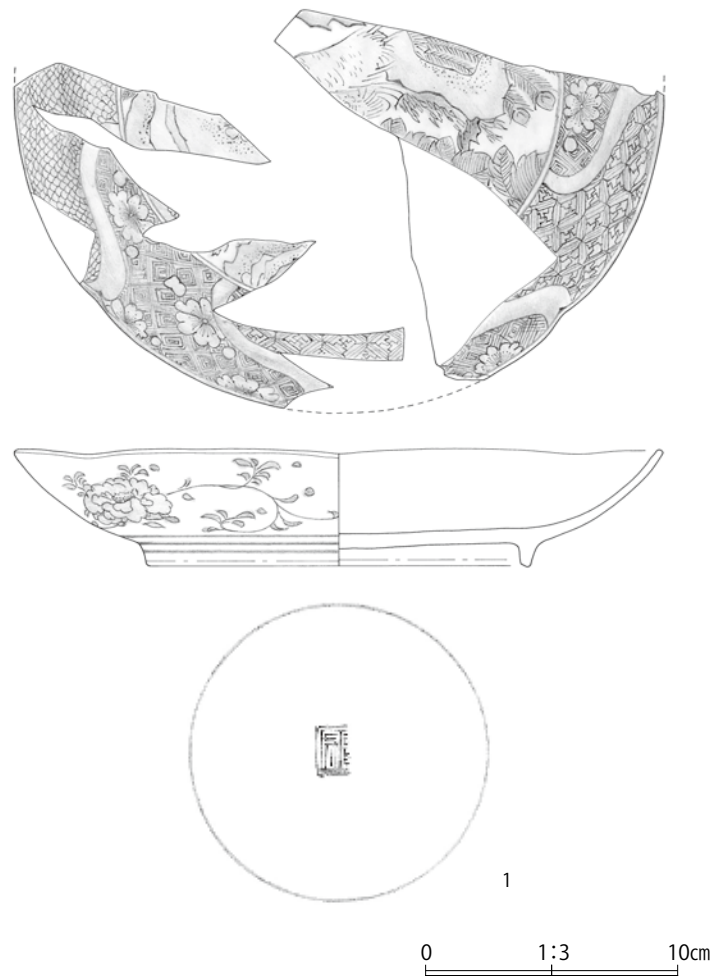
事などで使用された器であったと思われる。

30-3 は口径 24.8cm、高台径 12.2cm、器高 4.4cm を測る大皿である。口縁部は大きく外反し、型押成形による波打つ形状で、内外面に染付が描かれる。口縁部分は区画文で 8 区に区切り、それぞれに複雑かつ緻密な草花文などが描かれる。見込み中央には 2 羽の鳥、その背景に竹が描かれる。外面には唐草部分が渦巻き状になっている連続花唐草文が描かれる。高台内には 1 条の圏線、中央に「角福」銘が入る。また、底部にはハリ支え痕が残る。年代は九陶Ⅲ期（1660～70）に該当する。

31-1 は口径 25.6cm、高台径 15.2cm、器高 4.7cm を測り、口縁部は緩やかに湾曲する丸形を呈する。型押成形で象られた部分と染付は連動しており、染付は外内面に描かれ、繊細で緻密な絵柄である。見込み部分は残存不良のため不明瞭であるが、おそらく尾長鳥が木の枝にとまっている様子が描かれる。口縁部分は捻文で 8 区画に区切られているが、この捻文部分が型押成形によって盛り上がったように成形されている。8 区画内にそれぞれ四方禪文・桜文・網目文などが隙間無く描かれる。外面は連続する牡丹唐草文が大きく描かれ、高台内には 1 条の圏線、中央に「二重角福」銘が入る。年代は九陶Ⅲ期（1660～70）に特定できる。

32-1 は口径 32.7cm、高台径 14.0cm、器高 8.3cm を測り、30-3・31-1 と比べて最も大きく深さを持つ皿である。口縁部は緩やかに外反し、端部は型押成形によって一定間隔で波打つ形状である。染付は外内面に見られ、見込みに 2 羽の鳥と草花文、口縁部には大振りの花唐草文が連続して描かれる。外面は 30-3 と同じような花唐草文が描かれる。高台内には、1 条の圏線と中央に銘が入る。年代は、30-3・31-1 と同様に九陶Ⅲ期（1660～70）に該当する。

33-1・2 は有田で 1647～50 年頃まで生産された草創期の色絵磁器である。33-1 は復元口径 26.8cm、高台径 13.7cm、残存高 6.4cm を測る大皿で、口縁部は明確に外反し、端部が下垂する特徴的な形状である。型押成形により花形状に成形され、外面には染付、内面には色絵で絵が描かれる。外面には 1 連の花唐草文が描かれるが、この絵柄は「九角手」(五彩手の一種) と呼ばれる大皿に多く見られる文様である。



第31図 SK01出土遺物(4)

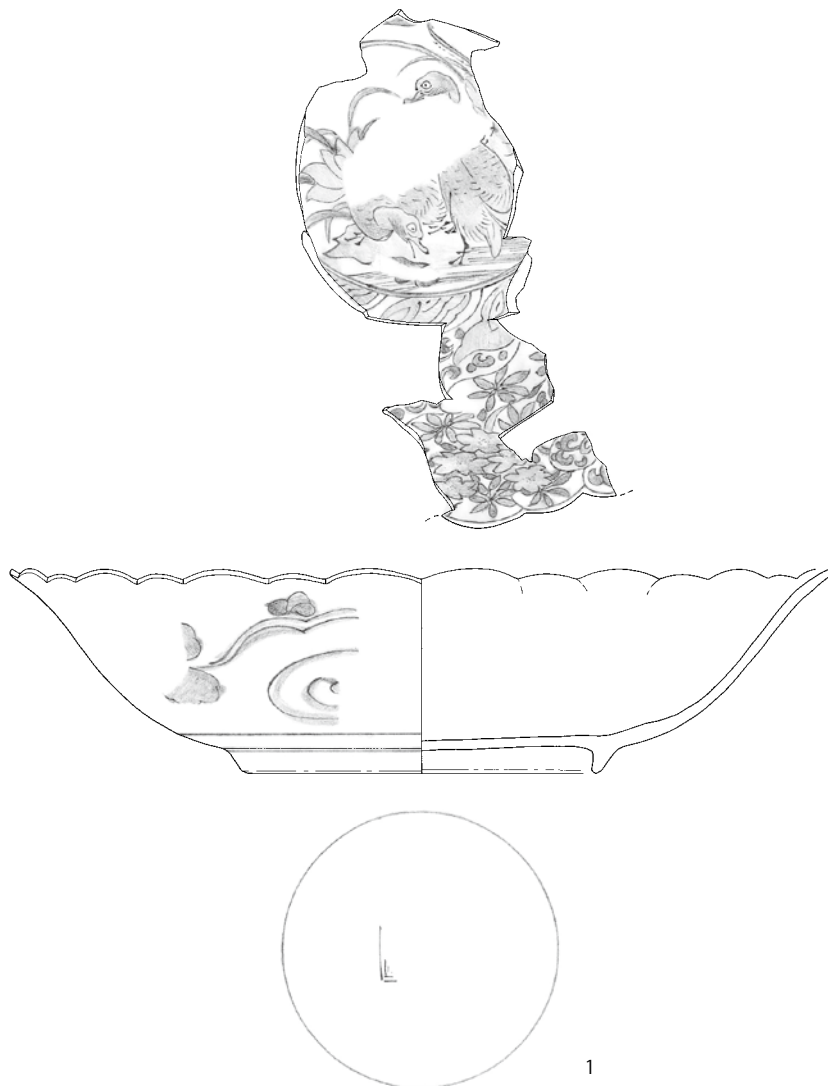
内面は色絵のみで絵柄が描かれるが、残存状態が不良なため、絵柄の全体像は掴めていない。残された破片から、花や葉などの草花文と青海波状の文様が描かれているのを確認している。なお、被熱痕が著しかったため、内面の色絵は色を失っている部分がある。高台内は付け根に1条、内側に2条の圏線が引かれている。

33-2は五彩手大皿で、素地に染付で線を引き、その後、赤・緑・黄・青・紫色などの濃い色絵具で絵付けを施している。内面は様々な幾何学文が緑・黄・赤・青色で描かれ、外面は濃い青色で草花文が描かれる。33-2も33-1同様被熱痕が顕著に見られるが、色絵部分は比較的良好に残存している。

34-1は有田の山辺田窯で生産された初期色絵の^{しよんずいで(21)}祥瑞手大皿である。口径31.7cm、高台径18.9cm、器高5.8cmを測る大皿で、口縁部～体部は丸みを帯びる形状である。器壁は大皿の割に薄手で最大0.6cmを測り、底部は中心に向かって上げ底状を呈する。

口縁部内面には多種多様な丸文が連続して描かれていることから、「色絵丸文繫大皿」とも呼ばれる。⁽²²⁾この丸文は、残存部分から推定すると20個配置されている。染付で直径約4.0cmの二重丸を描き、

その中に様々な文様が描かれる。残存している部分では、^{ねじれ}捻文2個、^{よもだすき}花文、^{しっぽう}四方禪文、^{れんべん}七宝文、^{れんべん}連弁文、^{れんべん}菊花文3個、^{さやがた}紗綾形文（^{ひしまんじ}菱万字文とも言う）2個、^{かごめ}籠目文、^{よこしま}よろけ横縞文が見て取れる。丸文内部は染付のみで描かれているものもあれば、染付と色絵のもの、色絵のみのもなどバリエーションに富んでいる。なお、文様配置の規則性は無いように思われる。見込みには赤い大ぶりの花が左側に配置され、中央には枝にとまった鳥^{うぐいす}（鶯か）が描かれる。色絵部分は薄くなっているが、鮮やかな赤・緑・黄色で描かれていたこ

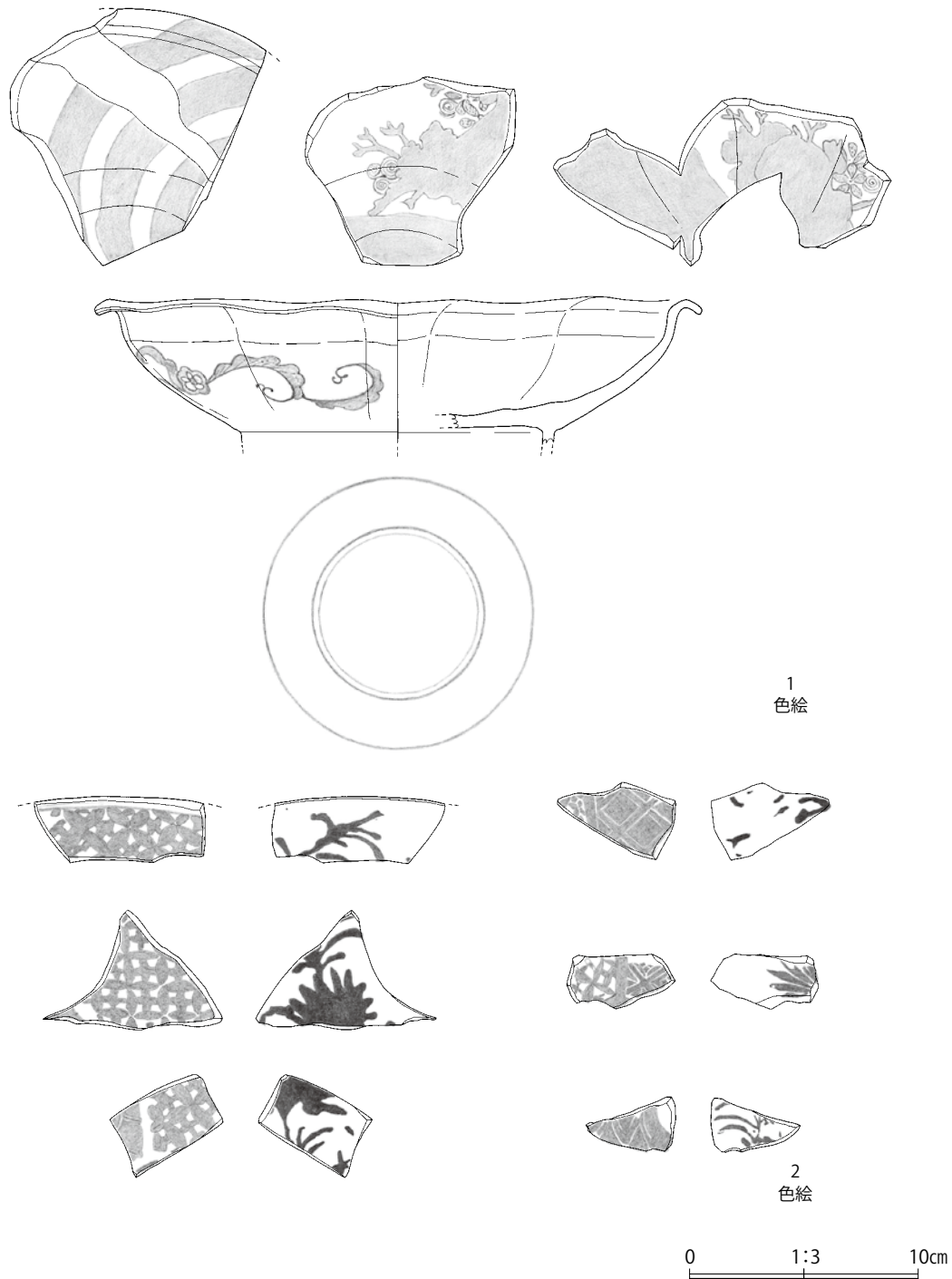


第32図 SK01出土遺物（5）

とが想像できる。

体部外面には幅 1.8cm の染付・色絵による帯状鋸歯文が巡り、高台の付け根に圏線 1 条、高台内の付け根にも 1 条、内側に 2 条の圏線が巡る。高台内圏線について、特に内側の 2 条は 33-1(第 33 図)と酷似しており、2 重の円弧が描かれる。これは中国製品を真似たものであると同時に、1640 年代に初期色絵を生産した有田・山辺田窯独自の手法であることを示している。⁽²³⁾ また、高台内中央には「福」を変形させた「合字示偏変形福字」銘が入る。

33-1・2、34-1 の 3 種は有田・山辺田窯で生産された初期色絵大皿であり、今回のように複数個体出土した例は、東京大学構内遺跡・加賀藩前田家江戸屋敷跡⁽²⁴⁾とで 2 例目である。



SK01 出土遺物・中国磁器（第35～37図）

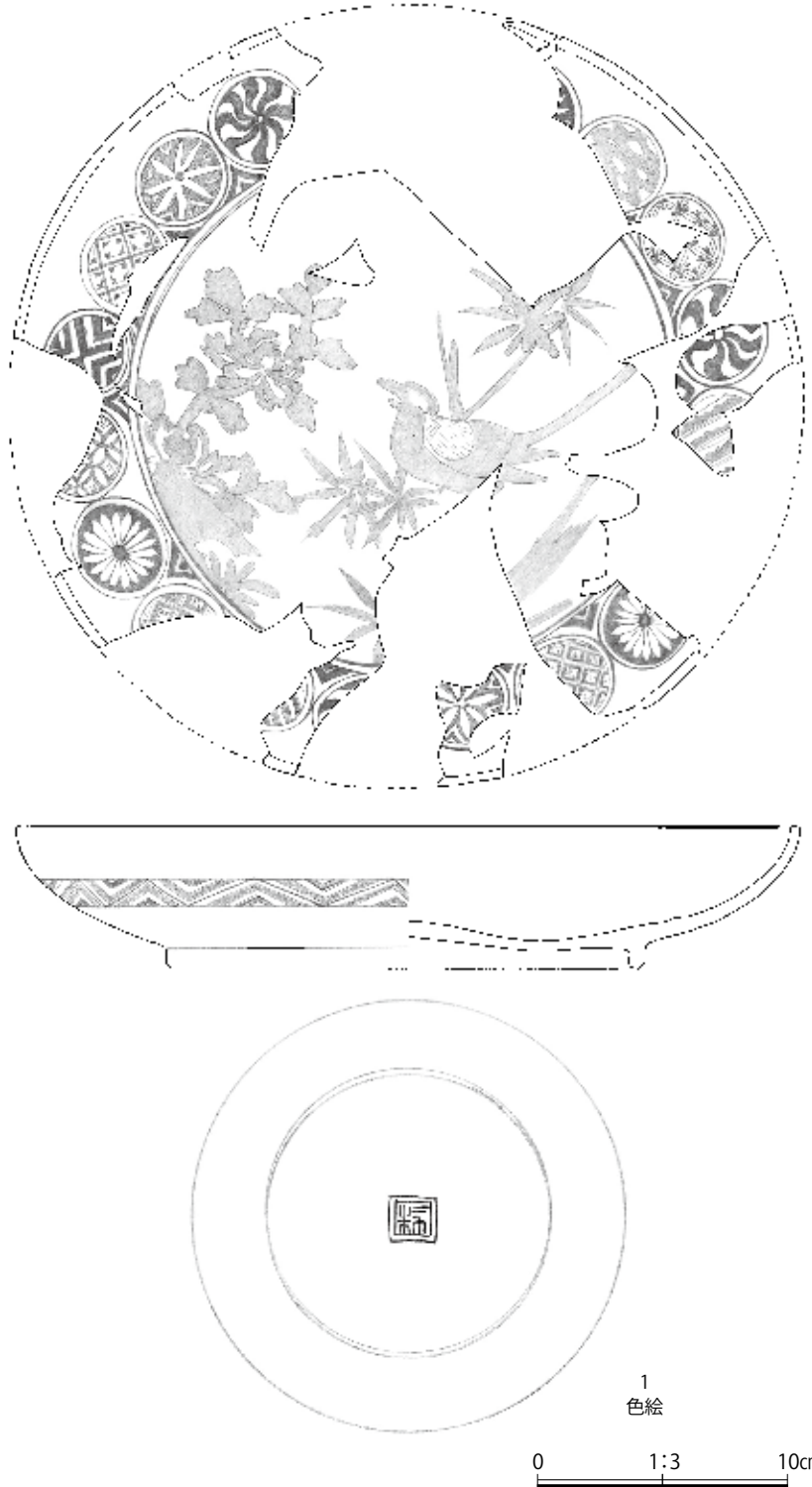
35-1～6、36-1、37-1～3は中国磁器で、35-1～6、36-1は景德鎮窯、37-1～3は漳州窯である。

35-1は丸形手塩皿で、口径7.0cm、高台径2.6cm、器高2.5cmを測る。染付は内面のみに見られ、口縁部には塗り潰す鋸歯文が巡り、見込みには蓮の葉を手にした鬼か神（もしくは子供）の絵柄が描かれる。高台内には圏線1条と「大明成化年製」銘が入る。少なくとも4客の同一器種を確認しており、

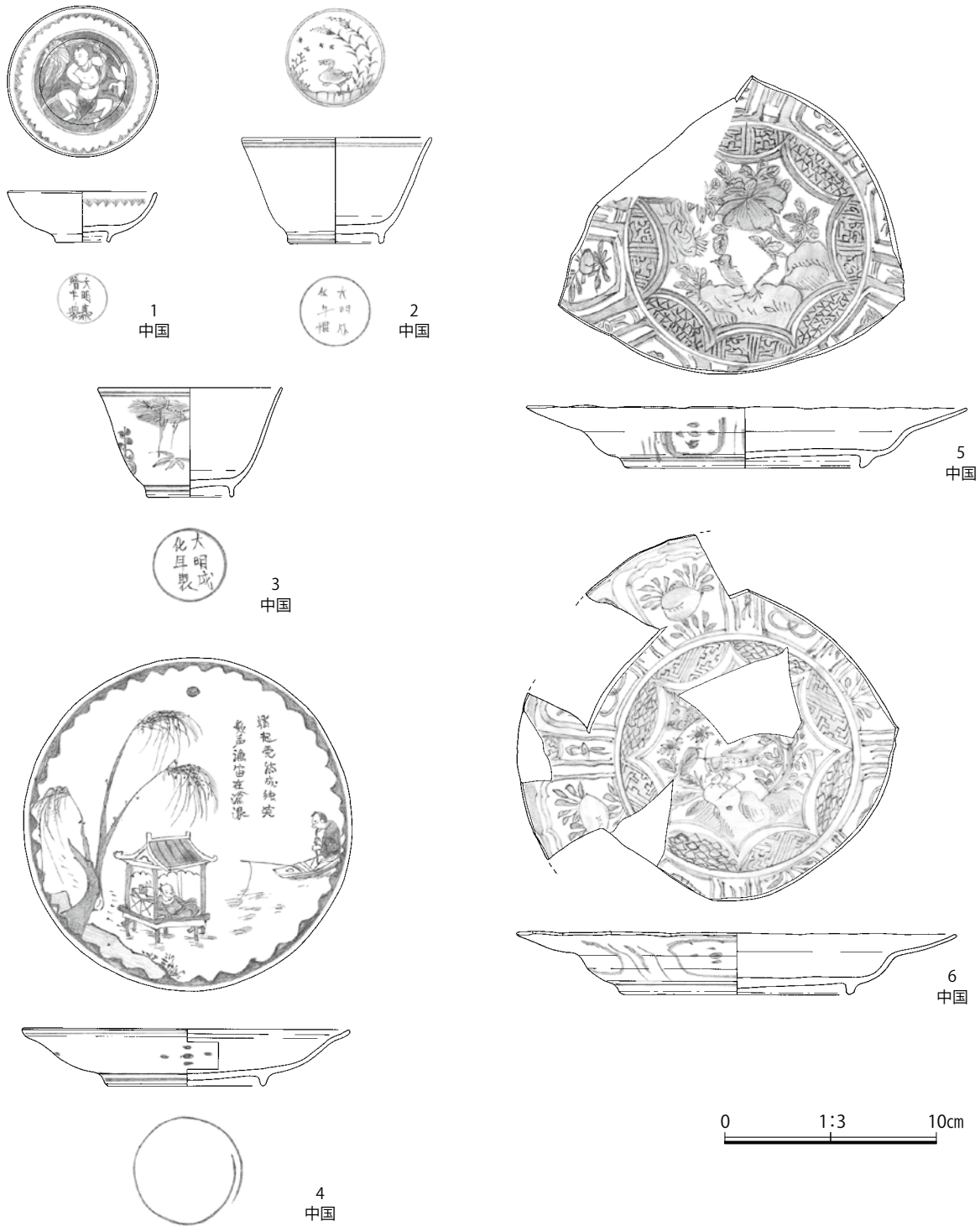
そのほとんどに被熱痕が残る。被熱の度合いが著しく、中には溶着している個体も見られる。年代は17世紀前半頃のものである。

35-2・3は小碗で、口縁端部がわずかに外反する端反形である。35-2の外面は圏線のみが口縁端部に2条、高台に2条引かれている。内面は口縁端部と見込みに2条の圏線、見込み内に鳥（雁か鴨）が1羽描かれ、その周囲に草花文、昆虫文が配される。高台内には圏線1条と「大明成化年製」銘が入る。少なくとも5客以上の同一器種を確認しており、被熱の痕跡は顕著ではない。年代は17世紀前半頃のものである。

35-3の染付は外面のみに見られ、口縁端部と高台に圏線を2条ずつ、胴部は全面に松竹梅文が配置される。高台内には圏線1条と「大明成化年製」銘が入る。少なくとも5客以上の同一器種を確認しており、そのほぼ全てに被熱痕を残す。年代は1620～40年代のものである。



第34図 SK01出土遺物（7）



第35図 SK01出土遺物（8）

35-4 は端反形の中皿である。口径 15.5cm、高台径 7.4cm、器高 2.8cm を測り、器壁は非常に薄い。染付は内外面に描かれており、特に内面には漢詩文をモチーフとした絵が見られる。口縁端部に塗り潰す連続鋸歯文を巡らせ、その中の右上に「睡起莞然成独笑 数声渔笛在滄浪」という漢詩の一文が書かれている⁽²⁵⁾。左下から柳の木が伸び、中央付近には水上東屋でくつろぐ男の姿がある。右側には船に乗った釣り人が描かれ、この男は釣竿を垂らしながら尺八を吹いている。また、上方には黒い月のような丸が描かれる。外面には圈線と草文が見られ、高台内には始点と終点が変わらない 1 条の圈

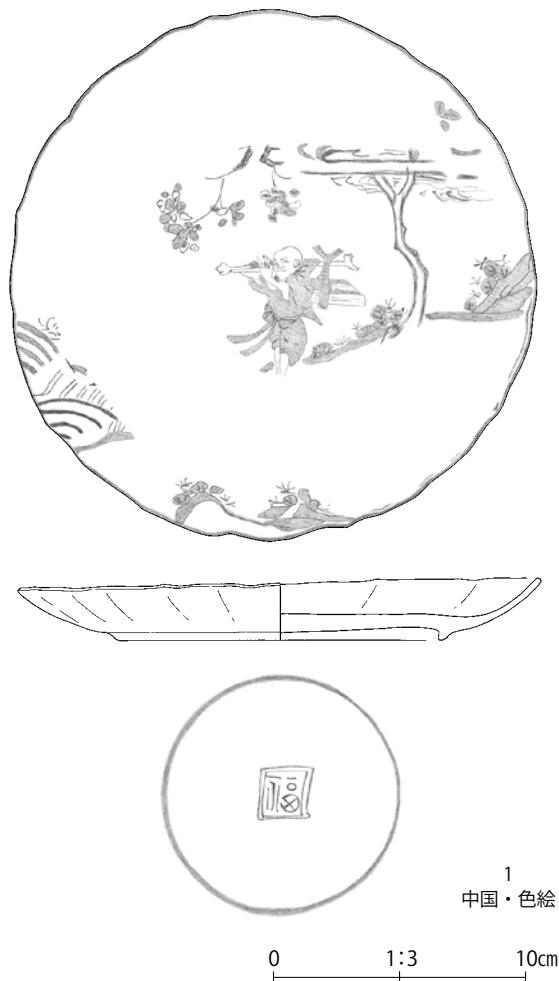
線が描かれる。また、高台内には放射状鉋痕が残る。少なくとも10客以上の同一器種を確認しており、そのほぼ全てに被熱痕が見られる。年代は1620～30年代に絞り込むことができる。

35-5・6は芙蓉手の折縁形中皿で、少なくとも10客以上の同一器種を確認したセット品である。見込みの絵柄が異なる絵柄違いであるため、そのうち2個体を掲載した。35-5・6は、口径約21.0cm、高台径10.8～11.4cm、器高3.0cmを測り、口縁部は大きく外に折れ曲がる形状で、器壁は非常に薄い。染付は内外面に描かれており、口縁部分は区画文で8区に分けられ、それぞれ草花文や宝文などが配置される。同一器種が10客以上ある中で、見込みの絵柄は4種類に分けられる。35-5は鳥と草花文、35-6は昆虫文と草花文、図化していないものには宝文と蛙文が見られる。外面にも区画文が見られるが、形骸化した文様である。畳付けは無釉で、粗い砂が多数付着し、高台内には放射状鉋痕が残る。年代は1600～30年代に該当する。

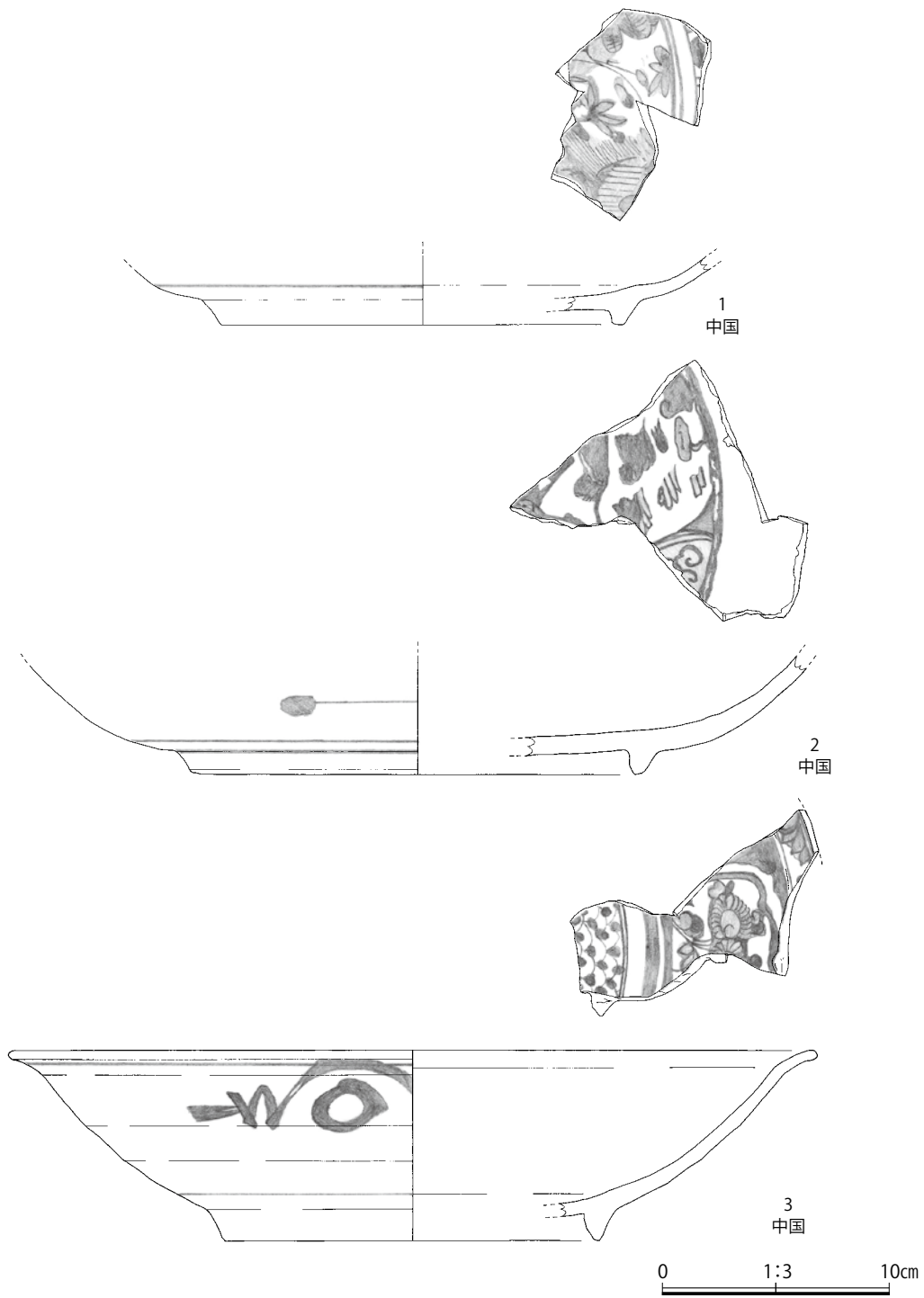
36-1は色絵中皿である。⁽²⁶⁾口径20.7cm、高台径12.9cm、器高2.5cmを測り、口縁部の器壁は薄いが底部にかけて厚手となる。型押成形により口縁部は波打つ形状を呈する。端部は口さびが塗られ、染付と色絵は内面に見られる。見込み中央に男性の立ち姿が描かれており、この男性は右肩に荷物を担いでいる。男性が立つ場所は海岸沿いであろうか、その左側には波濤文^{はとう}が描かれる。陸地である右側には1本の木が生え、広がった枝が男性の頭上に覆いかぶさるような配置である。

男性の顔や身体、衣服などの線、木の幹と枝、波濤の一部分は染付で描かれ、他は赤・黄・緑色の色絵が鮮やかに施されている。高台内には1条の太い圈線と中央に「二重角福」銘が入り、放射状鉋痕が見られる。年代は16世紀末～17世紀初頭頃のものである。

37-1～3は復元高台径16.7～20.0cmを測る漳州窯の大皿である。37-1～3の染付はいずれも内外面に描かれており、内面は草花文、外面は圈線と草花文らしき粗い文様が描かれる。高台及び高台内に粗めの砂が多量に付着していることは漳州窯の特徴であり、年代は16世紀末～17世紀前半頃のものである。



第36図 SK01出土遺物(9)



第37図 SK01出土遺物 (10)

第3節 屋敷境C (第38図)

屋敷境Cは、北西屋敷と南西屋敷を区画する位置に掘られた屋敷境の変遷が追える部分である。まず、造成初期段階に溝状遺構SD04(第39・40図)が掘り込まれる。SD04は、屋敷境A・Bで詳述したSD01・02と同じく、城下町形成当初に掘られた溝状遺構である。SD04が埋められた後、堀跡SA01(第42図)が造られる。

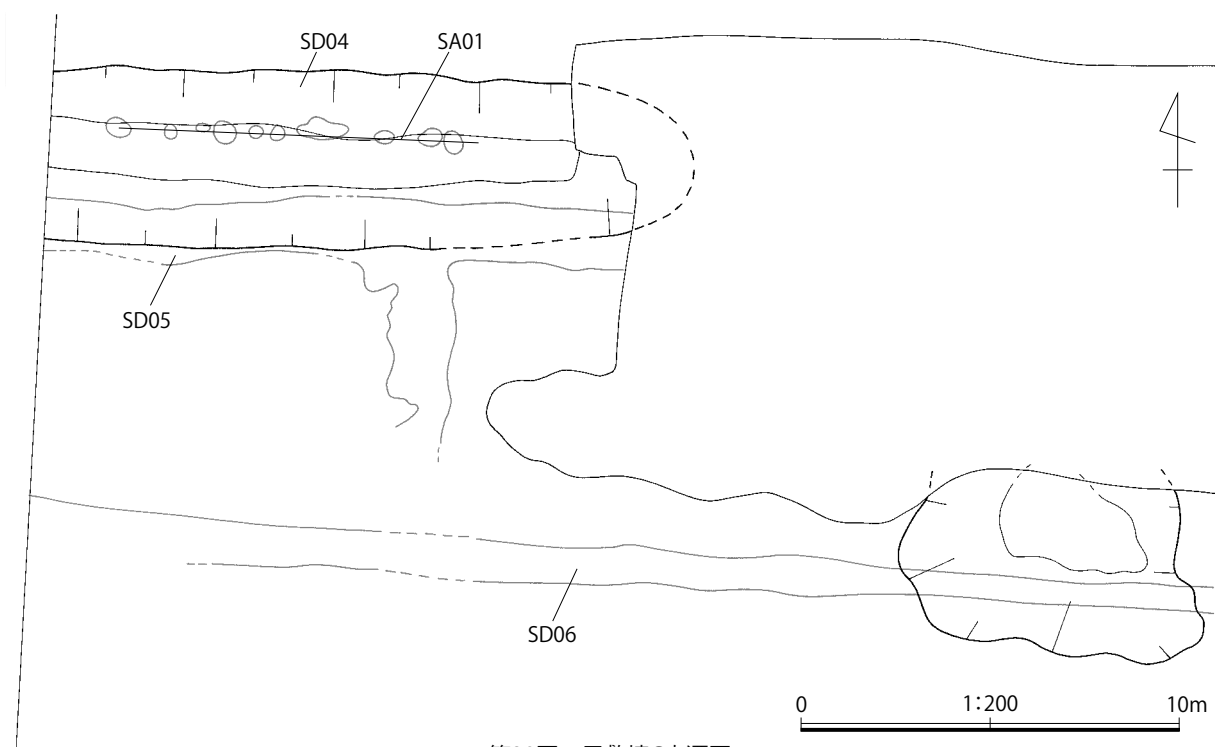
この後、SA01から南側へ約2.0m移動した位置に、同じく東西方向の屋敷境溝SD05(第43・44図)が造られる。SD05は南北方向部分の溝もあるT字状の溝である。

さらにその後、SD05から南側へ約9.0m大幅に移動した位置に、SD06(第48・49図)が造られる。SD06は、南西屋敷・第3遺構面の上面において造られた屋敷境溝であると思われるが、溝に伴う遺構面はあまり残存状態が良くない。また、江戸時代初頭から南西屋敷地として区画されてきた範囲を東西方向に分断するような形で造られていることから、屋敷地の分筆などが行われた背景が予想される。

屋敷境Cでは、最初に造られたSD04の位置を踏襲しSA01が造られ、その後、時代が新しくなるにつれて、SD05・06と南側に屋敷の境界が移り変わっていく様相が見られる。

第1項 SD04(第39・40図)

SD04は、北西屋敷と南西屋敷を区分する位置に掘られた東西方向の溝状遺構である。SD04の西側は調査地外へ続いており、東側は現代建物基礎部分の中へ続く形状である。この東端は、現代建物基礎部分内に続いていくが、溝の底面の標高レベルが東に向かって上がっていくのを確認しており(第39図A-A')また、建物基礎内部の調査において、この延長上には旧地表面が残存していた。このこ



第38図 屋敷境C変遷図

とから、SD04の東側は基礎西端付近で終息する形状であったと推測している。

規模は、東西残存長 15.2m、南北最大幅 4.8m で、深さは 1.2 ～ 1.4m を測る。底面レベルは東→西へ傾斜しており、排水の方向は東から西へ流れていたものと思われる。SD04 は断面形が逆台形状を呈しており、底面は約 1.6m 幅の平坦面を持つが、この平坦面は南側にわずかに傾斜している。

SD04 の埋土は、堆積状況から大きく 4 つの段階に分かれる。この各段階は、SD04 が埋められた時期差を示すものと考えている。

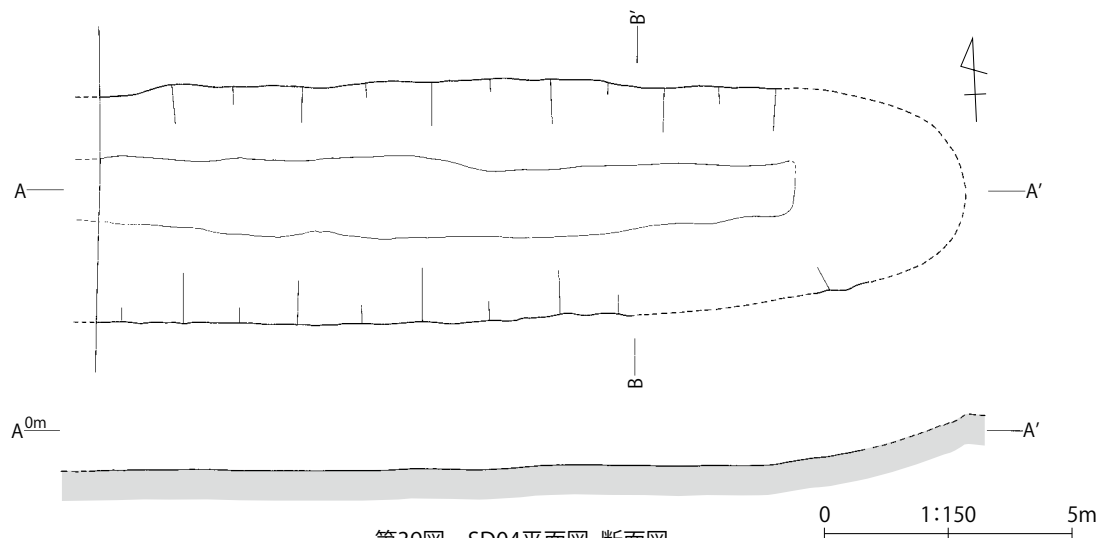
まず、第 13 ～ 17 層は、SD04 の最も古い埋土である。この埋土はいずれもシルト質な土層で、混入物はほとんど見られない。基本的に水平に近い状態で堆積しており、SD04 が溝として排水機能を有していた時に、漸時的に堆積したものとも考えられる。

次の段階は、北側から流れ込むように堆積する、第 8 ～ 12 層によるものである。土層構成は明確であり、大きく 3 種類に分けることができる。1 つは、第 11 ・ 12 層に見られる混入物の少ない黄色粘土層である。この土層は、SD04 のほぼ中心に溝状の形で堆積しており、第 11 ・ 12 層は第 13 ～ 17 層を掘り込んだ後の堆積であることから、掘り直し後の溝の埋土とも考えられる。

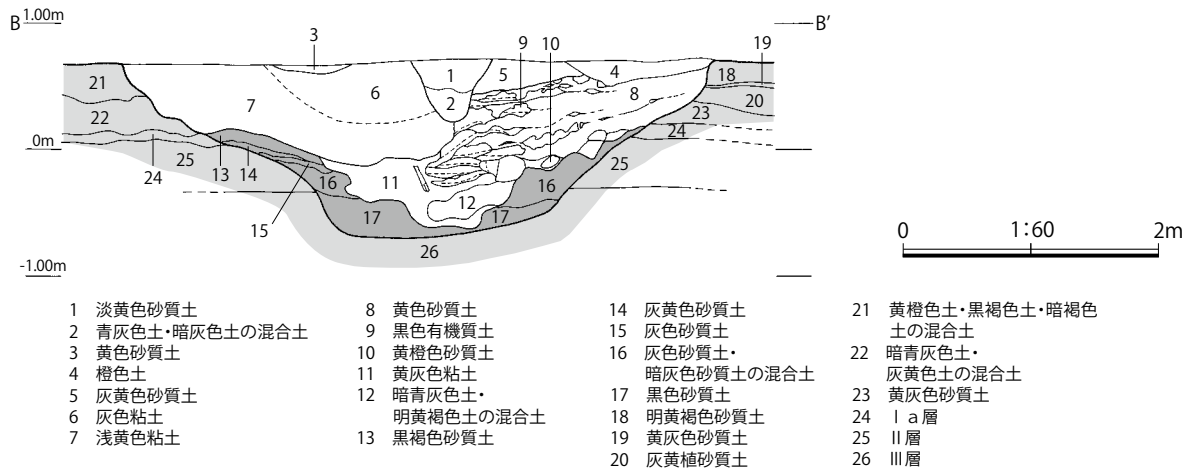
第 10 層は黄橙色砂質土層で、下部に集中してブロック塊が見られ、堆積の様相も不自然に敷かれたように見えることから、人為的に入れられた可能性が考えられる。その上層に見られる第 8 ・ 9 層も人為的な痕跡を窺わせる土層である。第 9 層は溝の中心付近に集中して堆積している土層で、有機物を多く含む黒色土層である。この第 9 層の黒色土層下部には黄灰色土塊が必ず伴っており、セツトのような状態で成り立っている。これらの北側に第 8 層（黄色砂質土）が入れられている。

第 8 ・ 9 層は版築状に堆積しており、その堆積状況から少なくとも 8 回に渡って土を入れたことが分かる。これらの作業は地盤を安定させるために意図的に行われたものと推定される。また、第 8 ～ 10 層は SD04 の北側部分のみに堆積していることから、北西屋敷地から入れられたものと思われる。

最後に、SD04 は、南側（南西屋敷地）から入れられたと思われる第 6 ・ 7 層により埋没し、その機能を終える。この土層は単純に 2 つの層で構成されており、いずれも強い粘土質の土層である。第 6 ・



第39図 SD04平面図・断面図



第40図 SD04土層断面図

7層ともに酷似した土層であることから、短期間に埋められたものとする。

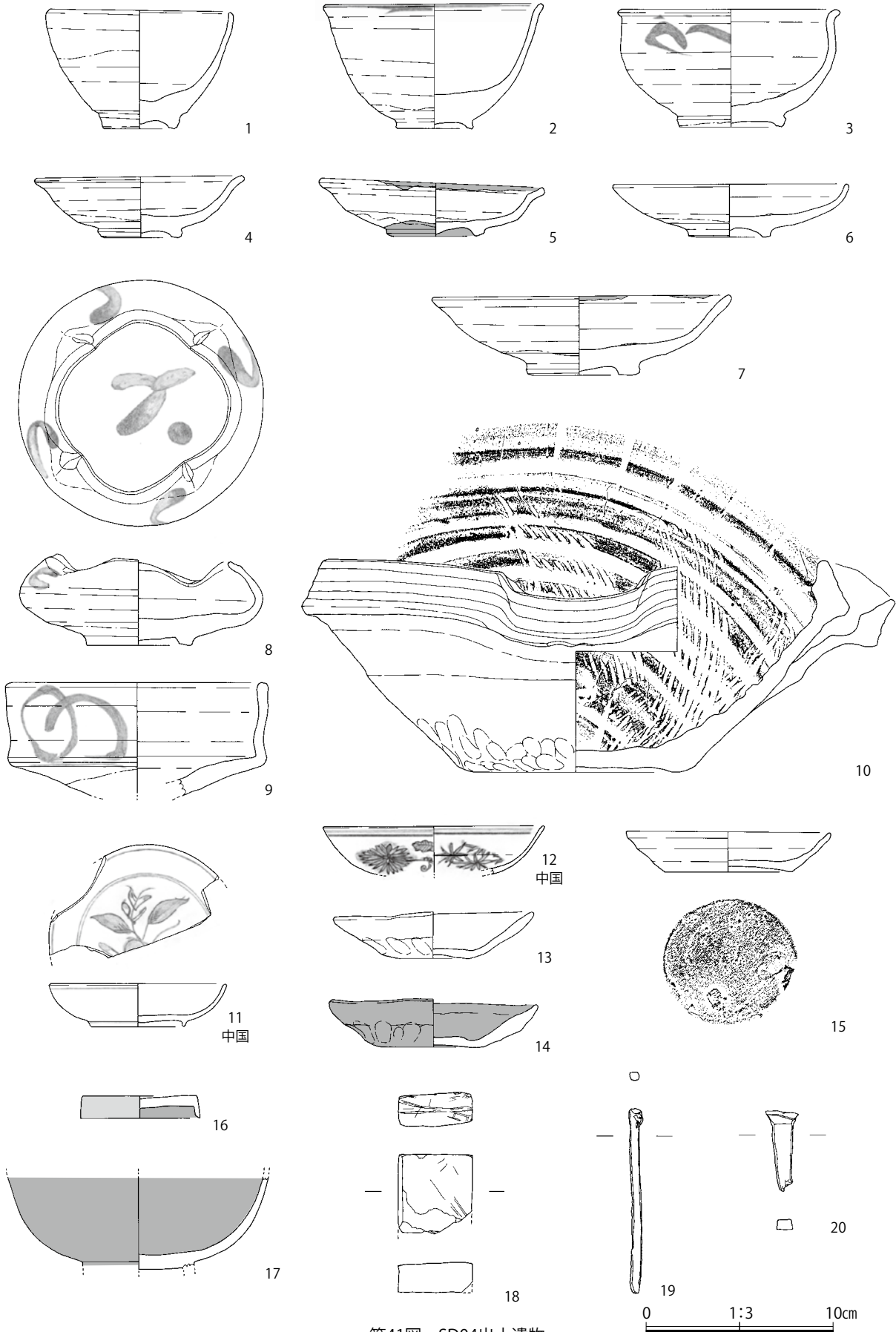
以上のように、これらの埋土はSD04の溝としての機能を終わらせるとともに、第6～10層の段階では埋め立て部分の地盤を固めることも考慮されたのではないかと推測している。このことは、SD04が埋められた後、ほぼ同位置に堀跡SA01が造られていること、また、第1・2層は南西屋敷・第1遺構面で検出した掘立柱建物跡SB07（第96図）を構成する柱穴の1つであり、よって、SD04が廃絶した後に、堀跡SA01、SB07が建っていることから、そのような意図で行われた作業であったと思われる。

SD04からの出土遺物は、陶器・磁器・土師器・漆器・石製品・金属製品など多様である。陶器は肥前の他に備前や瀬戸・美濃（志野）が見られ、磁器は中国（景德鎮窯）のみの出土である。土師器は京都系・在地系どちらも見られるが、京都系の方が多い。いずれの遺物も完形に近いものが多く、破片は少ない印象である。遺物の年代観は17世紀前半代のもものが中心である。

SD04 出土遺物（第41図）

41-1～10は陶器である。このうち41-1～8は肥前陶器である。41-1・2は中碗で、底部は兜巾・三日月高台である。41-2は口縁端部がわずかに外反する形状を呈し、口さび状に装飾されている。いずれも底部の器壁が厚く重量感のある器である。年代は九陶Ⅱ期（1610～50）に該当する。41-3は片口鉢で、腰部分が強く張り出す形状で、口縁端部はやや玉縁状を呈しつつ明確に外反する。片口部分は残存していない。また、口縁部外面に鉄絵が描かれる。見込みに胎土目痕が残ることから九陶Ⅰ-2期（1594～1610）に作られたものと思われる。

41-4～7は皿で、いずれも底部は兜巾・三日月高台である。41-4・5は折縁形、41-6は丸形の小皿である。41-4・5は目跡がなく、41-6は見込みに胎土目痕が残る。また、41-5は口縁端部と底部外内面に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されたものと思われる。いずれも九陶Ⅰ-2期（1594～1610）のものである。41-7は口径15.9cmを測る中皿で、見込みに砂目痕が見られることから九陶Ⅱ期（1610～50）のものであるが、砂目積みには皿の形状が大きく古手であることから、1610～30年代頃の砂目初期段階のものと考えている。41-8は向付の完形品である。



第41图 SD04出土遺物

口径 9.4cm、高台径 5.7cm、器高 4.9cm を測る不定形の器で、やや扁平な袋状を成している。口縁部は方形状に成形され、凹みが 4ヶ所に作られている。また、外内面に鉄絵による装飾が見られる。器の形状や鉄絵装飾などの要素から、九陶 I-2 期（1594～1610）のものと思われる。

41-9 は瀬戸・美濃(志野)の中碗である。口縁部は垂直に立ち上がる形状で、腰部分で明確に折れる。外面には鉄絵が見られ、無造作な円が 2つ重ねて描かれる。年代は 16 世紀末～17 世紀初頭と考えられる。41-10 は備前の片口付播鉢である。口径 26.8cm、底径 12.8cm、器高 11.4cm を測る大形品で、底部外面には指の痕跡が残っており、調整の痕跡を窺わせる。内面は波打つような工具痕で成形され、その上から 8 本単位の斜め方向スリ目が放射状に付けられている。スリ目は若干磨り減っていることから、長期間ではないが使用していた痕跡と思われる。年代は 1620～30 年代頃のものである。

41-11・12 は中国磁器(景德鎮窯)である。いずれも丸形小皿であり、器壁が薄く精巧な作りである。41-11 は見込みに、41-12 は外内面に草花文の染付が描かれる。また、41-11 の高台内には放射状鉋痕が残る。年代は 17 世紀前半のものである。

41-13～15 は土師器で、41-13・14 は手づくね成形による京都系、41-15 は底部に回転糸切り痕が残る在り系である。41-14 は全面に油煙痕と煤が付着し、真っ黒に変色している。

41-16・17 は漆製品である。41-16 は小形容器の蓋で、外面は朱色、内面は黒色の漆が塗られている。41-17 は浅丸形椀で、外内面ともに黒色の漆が塗られており、無文である。

41-18 は石製品で、最大幅 4.0cm、残存長 4.2cm、厚み 1.6cm を測る砥石である。表・裏面、上面、両側面に使用痕を確認している。

41-19・20 は金属製品で、いずれも鉄製の角形釘である。

第 2 項 SA01 (第 42 図)

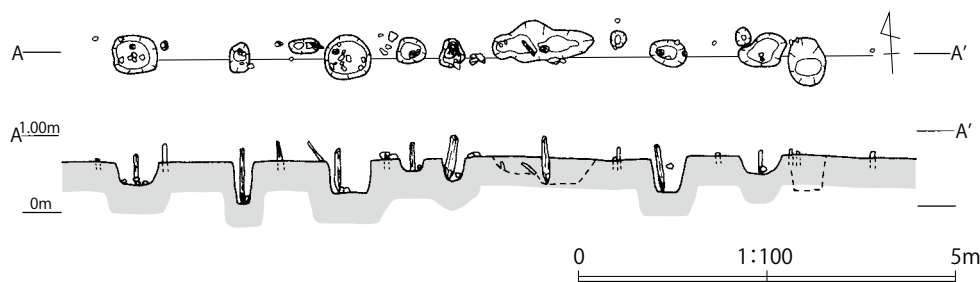
SA01 は、SD04 廃絶後に造られた東西方向の堀跡である。SA01 が堀跡であると考えている理由としては、南西屋敷・第 1 遺構面で検出した掘立柱建物跡 SB07 (第 96 図) と隣接していながらも、SA01 は SB07 を構成する柱穴列とは並ばず、間隔も不均一で、南北方向に対となる柱穴を検出していないことから、堀と判断したものである。

SA01 は東西方向に延びる形状で、残存長約 10.0 m を測る。主要な杭は約 1.5m 間隔であるが、均一でないところも見られ、補完的な杭が伴う。土坑の直径は小さいものは 0.2 m、大きいものは 0.6 m で、内部には直径 5～15cm、長さ 0.3～0.7m の丸杭が差し込まれている。これらはほぼ直立した状態で検出し、また、土坑内底部に小石が入れられているものも多数確認した。これは杭の強度を高めるための地下構造と思われる。

SA01 を構成する土坑から遺物は出土していないが、南西屋敷・第 1 遺構面の SB07 と同時期に造られた遺構であることから、年代は 17 世紀前半代と考えている。

第 3 項 SD05 (第 43・44 図)

SD05 は、SA01 から南側へ約 2.0m 移動した位置に造られた、約 0.3m 嵩上げ造成された後に機能



第42図 SA01平面図・断面図

した東西方向の屋敷境溝である。溝の西側は調査地外へ、東側は建物基礎による攪乱部分に続くもので、中央付近で南側に分岐する T 字状の溝である。SD05 は南西屋敷・第 3 遺構面で検出した礎石建物跡 SB09・10（第 106 図）と同時期に造られた遺構であると考えている。

SD05 の東西溝は、東西残存長 16.0m、南北最大幅 2.0m、最深部は 0.5m を測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、底面は約 1.0m の平坦面を持つ。SD05 の埋土は単純で、第 1～3 層がほぼ水平堆積する状況である。第 1～3 層はいずれも黒褐色系の砂質土が主である。

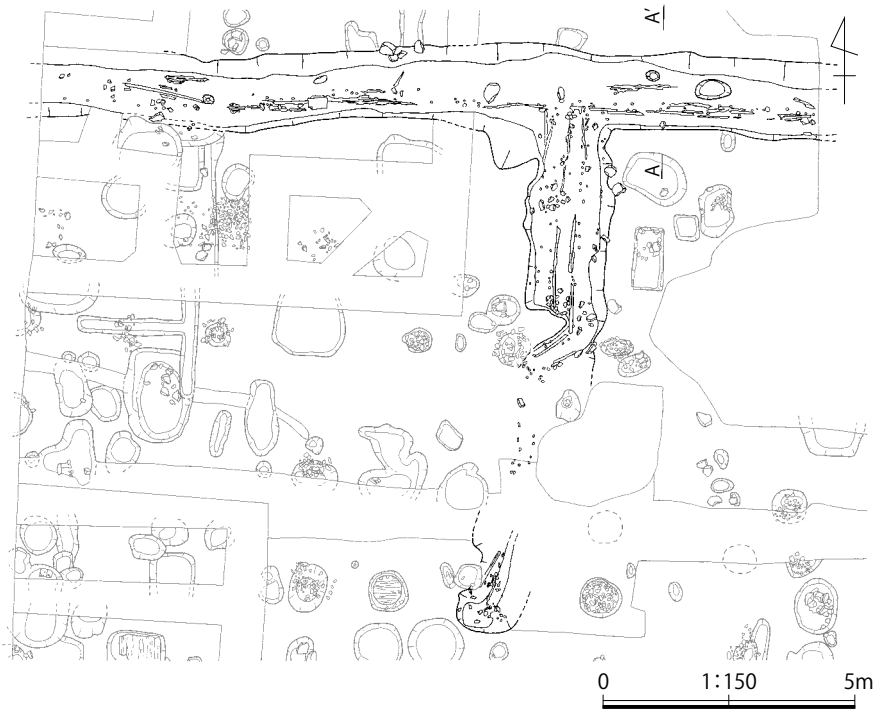
溝の底面部分には杭列が打ち込まれ、それらを渡すように板材もしくは平瓦が立てられていたことから、素掘り溝内に木柵溝が造られている状態であった。SD05 東西溝は東→西に傾斜していることから、木柵溝が排水施設として機能していたと思われる。

なお、SD05 のすぐ南側には礎石建物跡 SB09（南西屋敷・第 3 遺構面）が広がっており、SD05 南北溝をまたいでいることから、この南北方向部分は、屋敷の境界溝ではなく、建物地下に設置された排水溝の可能性が考えられる。

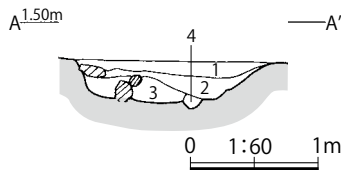
SD05 からは大量の遺物が出土している。陶器・磁器・土師器・土器・石製品・銭貨などが出土している中で、磁器の割合が多い。陶器は肥前がやや減り、京都・信楽系、瀬戸・美濃、在地などが増える傾向にある。磁器は肥前の九陶Ⅳ期（1690～1780）のものが圧倒的に多く、中にはⅢ期（1650～90）やⅤ期（1780～1860）のものも入り込む。また、肥前系磁器も少量ではあるが出土している。出土遺物は概ね 18 世紀代～19 世紀前半代頃に集約されている。以下、遺物の種類ごとに分けて詳述する。

SD05 出土遺物・陶器（第 45 図）

45-1～13 は陶器で、このうち 45-1～6 は碗である。45-1 は肥前の呉器手碗で、口縁部～胴部下方の残存である。器壁はやや厚手で、外内面に黄色釉が掛かる。年代は九陶Ⅲ期（1650～90）である。45-2 は在地（布志名）で、緑色釉が特徴的な碗である。腰部分が強く丸みを帯びる形状で、地元の松江地方では「ぼてぼて茶碗⁽²⁷⁾」とも呼称される器である。年代は 19 世紀代頃のものである。45-3 は山口（萩）の碗で、逆ハ字状の形状を呈する。口縁部～胴部にかけて波打つように稜線が入り、萩特有の釉薬掛け分けが見られる。45-4・5 は京都・信楽系で、45-4 は口径 8.8cm の端反形小碗である。白色釉が掛かり、全面に貫入が見られる。45-5 は中碗で、底部にかけて張り出さない形状、鉄絵による草文など、京都・信楽系の特徴を持つものである。いずれも年代は 18 世紀代である。45-6 は瀬戸・美濃の大碗で、口径 11.7cm、残存器高 8.8cm を測る大振り碗である。胴部は垂直



第43図 SD05平面図



第44図 SD05土層断面図

- 1 暗褐色土
- 2 黒褐色砂質土
- 3 黒褐色砂質土
- 4 黄灰色粘土

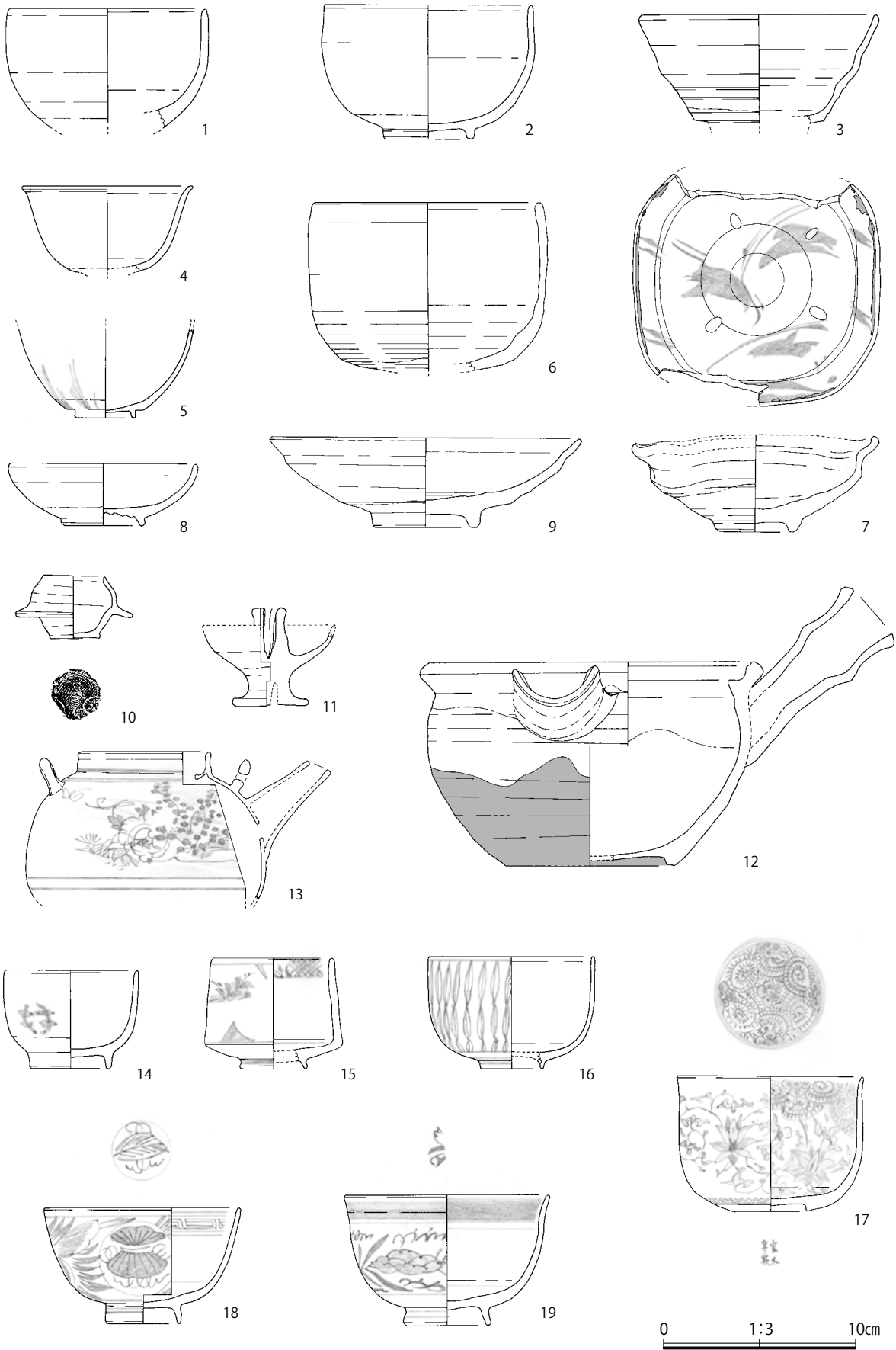
に立ち上がり、腰部が強く張り出す。薄緑色の釉薬が全面に掛かり、底部露胎部分の胎土は固く締まった灰色を呈する。年代は19世紀代のものと思われる。

45-7は肥前の向付である。口径12.5cm、高台径4.3cm、器高5.1cmを測るもので、隅切り方形状を呈する。内面に鉄絵で草花文が描かれる。また、見込みに胎土目痕が残ることから、九陶I-2期(1594～1610)のものである。

45-8・9は皿である。45-8は産地不明の丸形小皿で、暗緑色釉が底部以外に掛かる。また、高台内に渦巻き状の削り痕が残っており、山口(萩)に似た作りとも言える。45-9は肥前(内野山)で、口径16.1cm、高台径5.4cm、器高4.7cmを測る折縁形中皿である。銅緑色が掛かり、見込みには蛇ノ目釉剥ぎ痕が残る。年代は九陶IV期(17世紀末～18世紀前半)のものである。

45-10～12は在地陶器である。45-10はミニチュア製品の羽釜で、完形品である。口径3.1cm、底径2.6cm、器高3.3cmを測り、口縁部は強く内傾し、突出部は水平である。また、底部に回転糸切り痕が残る。45-11は灯火具で、受部中央には灯心を差し込む柱状の突起物が付随しており、それに切り込みが入る。端部は欠損しているが、燃料が漏れないように緩やかな丸みを持つ形状を呈する。脚部は1.5cmと短く、接地面は横に大きく張り出す。底部中央には貫通しない孔があり、釘などに固定するためのものであったことが窺える。45-12は行平鍋で、口径17.0cm、高台径8.8cm、器高14.6cmを測り、円筒状の把手と注口が付いている。口縁端部は蓋ができるように段が作られており、体部は丸みを帯びる形状である。体部～底部にかけての外表面には煤が付着していることから、調理の際に火にかけられた痕跡であることが分かる。45-10～12の年代は18～19世紀代に該当する。

45-13は信楽の土瓶で、いわゆる「山水文汽車土瓶」である。素地としての釉薬は明薄黄色で、鉄



第45図 SD05出土遺物（1）

絵による草花文や圏線が描かれる。年代は1880～90年代にかけて盛行したもので、汽車に乗車する際に持ち込んだ水筒代わりの土瓶であったことが分かっている。

SD05 出土遺物・磁器（第45～47図）

45-14～19、46-1～11、47-1～3は磁器であり、このうち46-2、47-1は肥前系、それ以外は肥前磁器である。

45-14は丸形小碗、45-15は筒形小碗で、口径6.2cm、高台径3.4cm、器高5.8cmを測る。口縁部は内傾しており、染付は外面に草花文、内面に四方禪文が描かれる。45-16は小丸形中碗で、口径8.6cmに対し高台径3.4cmと小さいものである。染付は外面のみに見られ、連続する縦鎖線文が3段描かれる。45-17は中碗だが、碁笥底高台で腰部分が強く張り出す特異な形状を呈する。口径9.6cm、高台径3.8cm、器高7.1cmを測り、口縁部はわずかに外反する。染付は内外面に見られ、牡丹唐草文と蛸唐草文が隙間無く描かれる。碁笥底高台付近に複合的な鋸歯文が見られ、内面の口縁部付近には蛸唐草文が集中して描かれ、見込みは1条の圏線内に蛸唐草文が配置されている。また、高台内には「富成年製」銘が入る。年代は九陶Ⅳ期（18世紀前半）に該当する。

45-18・19は端反形中碗で、いずれも九陶Ⅴ期（1820～60）に該当する。45-18の外面には線描きで草文、丸文、宝文などが描かれ、口縁端部内面には雷文が巡る。また、見込みには宝文が描かれる。45-19も草花文などが描かれる。

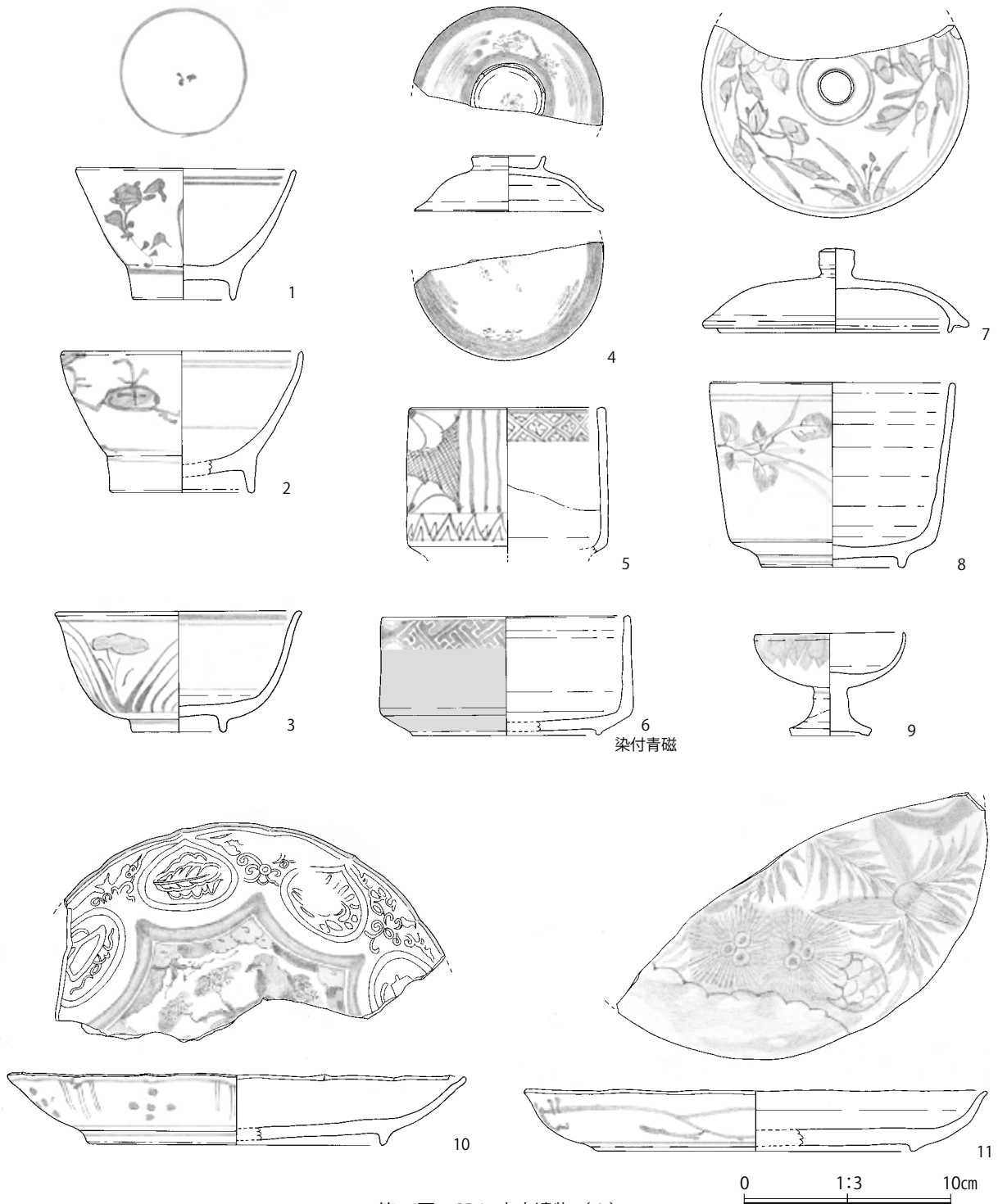
46-1・2は広東碗である。46-1の外面は捻花文、見込みに圏線1条と簡略化された草花文が描かれる。年代は九陶Ⅴ期（1780～1810）に該当する。46-2は肥前系で、口径11.6cm、高台径7.0cm、器高6.9cmを測る大碗である。染付は外内面に見られ、外面に雑な草花文、内面には圏線のみが引かれている。器形や染付の様相から、肥前で生産されたものではなく他地域で作られた可能性が高いもので、18世紀末～19世紀初頭頃のものである。46-3は瀬戸・美濃で、口径11.8cm、高台径4.6cm、器高5.9cmを測る大碗である。口縁端部は外反し、外面に草花文が描かれるもので、1820～60年代のものである。

46-4は端反形中碗蓋である。染付は外内面に描かれ、口縁端部とつまみ付け根に幅0.8cmの帯状圏線が引かれ、その間に梅に似た花文が描かれる。九陶Ⅴ期（1820～60）のものである。

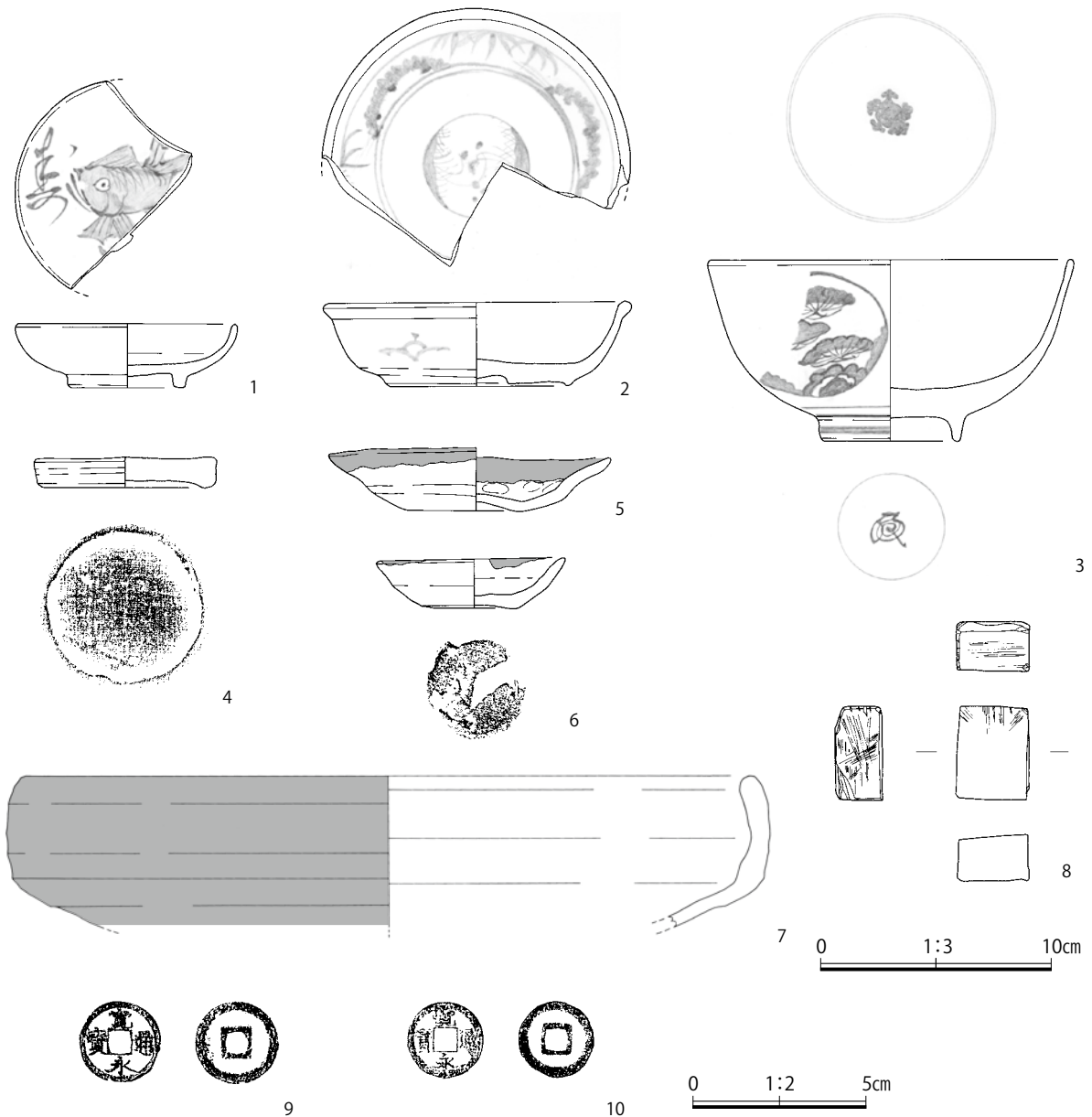
46-5は火入れで、口縁部～胴部の残存である。染付は外面に菊花文、斜格子文、縦縞文、鋸歯文、口縁部内面に四方禪文が描かれる。年代は九陶Ⅳ期（18世紀末～19世紀初頭）である。46-6は有田の高級磁器で、染付青磁の段重である。口径12.0cm、高台径9.2cm、器高5.8cmを測り、口縁部外面には墨弾き技法による紗綾形文、下方は薄い青磁釉が掛かる。また、口縁端部内面は無釉である。年代は九陶Ⅳ期～幕末（1690～幕末）である。46-7は蓋付鉢の蓋で、つまみは円柱状を呈する。外面には草花文が描かれる。46-8は蓋付鉢で、口縁端部は無釉である。染付は外面のみに見られ、草花文が描かれる。いずれも九陶Ⅴ期（1780～1860）のものである。46-9は仏飯器で、受部はやや浅く内湾気味で、脚部は輪高台形である。口縁部には雨降り文が描かれる。九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。

46-10・11は中皿である。46-10は口径22.0cm、高台径14.6cm、器高3.4cmを測り、型押成形

による形状である。内面の装飾は、型打陽刻で宝珠文・宝文を象り、それに連動させるように見込みに毬挟み文を描いている。毬挟み文内部に雲や木、鳥を描き、宝珠文内部には様々なバリエーションの宝文が入る。また、底部にハリ支え痕が残り、断面には漆継ぎ痕が見られる。有田・南河原窯の製品で、年代は九陶V期（18世紀後半）のものである。46-11も型押成形による花形状で、内面全面に草花文が描かれ、残存していない部分には鳥が描かれているものと思われる。底部にはハリ支え痕が残り、その痕跡が大きいこと、化粧掛けの釉薬が厚いことなどから、嬉野・志田窯の製品と特定し



第46図 SD05出土遺物（2）



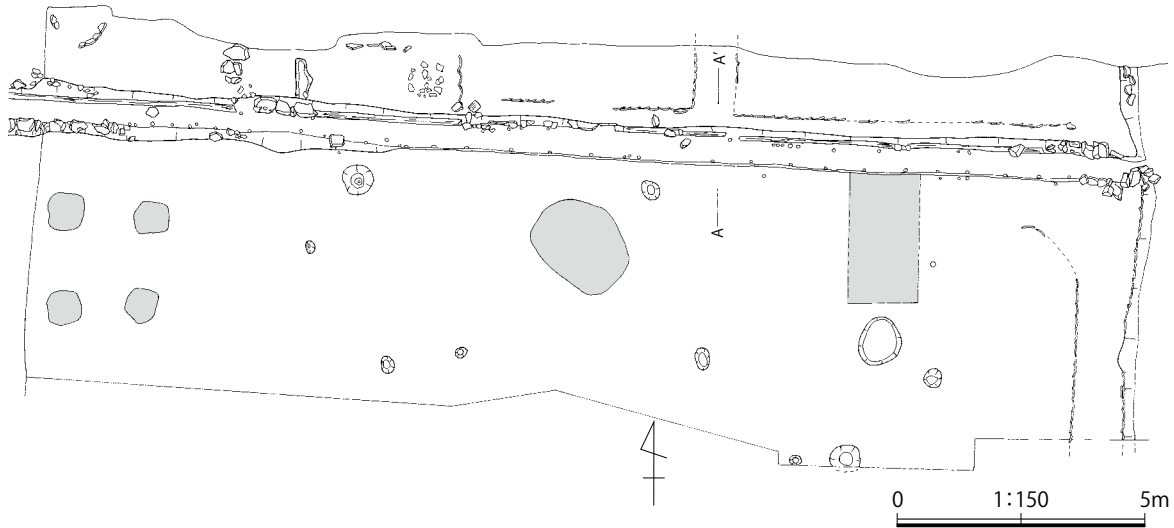
第47図 SD05出土遺物（3）

ている。年代は1780～90年代に限定できる。

47-1は肥前系で、口径9.5cm、高台径5.2cm、器高2.8cmを測る丸形小皿である。内面のみに染付が見られ、見込み中央に魚（鯛か）、左端に「寿」が描かれる。底部に足付ハマの痕跡が残ることから、1780～19世紀前半頃のものと思われる。47-2は蛇ノ目凹型高台の皿で、口縁端部は玉縁状を呈する。染付は形骸化された松竹梅文が描かれる。九陶V期（1780～1860）に該当する。47-3は口径15.7cm、高台径6.0cm、器高8.0cmを測る肥前・波佐見系の丸形鉢である。外面には丸文が3ヶ所に配され、その中に松竹梅文が描かれる。見込みに圏線2条と五弁花文、高台内には「渦福」銘が入る。年代は九陶V期（18世紀後半）である。

SD05 出土遺物・土師器、土器、石製品、銭貨（第47図）

47-5・6は土師器で、47-5は手づくね成形による京都系、47-6は底部に回転糸切り痕が残る在地区の極小皿である。いずれも口縁端部に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されてい



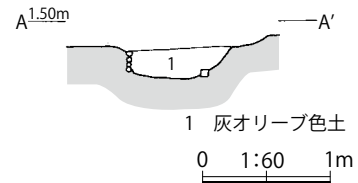
第48図 SD06平面図

たことが窺える。

47-4・7は土器である。47-4は焼塩壺の蓋で、端部は逆凹字形を呈する。内面には製作時の布目痕が残る。年代は18世紀代のものであろうと思われる。47-7は焙烙で、復元口径31.6cmを測る。外面全面に煤が付着していることから、調理などで使用されたと思われる。

47-8は最大長4.1cm、最大幅3.2cm、厚み2.0cmを測る砥石である。6面全面に使用痕が残る。

47-9・10は銭貨で、寛永通寶である。47-9は古寛永、47-10は新寛永である。



第49図 SD06土層断面図

第4項 SD06 (第48・49図)

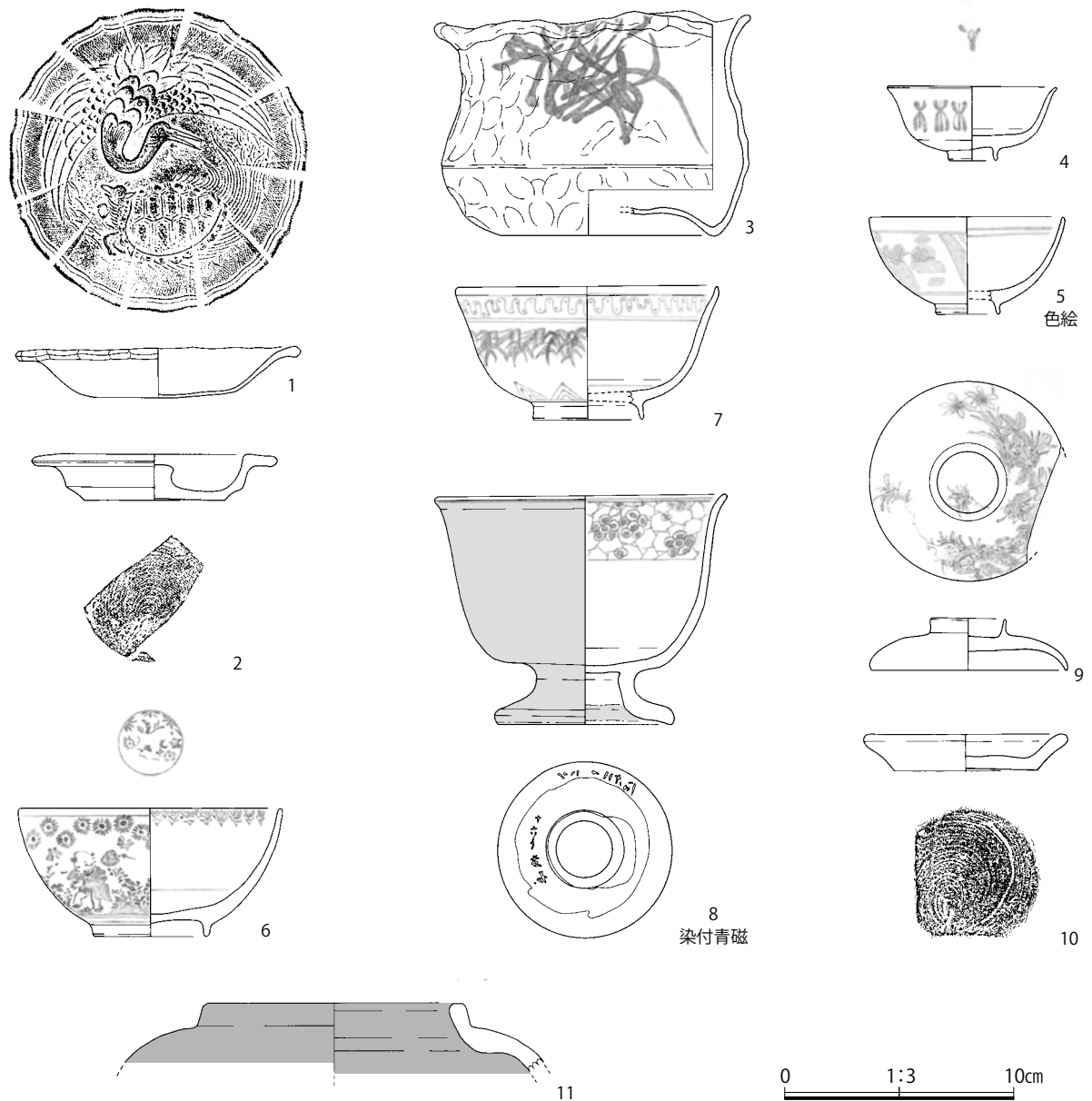
SD06は、SD05廃絶後、約0.3m嵩上げ造成された後に機能した屋敷境溝で、それまでの南西屋敷地を東西方向に分断するような形で造られた溝である。前述したSD04(第39図)・SA01(第42図)からは約9m、SD05(第43図)からも約9m大幅に南側へ移動している。SD06は、南西屋敷・第3遺構面で検出した礎石建物跡SB09・10(第106図)の上層面で検出している。

SD06は、東西残存長22.5m、南北最大幅1.0mを測り、西側は調査区外に続き、東側は後述するSD12(第51図)と結合しT字状となるものである。最深部は0.3mと浅く、溝内部には杭が等間隔で打ち込まれ、丸木が横たわり、板材が立てられていた。これは水を通すための構造であったと思われる。SD06の埋土は第1層のみで、灰オリーブ色土が堆積する。

出土遺物の傾向としては、陶器は在地(19世紀代)が多く、備前(19世紀代)はごくわずかである。磁器は肥前、肥前系、瀬戸・美濃などが見られ、年代は19世紀代のものがほとんどである。

SD06出土遺物(第50図)

50-1～3は陶器である。50-1は備前の煎餅皿せんべいざらと称される型押成形の小皿である。口径12.3cm、底径5.6cm、器高2.2cmを測り、器壁は非常に薄い。内面は鶴と亀をモチーフにした型押が成されており、鶴は羽を大きく広げて上方を舞い、亀はその下を歩く姿が象られている。50-2・3は在地(布



第50図 SD06出土遺物

志名)である。50-2は壺蓋で、つまみ部分が口縁部よりも低い位置にあるタイプで、ある。布志名特有の緑色釉が外面のみに掛かる。また、底部に回転糸切り痕が残る。50-3は変形鉢である。成形は、敢えて手作業で行われたものと同取ることができ、全体的に指痕が多数残る。また、器壁は3mmと非常に薄く、底部分は1.0cmの上げ底である。外面の対角となる位置に、青・茶色の草花文が描かれる。いずれも年代は19世紀代のものであろう。

50-4～9は磁器である。50-4は瀬戸・美濃(新製焼)の端反形小坏である。外面には染色体文が描かれており、19世紀代のものである。50-5は肥前の色絵浅丸形小碗で、外面には赤色と緑色で松文が表現されている。年代は九陶Ⅳ期(1710～80)のものである。50-6は肥前系の丸形中碗で、外内面の染付は型紙摺りによる唐子文、^{からこ}輪宝文^{りんぼう}などが見られる。年代は19世紀以降のものである。50-7は肥前の端反形中碗で、染付は外内面に見られる。口縁端部には波線文を巡らせ、外面にはそ

の下に連続笹文、複合鋸歯文を配する。50-8は肥前の杯洗^{はいせん}である。杯洗とは、水を溜めた受部で中で猪口や小坏を洗い流す器である。端反碗状の受部に脚部が付くもので、口径12.7cm、底径7.6cm、器高10.2cm、受部は深さ7.3cmを測る。外面に青磁釉が掛かり、内面に染付が見られる染付青磁である。口縁部内面には氷裂文の中に花文があしらわれる絵柄が描かれ、口縁端部は鉄釉で口さびである。断面に焼継ぎ痕が顕著であり、脚部内に焼継ぎ師が継いだ時の識別番号が残される。50-9は肥前の丸形中碗蓋で、外面に線描きで柘榴の木・花・果実が左右非対称に描かれる。50-7～9は九陶V期（1820～60）に該当する。

50-10は口径8.4cmを測る在地系土師器の極小皿で、底部に回転糸切り痕が残る。

50-11は土器で、口縁部が直角に立ち上がる火消壺である。外内面ともに真っ黒に変色していることから、使用の痕跡が窺える。

第4節 屋敷境D（第51・52図）

屋敷境Dは、南西屋敷と南東屋敷を区画する位置に掘られた、南北方向屋敷境溝の変遷が追える部分である。前述した屋敷境A～Cよりも溝を造り変える回数が多く、計4回の造り替えが確認された。

まず、造成初期段階に溝状遺構SD07・08が造られる。SD07は、屋敷境Bで検出したSD02（第11図）と形態が良く似たV字状を呈する溝である。SD07の西に隣接するSD08は、土層断面を見るとSD07を切って掘られているが、造られた時期はほぼ同一であった可能性を考えている。SD07・08が埋められた後、SD09・10が造られる。これらも東西で隣り合う形態で、造られた年代は南西屋敷・第2遺構面にすり合うことを確認している。この後、SD10のほぼ真上に当たる位置に、SD11が造られる。SD11は南西屋敷・第3遺構面の頃に掘られた溝である。さらにその後、西側へ約2.0m移動したところにSD12が造られる。SD12は屋敷境CのSD06（第48図）と直角にぶつかるT字状溝の南北方向部分である。

屋敷境Dにおける各時代の屋敷境溝は、造成初期段階のSD08を除外して、その位置をほとんど変えずに造り変えられており、土層断面でもその変遷が明確に見て取れる。いずれも南北方向に走る溝で、時代によっては2本連なっている場合も見られる。南西屋敷と南東屋敷の境界は、造成初期段階から幕末に至るまで、その位置を踏襲し続けたことが分かる。以下、古い時代から各溝の詳細を述べ、出土遺物も考慮し、遺構の年代観を提示する。

第1項 SD07

SD07・08の北・南側は基礎攪乱部や調査地外へ続くため、全体の規模などは不明である。2条の溝は城下町造成初期段階に掘られたもので、旧地表面上での検出である。東西で隣り合っており、土層では若干SD08が新しい可能性を示すが、ほぼ同時期の遺構という判断をしている。

SD07は東側の溝で、南北残存長7.8m、東西最大幅1.6m、最深部0.7mを測る断面形V字状の溝である。ここから遺物は出土していない。

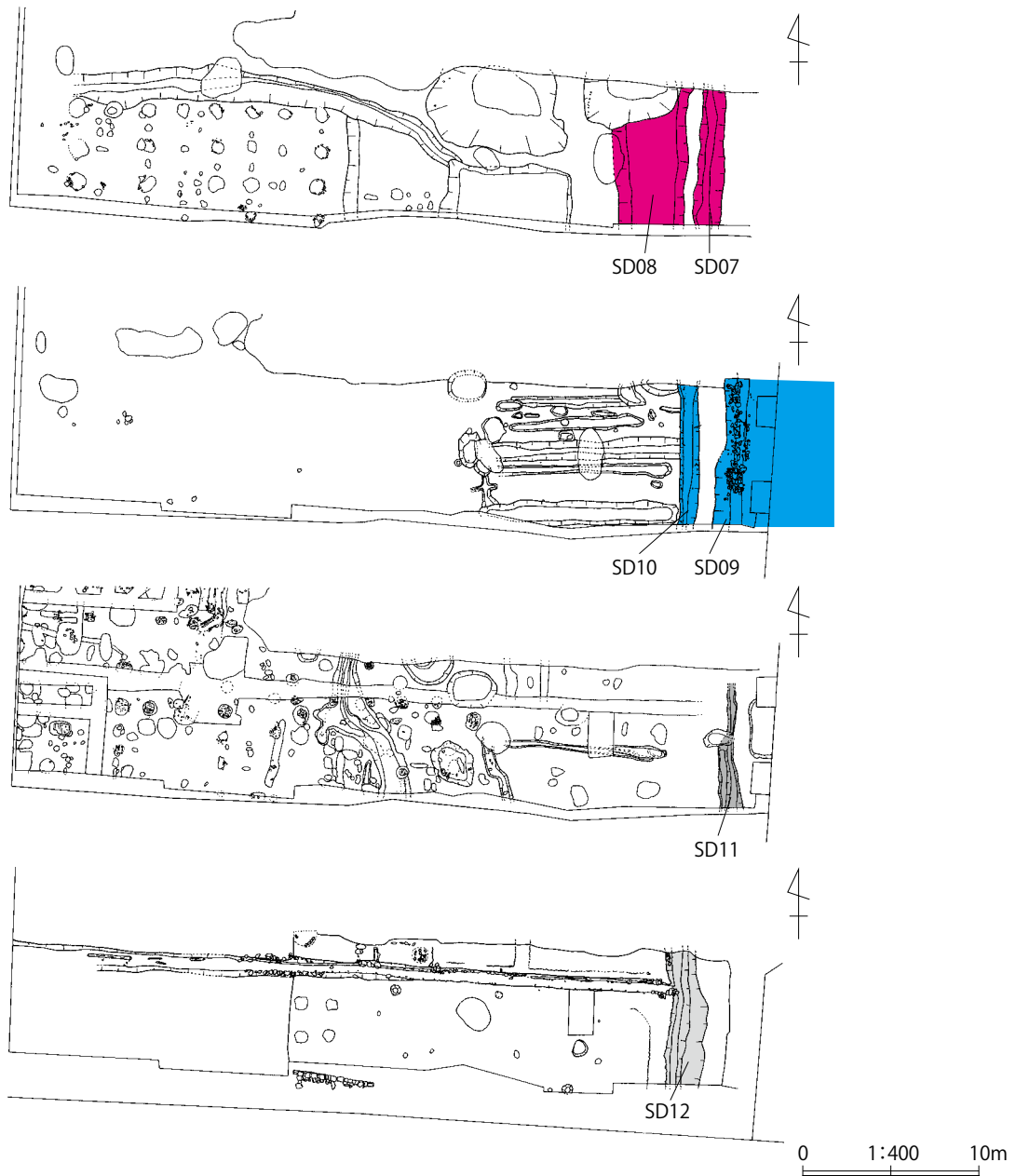
第2項 SD08

SD08はSD07の西側に位置する溝で、南北残存長7.9m、東西最大幅4.2m、深さ0.9mを測る断面形が逆台形状を呈する溝である。遺物は、下駄1点と模鑄銭1点のみの出土で、年代の定点となる遺物は見られないが、前述の通りSD07とほぼ同時期の遺構と考える。

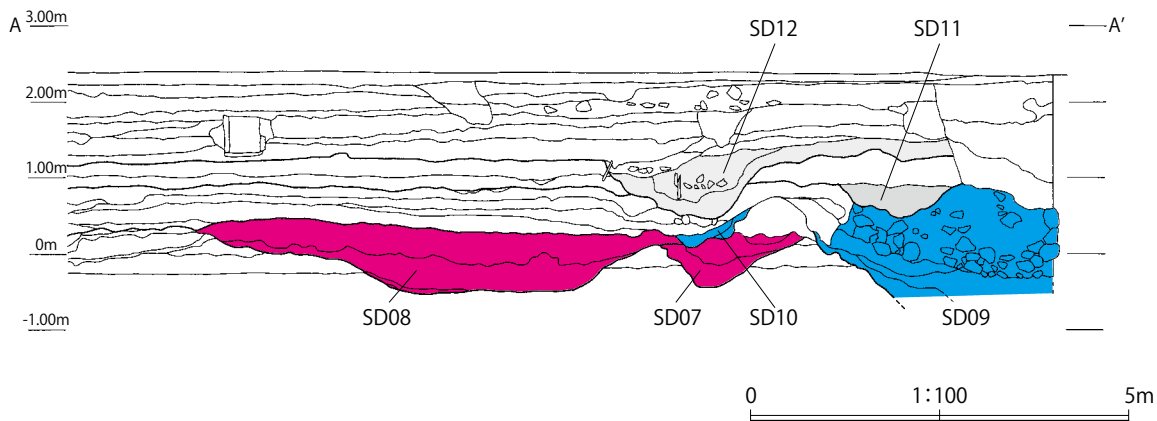
SD08出土遺物(第53図)

53-1は木製品で、丸型連歯下駄である。歯は前・後ろともかなり擦り減っており、長期間に渡って履かれていたことが推測される。また、前部分には指の痕跡も見られ、親指の跡が右側に残ることから、右足の下駄と推定している。

53-2は模鑄銭の「祥符元寶」である。



第51図 屋敷境D変遷図



第52図 屋敷境D土層断面図

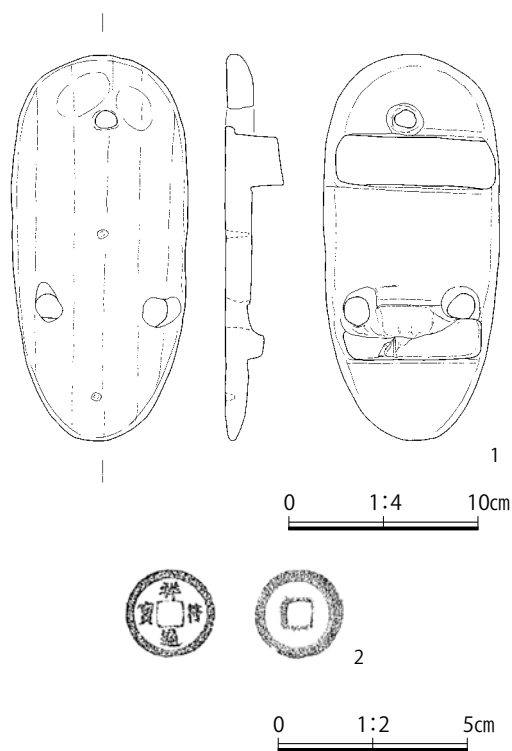
第3項 SD09

SD09・10は、南西屋敷・第2遺構面と同時期に造られた屋敷境溝で、上記のSD07・08と同様並列している。SD09は東側の溝で、溝の東肩部分は現代建物基礎の中に続いており、溝の東岸を検出しているが、ここでは溝底が基礎下をさらに掘り下げたところで検出したため、崩落の危険性があったことから詳細な調査はできなかった。そのため、正確な溝幅は不明であるが、規模は南北残存長8.3m、東西残存幅1.3m、残存深1.5mを測る。溝内部に石垣が積まれている痕跡があり、石組溝であったと思われる。石の下には竹が置かれており（写真図版9参照）、暗渠のような役割を果たしたものと考えている。

SD09からの出土遺物は小片が多く、陶器・磁器・土師器の破片が数点出土している他、荷札木簡が1点出土している。年代は17世紀後半～18世紀代と捉えられる。

SD09 出土遺物（第54・55図）

54-1は木製品で、両面に墨書文字が書かれている荷札木簡である。最大長14.4cm、最大幅3.2cm、厚み0.6cmを測る。墨書文字は表面に「大田惣右衛門上松井□□□□□」、裏面に「上ぬりこん布俵物」と書かれている。「大田惣右衛門」に届けられた荷物、という意味と推測している。裏面に書かれた文字の中に「こん布」と「俵物」という単語が読み取れるが、これは「昆布」と「海産物」という意味と思われ、大田惣右衛門に海産物が届けられる際に添付された荷札木簡の可能性が考えられる。なお、この「大田惣右衛門」については、堀尾・京極・松平のいずれの藩士にも該当す



第53図 SD08出土遺物

る名前は見られなかった。

55-1 は陶器で、山口（須佐）の播鉢である。胴部の破片で、8本単位のスリ目が放射状に付けられている。年代は18世紀代のものである。

55-2・3 は肥前磁器である。55-2 は丸形小坏で、口径 5.2cm、器高 3.3cm を測り、小坏の中でも小形の部類に入る。染付は外面に山や家屋などの風景文が描かれる。56-3 は丸形中碗で、口縁部～胴部の破片である。染付は外面のみに見られ、山水文が描かれる。いずれも年代は九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。

55-4 は在地系の土師器で、底部に回転糸切り痕が残る小皿である。口縁端部に油煙痕の付着が顕著であることから、灯明皿として使用されたものと思われる。

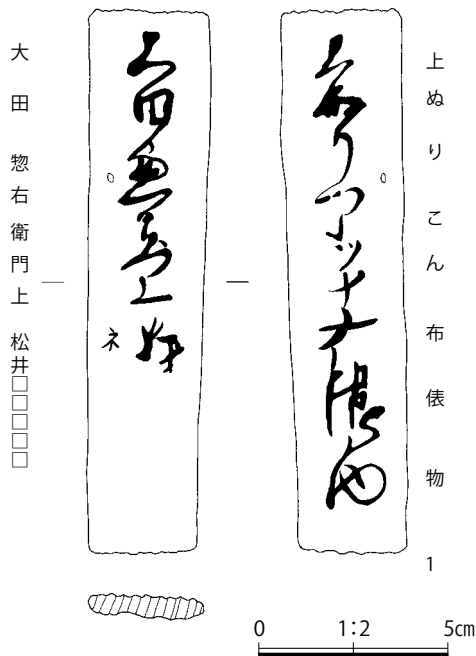
第4項 SD10

SD10 は西側の溝で、SD09 と比べてやや小規模であり、南北残存長 8.0m、東西最大幅 1.1m、深さ 0.2m を測る浅い溝である。遺物は陶磁器が数点出土しており、その年代観は SD10 とほぼ同一であると考えている。

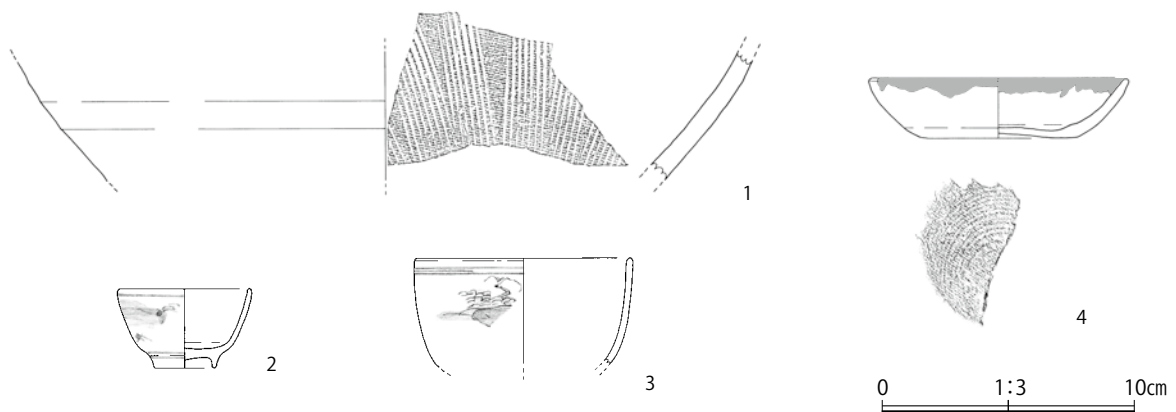
SD10 出土遺物（第56図）

56-1 は京都・信楽系陶器の中碗で、胴部のみ破片である。丸みを帯びる形状で、薄黄色釉が全面に掛かり、底部は露胎である。年代は18世紀代のものである。56-2 は肥前陶器の小皿である。口縁端部内面には溝が巡る溝縁皿である。見込みに砂目痕が残ることから、九陶Ⅱ期（1610～50）のものである。

56-3・4 は肥前磁器である。56-3 は中碗で、胴部～高台の破片である。くらわんか碗と呼称される波佐

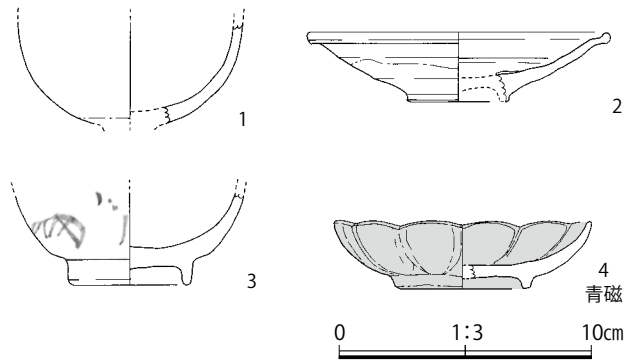


第54図 SD09出土遺物（1）



第55図 SD09出土遺物（2）

見地方の器で、染付は草花文が描かれる。年代は波佐見Ⅳ期（1680～1740）のものである。56-4は青磁小皿である。口径10.2cm、高台径5.4cm、器高2.7cmを測り、型押成形により連弁文形を呈する。青磁釉は全面に掛かり、畳付けのみ無釉である。年代は九陶Ⅱ-2期（1630～40）に該当し、SD09出土遺物の中では古手のものである。



第56図 SD10出土遺物

第5項 SD11

SD11は南西屋敷・第3遺構面時に造られた屋敷境溝で、南北残存長6.9m、東西最大幅1.2m、深さ0.4mを測る浅い溝である。断面はややいびつなU字状を呈し、埋土も1層である。遺物は凶化できない小破片の下駄が1点出土したのみである。

第6項 SD12

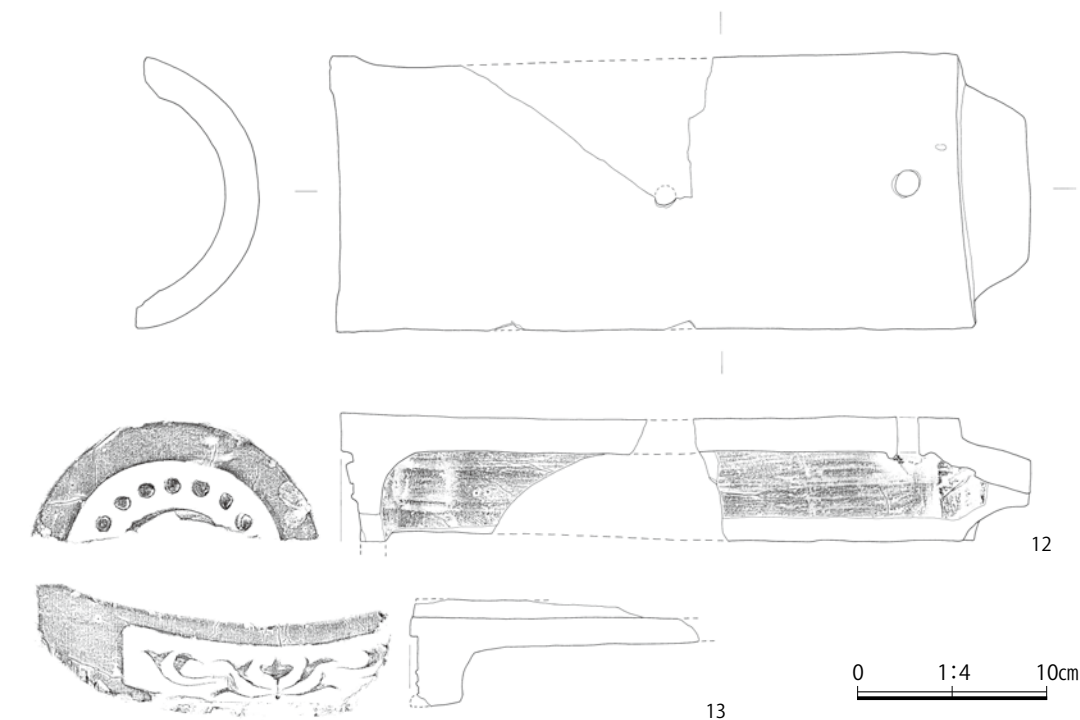
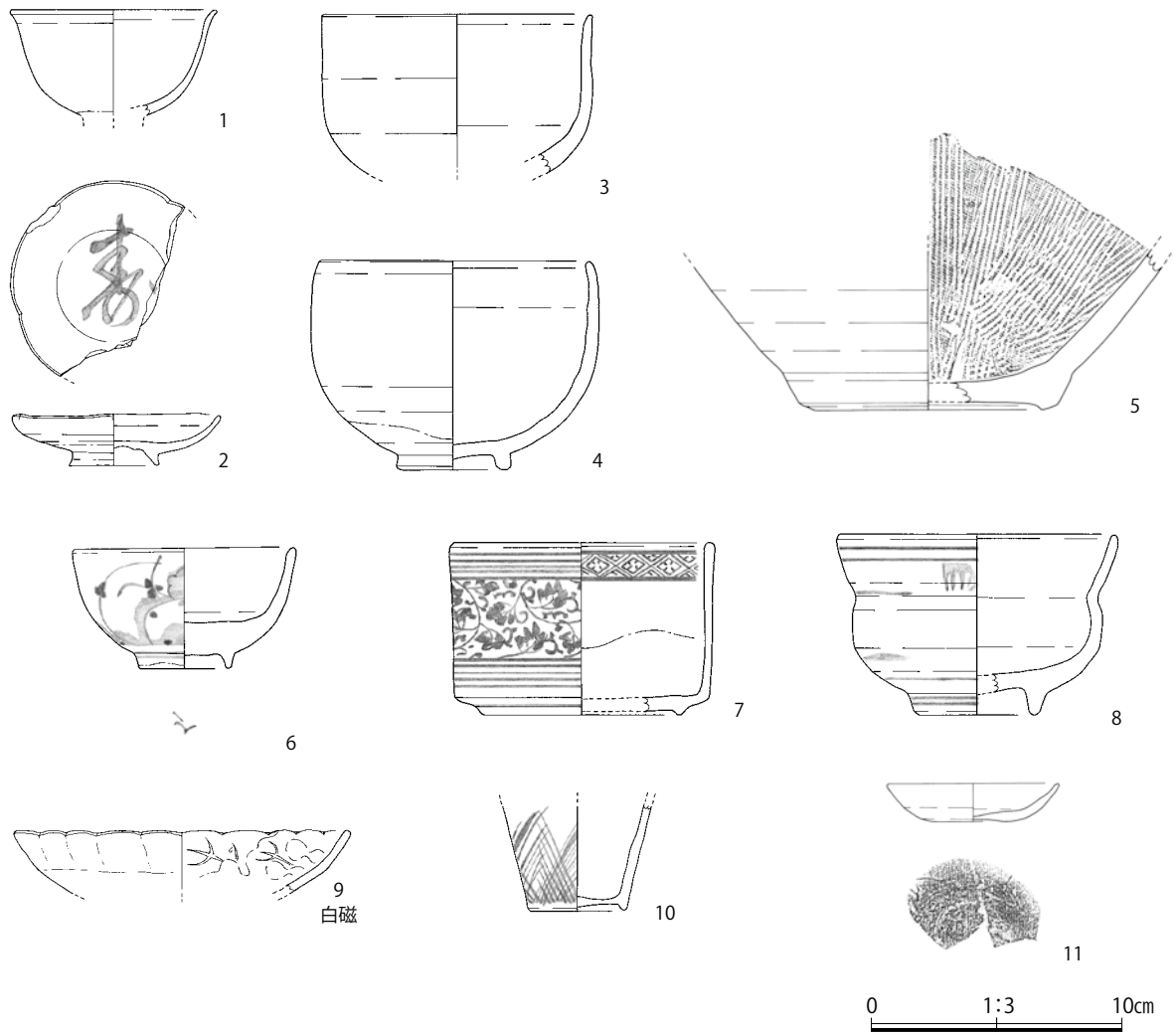
SD12は南西屋敷・第3遺構面上層面と同時期に造られた屋敷境溝で、南北残存長7.8m、東西最大幅2.1m、深さ0.8mを測る。断面はややいびつな逆三角形状を呈し、溝内部には平瓦が立てられていた。SD12はSD06（第48図）と直交するT字状溝の南北方向部分である。

遺物は陶器・磁器・土師器・瓦などが出土しており、年代は18世紀後半～19世紀代を示している。

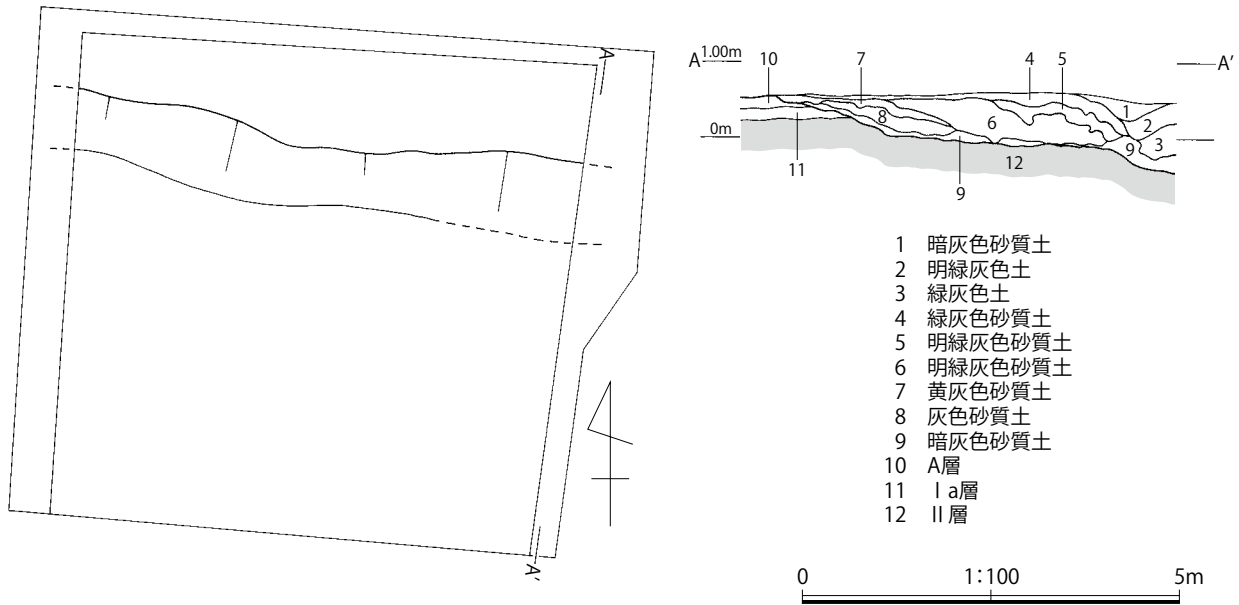
SD12出土遺物（第57図）

57-1～5は陶器である。57-1は京都・信楽系の端反形小碗で、薄黄色釉が掛かる外内面には貫入が顕著である。年代は18世紀代のものである。57-2は在地（布志名）の極小皿で、口径8.2cm、器高2.1cmを測る。見込みに約4cm四方の「寿」が鉄釉で書かれていることから、祝時などに使用された器と推定する。また、同一器種が数枚出土していることから、セット品であったと思われる。57-3は肥前の呉器手中碗で、腰部分が強く張り出し、口縁部にかけて垂直に立ち上がる。九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780）のものである。57-4は在地（布志名）の中碗で、胴部は半球状で丸く、口縁端部はわずかに内湾する。外内面は白色釉が掛かり、底部～高台にかけては無釉である。年代は19世紀代のものである。57-5は山口（須佐）の播鉢で、胴部～高台の破片である。内面に8本単位のスリ目が放射状に付けられており、18世紀代に多く見られる播鉢である。

57-6～10は肥前磁器である。57-6は口径8.8cm、高台径3.8cm、器高4.9cmを測る丸形小碗で、全体的に器壁が厚く、特に底部部分は厚さ1.3cmを測る。染付は外面のみに見られ、形骸化した草花文が描かれる。57-6はくらわんか碗で、九陶Ⅳ期（1680～1740）に波佐見地方で大量生産された器である。57-7は筒形の蓋付鉢で、口縁部～胴部は垂直に下りる形状、底部は蛇ノ目凹型高台である。染付は外内面に見られ、外面は口縁部と胴部下方に圏線5条ずつ、それらに挟まれる形

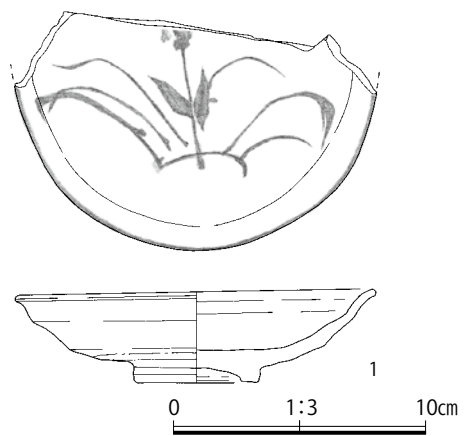


第57図 SD12出土遺物



第58図 SD13平面図・土層断面図

で花唐草文が描かれ、口縁端部内面には丁寧な四方禪文が描かれる。年代は九陶Ⅳ期（1700～80）に該当する。57-8は陶胎染付の中碗で、胴部上方で強く屈曲し、口縁部が外傾する特殊な形状である。年代は九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。57-9は九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780）の白磁小皿で、型押成形により花形状を呈する。57-10は桶形猪口で、外面に椀垣文が描かれる九陶Ⅴ期（1750～80）のものである。



第59図 SD13出土遺物

57-11は在地系の土師器で、口径6.9cm、底径4.1cm、器高1.5cmを測る極小皿である。底部には回転糸切り痕が残る。

57-12・13は瓦である。57-12は棟巴瓦で、最大長36.9cm、最大幅14.5cm、丸瓦厚2.0cmを測る。外径14.6cm、残存珠文7個で、三巴文は右巻である。57-13は軒平瓦で、顎面部分を含む破片である。残存長15.4cm、平瓦厚1.4cmを測り、瓦当部分には唐草文が象られている。

第5節 屋敷境E（第58図）

東西8.1m×南北6.7mの車庫建設予定範囲内を調査した結果、標高0.5m付近において、南側に向かって傾斜する落ち込みのラインを検出した。この落ち込みは東西方向に直線的な形状であり、上端と下端のラインが一定であることなどから溝状遺構と捉え、SD13と呼称する。

車庫建設予定地は上記の通り狭小な調査区であり、SD13はこの中で検出した遺構なので、必ずしも溝であると断定できない。大形土坑などの一端を検出した可能性も考えられる。

第1項 SD13 (第58図)

SD13は、4屋敷地の境界であった屋敷境溝の形態と似ており、検出面が旧地表面であることなどから、SD01・02・04・07(第7図)と同時期、城下町造成初期段階に造られた屋敷境溝の可能性が高い遺構と考えている。遺物は、陶器・土師器の破片が数点出土しており、その中で図化できたものは59-1(第59図)のみであった。

SD13 出土遺物 (第59図)

59-1は肥前陶器で、折縁形の小皿である。口径14.2cm、高台径5.0cm、器高3.8cmを測り、底部は兜巾・三日月高台である。口縁端部には鉄釉が塗られ、口さび状の装飾が施される。見込みには草花文が描かれ、目跡は見られない。年代は九陶I-2期(1594～1610)に該当する。

第4章 屋敷境

表1 屋敷境 陶磁器・土師器・土器観察表

遺物番号	面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾	法量:cm(残存値)			生産地	九陶(年代)	備考
								口径	底径	器高			
13-1	屋敷境	SD02	陶器	中碗	丸形	—	藁灰釉	10.7	3.9	6.7	肥前	Ⅱ(1610~50)	胴部~高台・無釉
13-2	屋敷境	SD02	陶器	小皿	丸形	—	藁灰釉	(11.7)	(4.2)	(3.2)	肥前	Ⅱ(1610~50)	底部~高台・無釉/なぶり口
13-3	屋敷境	SD02	磁器	香炉	—	沈線(ヘラ彫り)	青磁	7.0	6.0	6.3	中国(龍泉窯)	15世紀末~16世紀初	底部・無釉・足3(裝飾)
13-4	屋敷境	SD02	土師器	極小皿	京都系	—	—	9.0	3.4	2.3	在地	—	手づくね成形/内面・油煙痕・煤
16-1	屋敷境	SD03	陶器	小杯	丸形	—	—	(7.3)	3.0	5.0	肥前	Ⅱ(1610~50)	胴部~高台・無釉
16-2	屋敷境	SD03	陶器	小杯	丸形	—	—	7.0	3.4	3.1	肥前	Ⅱ(1610~50)	胴部~底部・無釉/底部・回転糸切り
16-3	屋敷境	SD03	陶器	中碗	天目形	—	—	(11.0)	3.7	6.1	肥前	Ⅱ(1610~50)	胴部~高台・無釉
16-4	屋敷境	SD03	陶器	中碗	端反形	—	—	11.8	4.5	7.7	肥前	Ⅱ(1610~50)	底部~高台・無釉/器付・砂目3 底部内面・茶死痕/見込・擦痕
16-5	屋敷境	SD03	陶器	中碗	呉器形	—	薄肌色釉	(12.5)	4.9	7.5	肥前(内野山)	Ⅱ(1610~40)	高台内・無釉・砂目3/胎土・朝鮮的
16-6	屋敷境	SD03	陶器	中碗	呉器形	—	黄色釉	10.5	4.8	7.2	肥前	Ⅲ(1650~90)	器付・無釉・砂目/饅頭芯
16-7	屋敷境	SD03	陶器	中碗	呉器形	—	薄黄色釉	(10.2)	4.7	7.5	肥前	Ⅲ~Ⅳ(1650~1780)	器付・無釉・砂目4
16-8	屋敷境	SD03	陶器	中碗	天目形	—	暗赤褐色 青色	(11.2)	—	(5.4)	福岡 (上野・高取)	17世紀前半	—
16-9	屋敷境	SD03	陶器	中碗	脚紐形	—	黒色釉	(12.2)	—	(5.1)	福岡 (上野・高取)	17世紀前半	—
16-10	屋敷境	SD03	陶器	向付	筒形	—	白色釉	—	6.0	(3.2)	瀬戸・美濃 (志野)	17世紀前半	貫入
16-11	屋敷境	SD03	陶器	中碗	—	—	藁灰釉 鉄繪	—	(4.4)	4.8	山口(萩)	18世紀代	底部~高台・無釉/高台内・渦巻き状
16-12	屋敷境	SD03	陶器	中碗	半球形	草花文	鉄繪	8.8	3.2	5.2	京都・信楽系	18世紀代	底部~高台・無釉
16-13	屋敷境	SD03	陶器	小皿	丸形	—	—	(10.6)	(4.8)	3.9	肥前	I-2(1594~1610)	体部~高台・無釉/胎土目 甚奇底高台
16-14	屋敷境	SD03	陶器	小皿	折縁形	—	—	12.4	5.0	3.3	肥前	I-2(1594~1610)	体部~高台・無釉/胎土目4
16-15	屋敷境	SD03	陶器	向付	方形	草花文	鉄繪	11.8	3.5	4.2	肥前	I-2(1594~1610)	底部~高台・無釉/目跡なし
16-16	屋敷境	SD03	陶器	小皿	丸形	—	—	11.0	4.5	2.8	肥前	Ⅱ(1610~50)	体部~高台・無釉/砂目3
16-17	屋敷境	SD03	陶器	小皿	溝縁形	—	—	(11.5)	4.0	2.7	肥前	Ⅱ(1610~50)	体部~高台・無釉/砂目3
16-18	屋敷境	SD03	陶器	小皿	折縁形	—	—	(12.6)	4.4	3.1	肥前	Ⅱ(1610~50)	高台内外・砂/砂目3~4
16-19	屋敷境	SD03	陶器	小皿	溝縁形	—	—	14.6	4.6	3.7	肥前	Ⅱ(1610~50)	体部~高台・無釉/砂目3
16-20	屋敷境	SD03	陶器	大鉢	丸形	—	銅緑釉 鉄釉	(35.4)	11.0	11.8	肥前(内野山)	Ⅲ(17世紀中頃~末)	高台抉り3
17-1	屋敷境	SD03	陶器	片口	玉縁形	—	—	(10.4)	4.2	6.1	肥前	Ⅲ(1650~90)	胴部~高台・無釉/砂目3
17-2	屋敷境	SD03	陶器	壺蓋	—	—	—	9.2	4.4	2.7	肥前	Ⅱ(1610~50)	内面・無釉/底部・回転糸切り
17-3	屋敷境	SD03	陶器	台付皿	丸形	菊花文・網目文	鉄繪	14.0	5.4	4.7	肥前	Ⅱ(1630~40)	器付・無釉/磁器窯で焼成
17-4	屋敷境	SD03	陶器	火入れ	玉縁形	—	白色・緑色 二彩手	13.7	6.4	6.3	肥前	Ⅲ(1650~90)	体部~高台・無釉/高台抉り3 底部内面・煤
17-5	屋敷境	SD03	陶器	壺	短頸形	—	鉄繪	8.8	6.7	10.1	肥前	I-2(1594~1610)	胴部~高台・無釉/胎土目3
17-6	屋敷境	SD03	陶器	大瓶	—	—	—	—	14.4	7.7	肥前	I(1580~1610)	叩き成形/貝目8 内面・同心円状当て具痕
17-7	屋敷境	SD03	陶器	甕	—	—	—	(14.4)	—	(9.3)	肥前	Ⅲ(1650~90)	—
17-8	屋敷境	SD03	陶器	壺	胴丸形	—	黒色釉	(11.4)	13.1	13.5	福岡 (上野・高取か)	17世紀前半代	内面・無釉/砂目8
17-9	屋敷境	SD03	陶器	壺	筒形	—	—	—	9.4	(18.1)	備前	17世紀前半代	底部外面・印刻(窓印)
17-10	屋敷境	SD03	陶器	香炉	布袋坐像	—	—	長10.6	幅9.4	(5.9)	備前	17世紀中~後半	布袋香炉/底部・刻印(ヘラ彫り) 細工物/伝世品
18-1	屋敷境	SD03	陶器	四耳壺	—	—	—	(10.0)	—	(11.2)	信楽	18世紀代	腰白壺
18-2	屋敷境	SD03	陶器	片口鉢	玉縁形	—	—	20.6	9.8	14.1	山口(須佐)	18世紀代	胴部~高台・無釉/目跡4
18-3	屋敷境	SD03	陶器	掃鉢	—	—	—	(24.6)	(10.7)	9.3	備前	17世紀代	—
18-4	屋敷境	SD03	陶器	掃鉢	—	—	—	—	(11.4)	(7.4)	山口(須佐)	18世紀代	—
19-1	屋敷境	SD03	磁器	中碗	端反形	唐子文	染付	(10.5)	—	(4.6)	中国(漳州窯)	17世紀前半	—
19-2	屋敷境	SD03	磁器	中碗	—	—	染付	—	5.0	(2.4)	中国(漳州窯)	17世紀前半	器付・無釉/高台内・断面・漆継ぎ
19-3	屋敷境	SD03	磁器	中碗	丸形	草花文	染付	10.0	4.6	6.9	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉・砂/粗製 化粧掛けしていない
19-4	屋敷境	SD03	磁器	中碗	丸形	草花文	染付	(9.6)	4.1	7.2	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	底部・器付・高台内・無釉/高台・砂
19-5	屋敷境	SD03	磁器	中碗	丸形	山水文	染付	10.6	4.0	6.7	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉・粗砂
19-6	屋敷境	SD03	磁器	中碗	丸形	松文	染付	(9.8)	4.3	6.8	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉・砂
19-7	屋敷境	SD03	磁器	中碗	丸形	網目文・寿文	染付	9.4	3.8	6.8	肥前	Ⅱ-2(1630~40)	器付・無釉・粗砂
19-8	屋敷境	SD03	磁器	中碗	丸形	團扇/見込・大明成化年製 高台内・宣徳年製	染付	9.3	3.8	5.1	肥前	Ⅲ(1650~60)	器付・無釉/漆継ぎ
19-9	屋敷境	SD03	磁器	中碗	浅丸形	牡丹唐草文/見込・五弁花文 高台内・大明成化年製	染付	9.7	4.1	5.4	肥前(有田)	Ⅲ~Ⅳ (1680~18世紀初)	器付・無釉
19-10	屋敷境	SD03	磁器	小杯	丸形	草花文	染付	(8.0)	3.2	4.6	肥前	Ⅲ(1650~90)	器付・無釉・砂目3
19-11	屋敷境	SD03	磁器	小杯	端反形	牡丹唐草文	染付	(7.2)	—	(4.4)	肥前(有田)	Ⅲ(1660~70)	漆継ぎ
19-12	屋敷境	SD03	磁器	小杯	端反形	草花文	染付	(6.7)	3.0	4.2	肥前	Ⅲ(1650~90)	器付・無釉・砂目4
19-13	屋敷境	SD03	磁器	鉢	丸形	区画文・草花文/高台内・福	染付	—	6.0	(6.4)	肥前(有田)	Ⅲ(1650~60)	器付・無釉/漆継ぎ
19-14	屋敷境	SD03	磁器	鉢	浅丸形	草花文/高台内・宣明年製	染付	16.0	6.1	7.9	肥前(有田)	Ⅲ(1660~80)	器付・無釉
19-15	屋敷境	SD03	磁器	鉢	丸形	見込・花・野菜文	染付	(16.6)	(6.5)	8.1	肥前	Ⅲ(1650~90)	器付・無釉
20-1	屋敷境	SD03	磁器	中皿	折縁形	—	染付	21.4	8.8	3.7	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉・粗砂
20-2	屋敷境	SD03	磁器	中皿	折縁形	見込・草花文	染付	(21.4)	(11.0)	4.7	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉・砂か/粗製/漆継ぎ
20-3	屋敷境	SD03	磁器	大皿	丸形	草花文	染付	(27.2)	(10.1)	6.6	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉・砂
20-4	屋敷境	SD03	磁器	小皿	端反形	見込・菊花文	染付	(13.4)	(5.6)	3.5	肥前	Ⅱ-1~2(1610~40)	器付・無釉
20-5	屋敷境	SD03	磁器	小皿	端反形	魚文か	染付	9.4	5.4	2.3	肥前(有田)	Ⅲ(1650~90)	糸切細工・型押成形/器付・無釉・砂 大量生産
21-1	屋敷境	SD03	磁器	大皿	端反形	牡丹唐草文・花唐草文	染付	(28.0)	(17.0)	4.7	肥前(有田)	Ⅲ(1660~70)	※柿右衛門窯/器付・無釉・砂 ハリ支え
21-2	屋敷境	SD03	磁器	大皿	端反形	花唐草文/見込・鳥文・草花文 高台内・二重角福か	染付	(30.6)	(16.6)	(4.7)	肥前(有田)	Ⅲ(1660~70)	※柿右衛門窯/器付・無釉/被熱 ハリ支え

遺物番号	面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾	法量:cm(残存値)			生産地	九陶(年代)	備考
								口径	底径	器高			
55-1	屋敷境	SD09	陶器	掃鉢	—	—	—	—	—	(5.2)	山口(須佐)	18世紀代	スリ目単位8本
55-2	屋敷境	SD09	磁器	小坏	丸形	風景文	染付	(5.2)	2.6	3.3	肥前	Ⅲ(1650~90)	畳付:無軸・砂
55-3	屋敷境	SD09	磁器	中碗	丸形	山水文	染付	(8.6)	—	(4.3)	肥前	Ⅲ(1650~90)	
55-4	屋敷境	SD09	土師器	小皿	在地系	—	—	(10.2)	(6.4)	2.4	在地	—	底部:回転糸切り/口縁端部:油煙痕
56-1	屋敷境	SD10	陶器	中碗	—	—	—	—	—	(4.0)	京都・信楽系	18世紀代	底部:露胎
56-2	屋敷境	SD10	陶器	小皿	溝縁形	—	—	(12.0)	(4.2)	2.7	肥前	Ⅱ(1610~50)	体部~高台:無軸/砂目
56-3	屋敷境	SD10	磁器	中碗	丸形	草花文	染付	—	4.8	(3.7)	肥前	Ⅳ(1680~1740)	畳付:無軸・砂/くらわんか手
56-4	屋敷境	SD10	磁器	小皿	菊花形	連弁文	青磁	(10.2)	(5.4)	2.7	肥前	Ⅱ-2(1630~40)	型押成形/畳付:無軸・砂
57-1	屋敷境	SD12	陶器	小碗	端反形	—	—	(8.2)	—	(4.2)	京都・信楽系	18世紀代	貫入
57-2	屋敷境	SD12	陶器	極小皿	丸形	見込:寿	鉄絵	8.2	3.6	2.1	在地(布志名)	19世紀代	底部~高台:無軸/高台内:溝巻き状
57-3	屋敷境	SD12	陶器	中碗	異器形 腰張形	—	—	(10.8)	—	(6.4)	肥前	Ⅲ~Ⅳ(1650~1780)	
57-4	屋敷境	SD12	陶器	中碗	腰張形	—	—	10.8	4.4	8.5	在地(布志名)	19世紀代	底部~高台:無軸
57-5	屋敷境	SD12	陶器	掃鉢	—	—	—	(10.4)	(6.5)		山口(須佐)	18世紀代	スリ目単位8本
57-6	屋敷境	SD12	磁器	小碗	丸形	草花文	染付	(8.8)	(3.8)	4.9	肥前	Ⅳ(1680~1740)	畳付:無軸・砂/くらわんか手
57-7	屋敷境	SD12	磁器	蓋付鉢	筒形	花唐草文・四方禪文	染付	(10.4)	(8.2)	6.9	肥前	Ⅳ(1700~80)	畳付:無軸/蛇ノ目型高台
57-8	屋敷境	SD12	磁器	中碗	腰折形	草花文	陶胎染付	(11.2)	(5.0)	7.3	肥前	Ⅳ(1690~1780)	畳付:無軸
57-9	屋敷境	SD12	磁器	小皿	花形	型打陽刻	白磁	(13.4)	—	(2.5)	肥前	Ⅲ~Ⅳ(1650~1780)	型押成形/漆継ぎ
57-10	屋敷境	SD12	磁器	猪口	桶形	絵垣文	染付	—	(3.8)	(4.3)	肥前	Ⅴ(1750~80)	畳付:無軸
57-11	屋敷境	SD12	土師器	極小皿	在地系	—	—	(6.9)	(4.1)	1.5	在地	—	底部:回転糸切り
59-1	屋敷境	SD13	陶器	小皿	折縁形	草花文	鉄絵	(14.2)	5.0	3.8	肥前	1-2(1594~1610)	底部~高台:無軸/目跡なし 畳付:胎土目

表2 屋敷境 銭貨観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	質量/直径	備考
47-9	屋敷境	SD05	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	3.76	100	0.16	ス貝寶(古寛永)
47-10	屋敷境	SD05	寛永通寶	22.0	6.0	0.7	2.31	100	0.11	ハ貝寶(新寛永)
53-2	屋敷境	SD08	祥符元寶	15.5	6.0	1.0	2.27	100	0.15	(北宋、1009)摸鑄銭

表3 屋敷境 金属製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	形状	材質	法量:残存値		備考
						大きさ(cm)	重量(g)	
23-13	屋敷境	SD03	壺形容器	—	—	口径2.0/器高4.6/厚さ0.1	119.97	
23-14	屋敷境	SD03	小柄	柄	鉄	長さ9.5/幅1.1/厚さ0.1	17.19	片面:溝文
23-15	屋敷境	SD03	煙管	吸口	真鍮	長さ(5.2)/幅1.1/厚さ0.05	2.09	
23-16	屋敷境	SD03	煙管	雁首	真鍮	長さ7.4/幅1.0/厚さ0.1	6.79	
23-17	屋敷境	SD03	釘	—	鉄	長さ8.2/頭部幅3.0/厚さ0.5	16.16	角釘
41-19	屋敷境	SD04	釘	—	鉄	長さ9.9/幅0.7/厚さ0.4	11.02	角釘
41-20	屋敷境	SD04	釘	—	鉄	長さ4.3/幅1.7/厚さ0.6	10.46	角釘/頭部あり

表4 屋敷境 石製品観察表

※墨書読み□の表記は解読不能の文字を表す。

遺物番号	面	遺構名	種類	材質	法量		備考
					大きさ(cm)	重量(g)	
24-1	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ2.3/幅2.2/厚さ0.6	0.82	片面:ヒ五郎(さじごろう・名)
24-2	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ3.2/幅2.0/厚さ0.6	5.20	片面:□名助(名)
24-3	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ3.1/幅2.7/厚さ0.5	6.97	片面:はやた(名字か名)
24-4	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ2.7/幅2.2/厚さ1.1	7.14	片面:「×」か「+」
24-5	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ3.1/幅2.5/厚さ0.4	6.17	片面:山本齋(やまもとさゝい・氏名)
24-6	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ3.4/幅2.7/厚さ0.9	12.11	片面:亥□
24-7	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ4.1/幅3.6/厚さ0.7	13.76	片面:平山(ひらやま・名字)
24-8	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ4.6/幅3.0/厚さ1.1	19.43	片面:真山□□(さだやま□□・氏名)
24-9	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ5.3/幅3.0/厚さ1.1	20.72	片面:武蔵房(むさしぼう)
24-10	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ4.8/幅3.1/厚さ1.1	21.58	片面:道□
24-11	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ3.7/幅2.9/厚さ0.6	7.91	片面:弓田六郎(ゆみたろくろう・氏名)
24-12	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ4.4/幅3.0/厚さ0.6	9.95	片面:山河氏郎(やまかわしろう・氏名)
24-13	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ4.2/幅3.4/厚さ1.0	15.58	片面:忍鬼大八郎(にんきだいはちろう)
24-14	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ4.2/幅3.2/厚さ0.75	16.76	片面:阿鬼得請(あつきとくしょう)
24-15	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ5.7/幅4.9/厚さ1.2	34.63	片面:墨書 判読不明
24-16	屋敷境	SD03	墨書石	—	長さ7.4/幅7.0/厚さ1.2	77.11	片面:坂田金蔵(さかたきんぞう・氏名)
24-17	屋敷境	SD03	墨書須恵器	糞	長さ10.1/幅7.2/厚さ1.3	112.98	両面:墨書 判読不明/胴部破片/角:摩耗
41-18	屋敷境	SD04	砥石	—	長さ4.2/幅4.0/厚さ1.6	57.79	5面使用痕
47-8	屋敷境	SD05	砥石	—	長さ4.1/幅3.2/厚さ2.0	52.51	6面使用痕

表5 屋敷境 木製品観察表

※墨書読み□表記は解読不能の文字、/は改行を表す。

遺物番号	面	遺構名	種類	各称部位	法量(cm)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
10-1	屋敷境	SD01	漆器	椀	(13.6)	(6.5)	9.0	—	—	外内面:朱/無文/高台高い
10-2	屋敷境	SD01	篋(片刃)	—	20.0	2.8	—	0.6	板目	
10-3	屋敷境	SD01	箸	—	30.1	—	—	φ0.8	榎目	白木

第4章 屋敷境

遺物番号	面	遺構名	種類	名称部位	法量(cm)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
25-1	屋敷境	SD03	漆器	椀	13.2(12.0)	5.8	9.0	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:草花文(黄・朱)/高台高い
25-2	屋敷境	SD03	漆器	椀	—	7.2	(8.6)	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:鳥文(朱)/高台高い
25-3	屋敷境	SD03	漆器	椀	—	—	(7.7)	—	—	外内面:黒/外面:紅葉文(楓文か)(朱)/高台高い
25-4	屋敷境	SD03	漆器	椀	12.9(10.0)	—	5.0	—	—	外内面:朱/外面:黒一重丸内に沢瀉文(黒)
25-5	屋敷境	SD03	漆器	椀	(13.2)	(6.3)	4.6	—	—	外内面:朱/無文
25-6	屋敷境	SD03	漆器	椀	12.3	6.6	5.6	—	—	外内面:黒/無文/高台内:「一」のキズ
25-7	屋敷境	SD03	漆器	椀蓋	(10.9)	(5.5)	(4.0)	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:黄色二重丸内に五弁花文(黄・朱)
25-8	屋敷境	SD03	漆器	蓋	—	18.7	2.7	—	—	外内面:黒
25-9	屋敷境	SD03	紡錘車か	—	φ 3.0	—	—	0.4	榫目	中央:φ 3mmの穿孔1
25-10	屋敷境	SD03	栓	—	8.4	φ 2.8-1.7	—	2.6	板目	円柱形
25-11	屋敷境	SD03	曲物	蓋	(12.3)	4.3	—	0.3	榫目	片面:墨書(梅花文)
25-12	屋敷境	SD03	舟形	—	14.4	4.5	—	2.3	板目	先端部:穿孔1(貫通)/内面底部:穿孔1(貫通)、11(不貫通)
25-13	屋敷境	SD03	人形	武士	13.0	5.8	—	4.0	—	頭部欠損
25-14	屋敷境	SD03	曲物容器	蓋	φ 13.0-13.4	—	—	0.5	榫目	墨書文字「納豆」
25-15	屋敷境	SD03	曲物容器	側板・底板	φ 14.1	—	3.5	—	榫目	底部内面:付着物/側板:綴皮2
25-16	屋敷境	SD03	曲物容器	蓋	10.5	—	—	0.9	榫目	中央:φ 2mmの穿孔1
25-17	屋敷境	SD03	篋(片刃)	—	19.0	1.7	—	0.1	榫目	柄の部分が付属/精巧なつくり
25-18	屋敷境	SD03	箸	—	24.9	0.6	—	0.5	榫目	白木
25-19	屋敷境	SD03	箸	—	25.2	0.6	—	0.5	榫目	白木
26-1	屋敷境	SD03	下駄	丸型差歯下駄	21.8	9.0	4.5	3.0	—	ホゾ穴前後1/指の痕跡あり
26-2	屋敷境	SD03	下駄	丸型差歯下駄	20.9	9.9	6.0	2.8	—	ホゾ穴前後1/指の痕跡あり
26-3	屋敷境	SD03	下駄	角型差歯下駄	23.4	11.2	7.2	3.4	—	ホゾ穴前後2/指の痕跡あり
26-4	屋敷境	SD03	下駄	角型差歯下駄	22.5	9.9	7.5	3.3	—	ホゾ穴前後1/指の痕跡あり
26-5	屋敷境	SD03	折敷	底板	31.4	(18.8)	—	0.5	榫目	目釘4
26-6	屋敷境	SD03	柄杓	底板	φ 14.1	—	4.2	0.7	榫目	底板側面:目釘
27-1	屋敷境	SD03	柄杓	柄・身部	50.7	—	4.7	φ 10.1	榫目	側板:綴皮2
41-16	屋敷境	SD04	小形容器	蓋	6.4	—	1.2	—	—	外面:朱/内面:黒
41-17	屋敷境	SD04	漆器	椀	—	—	(5.0)	—	—	浅丸形/外内面:黒/無文
53-1	屋敷境	SD08	下駄	丸型連歯下駄	20.5	9.3	3.1	1.4	—	穿孔2(不貫通)/指の痕跡あり
54-1	屋敷境	SD09	荷札木簡	—	14.4	3.2	—	0.6	—	両面:墨書文字/表面:「大田惣右衛門上 松井□□□□□」 裏面:「上ぬりこん布俵物」

表6 屋敷境 瓦観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	法量(残存値)		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
57-12	屋敷境	SD12	棟巴瓦	瓦当部:外径(14.6)/内径(10.4)/丸瓦厚2.0		2040 連珠三巴文/右巻/残存珠文7
57-13	屋敷境	SD12	軒平瓦	上弦幅(18.4)/下弦幅(16.6)/瓦当高(4.8)/平瓦厚1.4		830 唐草文

第5章 北西屋敷

北西屋敷は、新宮庁舎調査区の北西にあり、東側を屋敷境 A、南側を屋敷境 C により区画された屋敷地である。以下、その詳細を説明する。

第1節 基本層序 (第60図)

北西屋敷の土層堆積状況の観察を行った結果、旧地表面と3面の遺構面を確認した。なお、以下で説明する基本層序(第60図)については、第3章第2節で示した基本層序と共通するものであり、土層の呼称については対応する層名を付した。また、旧地表面(I a層)以下の説明は検出標高のみを記載し、詳細は割愛する。

北西屋敷の基本層序は、調査区北壁土層の一部分を掲載している(第61図 A-A')。以下、各遺構面の土層堆積状況について、下層から上層の順に説明する。

旧地表面以下の自然堆積層(Ⅱ・Ⅲ層) 標高 0.1m 層厚 30cm 以上

旧地表面(I a層) 標高 0.2 ~ 0.3m 層厚 15cm

第1遺構面(A層) 標高 0.7 ~ 0.8m 層厚 55 ~ 60cm

A層は城下町初期造成土と考えられるもので、I a層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土である。北西屋敷の第1遺構面基盤層である。ただし、後述するように建物土台部分にのみ厚く盛られ、その周辺は多様な土砂で造成されていた。

第2遺構面(B-1層) 標高 0.95 ~ 1.0m 層厚 10 ~ 25cm

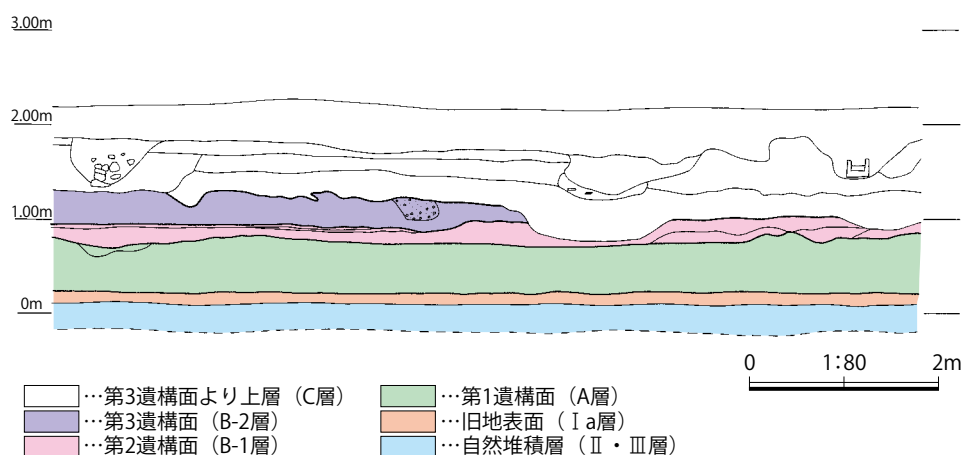
B-1層は北西屋敷の第2遺構面基盤層で、淡灰色砂質土を呈する。

第3遺構面(B-2層) 標高 1.2 ~ 1.3m 層厚 10 ~ 30cm

B-2層は北西屋敷の第3遺構面基盤層で、黄色シルト質の山土である。

第3遺構面より上層(C層) 標高 2.2 ~ 2.3m 層厚 90 ~ 120cm

C層は攪乱層である。近現代の陶磁器やガラス片、コンクリート片が混じる。



第60図 北西屋敷 基本層序土層断面図

第2節 第1遺構面

第1項 遺構面の概要 (第61図)

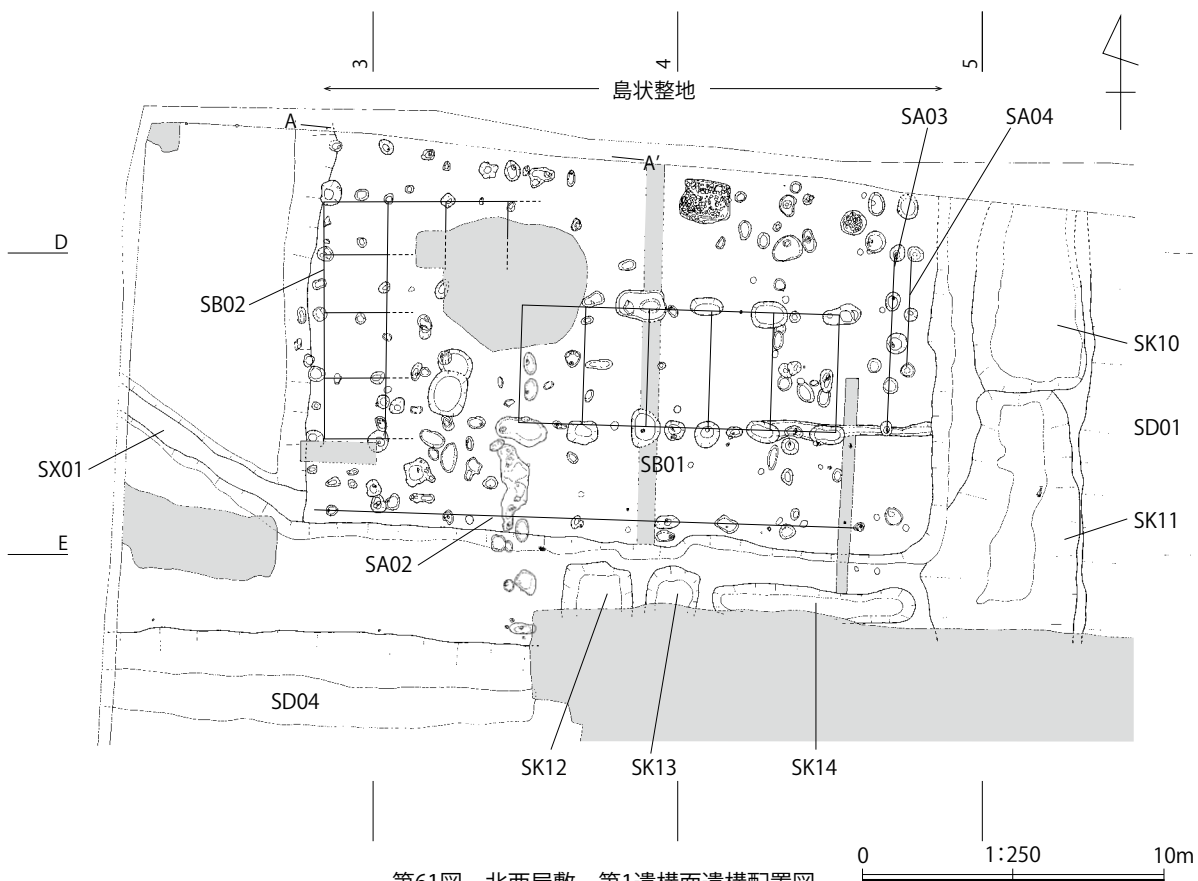
第1遺構面は、標高0.7～0.8mで検出し、遺構面を形成するA層は層厚55～60cmを測る。第1遺構面は自然堆積層である旧地表面（I a層）上に盛土（A層）を施して造成された最初の遺構面であり、その開始時期は堀尾氏が松江へ移転してきた17世紀初頭であると考えている。同時期に造られた屋敷境は、東側はSD01、南側はSD04である。

第1遺構面で検出した遺構は、大形土坑5基（SK10～14）、島状整地、掘立柱建物跡1棟（SB01）、礎石建物跡1棟（SB02）、杭列跡3列（SA02～04）、道状遺構1基（SX01）、その他多数の土坑・柱穴などを検出した。

遺物は、国産陶器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・木製品・瓦などが出土している。このうち陶器は肥前（九陶Ⅰ-2～Ⅱ期・1594～1650）が最も多く、その他少数で福岡（上野・高取）、瀬戸・美濃（志野）、山口（萩）、備前のものが出土している。肥前以外の陶器はいずれも17世紀前半代が多い。磁器は中国磁器（景德鎮窯・漳州窯・龍泉窯）のみの出土で、肥前磁器は見られない。土師器は京都系と在地系が混ざり合う状況である。

第1遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、城下町造成以前の旧地表面上に盛られた最初の遺構面であることを根拠として、堀尾氏が城下を造成した17世紀初頭を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。



第61図 北西屋敷 第1遺構面遺構配置図

第2項 島状整地（第61図）

島状整地は、北西屋敷地のほぼ中央に位置する方形状の盛土で、西・南・東側は残存し、北側は調査地外へ続いている。南西と南東に角が残存しており、その形状は、南西角は角張って明確であり、南東角は緩く隅切り状に成形されている。また、南西角には後述する道状遺構 SX01 が付随している。

規模は、東西長は上端 20.5m、下端 22.2m、南北残存幅は上端 12.5m、下端 13.0m で、盛土は約 0.5～0.6m の厚さを測る。周囲の溝や土坑から掘り上げられた自然堆積層 A 層（Ⅰa 層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土）を盛土として使用しており、家屋を建てるための土台とし、地盤を強化することを目的とした整地である。これを島状整地と呼称する。島状整地とは、家屋を建てる際に地盤を固めるため、造成初期段階に土を盛り上げ整地する地業の痕跡を呼称するものである。この島状整地上に、後述する掘立柱建物跡 SB01・02 が建てられており、他のところより約 0.5m 高く A 層が盛られている。建物が機能し始めた段階では、周囲との段差は解消していたものと推定している。

第3項 SX01（第61図）

SX01 は、掘立柱建物跡 SB01、礎石建物跡 SB02 が建てられた島状整地の西側に造られた道状の盛土遺構である。盛土は第1遺構面基盤層である A 層であり、島状整地と同様の土層堆積を示す。位置は、島状整地の南西角部分、SB02 南端と SA02 西端辺りから始まり、北西方向に斜めに伸びるものである。規模は残存長約 7.0m、最大幅 1.3m、高さ 0.2～0.3m を測り、中央部分を高くして、左右はなだらかに傾斜する。島状整地と一体化している形態であることから、島状整地及び家屋への進入路のような性格を持つ遺構と考えているが、詳細は不明である。

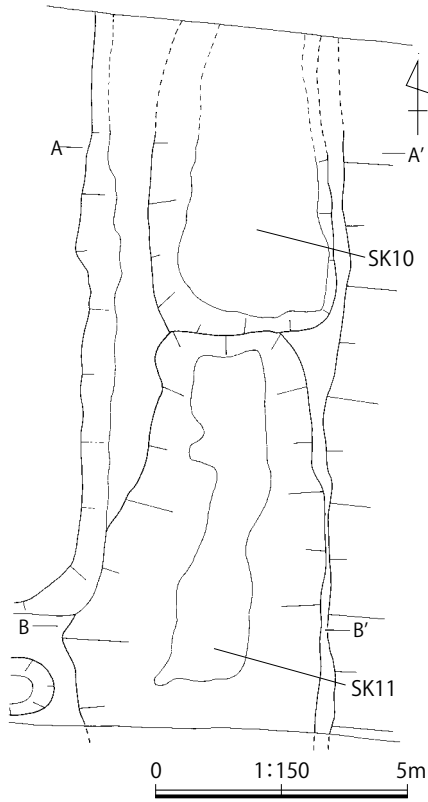
第4項 SK10・11（第62・63図）

SK10・11 は南北方向に連なる大形土坑で、位置は北西屋敷と北東屋敷を区画する屋敷境溝 SD01（第8・9図）のすぐ西側に当たり、いずれもいびつな長楕円形を呈する形状である。

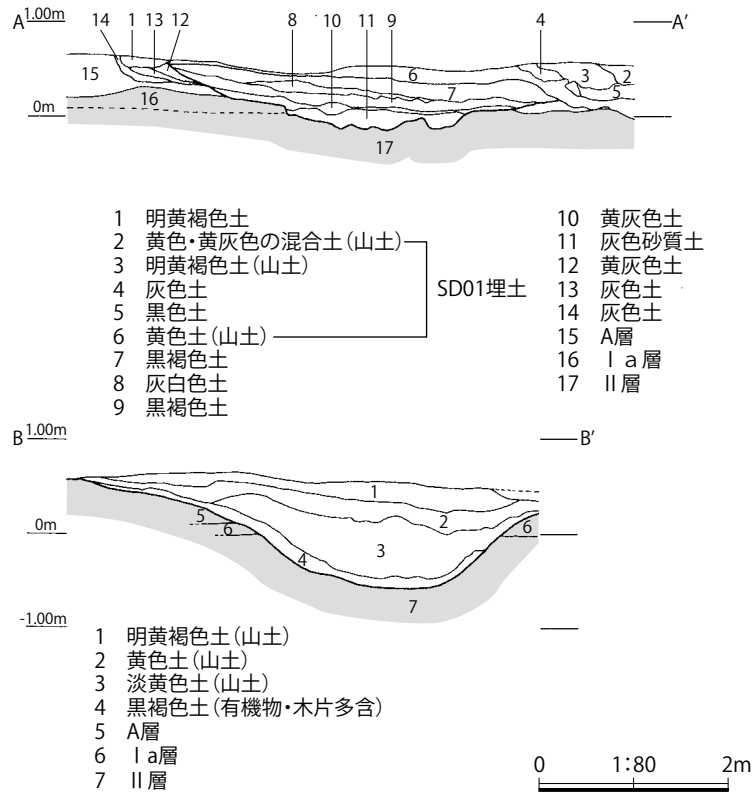
SK10 は南北残存長 6.2m、東西最大幅 3.7m、深さ 1.1m を測る土坑で、上層には SD01 の最終埋土（第2～6層）が堆積する。SK10 の埋土は水平に堆積し、第8層（灰白色土）を間に挟むその他は黒褐色系の土層である。

SK11 は南北残存長 7.9m、東西最大幅 5.1m、深さ 1.1m を測る土坑で、緩やかなカーブを持つ断面形状である。SK11 の埋土は、最下層に第4層（有機物や木片等を多く含む）の黒褐色土層が堆積し、上層の第1～3層はいずれも黄色砂質系の山土である。この山土は、造成初期段階の屋敷境溝 SD01・02・04 の埋土にも入っていたことから、これらと廃絶時期がほぼ同一である可能性が考えられる。

SK10・11 には切り合い関係が確認でき、SK11 の方が後で掘られている。この関係に、西に隣接する SD01 を加えて、掘られた順番を考えると、まず SD01 が最初に掘られ、その後に SK10 が掘り込まれる。さらにその後、SK11 が掘られたと考えている。SK10 の土層断面図から、最初に掘られた SD01 は埋められずに存在し、その間に掘られた SK10 は比較的早い段階で埋められ、その後、



第62図 SK10・11平面図



第63図 SK10・11土層断面図

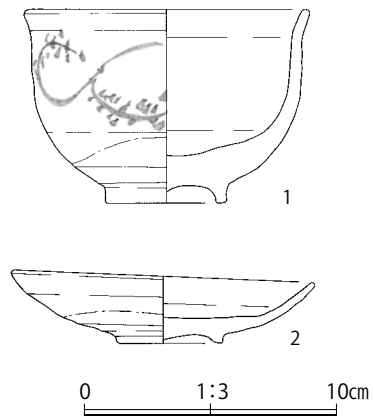
SK11 が掘り込まれる。SK11 と SD01 は同じ頃に同じ土で埋められたと思われる。

遺物は、SK10 から肥前陶器の碗や皿が数点出土している。その中で図化できたものを掲載しており、いずれも九陶 I -2 ~ II 期 (1594 ~ 1650) に該当する。

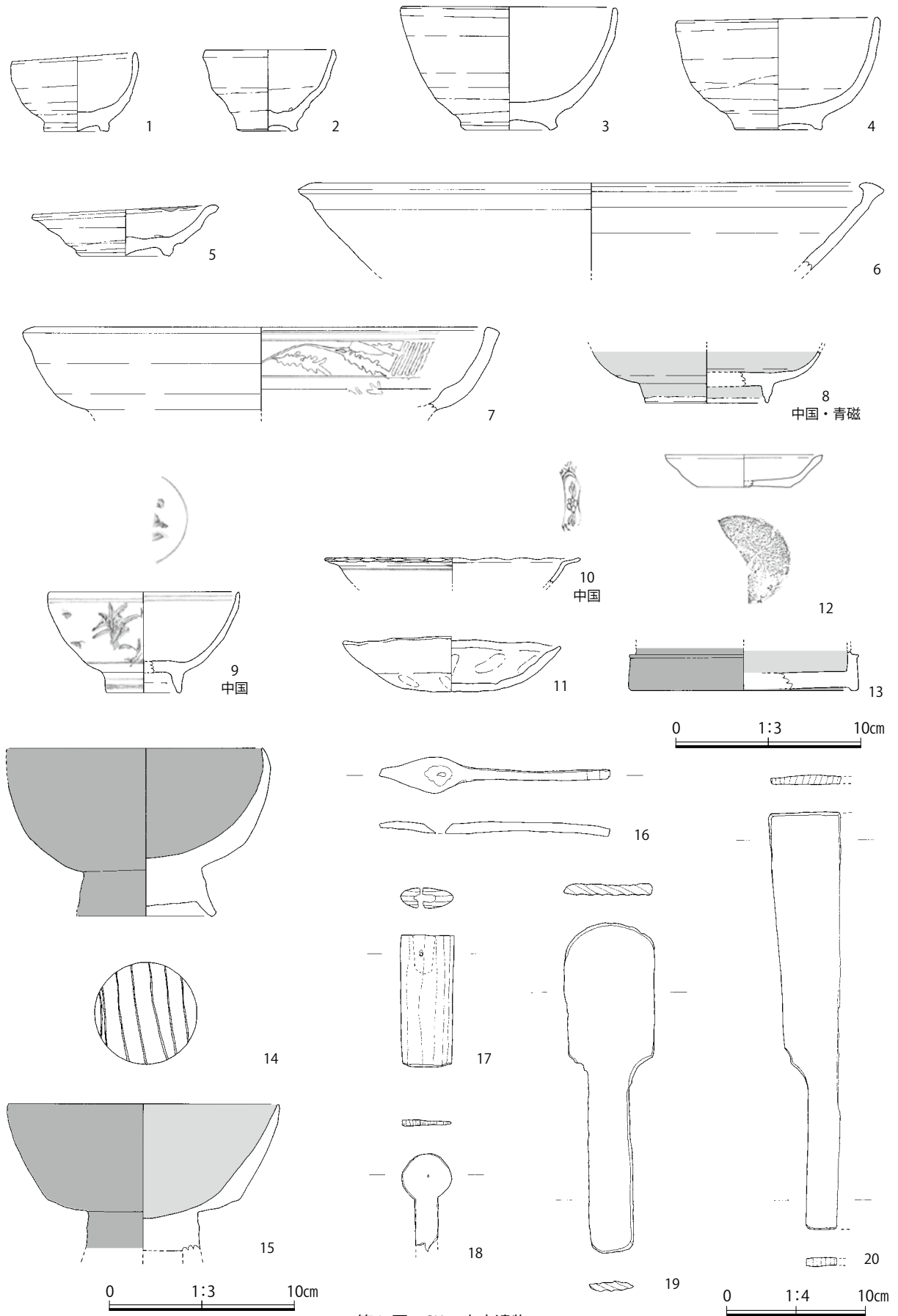
SK11 からは多量の遺物が出土している。陶器・磁器・土師器・漆器・木製品などで、比較的破片が多いが、中には完形品に近い状態のものも見られる。陶器は九陶 I -2 ~ II 期 (1594 ~ 1650) のものが多く、磁器は中国磁器 (龍泉窯・漳州窯・景德鎮窯) のみが出土している。また、漆器碗は高台が高く大形で、古いタイプのものである。

SK10 出土遺物 (第 64 図)

64-1・2 は肥前陶器である。64-1 は口径 11.1cm、器高 7.8cm を測る中碗で、口縁部は外反する。胴部~底部にかけて器壁が厚手であり、特に底部部分は厚み 1.4cm を測る。底部は兜巾・三日月高台で、外面には鉄絵で草花文が描かれる。64-2 は丸形小皿で、底部は兜巾・三日月高台を呈する。見込みに目跡が残っていないことから、窯入れの際一番上に積まれた可能性が高い。年代は九陶 I -2 ~ II 期 (1594 ~ 1650) 間のもと思われる。



第64図 SK10出土遺物



第65図 SK11出土遺物

SK11 出土遺物（第65図）

65-1～7は陶器である。このうち65-1～6は肥前で、65-1・2は丸形小坏である。65-3・4は中碗で、65-3はなだらかな丸みを帯びる形状、65-4は腰部分が若干張り出す形状を呈する。65-1～3は九陶Ⅱ期（1610～50）に該当する。65-4は藁灰釉が掛かるもので、岸岳系である可能性が高い。年代は九陶Ⅰ-1期（1580～90）で、松江城下町遺跡での出土は初となる。65-5は口径10.0cm、高台径4.9cm、器高2.8cmを測る折縁形小皿である。全体の小ささに対して器壁は厚手で重量感があり、見込みに胎土目痕が残る。口縁端部に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたものと思われる。年代は九陶Ⅰ-2期（1594～1610）のものである。65-6は福岡（上野・高取）の可能性が考えられる大鉢で、復元口径30.0cmを測る大形品である。年代は17世紀前半代のものである。

65-7は瀬戸・美濃（志野）で、復元口径24.7cmを測る大皿である。口縁部～体部の破片で、内面に象嵌、白化粧土による草花文が描かれる。鼠志野ねずみしのと呼ばれる高級陶器で、年代は17世紀前半代のものである。

65-8～10は中国磁器である。65-8は龍泉窯の青磁皿で、畳付以外に暗緑色の青磁釉が掛かる。底部・高台は厚手であり、高台端部の断面は三角形状に尖る。年代は15世紀末～16世紀初頭頃のものである。65-9は漳州窯の丸形中碗で、口径10.3cm、高台径4.1cm、器高5.5cmを測る。染付は外面・見込みに草花文が描かれる。年代は16世紀末～17世紀初頭代のものである。65-10は景德鎮窯の折縁形向付で、復元口径13.7cmを測る。口縁部には草花文が描かれ、全体的に被熱している。年代は17世紀前半代のものである。

65-11・12は土師器で、65-11は手づくね成形による京都系、65-12は底部に回転糸切り痕が残る在地系の極小皿である。65-11は外内面ともに指の跡が強く付く。

65-13～15は漆製品である。65-13は底部のみの残存で、外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られている。65-14・15は高台が高いタイプの漆器碗で、65-14は口径13.9cm、高台径7.3cm、器高9.3cmを測る。胴部は丸みを強く帯び、高台は撥形に広がる。外内面ともに黒色の漆が塗られ、無文である。また、高台内には6本の線描きが同一方向に付けられる。65-15は65-14よりも胴部が角張る形状で、高台も垂直に下りる。外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られており、無文である。

65-16～20は木製品である。65-16は匙状の形態を成した製品で、最大長16.7cm、厚み0.8cmを測る。匙部分の中央には意図的に開けたと思われる穿孔が見られるが、用途は定かではない。65-17は刃物の柄部分と思われる。断面は細長い楕円形状を呈し、内部は刃物が入っていた形状で割り貫かれている。外面は面取りで丁寧に削られ、握りやすいように丸みを帯びる。65-18は用途不明品であるが、匙状の形をしている。匙部分の中央に直径2mmの小さい穿孔が開いている。65-19は杓しゃもじ文字で、最大長23.9cm、最大厚0.8cmを測る。65-20は羽子板で、最大長30.0cmを測る。

第5項 SK12～14（第61図）

SK12～14は、SK10・11の南西側に位置する土坑で、西からSK12・13・14と東西方向に横並

びの配置となる。南側は建物基礎で壊されているため土坑の正確な規模は不明であるが、現状ではSK12は東西長6.7m、南北幅1.2m、深さ0.7m、SK13は東西長1.7m、南北残存幅1.3m、深さ0.6m、SK14は東西長2.3m、南北残存幅1.5m、深さ0.4mを測る。SK12～14の北側に造成された島状整地との切り合い関係は無く、SK11とも重ならない位置関係から、意図的に島状整地の外側に掘られた可能性を考えることができ、島状整地が盛られたのと同時期、もしくは整地後に掘られた土坑と考えている。

SK12・13からは少量の遺物が出土しており、SK14からは出土していない。

SK12・13 出土遺物 (第66図)

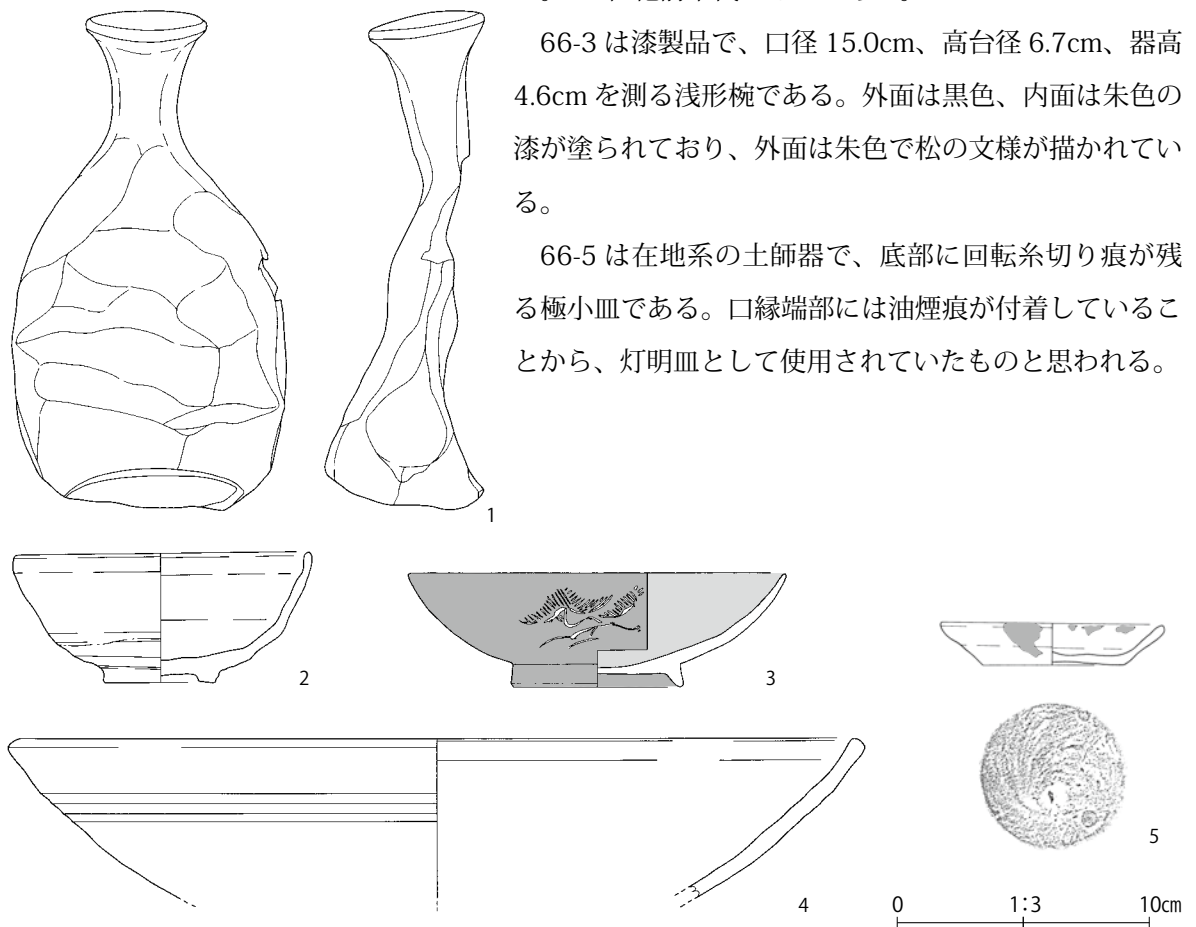
SK12からは66-1・2・4、SK13からは66-3・5が出土している。

66-1は金属製品で、徳利状の瓶である。胴部部分は大きく潰れているが、ほぼ完形品の珍しい出土品である。66-1の法量を推定復元すると、口径4.8cm、胴部最大径11.0cm、底径6.8cm、器高約20.0cmを測る。九陶Ⅰ～Ⅱ-1期(1580～1630)の肥前陶器に見られる大瓶とほぼ同一形状であることから、陶器を模倣して金属製品で瓶(徳利)を作った可能性が考えられる。

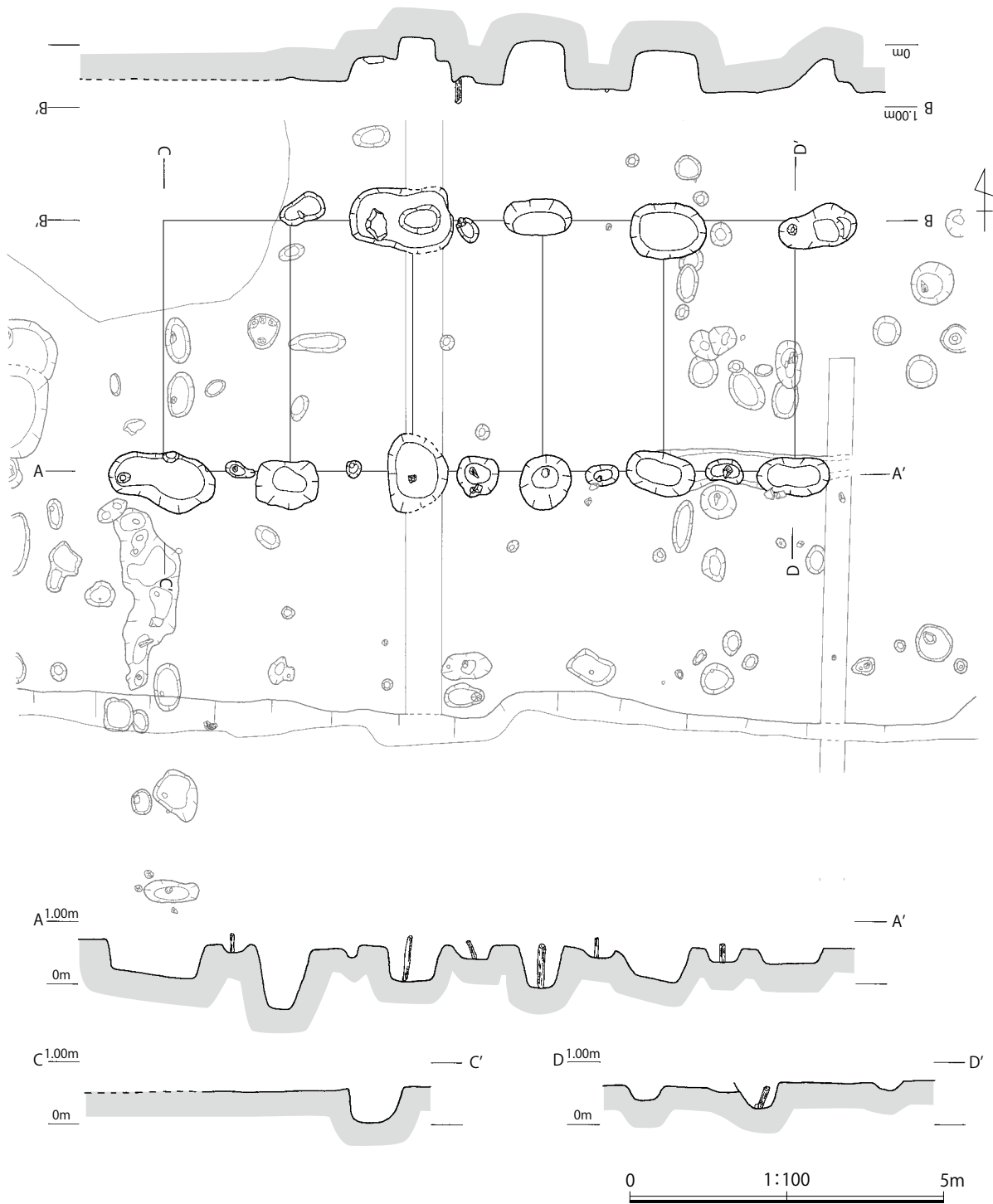
66-2・4は陶器である。66-2は肥前の丸形中碗で、口径11.7cm、高台径4.5cm、器高5.2cmを測る。釉薬は薄緑色で、年代は九陶Ⅱ期(1610～50)に該当する。66-4は山口(萩)の大皿で、復元口径33.6cmを測る大形品である。外内面には藁灰釉が掛かり、劣化して剥離している状態である。17世紀前半代のものである。

66-3は漆製品で、口径15.0cm、高台径6.7cm、器高4.6cmを測る浅形碗である。外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られており、外面は朱色で松の文様が描かれている。

66-5は在地系の土師器で、底部に回転糸切り痕が残る極小皿である。口縁端部には油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたものと思われる。



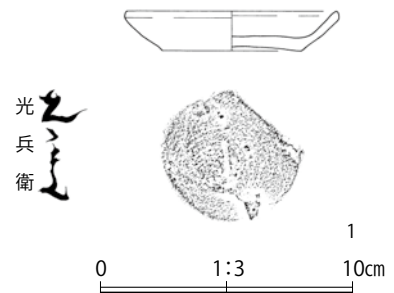
第66図 SK12・13出土遺物



第67図 SB01平面図・断面図

第6項 SB01 (第67図)

SB01は、北西屋敷の島状整地上に建てられた掘立柱建物跡で、敷地の軸に沿って東西方向5間(10.0m・1間2.0m)、南北方向2間(4.0m・1間2.0m)の規模を測る。柱穴は、そのほとんどがいびつな楕円形を呈しており、東西方向が長軸となるものが多く、概ね長軸0.7～1.7m、短軸0.6～1.3mを測り、深さは0.3～1.0m内に



第68図 SB01出土遺物

おさまる。柱材の直径は8～10cm、長さは0.3～0.8mを測る。また、少数ではあるが、穴の底に拳大の石が入っている柱穴も確認した。これは礎盤石とするには小さく、柱を支えるための根固石と判断している。

なお、SB01の周囲にも多数の土坑を検出しているが、SB01を構成する柱穴のように大形で深いものは他に見られず、この復元規模で考えて良いように思う。また、南北方向の2間の距離は4.0mを測るが、この間の1間部分(2.0m地点)に東石などの痕跡等^{つかいし}を確認できなかった。初めから無かったか、後世に石を抜かれた可能性を考えている。

SB01の範囲及び柱穴内からは遺物はほとんど出土していないが、陶磁器・土師器の小片が数点出土している。その中で、ほぼ完形品である土師器皿68-1(第68図)を1個体掲載している。

SB01 出土遺物(第68図)

68-1は在地系土師器で、口径8.4cm、底径5.6cm、器高1.6cmを測る極小皿である。口縁部は直線的に外傾し、端部に向けて若干膨らむ形状である。底部は上げ底で回転糸切り痕が残る。底部外面中央には墨書文字が見られ、「^{みつべえ}光兵衛」と解説できる。

第7項 SB02(第69図)

SB02はSB01の西隣に位置する建物跡である。前述した島状整地の西端ライン上に、建物西辺の柱列が乗っている状態で検出した。建物の軸はSB01と同一で、南北方向4間以上(8.0m以上・1間2.0m)、東西方向3間以上(6.0m以上・1間2.0m)の規模を持つ建物跡である。SB02の北側は調査地外に続いており、規模が広がる可能性がある。西側・南側は島状整地造成段階やその段差が解消された後も、建物を構成すると考えられる土坑は検出していないことから、SB02の範囲はここまでと考えている。東側には掘立柱建物跡SB01が存在しており、SB01の範囲に重なるような土坑等も検出していないことから、SB01とSB02はほぼ同時期に存在した建物跡であると考えている。ただし、柱列の並びに連続性が確認できなかったことから、2つの建物は母屋と離れのような関係性を持っていたとも考えられる。

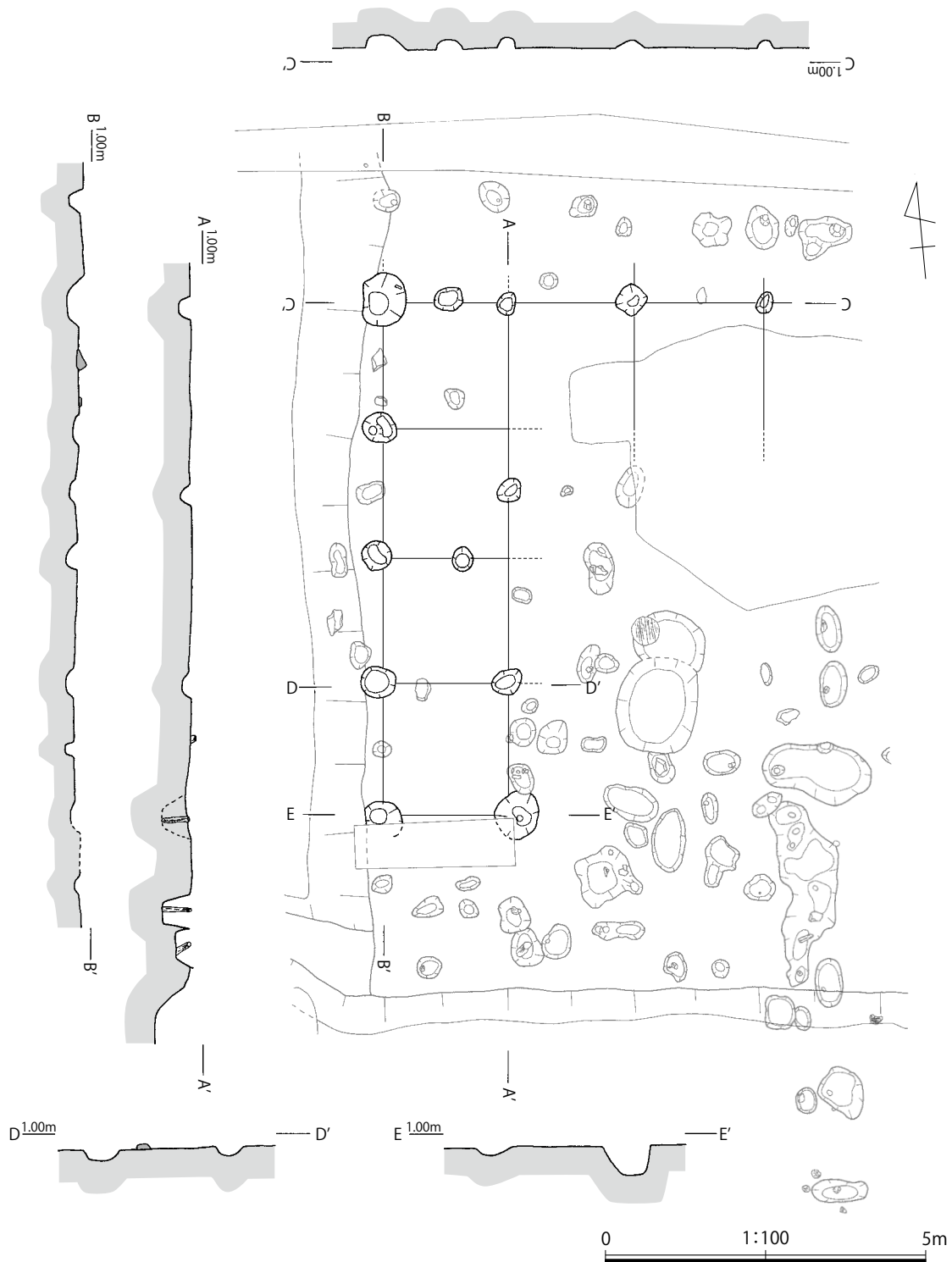
SB02を構成する土坑は、直径0.4～0.8m、深さ0.15～0.45m内におさまるもので、いずれも浅い。土坑内に柱材や小石の痕跡は見られなかったこと、土坑列状に乗る東石らしき石が並ぶ部分(B-B'・C-C'・D-D')があることから、これらの土坑は礎石の抜き取り痕である可能性を考えている。また、主となる土坑の合間に東石が存在したであろう痕跡(A-A'・B-B'・C-C')が見られることから、SB02は礎石建物跡と判断した。

SB02範囲内からは遺物は出土していない。

第8項 SA02～05(第70図)

SA02～04は、島状整地の南端ライン、東端ライン上に沿うように造られた柱列で、SA05はSB01の西端ラインとSA02が交わる部分に見られる柱列である。

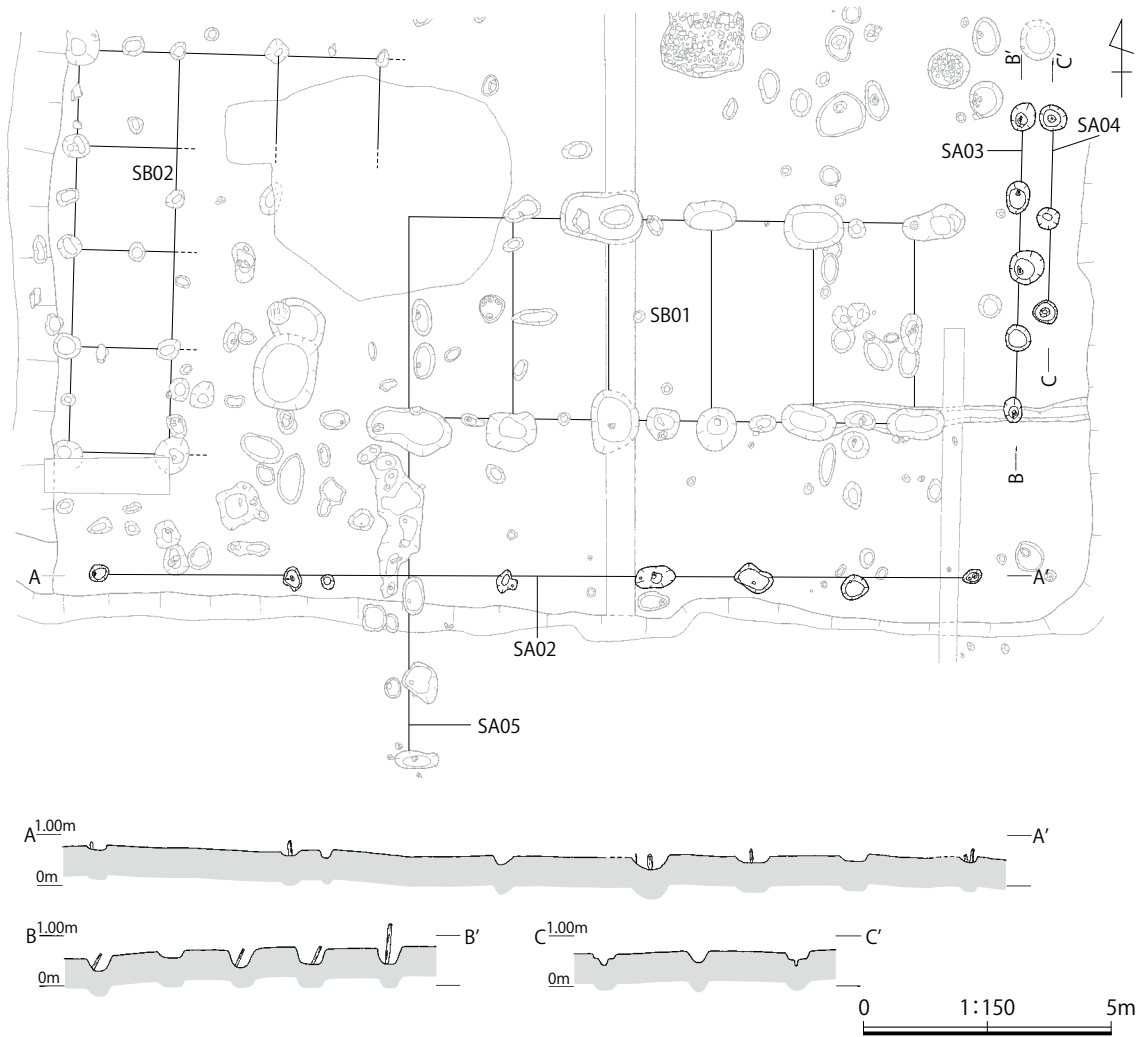
SA02(A-A')は島状整地の南端に位置し、直線的に並ぶ柱列である。東西方向6間(全長17.3m)



第69図 SB02平面図・断面図

を測り、柱穴の間隔は均一でない。西側から2間は約4.0m間隔、東側4間は2.0～3.0m間隔である。SA02を構成する柱穴は、直径0.4～0.8m、深さ0.2～0.3mを測る。内部に見られる柱は直径5～10cm、長さ0.1～0.3mを測るもので、SB01で見られた柱よりも小規模であることが分かる。

SA03 (B-B')・SA04 (C-C')は島状整地の東端に直線的に並ぶ柱列である。SA03は南北方向4間以上(全長5.8m以上・1間1.5m)、SA04は南北方向2間以上(全長3.8m以上・1間2.0m)を測るもので、いずれも北側は調査地外へ続くので、全体の規模は不明である。SA05はSB01の南西角



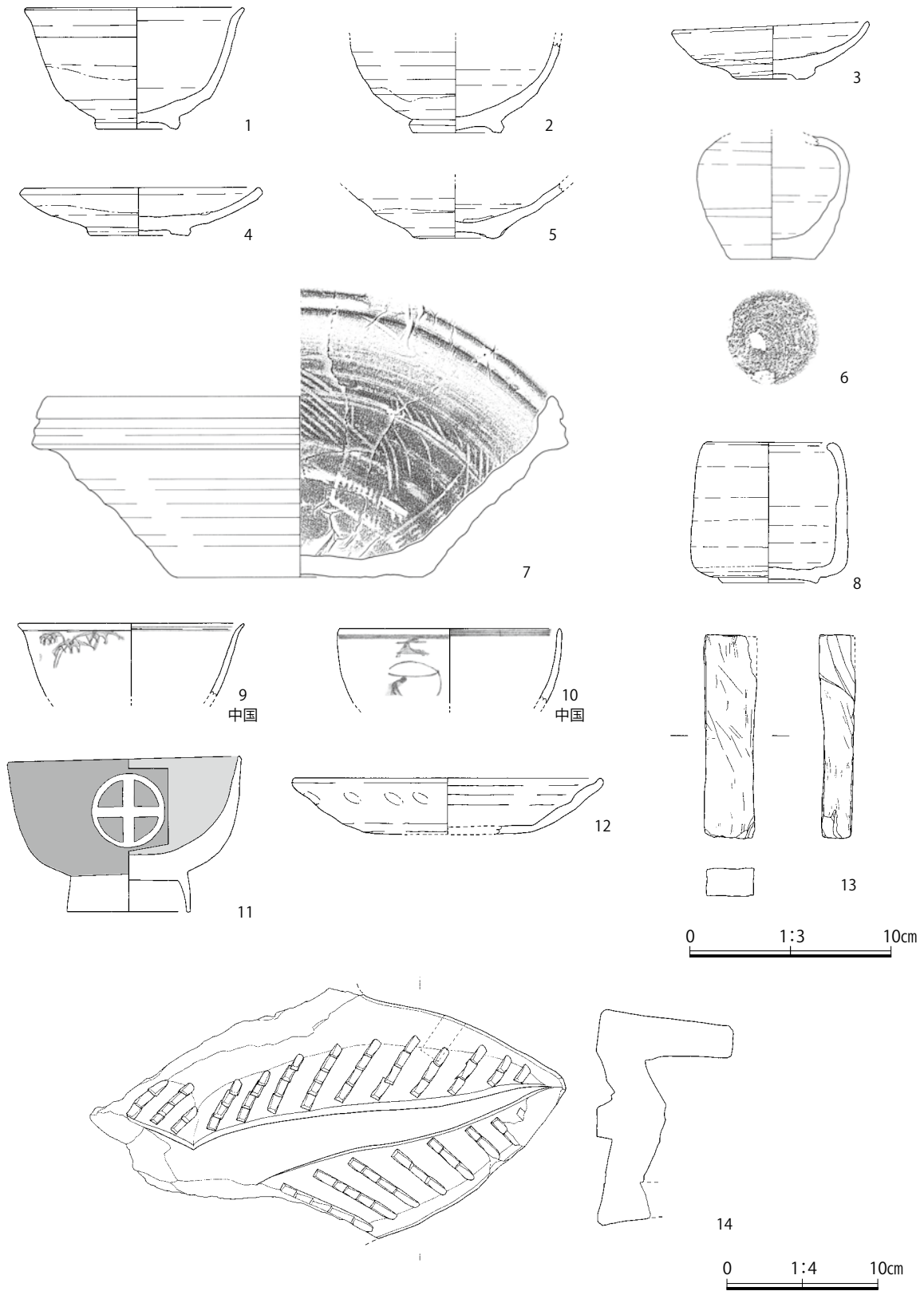
第70図 SA02~04平面図・断面図

から南へ延びる柱列で、全長 8.8m を測る。

掘立柱建物跡 SB01・礎石建物跡 SB02 に伴う島状整地は、北西屋敷地の中で西側・南側・北側にその端を検出している。これに伴って、SA02～04 が造られている。このことから SA02～04 は、SB01・02 を囲うように地業段階から設計された柵か塀のようなものであった可能性を考えている。ただし、SA02～04 は島状整地の範囲を意識しているものの、SA05 は島状整地解消後に造られており、生活面としての機能時には、建物地盤と周囲は同じレベルであった可能性が想定される。

第9項 遺構外出土遺物 (第71図)

71-1～8 は陶器で、このうち 71-1～5 は肥前である。71-1・2 は中碗で、71-1 は口縁端部が明確に外反し、75-2 は丸みを帯びる胴部である。いずれも年代は九陶Ⅱ期 (1610～50) である。71-3～5 は小皿で、71-3・4 は扁平な丸形である。見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2期 (1594～1610) に該当する。71-5 は高台から逆ハ字状に広がる形状で、見込みに砂目痕が残ることから、九陶Ⅱ期 (1610～50) に当たる。71-6・7 は備前である。71-6 は小壺で、口頸部が欠損している。胴部最大径 7.6cm の小形品で、底部に回転糸切り痕が残る。71-7 は播鉢で、口径



第71図 北西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物

25.5cm、底径 12.3cm、器高 9.1cm を測る。内面は斜め方向の放射状スリ目が付けられており、かなり擦り減っていることから長期間使用されたことが窺える。71-8 は瀬戸・美濃で、灰落としの完形品である。筒形で重心が低い形状を呈し、口縁端部は内傾する。71-6～8 は 17 世紀前半頃のものである。

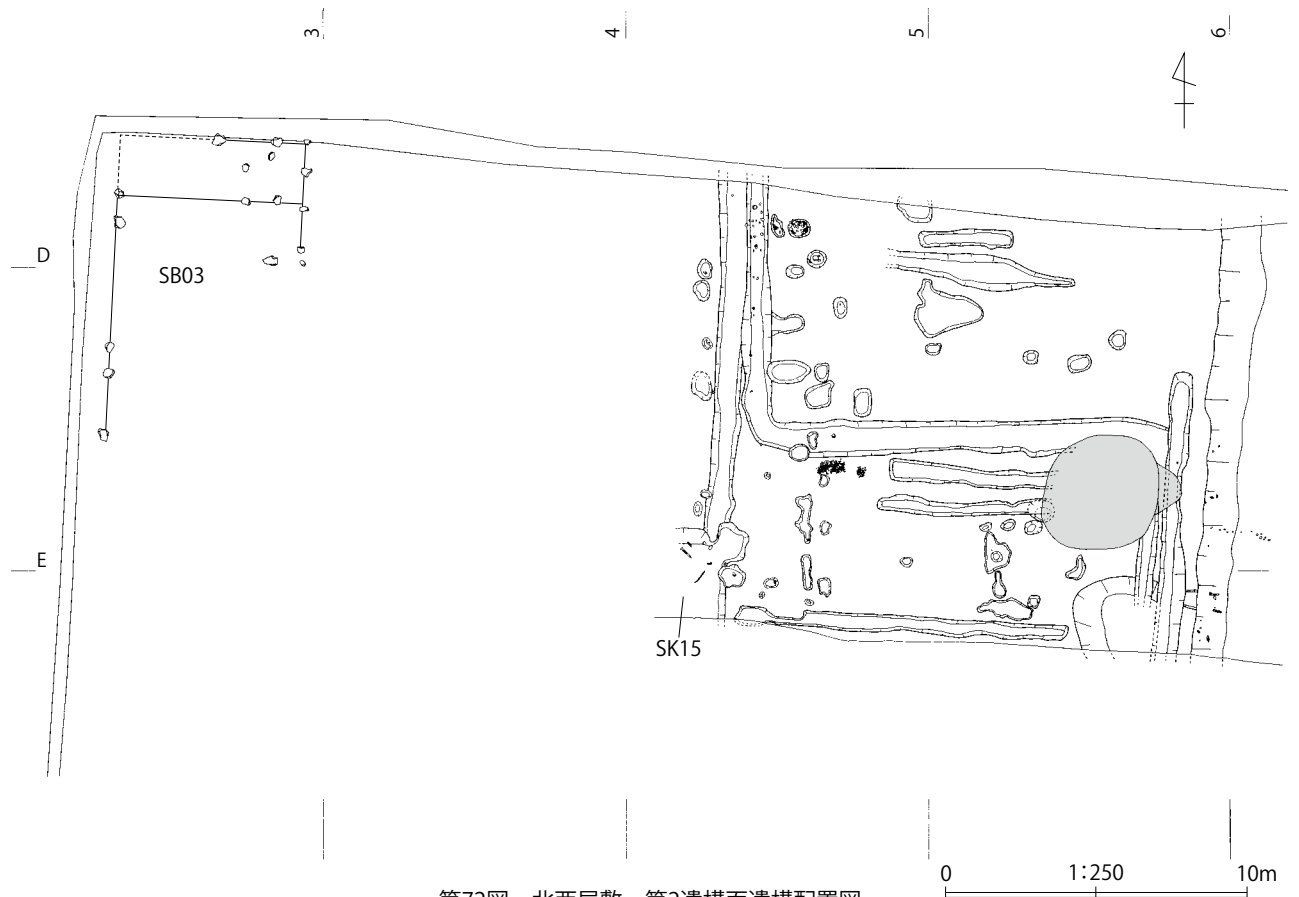
71-9・10 は中国磁器（漳州窯）の中碗である。いずれも口径 11.0cm 前後で、71-9 は端反形、71-10 は丸形を呈する。外面に圏線と草花文が描かれ、口縁部内面は 2 条の圏線が引かれる。いずれも年代は 16 世紀末～17 世紀前半である。

71-11 は高台が高いタイプの漆器碗である。口径 11.6cm、高台径 6.2cm、器高 7.8cm を測り、外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られている。外面には金色で「丸に十字文」が描かれ、家紋風の文様である。

71-12 は京都系の土師器で、口径 15.5cm、底径 6.9cm、器高 2.8cm を測る手づくね成形の大皿である。体部外面には等間隔の指痕が残る。

71-13 は石製品で、完形に近い砥石である。長さ 10.3cm、幅 2.6cm、厚み 1.4cm を測り、表面・裏面・両側面に使用痕が残る。

71-14 は瓦で、鬼瓦の一部分である。最大長 30.3cm、最大幅 16.3cm を測り、植物の葉をモチーフとして製作されたものである。



第72図 北西屋敷 第2遺構面遺構配置図

第3節 第2遺構面

第1項 遺構面の概要 (第72図)

第2遺構面は、標高0.95～1.0mで検出し、遺構面を形成するB-1層は層厚10～25cmを測る。第2遺構面で検出した遺構は、礎石建物跡1棟(SB03)、土坑1基(SK15)などで、その他東西南北方向の溝状遺構や土坑などを検出した。なお、西側の空白地では遺構を確認していない。同時期に造られた屋敷境は、東側はSD03、南側は後述する礎石建物跡SB08(第101図)が存在することで、一時的に境界が無くなる可能性を考えている。

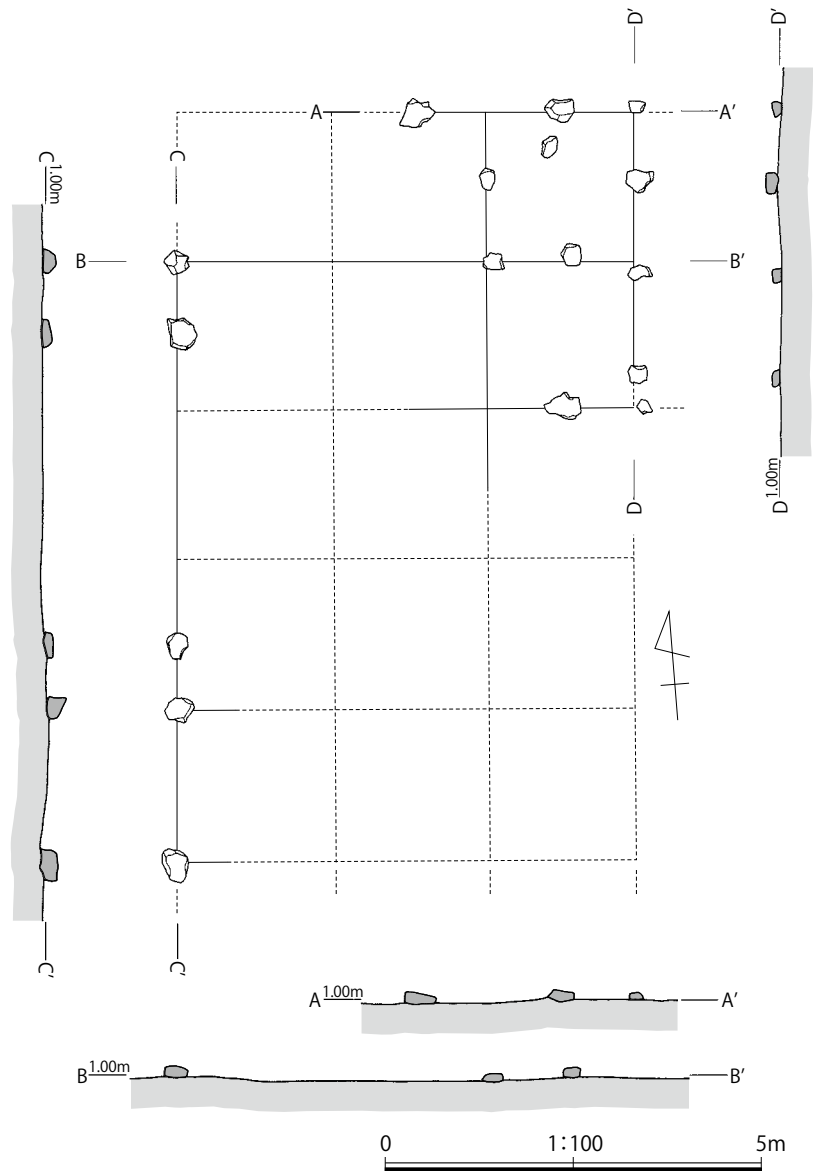
遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・瓦などが出土している。このうち陶器は肥前が多く、呉器手碗や内野山の銅緑釉掛けの製品など、九陶Ⅲ期(1650～90)に該当する遺物が多く見られる。また、わずかに備前も出土している。磁器は肥前(九陶Ⅲ～Ⅳ期・1650～18世紀初頭)が多く見られ、有田や柿右衛門窯の高級磁器も出土している。陶磁器はほぼ肥前に集約され、肥前陶磁器の流通が拡大していた時代を示す傾向が見られる。土師器は京都系と在在系が混ざり合う状況である。

第2遺構面の年代は、第1遺構面(A層)の上面に形成された遺構面であることと、遺物の年代観から、17世紀中頃～18世紀初頭頃を想定している。

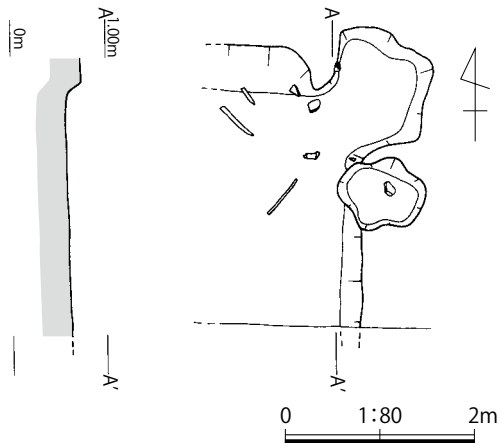
以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 SB03 (第73図)

SB03は北西屋敷の西端部分に位置する礎石群から復元した建物跡である。礎石の空白部が多く、複数の建物跡の痕跡である可能性もあるが、1間のメッシュ上に並ぶ最大限の復元とした建物の軸は、第1遺構面のSB01・02(第67・69図)とほぼ変わらない。SB03は南北方向に長い範囲で



第73図 SB03平面図・断面図



第74図 SK15平面図・断面図

第3項 SK15 (第74図)

SK15は北西屋敷のほぼ中央部分に位置する土坑で、いびつな方形を呈する。西～南側は攪乱のため、土坑の規模は全体を把握できておらず、土坑の北東部分だけを検出した。南北残存長3.7m、東西残存幅2.5m、最大深0.2mを測る。SK14の底面は平坦である。

ここからは多量の遺物が出土している。特に磁器の質が高く、肥前・有田の碗や皿、柿右衛門様式の特徴を持つ小皿などが多数出土している。いずれも九陶Ⅲ期(1650～90)に該当する。

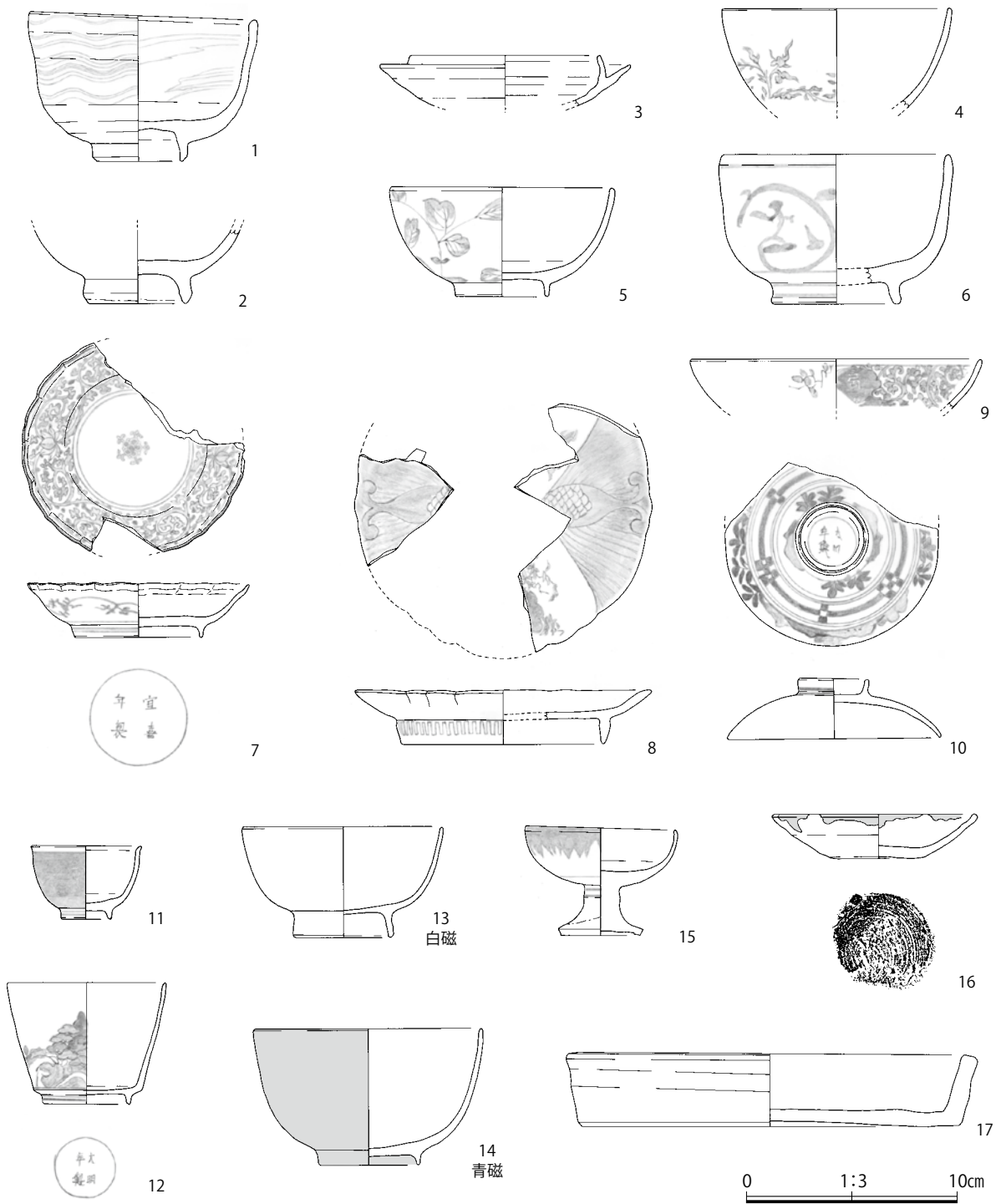
SK15の性格は不明と言わざるを得ないが、出土遺物の傾向などから、廃棄土坑と考えることができる。

SK15 出土遺物 (第75図)

75-1～3は陶器である。75-1・2は肥前の中碗で、高台内が饅頭^{まんとうしん}芯状を呈する。75-1は外内面に刷毛目文が描かれるもので、75-2は黄色釉の呉器手碗である。いずれも九陶Ⅲ期(1650～90)のものである。75-3は備前の灯明受皿で、年代は17世紀後半代のものである。

75-4～15は肥前磁器で、このうち75-4・5・7～9・11～13は九陶Ⅲ期(1660～70)に有田で生産された高級磁器である。75-4～6は丸形中碗で、75-4は外面のみに繊細な草花文が描かれ、口縁端部は口さびである。75-5は浅い形状で、外面全面に大きな唐草文が連続して描かれる。また、被熱痕が全面に顕著である。75-6は陶胎染付で、腰部分が強く張り出す形状で、外面に曖昧で薄い草花文が描かれる。九陶Ⅳ期(1690～1780)のものである。

75-7は型押成形による折縁形小皿で、口径10.6cm、高台径6.0cm、器高2.6cmを測る。口縁端部は薄手で精巧な作りである。染付は外内面に見られ、見込みに手描きの五弁花文、その周囲に緻密な花唐草文が描かれる。外面は唐草文と圏線が全周し、高台内は圏線1条と「宣嘉年製」銘が入る。また、口縁端部は口さびである。75-8は有田・柿右衛門窯の可能性が高い製品で、糸切細工による変形皿である。推定口径14.0cm、高台径9.8cm、器高2.6cmを測り、貼付高台の高さは1.2cmである。このように高台が高く、外面に線描きの櫛歯文が描かれるのは柿右衛門窯のみで見られる特徴である。内面の型押し、染付にも細やかな作業を窺わせ、両サイドに墨弾き技法による花卉(牡丹か)⁽²⁸⁾をあしらい、見込みには草花文や鳥が配置される。また、内面一部分に被熱痕が確認できる。75-9



第75図 SK15出土遺物

は口径 13.8cm を測る丸形小皿で、内面に花唐草文、如意頭文を区画文としている。

75-10 は丸形中碗蓋で、染付は外面のみに見られ、市松文状の圏線を巡らせた間に草花文や山水文を描くデザインである。つまみ内に圏線 1 条と「太明年製」銘が入り、九陶Ⅳ期（1690～1780）頃のものである。

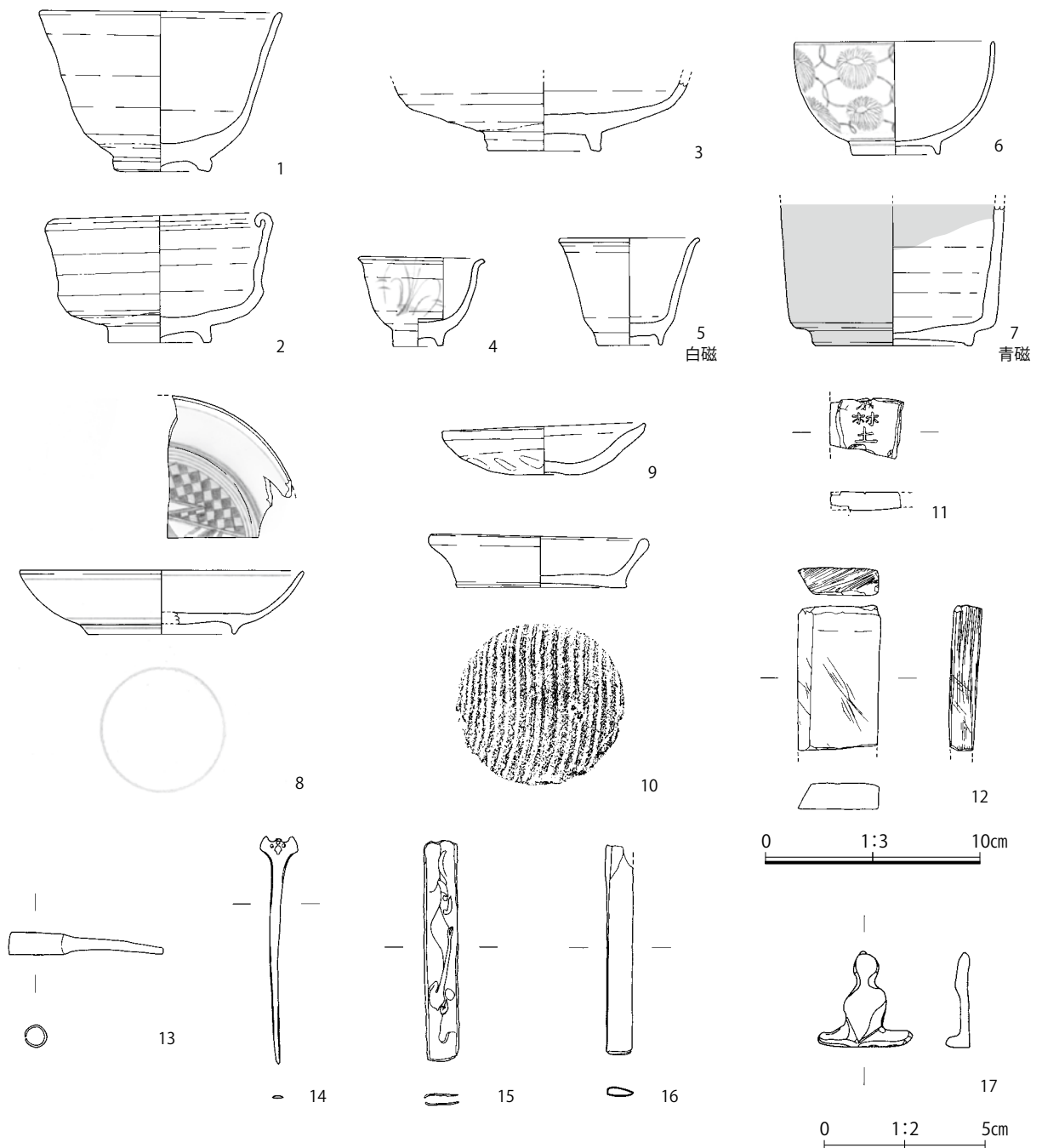
75-11 は小坏で、口径 5.2cm、器高 3.5cm の小形品である。染付は外面のみで、口縁部～底部にかけて段々薄くなるように濃淡が付けられる。その中に、墨弾き技法による花唐草文が描かれる。

75-12は猪口で、染付は外面のみに見られ、^{はとう}波濤文と松文が描かれる。高台内に圈線1条と「大明年製」銘が入る。75-13は白磁中碗で、高台が高く器壁が薄い。

75-14は外青磁中碗、75-15は輪高台形の仏飯器で、口縁部に雨降り文が描かれ、脚部上方に圈線2条が巡る。75-14・15は九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。

75-16は在地系の土師器で、底部に回転糸切り痕が残る小皿である。口縁端部に油煙痕が残ることから、灯明皿として使用されたと思われる。

75-17は土器で、口径18.4cm、底径18.0cm、器高3.5cmを測る小形焙烙である。口縁部はやや外傾して開き、底部は若干の上げ底を呈する。外内面に煤の痕跡などは見られない。



第76図 北西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物

第4項 遺構外出土遺物（第76図）

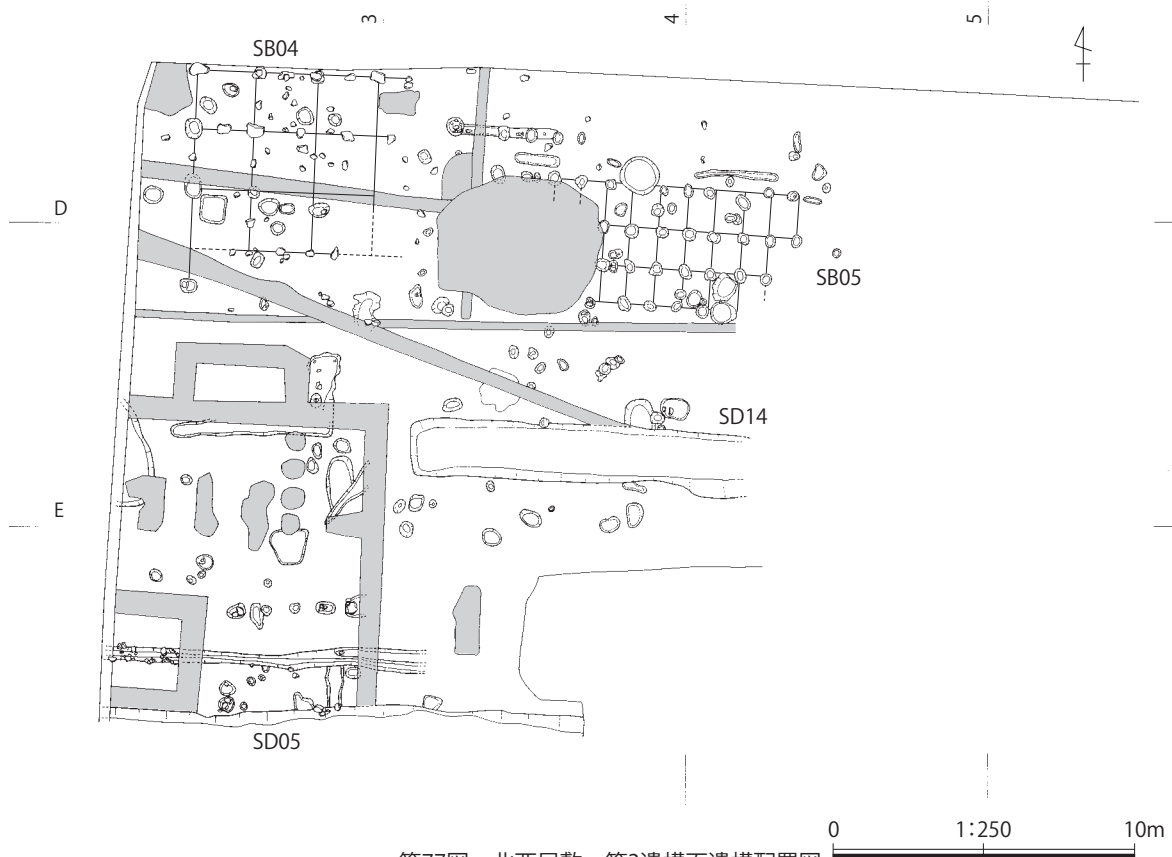
76-1～3は肥前陶器である。76-1は中碗で、胴部～口縁部が逆ハ字状に外反する。九陶Ⅱ期（1610～50）のものである。76-2・3は外内面に銅緑釉が掛かる肥前（内野山）の可能性が高い製品である。76-2は香炉で、口縁端部は内側に折れ曲がり、腰部が強く張り出す形状である。また、断面には漆継ぎ痕が残る。76-3は火入れで、底部～高台の破片である。見込みに蛇ノ目釉剥ぎが残る。76-2・3はいずれも九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。

76-4～8は肥前磁器である。76-4・5は端反形小坏で、76-4は外面に蘭文が描かれる九陶Ⅱ-2期（1630～50）の器である。76-5は白磁で、全体的に外反気味な形状である。九陶Ⅲ期（1650～90）に該当する。76-6は浅丸形中碗で、外面のみに染付が見られる。菊花文と網目文を組み合わせたモチーフが全周するもので、九陶Ⅲ期（1650～90）の特徴を捉えた器である。76-7は青磁香炉で、口縁端部は欠損している。高台内は鉄漿が塗られる。九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780）のものである。76-8は口径13.2cm、高台径6.8cm、器高3.0cmを測る丸形小皿である。外面は圏線のみが引かれ、内面は口縁部に圏線1条、見込みに圏線6条と市松文を描く。また、高台内に圏線1条を巡らす。九陶Ⅲ期（1650～90）に該当する。

76-9・10は土師器の極小皿で、76-9は手づくね成形による京都系、76-10は底部に静止糸切り痕が残る在り系である。76-9の外面には指痕が一定間隔で残る。76-10の口縁端部は丸く膨らみ、底部は上げ底を呈する。

76-11・12は砥石で、いずれも全面に使用痕が残る。76-11は表面に彫り込まれた文字の一部が残り、「森土」と読めるが前後関係は不明である。

76-13～17は金属製品である。76-13は煙管の吸口で、最大長7.2cm、火口径1.0cm、口付径0.3cmを測る。76-14は簪^{こうがい}で、最大長10.5cmを測る。頭部に飾り用の孔が開けられている。76-15・16は小柄の柄部分で、76-15は型押しによる草花文が施され、76-16は無文である。76-17は最大長3.0cm、最大幅2.9cm、厚み0.8cm、重さ15.36gを測る小形品で、仏像坐像のように見えるが、内側の様相が不明瞭であるため明確なことは言えない。



第77図 北西屋敷 第3遺構面遺構配置図

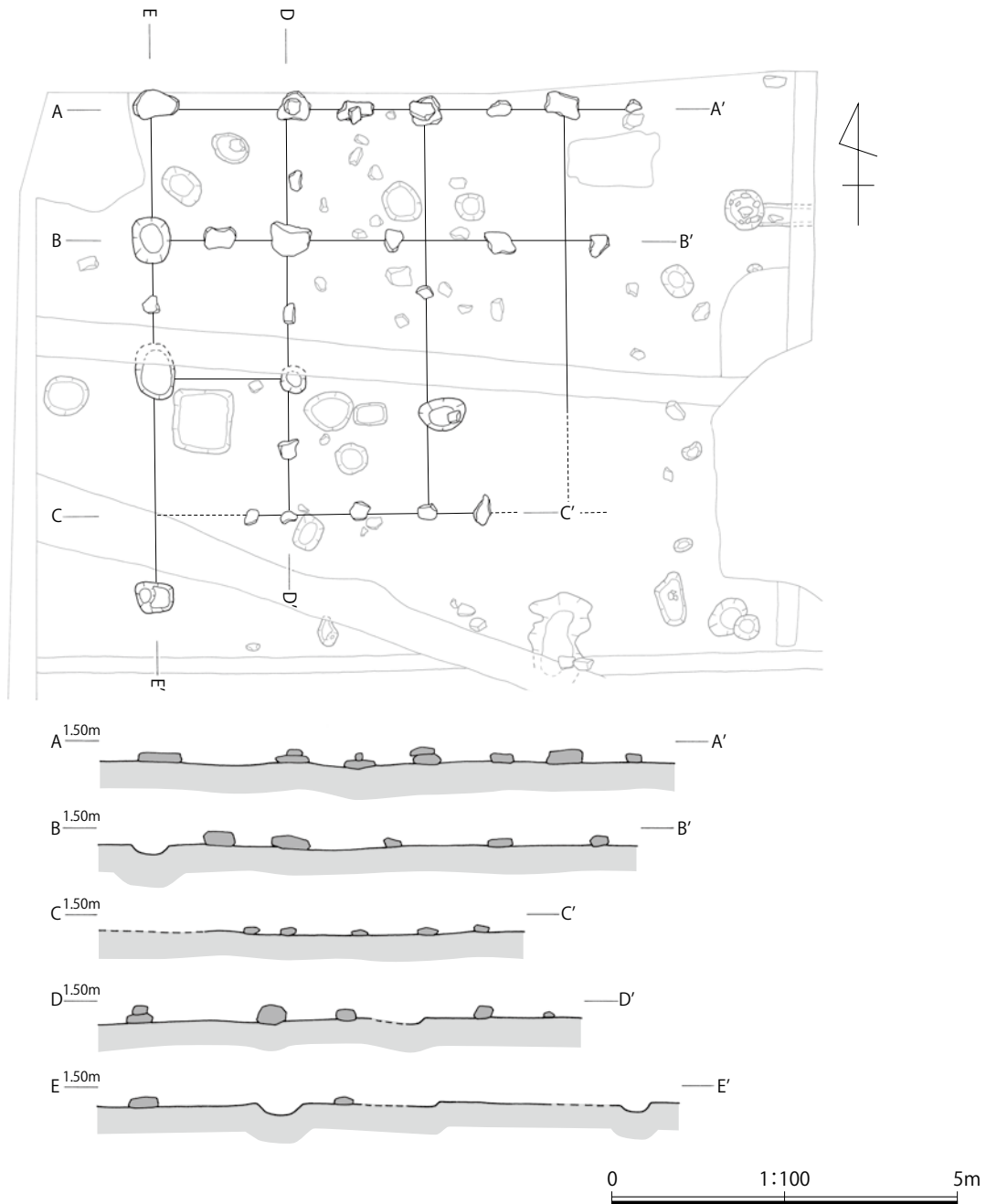
第4節 第3遺構面

第1項 遺構面の概要 (第77図)

第3遺構面は、標高1.2～1.3mで検出し、遺構面を形成するB-2層は層厚10～30cmを測る。第3遺構面で検出した遺構は、礎石建物跡1棟 (SB04)、掘立柱建物跡1棟 (SB05)、溝状遺構1基 (SD14)などで、その他、性格不明の土坑や浅い溝状遺構などを検出した。なお、第3遺構面では近現代の攪乱が多く見られるようになり、遺構が破壊されている部分が目立つ状態で、特に東半は北東屋敷全面に至るまで遺構面は消失していた。同時期に造られた屋敷境は、東側は攪乱のため明確ではないが、SD03が存在していた可能性が高く、南側はSD05である。

遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・銭貨・瓦などが出土している。陶器は肥前が減少し、信楽、京都・信楽系、瀬戸・美濃、在地 (布志名)が増加する。肥前以外の陶器は18世紀代～19世紀代にかけての幅広い時代の遺物が入り込む。磁器は肥前磁器 (九陶Ⅳ～Ⅴ期・17世紀後半～19世紀代)がそのほとんどを占めるが、肥前系磁器が少量であるが出土している。なお、中国磁器 (景德鎮窯・17世紀前半頃)も出土しているが、その量はごくわずかである。土師器は在地系が増え、京都系がほぼ出土しなくなる。また、土器 (焼塩壺・焙烙など)の出土量が多くなる傾向である。

第3遺構面の年代は、第2遺構面の上面に造成された遺構面であることと、出土遺物の年代観から、17世紀末～19世紀代を想定している。



第78図 SB04平面図・断面図

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 SB04 (第78図)

SB04は北西屋敷の西端部分に位置する礎石建物跡である。建物跡の軸は第1遺構面のSB01・02(第67・69図)、第2遺構面のSB03(第73図)と変わらず、南北軸が北から東に4度ずれる。SB04は調査区の西端角で検出しており、北側・西側は調査地外へ続いている可能性がある。また、南側・東側は攪乱によるためか、現状以上の遺構を検出していない。

SB04の規模は、南北方向3.5間以上(7.0m以上・1間2.0m)、東西方向3.5間以上(7.0m以上・1間2.0m)の範囲である。建物の構造は遺構面上に礎石のみを置くもので、主となる礎石の間に束

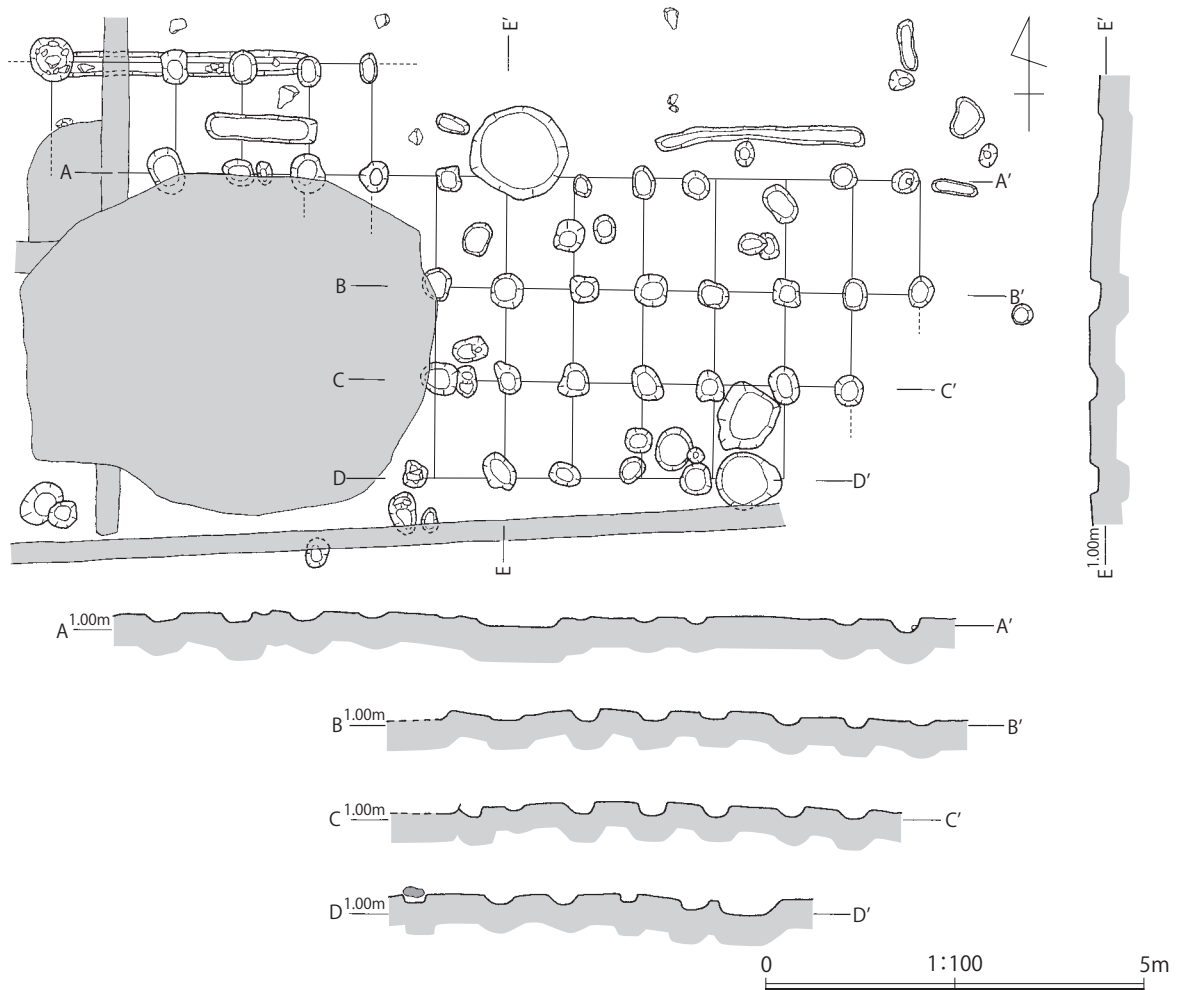
石を置いている。礎石のサイズは概ね 50～60cm と大形で、束石は 20～40cm の大きさである。

A-A'の礎石は石が2段に積まれているものが見られる。礎石の高さを調整するためのものであろう。D-D'・E-E'には礎石に当たる位置に直径0.4～0.7mの浅い土坑が見られ、これは礎石が抜き取られた痕跡と捉えている。特にE-E'には大形土坑が見られ、置かれていた礎石のサイズが40～60cm程度のものであったと想定できる。礎石・束石に使用された石は「おおみさきいし大海崎石」と呼ばれる地元で産出される石⁽²⁹⁾で、赤い色を呈した安山岩である。

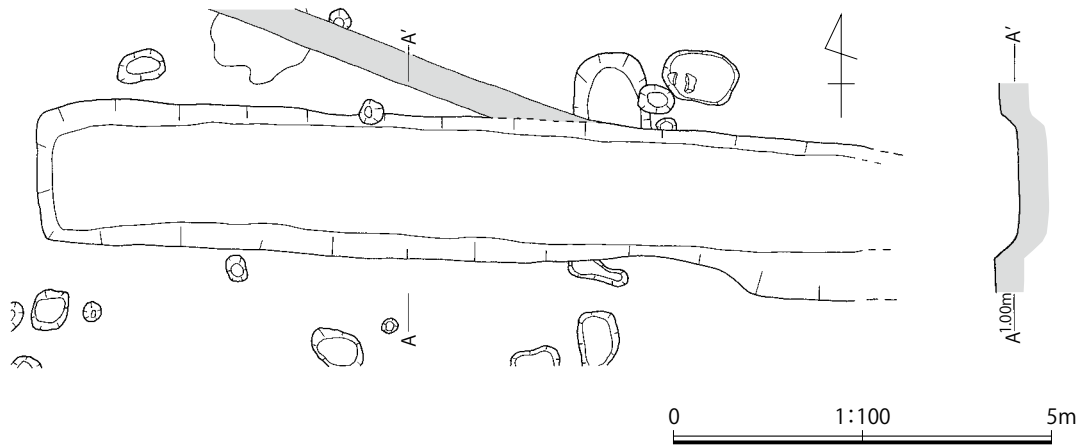
SB04が建てられていた位置は、古い遺構面においても建物が建てられていた場所である。第1遺構面では礎石建物跡SB02(第69図)、第2遺構面でも礎石建物跡SB03(第73図)がほぼ同一位置に建っていた。いずれも礎石建物跡であり、その規模なども似通っていることから、ある程度、屋敷地内での建物位置は各時期とも共通するようである。

第3項 SB05(第79図)

SB05はSB04から東へ約4.0mのところの位置する建物跡である。建物跡の軸はSB04とほぼ変わらない。SB05は北西屋敷地のほぼ中央部分に位置し、東西方向に長い建物跡である。建物跡範囲



第79図 SB05平面図・断面図



第80図 SD14平面図・断面図

の西側は近現代の攪乱で破壊されている。

SB05の規模は、南北方向11.5m以上（柱間は約0.9m）、東西方向5.4m以上（柱間は約1.3m）という東西と南北の柱間幅が異なる変則的な間取りである。建物を構成するのは土坑群で、各土坑は直径0.3～0.5m、深さ0.1～0.15mを測る小形で浅い形状を呈する。この土坑については、礎石を抜き取られた痕跡か、あるいは第3遺構面より上層から掘られた土坑群の底面部分が当該遺構面で検出されたか、という2つの可能性を考えることができる。

第4項 SD14（第80図）

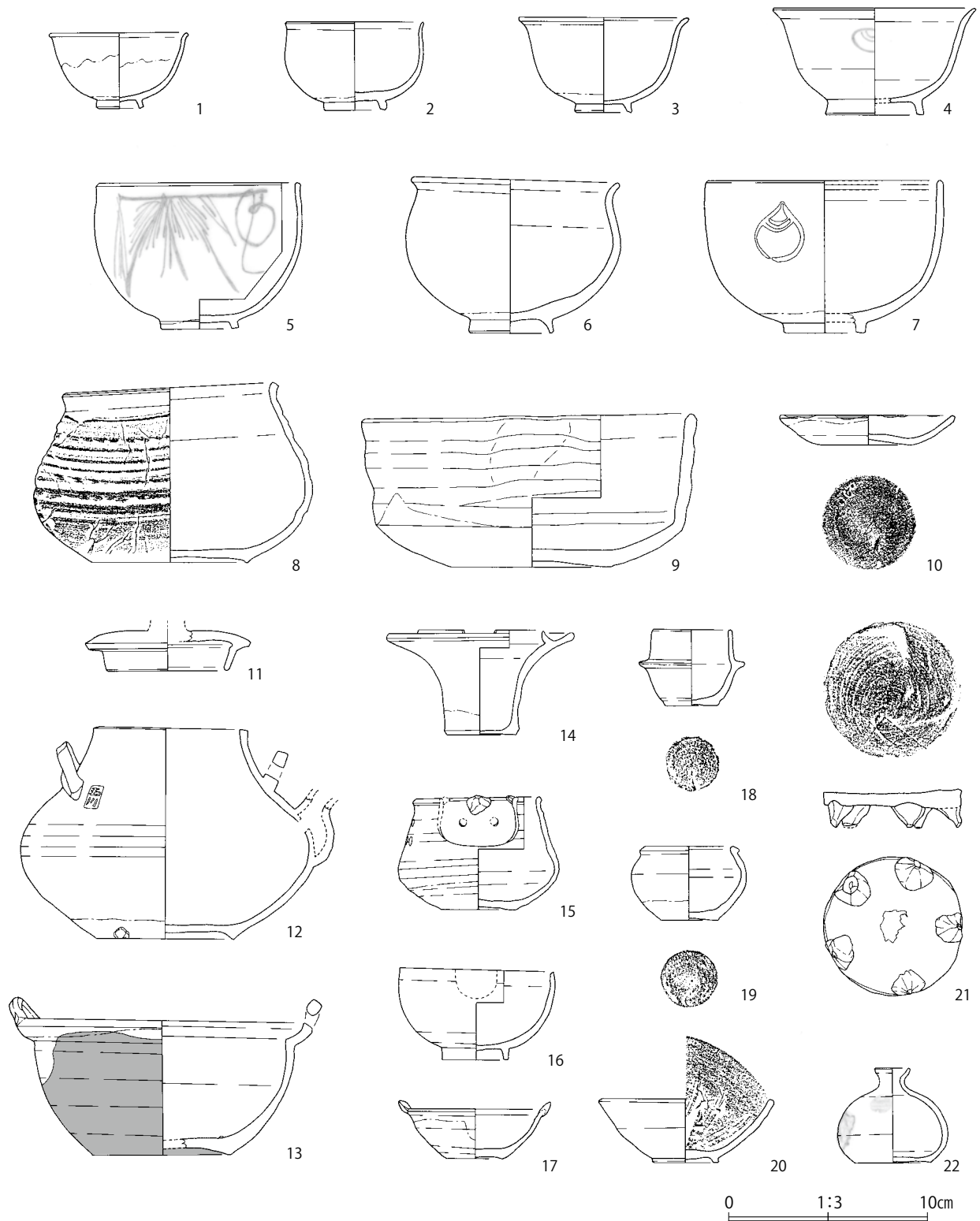
SD14は、SB05の南側4mのところろに位置する。東西方向に伸び、西端は明確に終息し、東端は近現代の攪乱により破壊されている。東西残存長11.0m、南北最大幅2.0m、深さ0.3mを測る浅い遺構で、底面は約1.3mの平坦面を成す。

内部全面に渡って、多量の瓦片と陶器・磁器・土師器・土器・土製品・銭貨などが、ばらまかれたような状態で出土した。出土遺物の傾向としては、肥前陶器がほぼ出土しておらず、その他の京都・信楽系や在地（布志名）が増えている。磁器に関しては圧倒的に肥前磁器が多く、中国磁器は1点も出土していない。特筆すべきは、陶器のミニチュア製品、土器・土製品（人形など）が多量に出土していることである。これらはほとんどが完形品に近い形で残存しており、また、破片になっていてもかなりの割合で接合できたことから、完品のまま捨てるか埋めるなどの行為が成されたものと考えられている。遺物の年代観は、北西屋敷・第3遺構面の年代観（17世紀末～19世紀代）に沿っていると思われる。

以下、遺物の種類ごとに詳細を説明する。

SD14 出土遺物・陶器（第81図）

81-1～22は陶器である。81-1～3は端反形小坏で、81-1・3は京都・信楽系、81-2は在地（布志名）である。81-1は口径6.9cm、高台径2.4cm、器高3.7cmを測り、素地は黄色釉で、口縁部外内面に濃緑色釉を掛け分ける。81-2は腰張形小坏で、口縁端部が外反する。釉薬は布志名特有の緑色釉である。81-3は白色釉で全面に貫入が入る。81-4は口径10.1cm、高台径5.0cm、器高5.4cmの端反



第81図 SD14出土遺物（1）

形小碗で、外面に鉄絵による宝珠文が描かれる。81-5・6は京都・信楽系の中碗で、81-5は半球形で、外面に鉄絵で注連縄文が描かれる。81-6の口縁部は大きく外反し、腰部が強く張り出す形状で、薄黄色釉で貫入が入る。81-7は在地（布志名）の腰張形中碗で、外面に型押しによる宝珠文が見られる。81-1・3～6は18世紀代、81-2・7は19世紀代のものである。

81-8は産地不明の建水^{けんすい}で、口縁部が内傾する特殊な形状の器である。全体的に器壁は薄く、胴

部外面に飛び^{がんな}鉋痕が見られる。81-9は山口（萩）の鉢で、洗面器のような扁平形を呈する。口径16.5cm、底径8.1cm、器高7.7cmを測り、口縁部2ヶ所に持ちやすいための凹みが見られる。また、底部中央には焼成前に割れたと思われるヒビがあり、そこに釉薬が塗り込まれている様子が見て取れる。これは不良品になるのを防ぐために行われた出荷前の補修の痕跡である。

81-10は在地の灯明皿で、底部に回転糸切り痕、口縁端部に油煙痕が残る。19世紀代のものである。

81-11・12は信楽陶器で、土瓶と蓋のセット品である。81-11はつまみが欠損する土瓶蓋である。81-12は土瓶で、胴部は反り気味に強く張り出す。口径7.1cm、胴部最大径14.7cm、器高10.7cmを測る。また、把手付近に「玉川」という陰刻が押されている。81-11・12は外面に濃い緑色釉が掛かる。18世紀代～19世紀代にかけてのものである。

81-13～22は在地陶器である。81-13は土鍋で、外面広範囲に煤が付着していることから、調理時に使用していたことが窺える。81-14は木製容器に装着する灰皿である。81-15～22はミニチュア製品で、81-15は口径6.2cm、器高5.7cmを測る焜炉である。五徳、通気口、窓などが細かに再現されている。81-16は口径7.8cm、高台径3.3cm、器高4.7cmを測る片口鉢である。片口部分は貼りついていた痕跡が残る。81-17は土鍋、81-18は^{はがま}羽釜、81-19は壺、81-20は挿鉢である。81-22は薄黄色釉に色付けを施した徳利である。81-21は直径7.0cmの窯道具で、5ヶ所に足が付く。81-13～22は19世紀代のものである。

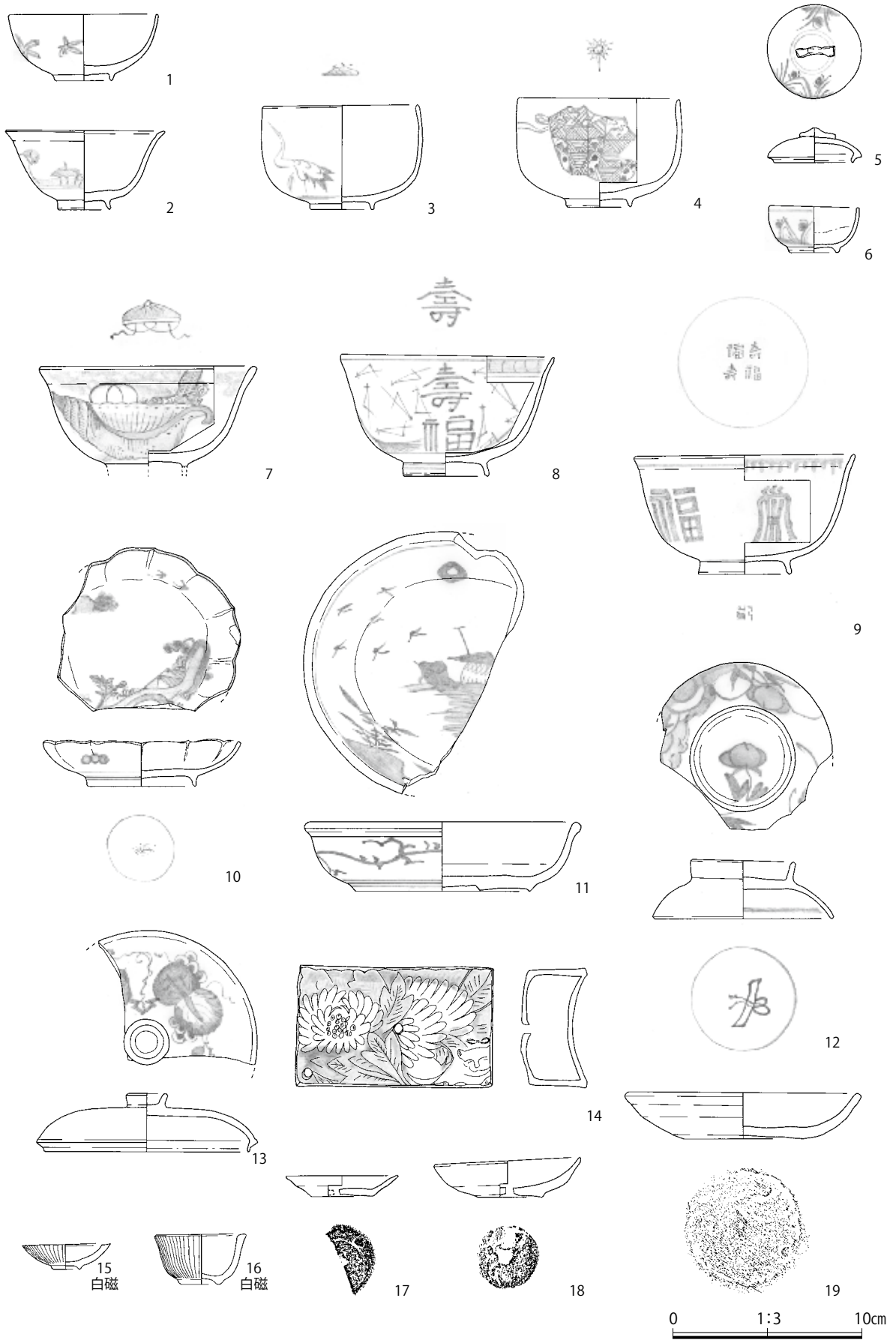
SD14 出土遺物・磁器（第82図）

82-1～16は肥前磁器である。82-1・2は小坏で、82-1は浅半球形で外面に桔梗文、82-2は端反形で外面に草花文が描かれる。いずれも九陶V期（1780～1810）のものである。82-3・4は小丸形中碗で、いずれも腰が強く張り、高台径が小さく、口縁部がわずかに内傾する形状である。82-3の外面は^{いなたば}稲束文と対角に^{さぎ}鷺文を配し、見込みに^{いわなみ}岩波文を描く。82-4の外面は2種の宝文が対角に描かれ、見込みに^{ほむらほうじゆ}火焰宝珠文が描かれる。82-3・4のような小丸形は特殊な形状で、広東碗が出現する九陶V期（1780～1810）に茶飲み碗として盛行した器である。

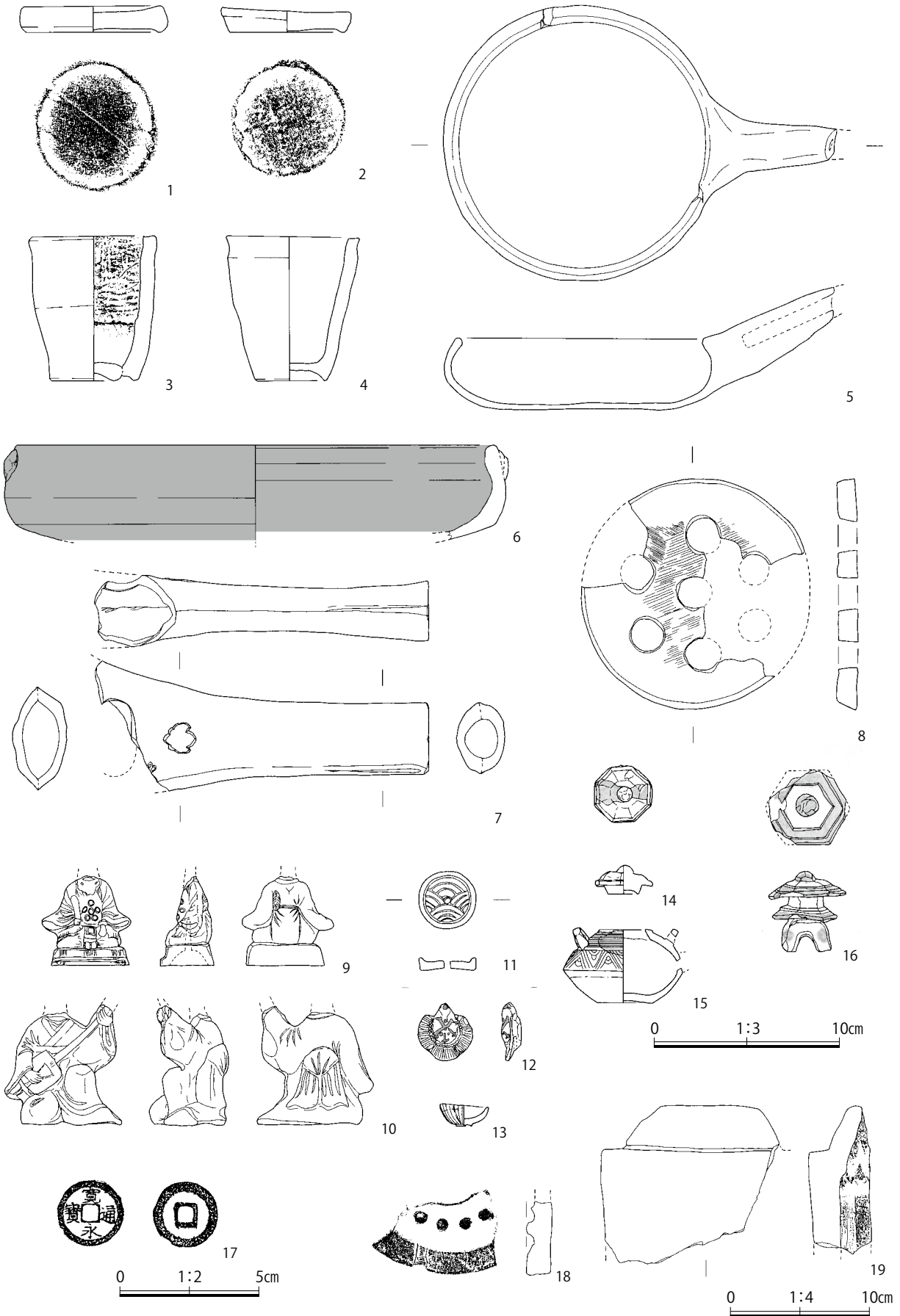
82-5・6は合子と蓋のセット品で、有田の可能性が高いものである。蓋物として精巧に作られており、同一の草花文が描かれる。年代は九陶V期（18世紀後半）のものである。

82-7～9は端反形中碗で、有田産の高級磁器である。口径11.3～11.6cm、高台径4.4～5.0cm、器高5.4～6.5cmを測り、いずれもよく似た形状を呈する。82-7は外内面に^{ふきずみ}吹墨技法が用いられ、片側に約9.0cm幅の^{かいたから}貝宝文（巻貝を宝に見立てた文様）、見込みに宝文が描かれる。82-8は外面の対角の位置に、一文字2.5cm四方の「壽福」「福壽」と縦書きで大きく書き入れ、その周囲に松葉文と箒文を散らす。見込みに「壽」の一文字を2.5cm四方で書き入れている。82-9は外面に「福」と「壽」を3.0cm四方の大きさで交互に描き、見込みに「福壽」を組み合わせた銘を入れている。年代は九陶V期（1820～60）で、いずれの碗も独特の染付が施されており、他に類を見ない器である。また、この3個体には焼継ぎ痕が顕著に見られる。

82-10・11は皿で、82-10は有田・^{なんがわらがま}南河原窯の高級磁器である。口径10.4cm、高台径5.8cm、器高2.5cmを測る型押成形の小皿で、見込みに風景文、高台内に「山福」銘が入る。また、口縁部は



第82図 SD14出土遺物 (2)



第83図 SD14出土遺物 (3)

口さびである。年代は九陶Ⅳ期（1740～80）である。82-11は蛇ノ目凹型高台の中皿で、口縁端部は玉縁状を呈する。染付は外内面に見られ、内面には家屋や月、鳥の群れなどが描かれる。九陶Ⅴ期（1780～1810）のものである。

82-12は丸形中碗蓋である。外面及びつまみ内に草花文を巡らせ、見込みに宝文が描かれる。82-13は蓋付鉢の蓋で、輪状形つまみが付き、外面は宝文が描かれる。82-12・13は九陶Ⅴ期（1820～60）のものである。82-14は水滴で、長辺10.5cm、短辺6.5cm、高さ3.6cmの長方立方体である。上面は型押成形による装飾が施され、2輪の菊花と葉、右下に猫（虎か）がうずくまるデザインである。また、中央と左下に直径2mmの孔が開いている。九陶Ⅴ期（1780～1810）のものである。82-15・16は白磁である。82-15は紅小皿で、九陶Ⅴ期（1840～60）頃のもの、82-16は小坏で、18世紀代のものである。いずれも型押成形により外面に鑄文しのぎが付けられている。

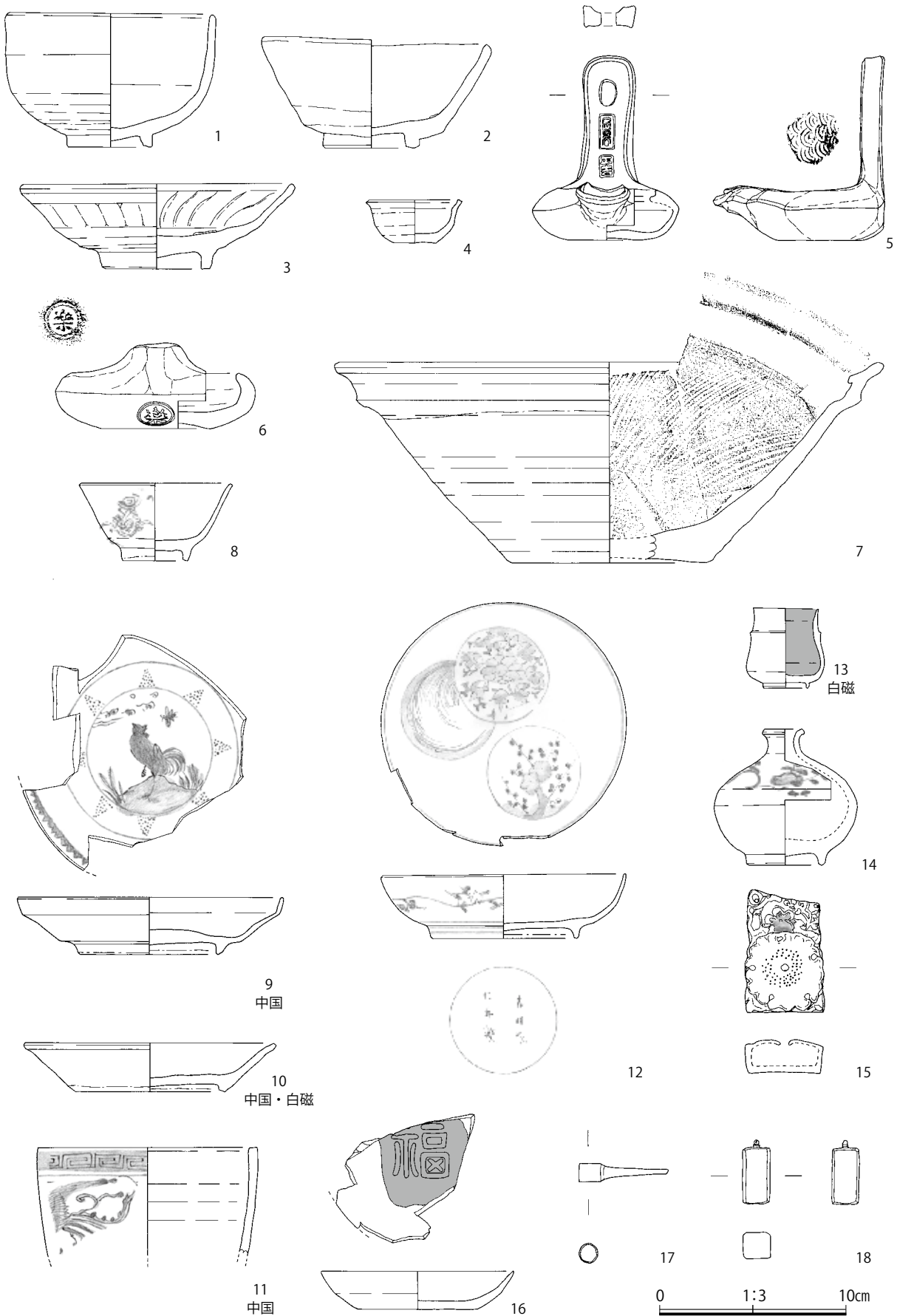
SD14 出土遺物・土師器、土器、土製品、銭貨、瓦（第82・83図）

82-17～19は在地系の土師器である。82-17・18は極小皿で、底部中央に直径2mmの穿孔が見られる。82-19は口径12.2cm、底径6.3cm、器高2.5cmを測る中皿である。

83-1～8は土器である。83-1～4は焼塩壺で、83-1・2は蓋、83-3・4は身である。83-1は断面凹字形で、18世紀後半代に作られた形状である。83-2は断面三角形状で、19世紀代のものである。83-3は口縁端部が蓋受け状を呈し、83-4は断面三角形状である。いずれも内面に工具痕が残る。83-5～7は様々な形状の焙烙である。83-5は口径13.3cm、底径8.7cmを測る小形のもので、柄部分が残存する珍しい例である。底部は厚み1.5mmと薄手だが、柄部分は粘土も厚く、しっかりと接合されている。外面全面に煤が付着しており、調理等で使用した痕跡が窺える。83-6は復元口径26.0cmを測る通常の焙烙で、口縁部は内傾する。口縁端部上面に不貫通の穿孔が2ヶ所に見られる。全面に煤が覆っており、長期間使用されていたことが窺える。83-7は焙烙の柄部分である。最大長18.1cm、最大幅5.8cmを測り、大形の焙烙に取り付けられた柄であったと推定する。また、型押しで作られたパーツを半分で合わせて接合している。さらに柄の付け根部分に楕円形の窓が開いている。83-8は直径12.5cm、厚み1.1cmを測る円形火皿で、直径約1.8cmの孔が7個均等に開いている。焜炉等の上に置き、調理に使ったものである。

83-9～16は土製品である。83-9・10は人形で、型押成形で製作後、表面と裏面のパーツを接合して作られている。83-9は台座に座る天神坐像であり、頭部は欠損している。83-10は女性坐像で、立て膝の状態で三味線を弾く遊女のようなモチーフである。着物の流線形、裏面の帯の表現などが細やかに施されている。頭部は欠損している。83-11は泥面子どろめんこの可能性が考えられるもので、直径3.1cm、厚み0.4～0.7cmを測る。中央に直径1.5mmの穿孔が開き、表面は型押成形により、寛永通寶の裏側に見られる青海波文を模倣している。83-12は鳥を象ったもので、最大長3.1cm、最大幅3.0cm、厚み1.1cmを測る小形品である。鳥の羽ばたきを形にしたものであるが、羽や頭部などの表現はデフォルメされている。胴体部分に「×」が朱色で色付けされている。83-9～12は裏側に直径2mmの不貫通穿孔が開いていることから、棒などを刺して使用したものと思われる。

83-13～16はミニチュア製品である。83-13は碗で、型押による鑄文が付く。83-14・15は土瓶



第84图 北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物（1）

と蓋のセット品で、細かい文様の部分まで型押で表現されている。83-16は灯籠で、器高4.3cmを測る。これらはままと道具として製作・使用されたものと推定する。

83-17は「寛永通寶」の古寛永である。

83-18・19は瓦である。83-18は軒丸瓦の瓦当部片で、復元外径15.8cm、珠文は4個残存する。83-19は丸瓦片で、丸瓦厚2.1cmを測る。

第5項 遺構外出土遺物（第84・85図）

84-1～7は陶器である。84-1は山口（萩）の腰張形中碗で、腰部が強く張り出す形状である。釉薬は深緑色で、畳付け以外全面に施釉されている。84-2は在地（布志名）の平形中碗で、胴部～口縁部にかけて逆ハ字状に開く。

84-3は肥前の中皿で、口径14.6cm、高台径5.9cm、器高4.6cmを測る。高台が直立する形状で、内外面にヘラ彫りによる連弁文が付けられる。全面に暗桃色の藁灰釉が掛かり、見込みに砂目痕が残る。形状や釉薬などから肥前か福岡の製品で、年代は砂目積み初期段階と思われる九陶Ⅱ期（1610～30）頃のものである。

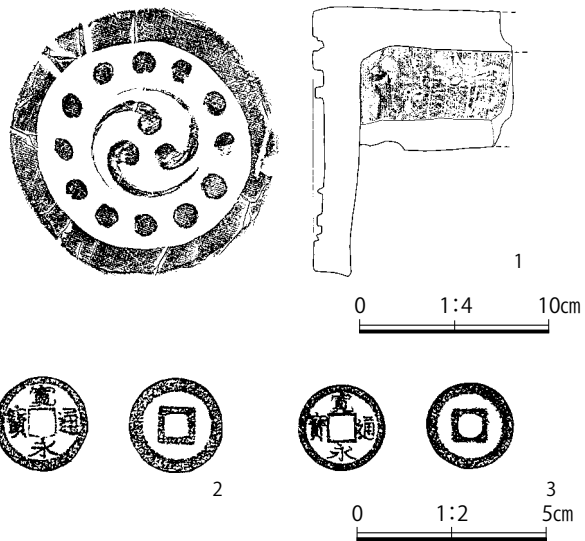
84-4は在地のミニチュア製品の土鍋で、19世紀代に生産された。84-5は壁に設置する形態の灯火具である。柄と受皿が垂直に接合されており、柄の上方に長辺0.7cm、短辺0.4cmの楕円形孔が開いている。この孔は壁などに掛ける際に、引っ掛ける部分であったと思われる。孔下に2つの印刻が見られ、上は陽刻、下は陰刻である。上は判読不明、下は「正吉」と読める。作者か問屋の名前か。受皿には注ぎ口が付き、中央に受皿の内部と繋がるように小さい穿孔が開いている。そこから内部の液体（油か）が流れるようになっており、注ぎ口の外側にもう一重作られている。また、受皿の底部内面一部分には直径約3.0cmの範囲で青海波文せいはいはもんの陽刻が成されている。滑り止めのようなものであろうか。

84-6は産地不明の茶器である。全面に鮮やかな橙色の釉薬が掛かり、外面の1ヶ所には「楽」の陽刻印が押印されている。器壁は厚く、特徴的な形状している。84-7は肥前の播鉢で、口縁部形態は二重の段階を踏む特殊なものである。スリ目は7本単位で、中央から放射状に付けられていることから、年代は17～18世紀代のものであろうと思われる。

84-8～11は中国磁器（景德鎮窯）である。84-8は端反形小坏で、外面のみに染付が見られる。高台内は無釉で、18世紀後半～19世紀代にかけての清朝期のものである。84-9は小皿で、口縁端部が垂直気味に立ち上がる珍しい形状である。染付は内面のみに見られ、口縁端部に鋸歯文きよし、見込みに鶏と昆虫、その周囲に9つの三角形を点描で表現する独特のモチーフである。また、高台内には放射状鉋痕が残る。年代は17世紀前半頃のものである。84-10は口径13.4cm、高台径8.0cm、器高2.6cmを測る小皿で逆ハ字状に外傾し、口縁端部は外反する。全面に暗灰色釉が掛かり、明瞭な貫入が入る。84-8同様清朝期のものである。84-11は口径12.0cmを測る火入れで、口縁部に雷文、胴部に龍が描かれる。年代は17世紀前半のものである。

84-12～15は肥前磁器である。84-12は丸形小皿で、口縁端部は口さびで、見込みに丸文が3個、

それぞれ花唐草文、草文、梅文が描かれている。外面には唐草文と圏線が巡り、高台内は圏線1条と「大明成化年製」銘が入る。少なくとも3客の同一器種を確認しており、セット品であったと思われる。九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。84-13は白磁小形瓶である。小壺のように見えるが、口縁部は二次的に割られている。上方が欠損した後この状態で使用したと思われる特異なタイプである。胴部は腰張状に膨らみ、口縁部にかけてすばまる形状を呈する。口縁部下方に明確な段が付いている。また、内面は黒く変色しており、煤状の物質が付着していると思われる。年代は九



第85図 北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2)

陶Ⅲ期頃（1650～60）のものである。84-14は油壺の完形品で、外面肩部には草花文が描かれる。九陶Ⅲ期（1650～90）に該当する。84-15は菊花をモチーフとした水滴で、最大長6.6cm、最大幅4.2cm、厚み1.8cmを測り、長方形をやや崩したいびつな形状を呈する。表面は下方に大きく菊花文を配し、型押成形により立体的な文様が象られている。水滴としての穿孔は、菊花文の中央に1個、左上に1個開けられている。九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780）のものである。

84-16は口径10.4cm、底径6.4cm、器高2.1cmを測る土師器小皿である。糸切り成形で作られたものだが、底部に回転糸切り痕は残っておらず、糸切り後ナデ消す工程を経たものと思われる。特筆すべきは、見込みに3.0cm四方の「福」の文字が陽刻で刻まれている。さらに、陽刻部分に金箔が貼られていた痕跡が残る。また、底部外内面に黒く変色した範囲が見られる。灯明皿に見られるような煤や油煙痕などの痕跡ではなく、断面も黒く変色していることから、一次焼成時の痕跡かと考えている。見込みに「福」を刻印した土師器皿の出土例は、北山伏町遺跡（東京都）⁽³¹⁾、都立白鷗高校内遺跡（東京都）⁽³²⁾、下本多遺跡（石川県）⁽³³⁾などで類例が見られる。北山伏町遺跡では「寿」が刻印された土師器皿も出土しており、^{えな}胞衣容器として報告されている⁽³⁴⁾。84-16も胞衣埋納に使用された特殊品であった可能性が考えられる。

84-17・18は金属製品である。84-17は煙管の吸口、84-18は分銅である。84-18は一面1.5cm四方、長辺3.4cm、重量48.95gの長方立方体であり、上部には紐を通してつるすことが可能かつまみが付いている。また、四隅は面取りされており丁寧な細工である。

85-1は軒丸瓦の瓦当部分で、外径13.7cmを測る。連珠文12個、三巴文は左巻である。

85-2・3は銭貨で、いずれも「寛永通寶」である。85-2は古寛永、85-3は新寛永である。

表8 北西屋敷 銭貨観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	質量/直径	備考
83-17	3	SD14	寛永通寶	16.0	5.0	1.0	2.31	100	0.14	ス貝寶(古寛永)
85-2	3	遺構外	寛永通寶	17.0	6.0	1.5	4.54	100	0.27	ス貝寶(古寛永)
85-3	3	遺構外	寛永通寶	15.0	6.0	1.0	2.74	100	0.18	ハ貝寶(新寛永)

表9 北西屋敷 金属製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	形状	材質	法量		備考	
						大きさ(cm)	重量(g)		
66-1	1	SK13	瓶	—		口径4.8/底径6.8/器高20.0		379.81	
76-13	2	遺構外	煙管	吸口	真鍮	長さ7.2/火口φ1.0/口付φ0.3		4.94	
76-14	2	遺構外	簪	—		長さ10.5/幅1.8/厚さ1.0		3.58	
76-15	2	遺構外	小柄	柄	鉄	長さ10.4/幅1.5/厚さ0.1		15.52	片面:草花文(型押)
76-16	2	遺構外	小柄	柄		長さ9.8/幅1.2/厚さ0.4		18.20	無文
76-17	2	遺構外	人形か	仏像か		長さ3.0/幅2.9/厚さ0.8		15.36	
84-17	3	遺構外	煙管	吸口	真鍮	長さ4.8/小口φ1.0/口付φ0.2		3.81	
84-18	3	遺構外	分銅	長方形	銅	長さ3.4/幅1.5/厚さ1.4		48.95	紐を通す孔あり

表10 北西屋敷 石製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	材質	法量		備考	
					大きさ(cm)	重量(g)		
71-13	1	遺構外	砥石	—	長さ10.3/幅2.6/厚さ1.4		78.49	4面使用痕
76-11	2	遺構外	砥石	—	長さ2.8/幅3.5/厚さ0.9		11.98	片面:「森土」刻文字/上下欠損/3面使用痕
76-12	2	遺構外	砥石	—	長さ6.7/幅3.9/厚さ1.2		58.99	5面使用痕

表11 北西屋敷 木製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	各称部位	法量:cm(残存値)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
65-13	1	SK11	漆器	容器	—	12.3	(2.3)	—	—	外面:黒/内面:朱
65-14	1	SK11	漆器	椀	(13.9)	(7.3)	9.3	—	—	外内面:黒/無文/高台が高い/高台内:傷あり
65-15	1	SK11	漆器	椀	(14.8)	—	(7.9)	—	—	外面:黒/内面:朱/無文/高台が高い/高台内:傷あり
65-16	1	SK11	匙か	—	16.7	2.6	—	0.8	椀目	匙部:穿孔1(貫通)
65-17	1	SK11	刃物か	柄	9.5	3.8	—	1.5	椀目	上部:穿孔1(貫通)
65-18	1	SK11	—	—	7.1	3.6	—	0.5	椀目	穿孔1(不貫通)
65-19	1	SK11	杓文字	—	23.9	6.5	—	0.8	椀目	劣化顕著
65-20	1	SK11	羽子板	—	30.0	5.2	—	0.7	椀目	
66-3	1	SK13	漆器	椀	(15.0)	6.7	4.6	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:松文(朱)
71-11	1	遺構外	漆器	椀	11.6	6.2	7.8	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:金丸に十字文/高台が高い

表12 北西屋敷 瓦観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	法量:残存値		備考	
				大きさ(cm)	重量(g)		
71-14	1	遺構外	鬼瓦	長さ30.3/幅16.3/厚4.6-2.1		2280	葉のモチーフ
83-18	2	SD14	軒丸瓦	瓦当部:外径(15.8)/丸瓦厚1.8		100	連珠三巴文/右巻/残存珠文4
83-19	2	SD14	丸瓦	長さ(11.1)/幅(12.3)/厚2.1		380	
85-1	3	遺構外	軒丸瓦	瓦当部:外径13.7/内径10.7/丸瓦厚2.1		1010	連珠三巴文/左巻/珠文12

第6章 南西屋敷

南西屋敷は、新宮庁舎調査区の南西にあり、北側を屋敷境C、東側を屋敷境Dにより区画された屋敷地である。以下、その詳細を説明する。

第1節 基本層序 (第86図)

南西屋敷の土層堆積状況の観察を行った結果、旧地表面と3面の遺構面を確認した。なお、以下で説明する基本層序(第86図)については、第3章第2節で示した基本層序と共通するものであり、土層の呼称については対応する層名を付した。また、旧地表面(Ia層)以下の説明は検出標高のみを記載し、詳細は割愛する。

南西屋敷の基本層序は、調査区南壁土層の一部分を掲載している(第87図A-A')。以下、各遺構面の土層堆積状況について、下層から上層の順に説明する。

旧地表面以下の自然堆積層(Ⅱ・Ⅲ層) 標高-0.05~0.1m 層厚30cm以上

旧地表面(Ia層) 標高0.15~0.25m 層厚15~20cm

第1遺構面(A層) 標高0.7~0.85m 層厚50~65cm

A層は城下町初期造成土と考えられるもので、Ia層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土である。南西屋敷の第1遺構面基盤層である。ただし、後述するように建物土台部分にのみ厚く盛られ、その周辺は多様な土砂で造成されていた。

第2遺構面(B-1層) 標高0.8~1.15m 層厚10~20cm

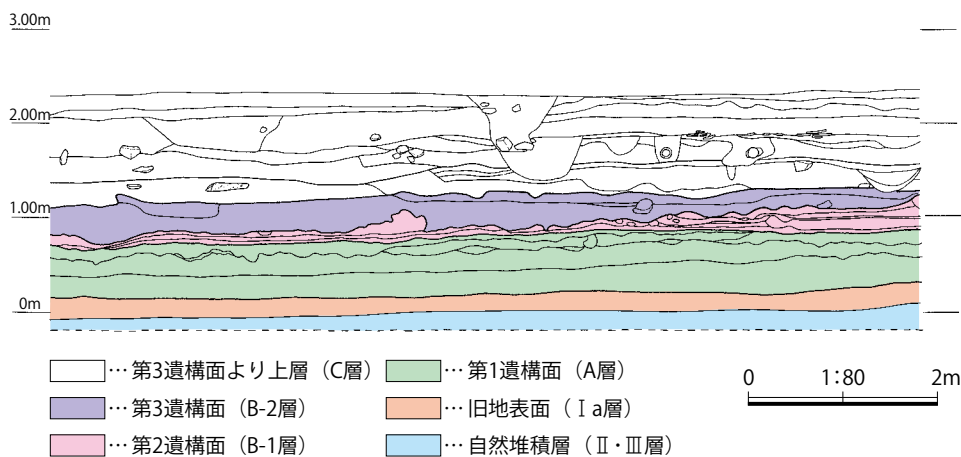
B-1層は南西屋敷の第2遺構面基盤層で、淡灰色砂質土を呈する。

第3遺構面(B-2層) 標高1.1~1.3m 層厚25~40cm

B-2層は南西屋敷の第3遺構面基盤層で、黄色シルト質の山土である。

第3遺構面より上層(C層) 標高2.3~2.4m 層厚100~120cm

C層は攪乱層である。近現代の陶磁器やガラス片、コンクリート片が混じる。



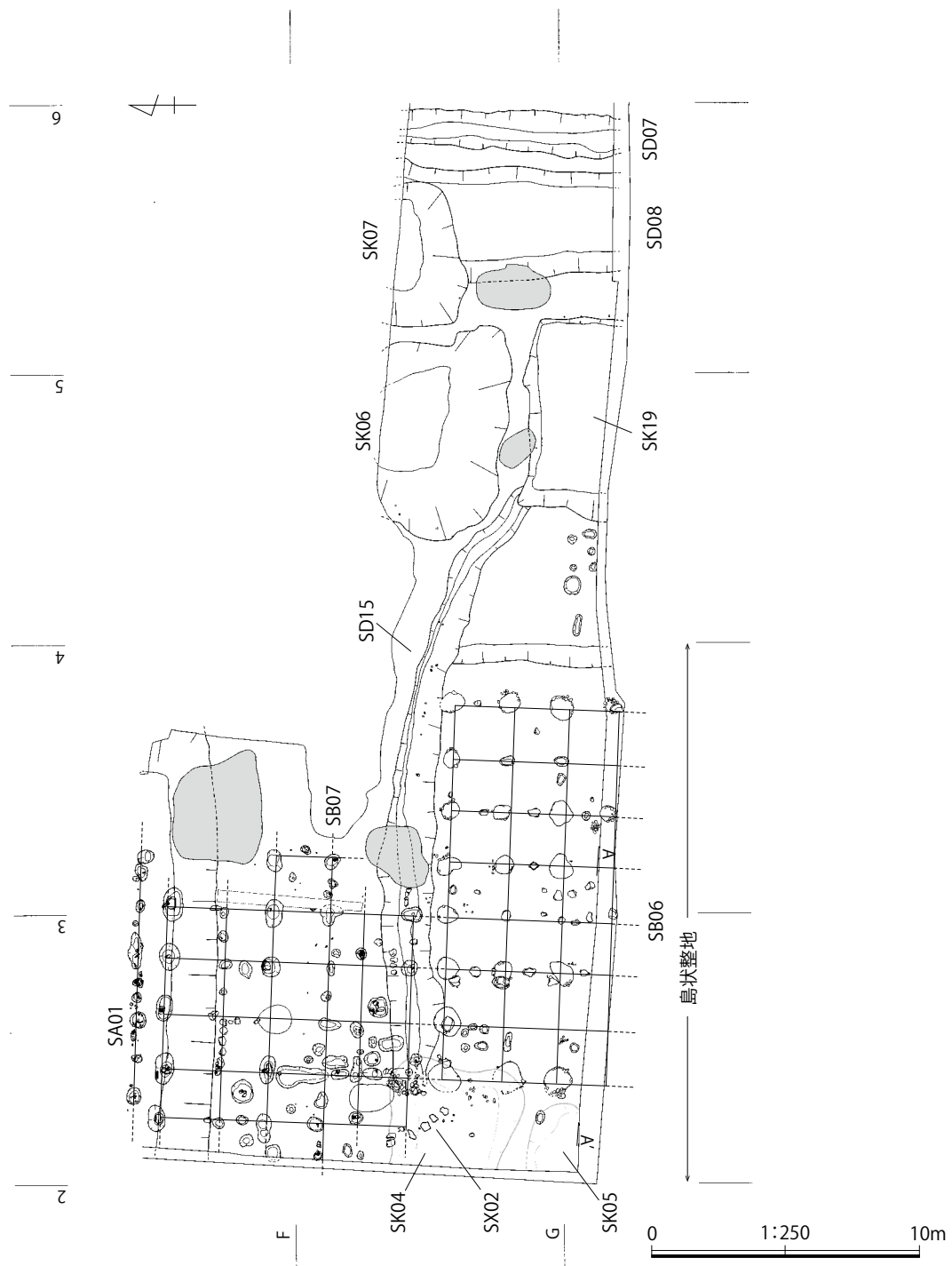
第86図 南西屋敷 基本層序土層断面図

第2節 第1遺構面

第1項 遺構面の概要 (第87図)

第1遺構面は、標高0.7～0.85mで検出し、遺構面を形成するA層は層厚50～65cmを測る。第1遺構面は自然堆積層である旧地表面（I a層）に盛土（A層）を施して造成された最初の遺構面と捉えているが、後述の島状整地部分のみ厚く、その周囲は薄い土層であり、多様な土砂が用いられている。また、島状整地の北側と西側では、屋敷境を含めて部分的な嵩上げが成されており、上層と下層の遺構に分かれる。なお、下層は屋敷境SD04と対応し、主な遺構はSD15、SK04・05であり、上層は屋敷境SA01と対応し、主な遺構は掘立柱建物跡SB07、飛び石SX02である。

この他、第1遺構面で検出した遺構は、礎石建物跡SB06、SK06・07であり、東側の屋敷境は



第87図 南西屋敷 第1遺構面遺構配置図

SD07・08 が対応する。

遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・木製品・瓦などが出土している。このうち陶器が最も多く出土し、肥前（九陶Ⅰ-2～Ⅱ期・1594～1650）、その他少数で福岡（上野・高取）、瀬戸・美濃（志野）、備前が出土している。肥前以外の陶器はいずれも17世紀前半代が多い。磁器は少なく、ほとんどが中国磁器（景德鎮窯・漳州窯）、肥前磁器はわずかに出土している。土師器は京都系と在地系が混ざり合う状況である。

第1遺構面の年代は、出土遺物の年代観と城下町造成以前の旧地表面上に盛られたA層を基盤とする最初の遺構面であることを根拠として、17世紀初頭～17世紀前半頃を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 島状整地（第87図）

島状整地は、南西屋敷地に位置する方形状の盛土で、東側は残存し、南側は調査地外へ続いている。また、北側のSD15は島状整地の北辺を兼ねた遺構である。

規模は、東西残存長は上端19.0m、下端19.8m、南北残存幅は上端6.8m、下端7.8mで、盛土は約0.4mの厚さを測る。周囲の溝や土坑から掘り上げられた自然堆積層A層（Ⅰa層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土）を盛土として使用しており、家屋を建てるための土台とし、地盤を強化することを目的とした整地である。これは北西屋敷第1遺構面で検出したものと同様の性格を持っており、建物を建てるために行われた地業であったことが分かる。

島状整地には後述する礎石建物跡SB06が建てられるが、建物が機能し始めた段階では、周囲との段差は解消していたものと推定する。

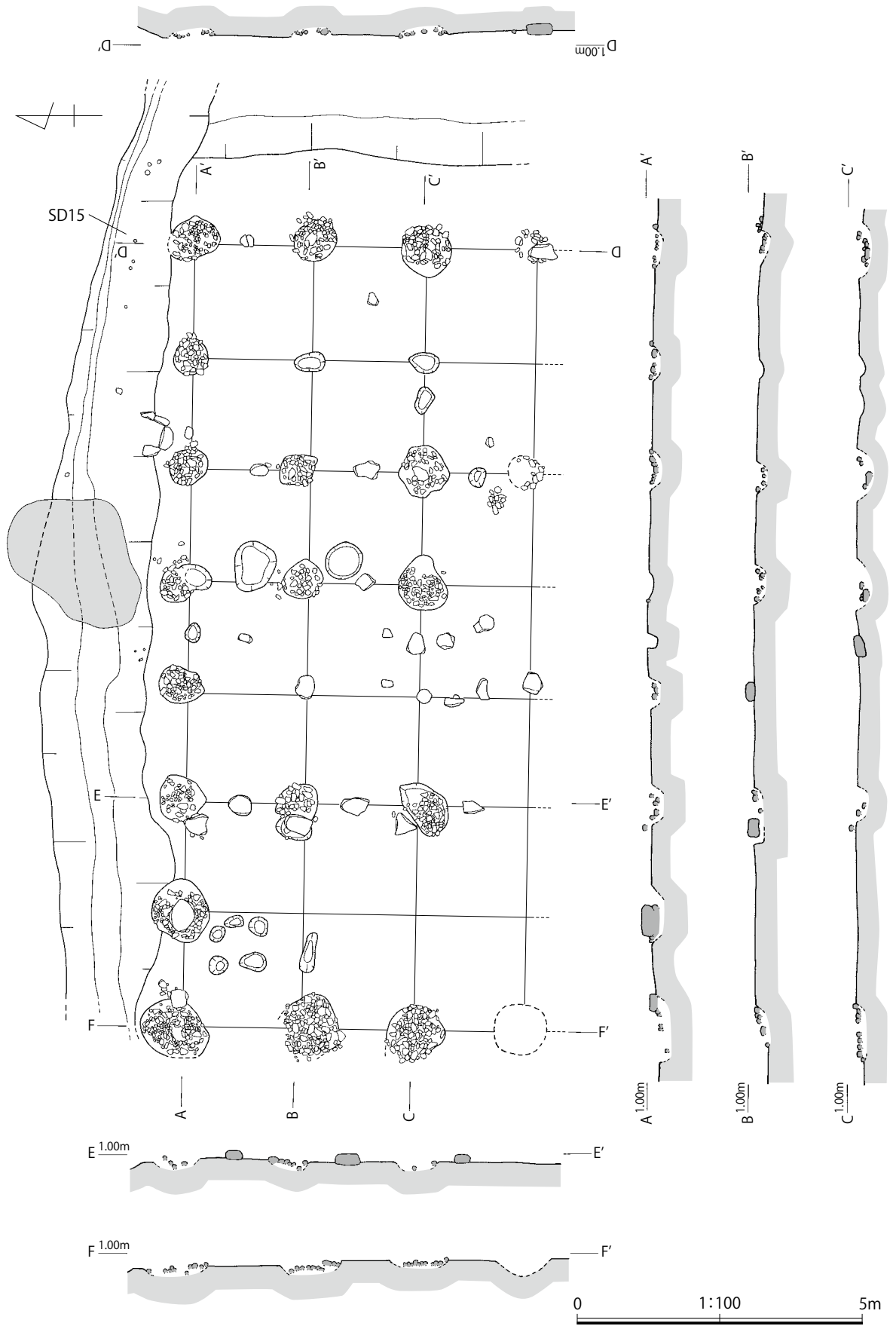
第3項 SB06（第88図）

SB06は調査区の南西角に当たる位置に建てられた礎石建物跡である。SB06が建てられている場所は、北西屋敷と同じく島状整地による地業が施されている。

SB06の規模は、東西方向7間（約14.0m・柱間2.0m）、南北方向3間以上（6.0m以上・柱間2.0m）で、南側は調査地外へ続く可能性がある。

SB06は、栗石を伴う礎石と、礎石のみを置くタイプが混在して構成されている。礎石は、直径0.7～1.2m、深さ0.2～0.3mを測る土坑内に、5～15cm大の小石が隙間無く入れられている。その中心に、0.3～0.7mの大きな石を置く構造である。礎石の種類は赤い大海崎石で、北西屋敷・第3遺構面で検出した礎石建物跡SB04（第78図）と同様の石材である。ただし、礎石が無い状態で検出したものが多く、礎石の抜き取りが行われたと思われる痕跡の土坑や、各礎石の合間に東石が置いてある部分も見られる。

SB06の北側に隣接するSD15（第93図）とSB06の北端礎石列（A-A'）は、遺構としては切り合い関係が無く、また、東端礎石列（D-D'）も島状整地に沿うように造られている。このことから、SB06とSD15・島状整地が同時期に存在していたことを示すと考えている。



第88図 SB06平面図・断面図

SB06 を構成する土坑及び範囲内からは、陶器・磁器・土師器・石製品がわずかながら出土している。

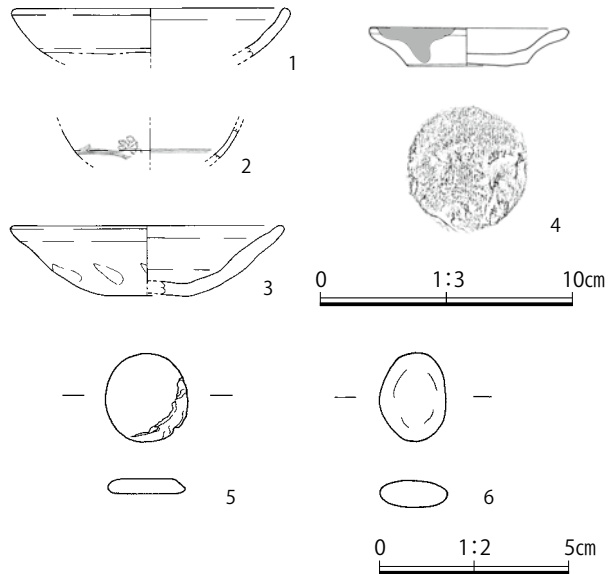
SB06 出土遺物（第 89 図）

89-1 は肥前陶器の丸形小皿である。口縁部のみの残存だが、形状などから九陶 I-2 ～ II 期（1594 ～ 1650）に該当する。

89-2 は肥前磁器の小碗で、胴部の小片である。外面に草花文が描かれ、断面に漆継ぎの痕跡が残る。九陶 II-2 期（1630 ～ 50）頃のものである。

89-3・4 は土師器である。89-3 は手づくね成形による京都系の小皿で、器壁は厚く、体部外面に指の痕が一定間隔で残る。89-4 は口径 7.6cm を測り、底部に回転糸切り痕が残る在地系の極小皿で、口縁端部は丸く膨らみを持つ。口縁部外面に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたと思われる。

89-5 は白色、89-6 は黒色の基石である。直径約 2.4cm、厚み 0.4 ～ 0.7cm を測り、89-5 は貝殻を加工して作られている。



第89図 SB06出土遺物

第 4 項 SK04・05（第 87 図）

SK04・05 は、調査区南西隅で検出した土坑である。2 基の土坑は南北方向に隣り合った状態で、北側に SK04、南側に SK05 が位置する。いずれも土坑の西側は調査地外へ続いている。これらは旧地表面で検出していることから、造成初期段階で掘り込まれた土坑と考えられる。

SK04 は南北幅 5.0m、東西残存幅 4.0m、深さ 0.6m、SK05 は南北残存幅 2.0m、東西残存幅 2.5m、深さ 0.5m を測る土坑である。2 基の土坑には切り合い関係が見られないことから、大きな時期差は無いと思われる。

SK04・05 からの出土遺物は少量かつ小片であるため図化できなかった。遺物から年代観を導き出すことができないが、SK04・05 は造成初期段階で掘り込まれ、埋められた土坑と考えられる。

第 5 項 SK06・07（第 90 図）

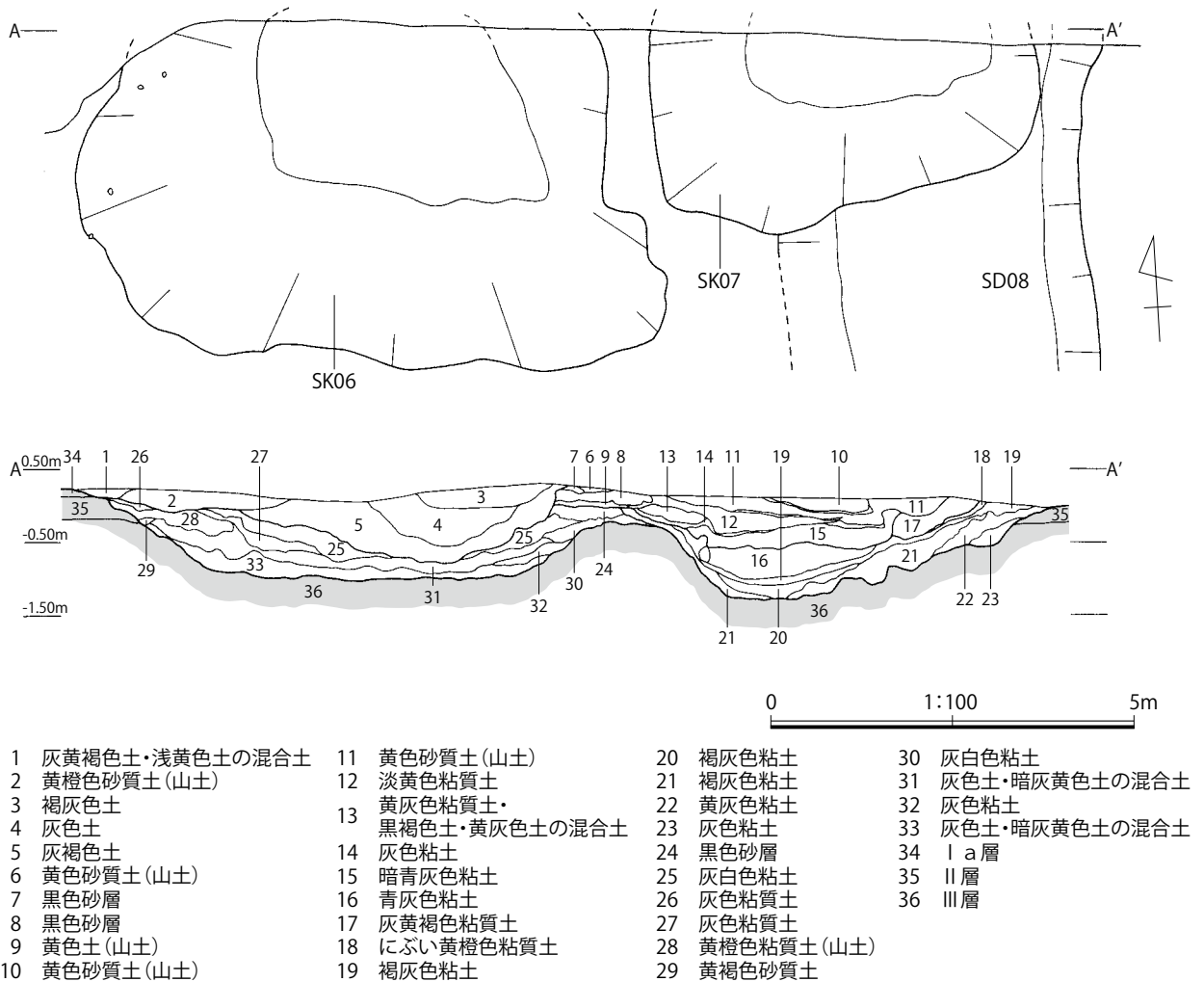
SK06・07 は、南西屋敷地内の東寄りに位置する土坑である。2 基の土坑は東西方向に隣り合った状態で、西側に SK06、その東側に SK07 が位置する。いずれも土坑の北側は基礎攪乱範囲により破壊されている。

SK06 は東西幅 7.3m、南北残存幅 4.7m、深さ 1.1m を測る土坑で、いびつな隅丸形状を呈する。土坑の断面図では逆台形状をしており、底面が約 7.6㎡の水平範囲面を持っていたことが分かる。

SK07はSK06の埋土を切って掘られた土坑で、東西幅5.3m、南北残存幅2.3m、深さ1.4mを測る。SK06同様のびつな隅丸方形形状を呈し、土層断面の形は逆三角形形状である。

2基の切り合い関係は、土層断面図から判断すると、新旧関係は明瞭ではない。まず、第25～33層はSK06の前段の土層である。このうち、第28・29層（黄色系粘質・砂質土）を除いた土層は、いずれも灰色系粘質土である。次に、SK07内の第13～23層が堆積し、その上層に第7～12層が堆積する。この2グループの層位には、粘質土や砂質土を含む多様な土層が見られる。第7～12層を切って入り込むのがSK06側の第1～5層で、これらはほぼ全層が黄色系砂質土である。第1～5層はSK06・07の後段埋土である。また、前述した土層堆積状況から、SK06・07は比較的短時間で埋められたもので、かつ、2つの土坑に大きな時期差は無いように思われる。SK06埋没後、SK07にも土が入り、立て続けに埋められた印象を受ける。

SK06・07からの出土遺物は少量である。いずれも陶器・磁器・土師器・木製品が出土しているが、SK07出土の木製品1点(92-3)を除いて、いずれも10cm以下の破片で出土している。遺物の年代観は17世紀初頭～前半代と考えている。



第90図 SK06・SK07平面図・土層断面図

SK06 出土遺物 (第91図)

91-1は肥前陶器の中碗で、口縁端部の破片である。口縁部は直口気味に立ち上がり、端部でわずかに外反する。九陶Ⅱ期(1610～50)のものと思われる。

91-2は土師器で、復元口径15.8cm、底径9.2cm、器高2.7cmを測る大皿である。底部外面に等間隔の指痕が残り、手づくね成形により作られたことを示す。

SK07 出土遺物 (第92図)

92-1・2は肥前陶器である。92-1は中碗で、胴部～高台の破片である。胴部は丸みを帯び、底部の器壁が厚い形状で、高台部分は1.6cmの高さを持つ。九陶Ⅱ期(1610～50)のものである。

92-2は小皿で、体部～高台の破片である。底部は基筈底高台で、体部は大きく外傾する。見込みに胎土目痕が残り、九陶Ⅰ-2期(1594～1610)のものである。

92-3は木製品で、独楽の完形品である。最大長7.6cm、直径4.9cmを測り、上方は円柱形、下方は円錐形状を呈する。約1.0cm間隔の均一な面取り成形で円柱形を作り出しており、円錐部の先端は尖っている。また、上面には墨で「○」が描かれている。この墨書が何を表すものかは不明であるが、装飾的なものか、あるいは目印のような意味合いと推測する。

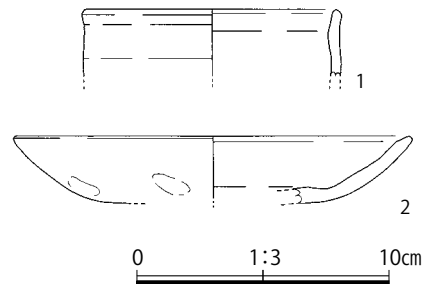
第6項 SD15 (第93・94図)

SD15は、礎石建物跡SB06の北側に隣接する溝で、東西方向に伸び、東側では徐々に南東方向に曲がる形状を呈する。SD15の南側にSB06の北端礎石列が造られており、SB06が建てられた面とSD15の底面とは約0.4mの高低差がある。また、SD15は島状整地の北辺を兼ねているものと考えている。

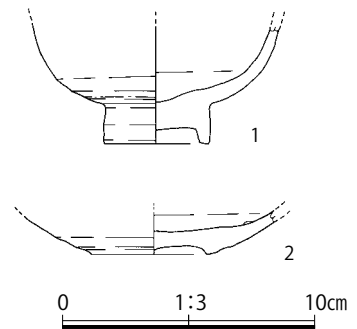
SD15の規模は、東西残存長約25.0m、南北最大幅1.9m、最少幅0.7m、深さは0.27～0.42mである。溝底の傾斜は西から東へ明確に下り、軸が南東側へと曲がっていく。溝幅は徐々に先細り、最終的にSK19にぶつかって終息している。

島状整地・SB06・SD15の3遺構に切り合い関係は無いと思われる。SB06を建てるために、最初に島状整地を盛り、その次にSD15を掘り上げ、最後にSB06を建てたと考えられる。SD15の島状整地以外の機能としては、雨落溝のような役割も考慮されるが、その簡易的な構造やその後の島状整地の解消を考えると、屋敷造成中の一時的な排水路であったと考えられる。

出土遺物の傾向は、陶器は肥前(九陶Ⅰ-2～Ⅱ期・1594～1650)がほとんどで、わずかに瀬戸・美濃(志野)が出土している。磁器は中国磁器(景德鎮窯・漳州窯)のみの出土で、肥前磁器は出土していない。その他土師器皿、漆器椀、木製品などが出土する。遺物の年代観は17世紀初頭～前半である。



第91図 SK06出土遺物

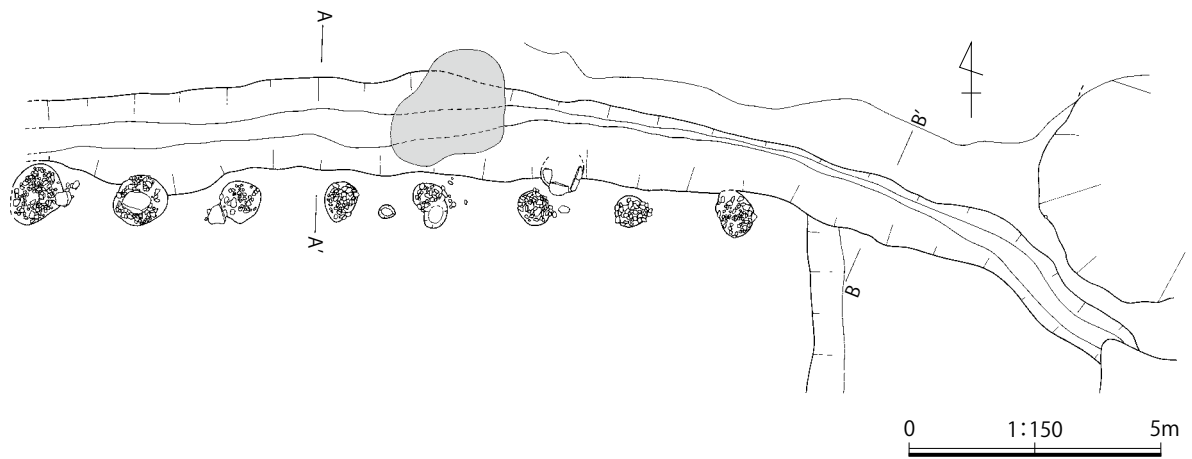


第92図 SK07出土遺物

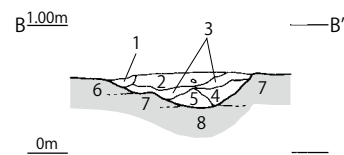
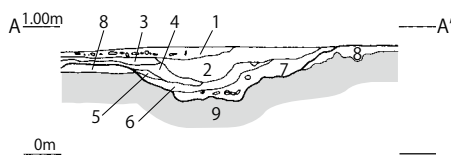
SD15 出土遺物 (第95図)

95-1～9は陶器である。このうち95-1～7は肥前で、95-1・2は中碗である。95-1の口縁端部はわずかに外反するもので、九陶Ⅱ期(1610～50)のものである。95-2は全体的に外反し、復元口径12.6cmを測るやや大形の碗である。外面に象嵌・黒化粧土による幾何学文様が見られる珍しい遺物で、九陶Ⅱ期(1610～40)のものである。95-3～5は小皿で、95-3は口径10.1cm、95-4は口径13.3cmを測る。いずれも見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2期(1594～1610)のものである。95-5は口径13.7cm、高台径4.9cm、器高3.8cmを測り、体部が直線的に広がる形状である。内面にへら彫りと白化粧土による装飾が見られ、見込みに印花文の押印を五弁花文状に配し、その周囲にへら彫りで2条の圏線を巡らせる。口縁部は白化粧土を使った放射状の波文が描かれる。また、白化粧土は見込みのへら彫り圏線、印花文上からも塗られている。見込みに砂目痕が残ることから、九陶Ⅱ期(1610～50)に該当するが、出土例はあまり確認されていない。95-6は大皿で、体部～高台の破片である。見込みに鉄絵による草花文が大きく描かれること、その形状などから九陶Ⅰ-2期(1594～1610)に該当する絵唐津大皿である。95-7は片口で、片口部分は付け根から破損している。口縁端部は玉縁状を呈し、見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ期(1590～1620)頃に生産されたものである。

95-8は瀬戸・美濃(志野)の向付である。口縁部～胴部の破片であり、器壁は厚く口縁部は内傾する。外面には鉄絵で木賊文とくまが描かれる。17世紀前半代に生産されたものであろう。



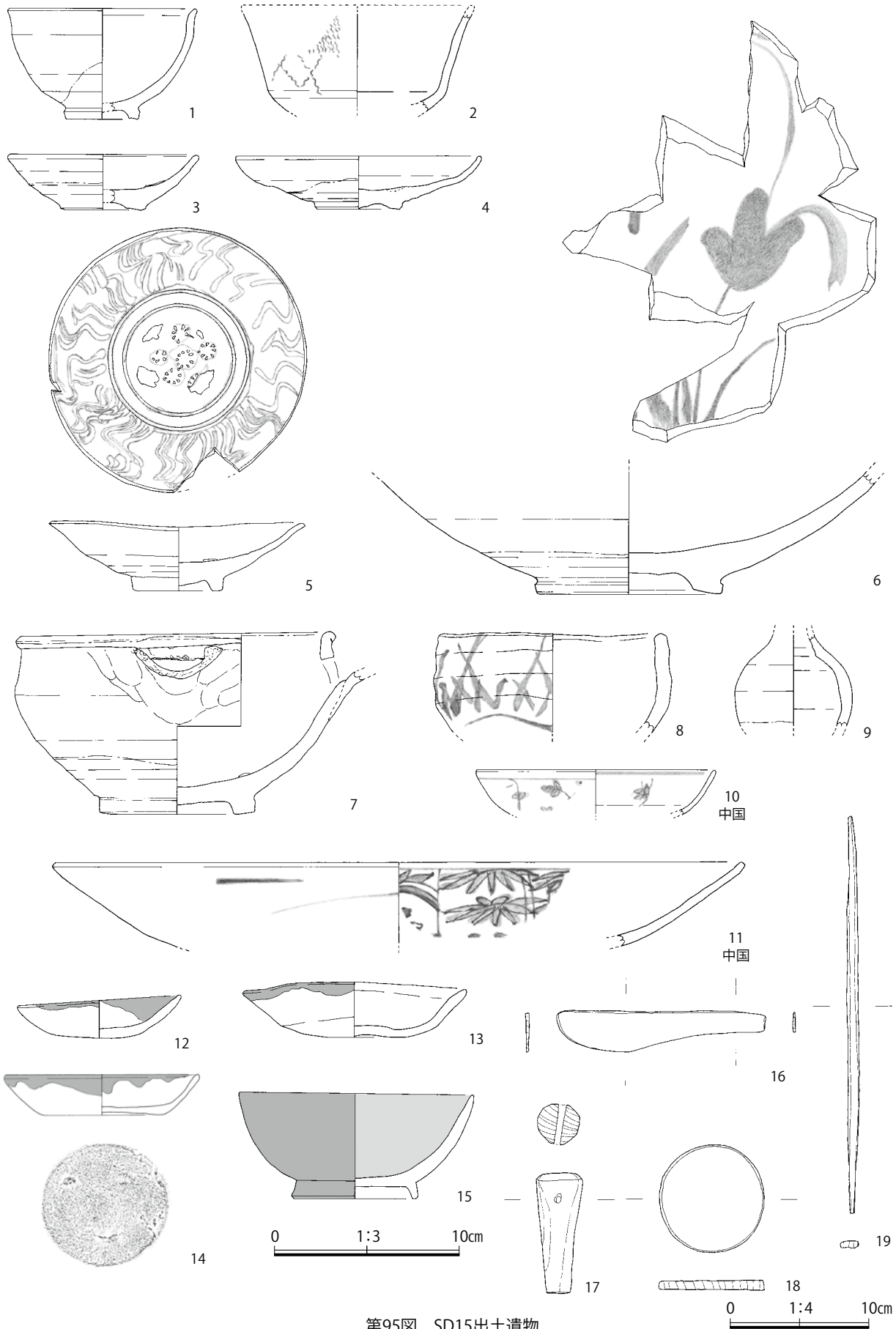
第93図 SD15平面図



- | | |
|-----------|----------|
| 1 灰黄褐色粗砂層 | 6 褐灰色粘土層 |
| 2 淡黄色粘土 | 7 褐灰色粘土層 |
| 3 灰黄褐色粗砂層 | 8 灰白色川砂層 |
| 4 灰黄褐色粘土層 | 9 A層 |
| 5 褐灰色川砂層 | |

- | | |
|-------------|----------|
| 1 黄橙色土 | 5 褐灰色粘土層 |
| 2 淡黄色粘土 | 6 暗褐色土 |
| 3 にぶい黄褐色砂質土 | 7 A層 |
| 4 にぶい黄褐色粘土層 | 8 I a層 |

第94図 SD15土層断面図



第95图 SD15出土遺物

95-9 は福岡の可能性が高い小瓶である。胴部最大径 6.4cm を測り、外面は黒色釉が掛かる。

95-10・11 は中国磁器である。95-10 は景德鎮窯の丸形小皿で、口径 13.1cm を測る。外内面に草花文の染付が描かれ、年代は 17 世紀前半のものである。95-11 は漳州窯の大皿で、復元口径 37.6cm を測る大形品である。口縁部は直線的に外傾する形状で、外内面に染付が見られ、内面に笹の葉が描かれている。年代は 16 世紀末～17 世紀初頭のものである。

95-12～14 は土師器で、95-12・13 は手づくね成形による京都系、95-14 は糸切り成形による在地系である。95-14 は底部に回転糸切り痕が残る。いずれも口縁部に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたことが窺える。

95-15～19 は木製品で、95-15 は高台が低いタイプの漆器椀である。外面は黒色、内面は朱色の漆が塗られており、無文である。95-16 は片刃篋で、最大長 15.2cm、厚み 0.3cm を測る薄手の作りである。95-17 は円柱形の栓で、長さ 8.8cm、直径 2.9～3.4cm を測る。上方に直径 2mm の貫通する孔が開いており、紐を通すためのものであったと推測する。95-18 は小形曲物容器の底板で、おそらく柄杓と思われる。直径 7.7cm、厚み 0.7cm を測る。95-19 は長さ 28.8cm、直径 0.5～0.8cm を測る白木の箸である。

第7項 SB07 (第96図)

SB07 は、礎石建物跡 SB06 (第88図) の北側に隣接する掘立柱建物跡である。建物の西側は調査地外へ、東側は基礎攪乱内へ続いている可能性がある。北側は、屋敷境(第4章)で述べた塀跡 SA01(第42図) が同時期に造られており、SD04 廃絶後の遺構として考えている。南側は、SB06 に隣接していた SD15 が埋められた直上に C-C' が掘られていることから、SD15 が廃絶された後に造られた建物であることが分かる。

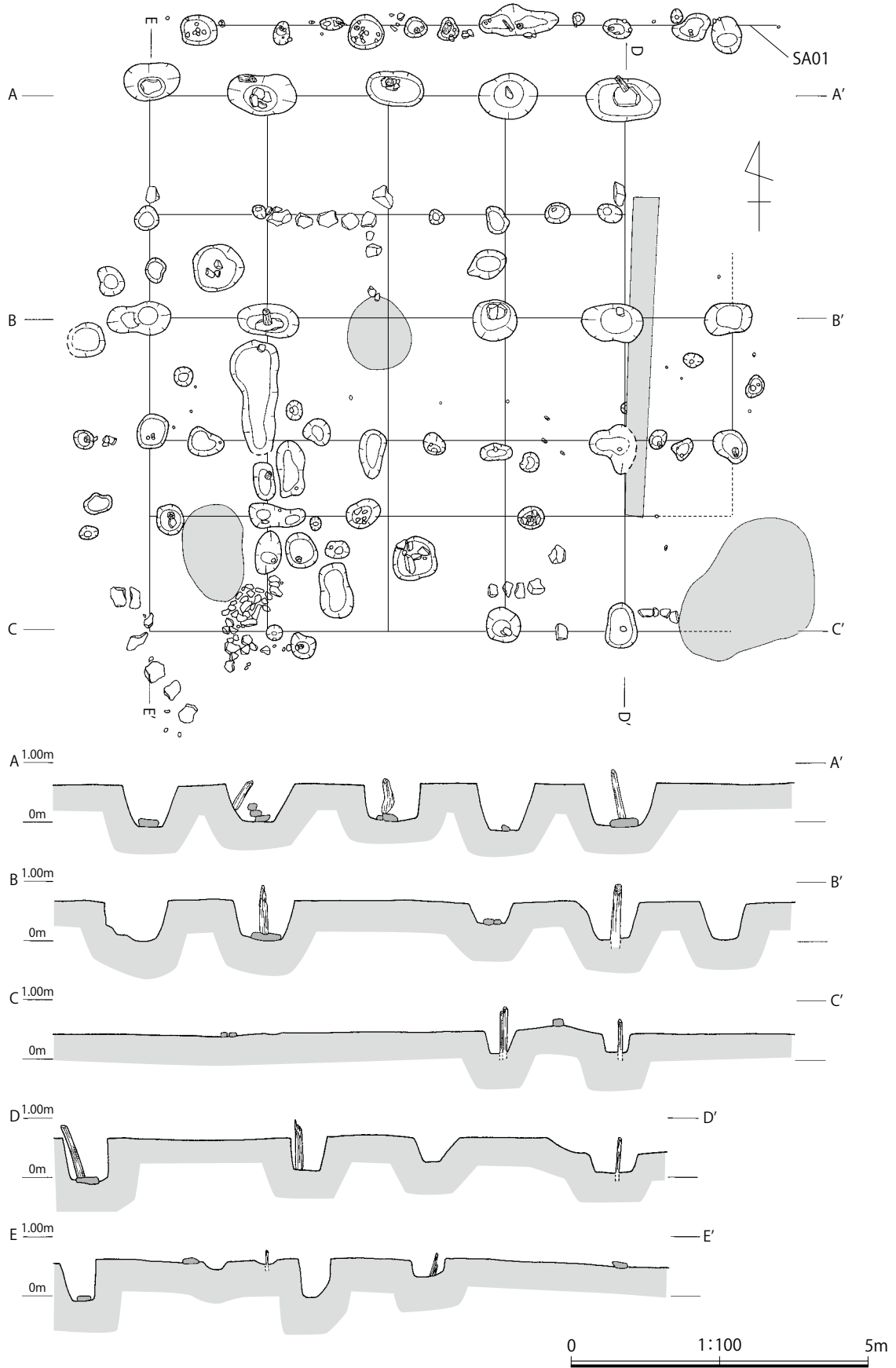
SB07 の規模は、東西方向 5 間以上 (9.8m 以上・柱間 1.9～2.0m)、南北方向 4.5 間 (9.0m・柱間 1.3～2.1m) である。また、SB06 の礎石と SB07 の掘立柱の並びが同列上にあることから、SB07 は島状整地解消後に造られた SB06 と関連が強い建物と理解できる。

SB07 の構造は掘立柱列によるもので、特に残存状況が良いのは A-A' で、いずれの柱穴も楕円形を呈し、規模は長辺 1.0～1.2m、短辺 0.55～0.75m、深さ 0.6～0.8m を測る。底面には礎盤石となる大海崎石が置かれており、その上に加工された直径 10～15cm、長さ 1.0m 以上の柱材が残っていた。

SB07 を構成する柱穴内及び範囲内からはわずかながら遺物が出土しており、そのうち肥前陶器、^{るつぼ} 埴塼は完形品であった。

SB07 出土遺物 (第97図)

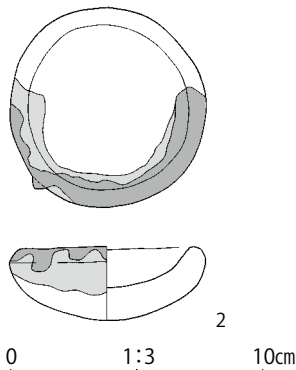
97-1 は肥前陶器の折縁形小皿で、口縁部は湾曲するように折れ曲がる特異な形状を呈する。底部は兜巾・三日月高台であり、見込みに胎土目痕が残ることから、九陶 I -2 期 (1594～1610) のものと思われる。97-2 は埴塼で、口径 6.9cm、器高 3.0cm、器壁 1.2cm を測る。口縁端部は丸い形状で、そのまま底部まで下りる。口縁部の約 50% に黒色物が付着しており、使用していく過程で被熱し、



第96图 SB07平面图·断面图



その胎土はかなり硬化している。また、部分的に赤く変色しているところも見られる。



第97図 SB07出土遺物

第8項 第1遺構面遺構外出土遺物（第98・99図）

98-1～12は陶器である。このうち98-1～10は肥前陶器で、98-1は折縁形小坏である。口縁部は明確に外傾し胴部は若干の膨らみを持つ。98-2～4は中碗で、98-2は丸形、98-3は外折形、98-4は端反形である。98-1～4は九陶Ⅱ期（1610～50）のものである。98-5～9は小皿及び向付で、98-5は口径10.4cm、高台径4.6cm、器高3.1cmを測る丸形小皿である。露胎部分が濃茶色をしており、肥前ではあまり見られない傾向であるとの指摘を受けているので、福岡（上野・高取系）の可能性を考えている。⁽³⁶⁾

98-6は逆ハ字状に外傾するもので、見込みに胎土目痕が残る。98-7は隅切方形向付で、四隅が斜めに成形される量産形の絵唐津である。内面には鉄絵が見られ、見込みに草花文、口縁部に二重線が描かれる。見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2期（1594～1610）のものである。98-8・9は見込みに砂目痕が残る九陶Ⅱ期（1610～50）の小皿で、98-8は碁笥底高台、98-9は折縁形を呈する。98-10は復元口径31.4cmを測る大皿で、口縁部はわずかに折れる折縁形である。内面には鉄絵による草花文が描かれ、九陶Ⅰ-2期（1594～1610）頃のものである。98-11は備前の播鉢で、口縁端部には2条の太い沈線を巡らす備前特有の形状であり、年代は16世紀末～17世紀初頭のものである。98-12は中国（交趾焼）の華南三彩小皿である。口径5.7cm、高台径3.2cm、器高1.0cmの極小皿で、鮮やかな青色釉が掛かる。型押成形による形状で、高台内には二重の陽刻印が見られる。

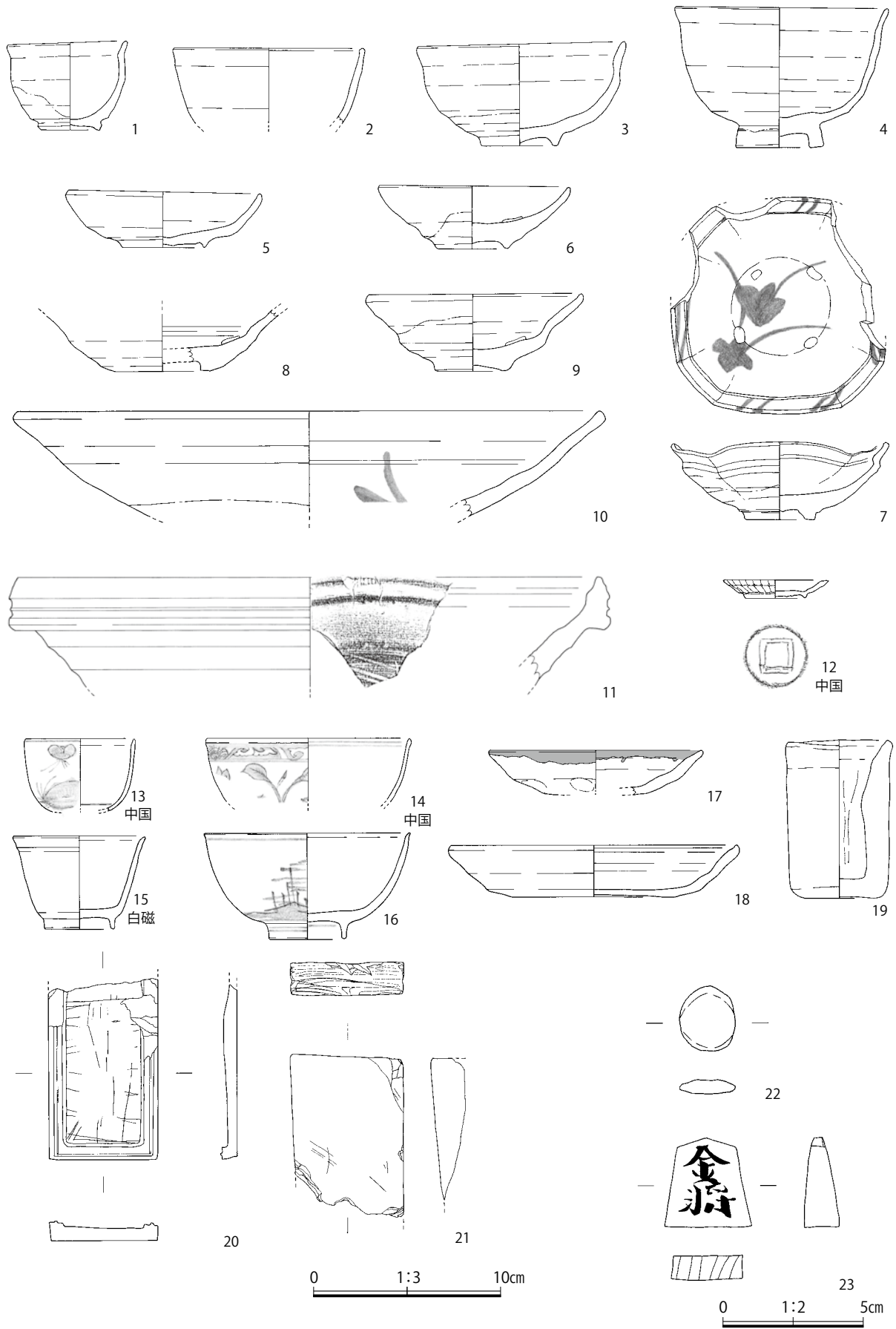
98-13・14は中国磁器（景德鎮窯）で、98-13は腰張形小坏で、外面に蝶が描かれる。98-14は丸形中碗で、外面に草花文をモチーフとした文様が描かれ、口縁端部内面には圈線2条が巡る。いずれも薄手で精巧な作りであり、年代は17世紀前半頃のものである。98-15・16は肥前磁器である。98-15は白磁端反形小坏、98-16は外面に風景文を描いた丸形中碗である。九陶Ⅲ期（1650～90）年代のもので、この面から出土した肥前磁器はこの2点のみである。

98-17・18は手づくね成形による京都系の土師器皿で、98-17は口縁端部に油煙痕が顕著であることから、灯明皿として使用されていたと思われる。98-18は口径15.6cmを測る。98-19は土器で、焼塩壺である。器高8.5cmの筒形で、口縁部は先細り、内面にしぼり痕が見られる。

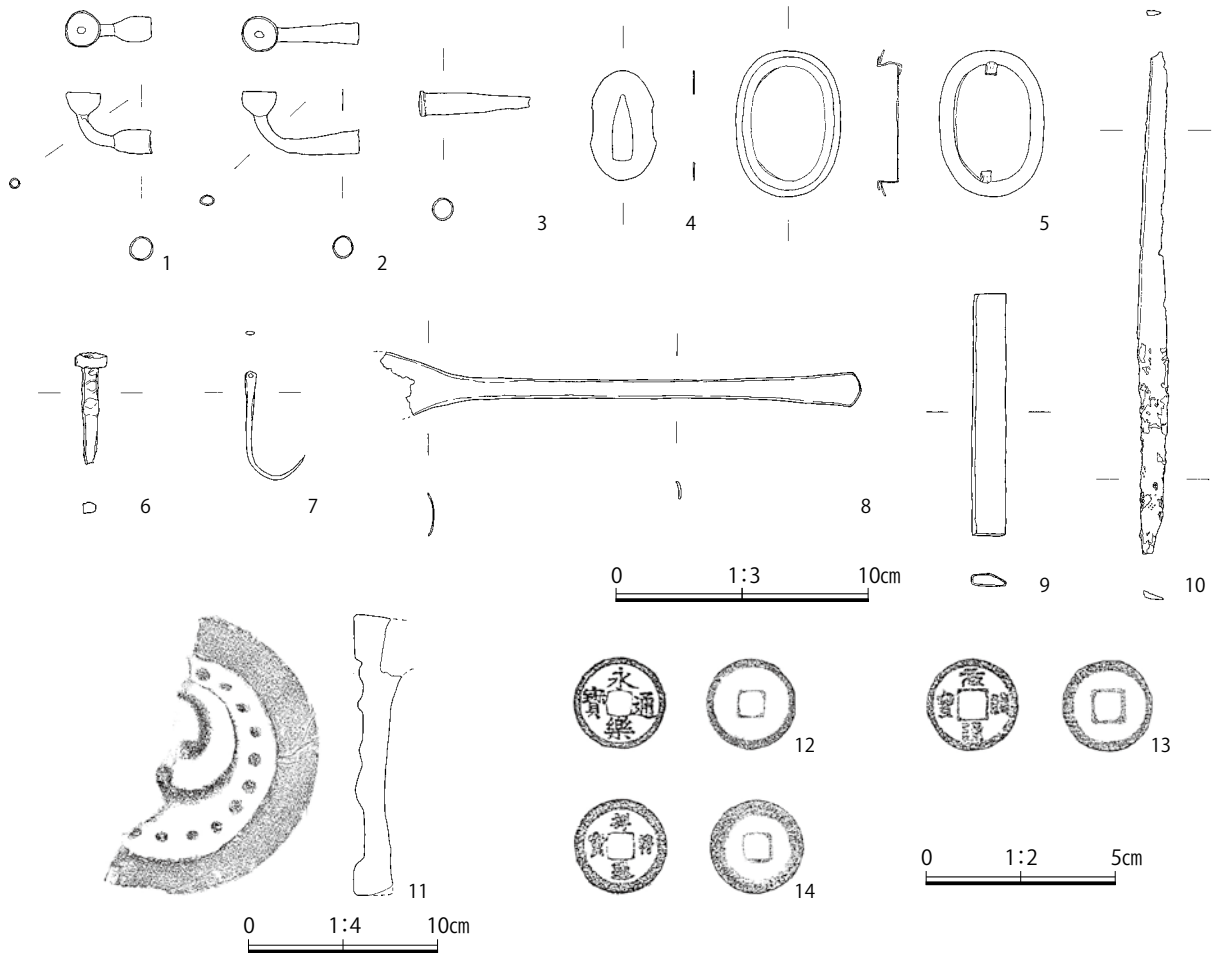
98-20～22は石製品である。98-20は硯の下方部分で、幅5.9cmを測る。98-21は砥石で、4面に使用痕が見られる。98-22は黒色の碁石で、直径2.3cm、厚み0.5cmの楕円形である。

98-23は木製品で、将棋の駒「金将」である。最大長・幅3.2cm、厚み0.9cmを測る。

99-1～10は金属製品である。99-1～3は煙管で、99-1・2は雁首、99-3は吸口である。99-4は切羽、99-5は襖の把手部分である。99-6は頭部が方形の釘、99-7は釣り針状の製品である。99-8は匙状で最大長18.2cmを測る薄手の製品である。99-9・10は小柄で、99-9は無文の柄である。99-10



第98図 南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物 (1)



第99図 南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物（2）

は刃部分のみの残存である。

99-11は軒丸瓦の瓦当部分である。外径14.8cm、残存珠文11個、三巴文は左巻である。

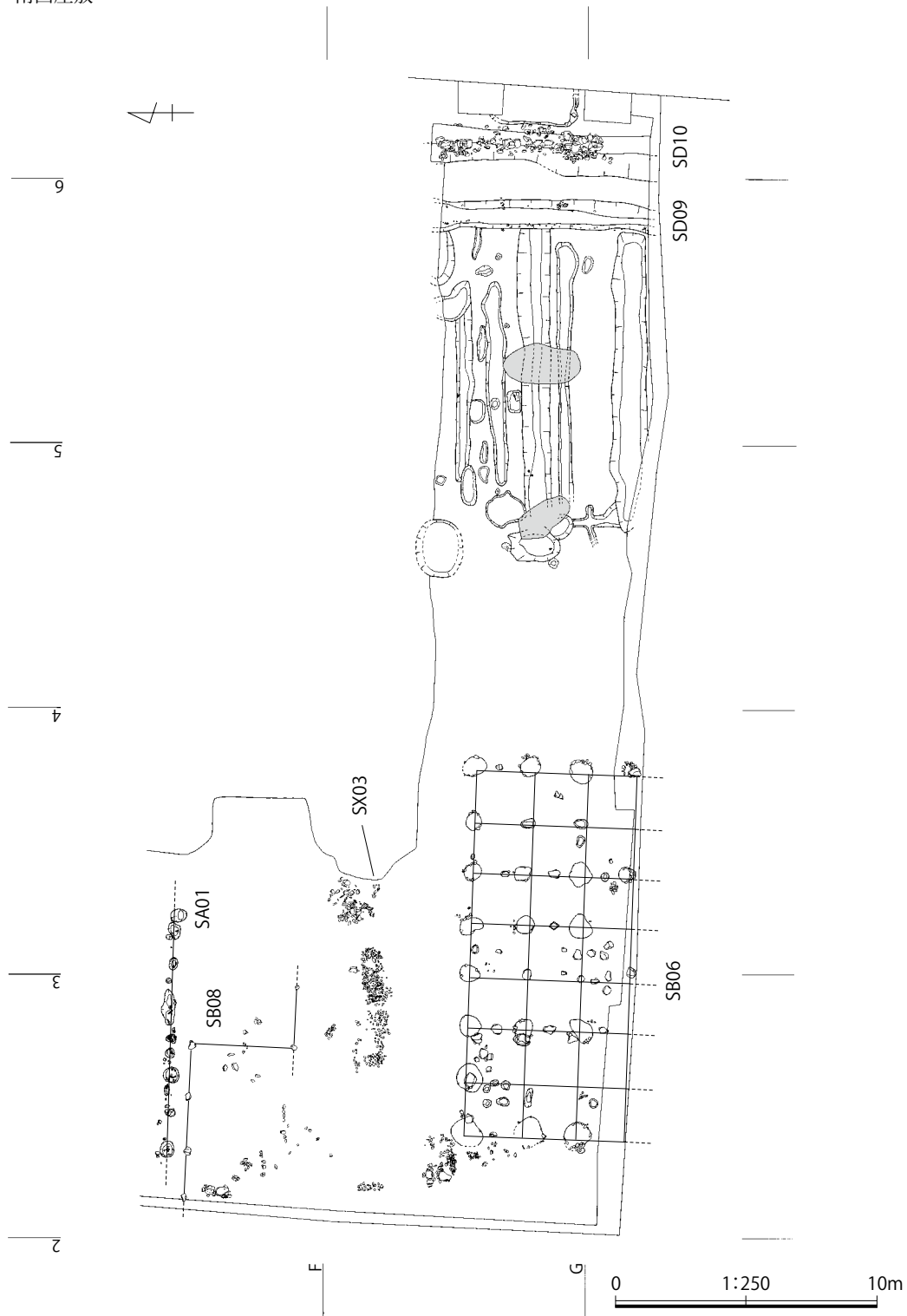
99-12～14は銭貨で、いずれも模鑄銭である。99-12は「永楽通寶」、99-13は「元祐通寶」、99-14は「祥符元寶」である。

第3節 第2遺構面

第1項 遺構面の概要（第100図）

第2遺構面は、標高0.8～1.15mで検出し、遺構面を形成するB-1層は層厚10～20cmを測る。第2遺構面では、第1遺構面で検出したSB06（第88図）が継続して存在しており、その他の主な遺構は礎石建物跡SB08、礎敷遺構SX03などである。同時期に造られた屋敷境は、北側はSA01が存続していた可能性が考えられ、東側はSD09・10が対応する。

遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・木製品・瓦などが出土している。このうち陶器は肥前（九陶Ⅱ期・1610～50）が多く、Ⅲ・Ⅳ期（1650～17世紀末）のものもわずかに見られる。磁器は、中国磁器（景德鎮窯・漳州窯）と肥前磁器（九陶Ⅱ-2～Ⅲ期・1630～90）が両方出土しており、肥前が中国をやや上回り始める。土師器は京都系と在地系が混ざり合う状況である。



第100図 南西屋敷 第2遺構面遺構配置図

第2遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、城下町初期造成土（A層）の上に形成された第1遺構面を埋め立てた面であることから、17世紀中頃～18世紀初頭頃を想定している。

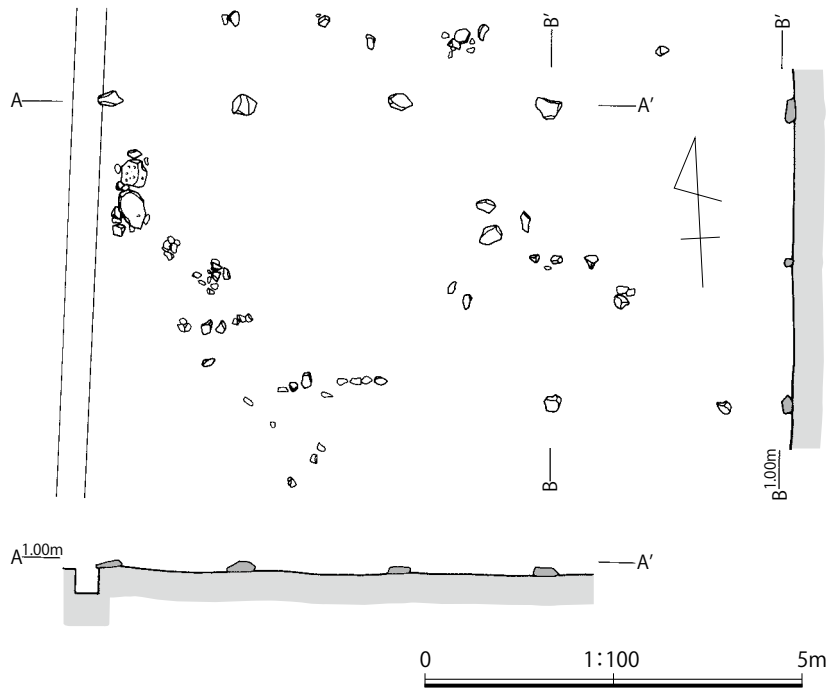
以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 SB08（第101図）

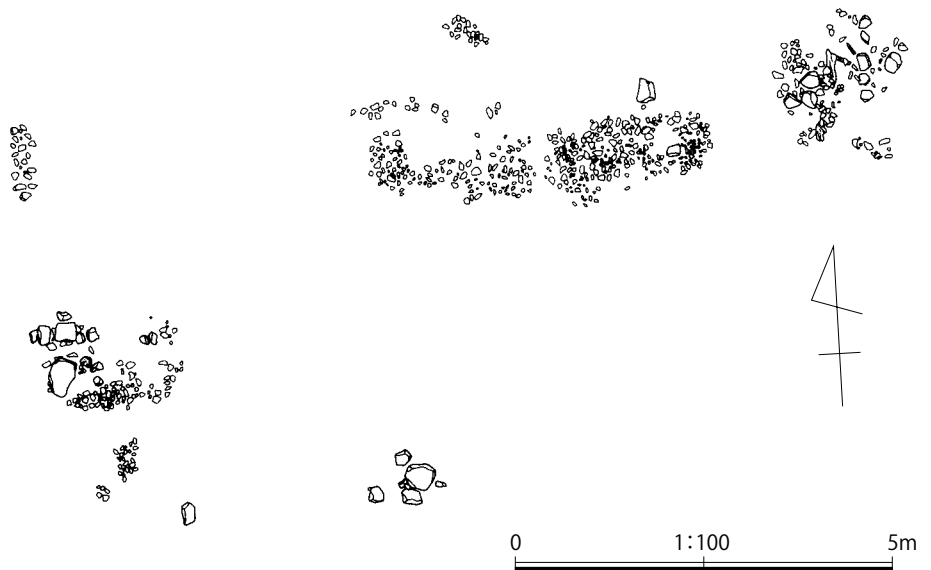
SB08は南西屋敷の北側寄りに位置しており、第1遺構面ではSB07（第96図）が所在していた

場所の上層で検出した礎石建物跡である。礎石がほぼ同一間隔で並び、一部南側に広がることから、残存状況は悪いが礎石建物跡と判断した。

SB08の規模は東西方向に3間以上(5.8m以上・柱間約1.9m)、南北方向に2間(3.9m・柱間1.95m)と復元した。周囲に10～20cm大の小石が散在するが、礎石建物跡を構成する石の可能性は低い。石の天端は全て標高1.0m付近を測る。SB08のA-A'のすぐ北側には、塀跡SA01が存続していた可能性が考えられる。また、第1遺構面から存続するSB06の北側建物として、掘立柱建物跡SB07が礎石建物跡SB08へ造り替えられたものと推察される。なお、この遺構に確実に伴う遺物は出土しなかった。



第101図 SB08平面図・断面図



第102図 SX03平面図

第3項 SX03 (第102図)

SX03はSB06とSB08の間に位置する小石が敷き詰められた遺構である。礫は5～15cm程度の大きさのもので、東西方向に広がる様相である。規模は、東西方向7.5m、南北方向1.3mを測る。なお、南側の礫群の一部を図化できなかったため、範囲は写真図版20図を参照されたい。全体像は明確ではないが東西方向に長い範囲であったと思われる。SX03の性格は現時点では不明であるが、同様の礫敷遺構は、屋内では台所(炊事場)などの水を扱う場所に見られる遺構であり、屋外では雨落溝と

して確認されている。また、検出時点では礫がまばらでも、当時は隙間無く敷き詰められていたことも考えられる。あるいは、SB06 と SB08 の空間を埋める施設であったかもしれない。

SX03 からは小石に混じって多くの遺物が出土した。陶磁器・土師器などの器類、杓文字や栓、荷札木簡、折敷の底部などの木製品、基石、土錘など、その種類は多岐に渡る。

SX03 出土遺物（第 103 図）

103-1～5 は肥前陶器である。103-1 は丸形小皿で、見込みに胎土目痕が残る。103-2・3 は向付で、103-2 は口縁端部が鑿縁状を呈し、腰部分が直角気味に折れ曲がり、底部の器壁が厚い形状である。見込みに目跡が見られないことから、窯詰めの際一番上に置かれた製品であったと考える。103-3 は隅切方形の向付で、口縁部は折縁状を呈する。内面に鉄絵による草花文、口縁部に 2 条の線が描かれる。見込みには胎土目痕が残る。103-1～3 は九陶Ⅰ-2 期（1594～1610）に該当する。103-4 は大瓶で、胴部下方～底部の破片である。底径 14.0cm を測る大形品で、全面叩き成形で作られている。また、底部外面には 1 条の圏線と陽刻印「大」（「六」か）が見られる。年代は九陶Ⅱ-1 期（1600～30）のものである。103-5 は片口鉢で、片口部分は欠損している。口縁端部は玉縁状を呈し、口縁部は垂直に立ち上がり、胴部で明確な稜線が入って膨らみながら下りる。底部は兜巾・三日月高台である。九陶Ⅰ期（1590～1610）頃のものである。

103-6 は備前の播鉢である。復元口径 30.2cm を測る大形品で、底部は残存していない。口縁端部は幅 3.1cm で、外面に 2 条の太い沈線が引かれている。内面に 9 本単位のスリ目が斜め方向に付けられる。年代は 17 世紀前半のものである。

103-7～10 は磁器である。103-7・8 は中国磁器（景德鎮窯）で、103-7 は口縁部が大きく外に折れる向付である。全体的に薄手で、外面には瑠璃釉、内面には型打陽刻による区画割り、草花文などが見られる。103-8 は丸形中碗で、器壁は薄く染付は外面のみに見られる。区割りされた中に馬が駆けるモチーフが描かれ、内面には型打陽刻による草花文などの文様が見られる。103-7・8 の年代は 17 世紀前半頃のものである。103-9 は中国磁器（漳州窯）の丸形中碗で、染付は外面と見込みに見られ、漳州窯特有の草花文が描かれる。年代は 17 世紀前半頃のものである。

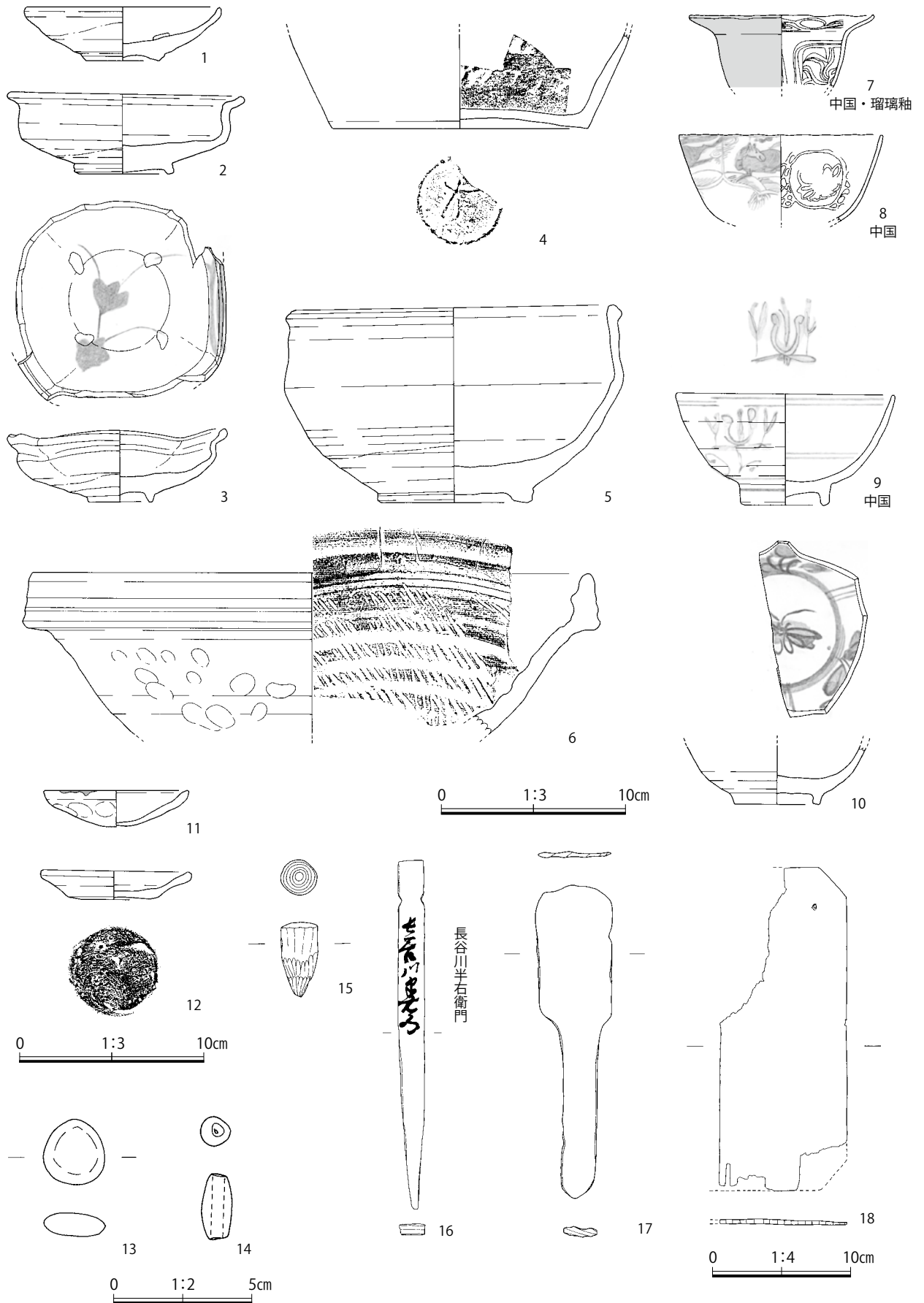
103-10 は肥前磁器の中碗で、胴部～高台の破片である。染付は内面のみに見られ、見込みに大きな蝶、胴部は区割りされ、その中に草花文が描かれる。また、断面に漆継ぎ痕が残る。形状や染付から、九陶Ⅱ-2 期（1630～50）のものである。

103-11・12 は土師器で、103-11 は手づくね成形による京都系の極小皿である。口径 7.8cm を測る小形の皿で、体部外面に指痕が残る。また、口縁端部に油煙痕が付着することから、灯明皿として使用していたものと思われる。103-12 は底部に回転糸切り痕が残る在地系の極小皿である。

103-13 は石製品で、黒石の基石である。直径 2.4cm、厚み 0.8cm を測るやや楕円形である。

103-14 は土製品で、最大長 2.4cm、最大径 1.1cm を測る土錘である。中心には直径 0.4cm の孔が貫通する。

103-15～18 は木製品である。103-15 は円柱形の栓が独楽で、約半分辺りから先端に向かって円錐状に削られる。最大長 5.4cm、直径 2.7cm を測る。



第103図 SX03出土遺物

103-16 は荷札木簡で、最大長 25.3cm、最大幅 1.9cm、厚み 0.8cm を測る細長い形状である。上方部分は両側から切り込みが入り、荷物に付ける紐を結ぶ部分が作られている。片面のみに墨書文字が書かれており「長谷川半右衛門」とある。この人物は堀尾家臣（1,000 石・江戸）である。⁽³⁷⁾「長谷川半右衛門」宛てか、「長谷川半右衛門」が送ったものかは不明である。南西屋敷地の歴代屋敷主の中に「長谷川角左衛門（400 石・江戸）」という人物がいたことが「堀尾期絵図」から読み取れる。（第 3 図）。103-16 と「長谷川」という名字が同一で、勤務地も同じく「江戸」であること、出土した屋敷地も一致することなどの共通点が挙げられるが、明確な関連は見出せていない。いずれにせよ、当遺構面の実年代を示す貴重な資料である。

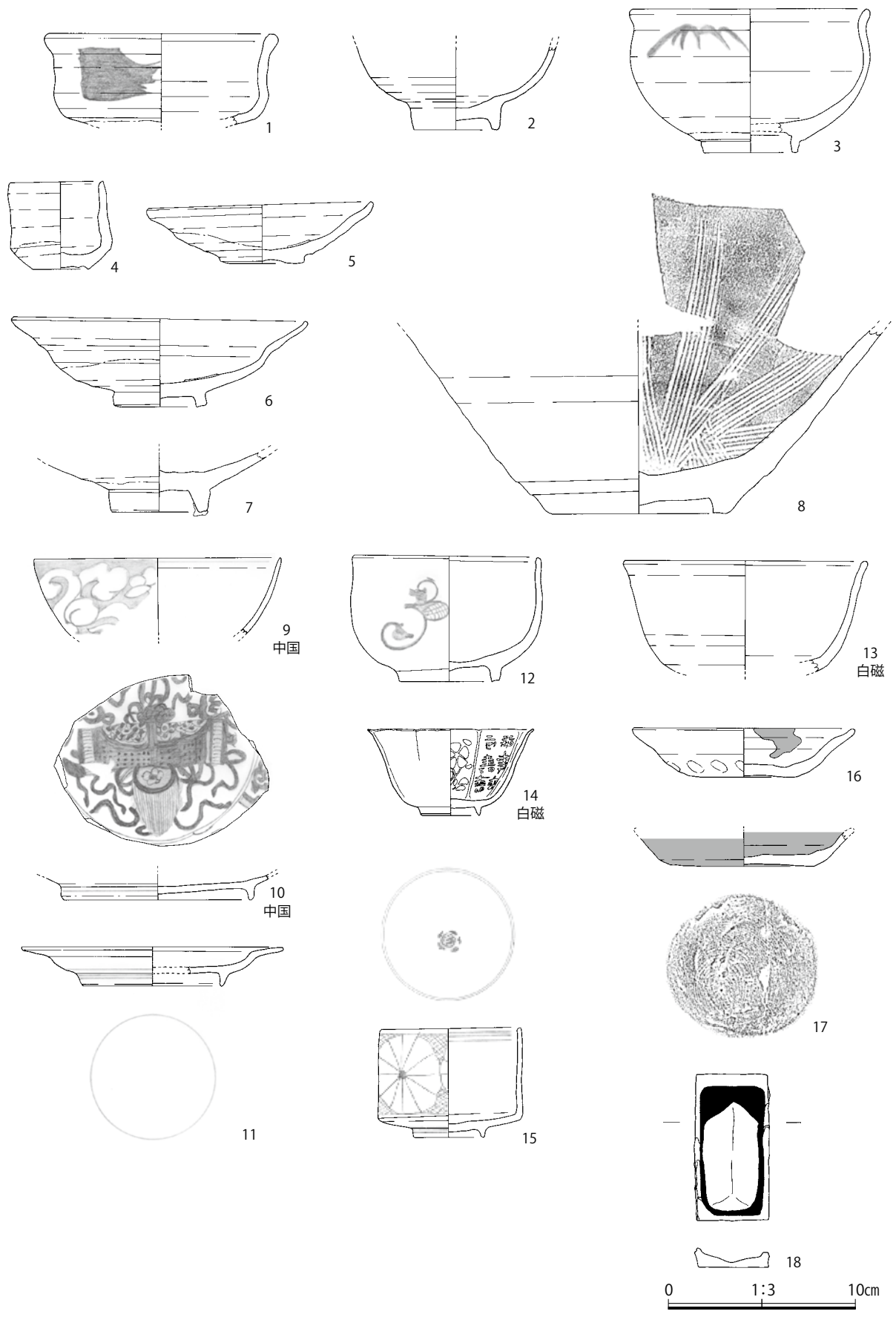
103-17 は杓文字で、刃・柄部分ともに丸みを帯びた加工が成されているが、劣化が著しく木目が目立つ状態である。103-18 は折敷の底板で、一辺 23.4cm を測る。四隅は斜めに切り落とされ、1ヶ所ずつ穿孔が開いている。

第 4 項 遺構外出土遺物（第 104 図）

104-1 ～ 8 は陶器で、このうち 104-1・2・4 ～ 8 は肥前陶器である。104-1 は碗の一種で、胴部～口縁部にかけて垂直に立ち上がり、口縁端部で玉縁状になりつつ外反する形状である。復元口径 11.8cm を測り、上記の形状などから杓形碗くつがたと思われる。外面に鉄絵が見られ、刷毛で雑風に描かれる。年代は九陶Ⅰ-2 期（1594 ～ 1610）頃である。104-2 は呉器手碗で、九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650 ～ 1780）のものである。104-3 は京都・信楽系の大碗で口縁端部は外反する。口縁部に鉄絵で笹文が描かれ、18 世紀代のものである。104-4 は筒形小坏で、口径 5.0cm、高台径 3.0cm、器高 4.7cm を測る小形品である。104-5 は折縁皿で、見込みに砂目痕が残る。104-6 は口径 15.8cm、高台径 5.0cm、器高 4.8cm を測る折縁形中皿で、見込みに砂目痕が残る。104-7 は中皿で、底部～高台の破片である。高台は断面四角形状を呈し、畳付けに砂目痕が残る。104-4 ～ 7 はいずれも九陶Ⅱ期（1610 ～ 50）に該当する。104-8 は播鉢である。高台～胴部にかけて逆ハ字状であり、直線的に開く形状である。内面は、放射状に広がる 7 本単位の摺目が入り、年代は 18 世紀代のものである。

104-9 ～ 15 は磁器である。このうち 104-9・10 は中国磁器で、104-9 は漳州窯の丸形中碗である。染付は外面のみに見られるが、薄く曖昧なものである。104-10 は景德鎮窯の芙蓉手中皿で、底部～高台の破片である。見込みに宝文が描かれ、高台内に放射状鉋痕が残る。被熱痕が顕著であり、二次的な事象で火を受けたものと思われる。

104-11 ～ 15 は肥前磁器で、104-11 は折縁形中皿である。口縁部は強く屈曲し水平気味に突出する。染付は圏線のみで、外面と高台内に見られる。また、断面には漆継ぎ痕が残る。九陶Ⅲ期（1650 ～ 90）のものである。104-12 は腰張形中碗で、口縁部は若干内傾する。104-13 は白磁端反形大碗で、復元口径 13.0cm を測る。104-14 は白磁端反形小碗で、全体的に器壁が薄い。型押成形による形状で、内面は型打陽刻によって区割りされた中に草花文と寿文が描かれる。同一器種が数点出土していることから、セット品であったと思われる。年代は九陶Ⅱ-2 ～ Ⅲ期（1610 ～ 90）のものである。104-15 は筒形碗で、口縁部にかけて内傾気味である。外面に大きな菊花文を連続して配し、その周



第104図 南西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物

罫には斜格子文を隙間無く描き入れている。見込みには圏線2条と五弁花文を描く。九陶Ⅴ期(1780～1810)に該当する遺物はこの1点のみで、第2遺構面で出土している他の遺物よりも新しい時期であるため、混入品の可能性が高い。

104-16・17は土師器で、104-16は手づくね成形による京都系の小皿である。底部外面に指痕が強く残る。104-17は底部に回転糸切り痕が残る在地系の小皿である。いずれも油煙痕が付着しているが、104-17は特に著しく、全面に渡り真っ黒に変色している。

104-18は石製品で、小形の硯である。長さ7.9cm、幅4.0cm、厚み1.0cmを測る小形品で、墨を溶く部分は、使用過多により抉れるようにへこんでいる。

第4節 第3遺構面

第1項 遺構面の概要(第105図)

第3遺構面は、標高1.1～1.3mで検出し、遺構面を形成するB-2層は層厚25～40cmを測る。第3遺構面で検出した遺構は、礎石建物跡2棟(SB09・10)、土坑1基(SK16)、桶埋設遺構2基(SX04・05)などで、その他性格不明の土坑や浅い溝状遺構など、多数の遺構を検出した。同時期に造られた屋敷境は、北側はSD05、東側はSD11が対応する。

遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・木製品・銭貨・瓦などが出土している。陶器は肥前が減少し、京都・信楽系、瀬戸・美濃、在地(布志名)が増加する。肥前以外の陶器は18世紀代～19世紀代にかけての幅広い時代の遺物が入り込む。磁器に関しては、肥前磁器(九陶Ⅳ～Ⅴ期・17世紀後半～19世紀代)が一定量出土している。また、九陶Ⅲ期(1660～70)の肥前・有田の染付大皿なども少量であるが出土している。なお、中国磁器(景德鎮窯・17世紀前半頃)も出土しているがその量はごくわずかである。土師器は在地系が増え、京都系がほぼ出土しなくなる。

第3遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、第2遺構面の上面に造成された遺構面であることから17世紀末～19世紀代を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 SB09(第106図)

SB09は南西屋敷地の調査範囲の北側に位置する礎石建物跡である。栗石を伴う礎石で構成されており、礎石は全て抜き取られていた。SB09は南北軸から東に4度ずれる建物軸である。

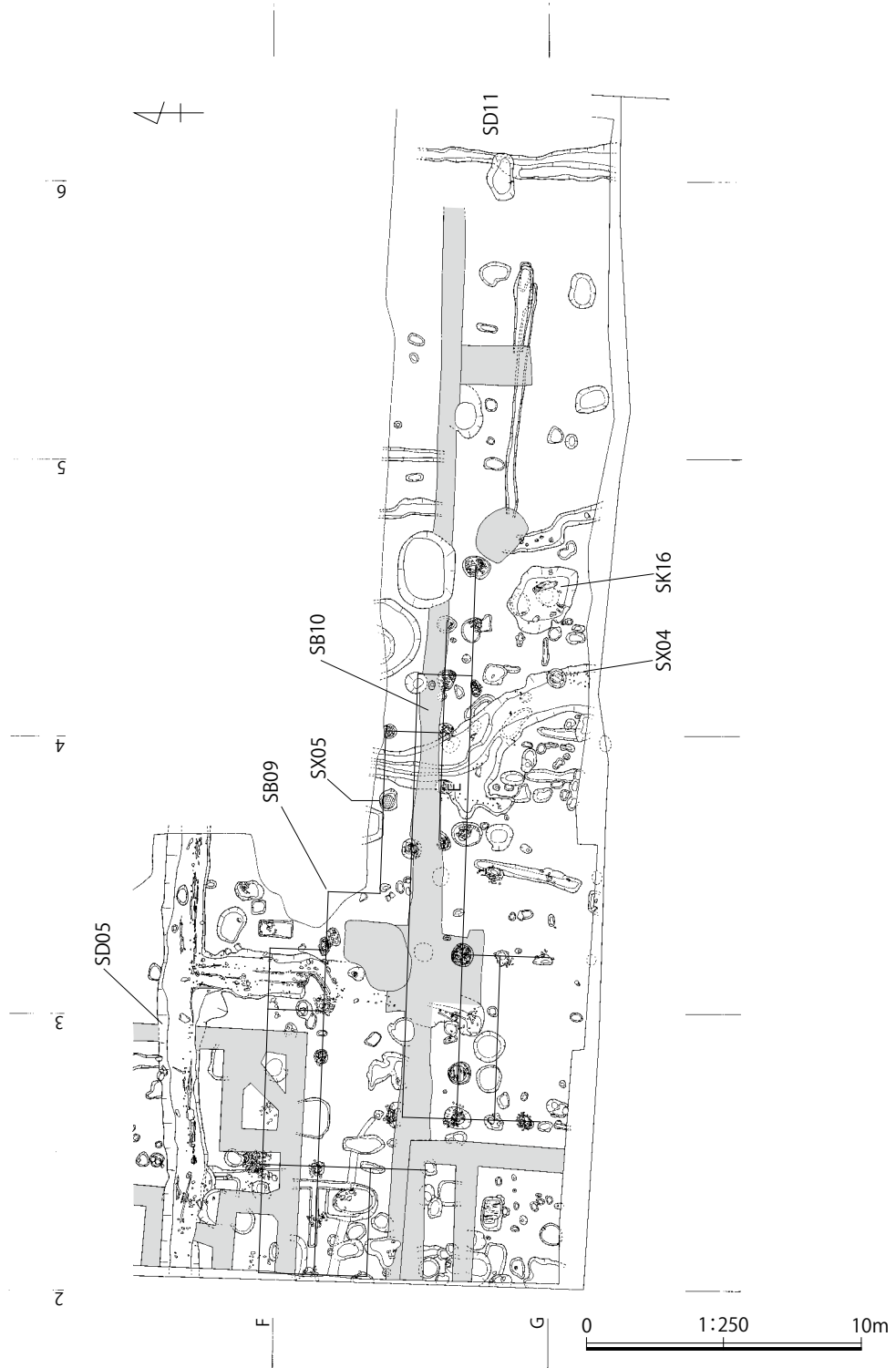
規模は、東西12間以上(23.6m・柱間1.96m)、南北3間以上(6.1m、柱間2.0m)で、礎石はまばらに残存している。SB09の北端礎石列の北側には屋敷境SD05が造られていることから、北側の建物範囲はここまでと考えられる。また、SD05(第4章)で詳述したが、SD05の南北溝部分はSB09の下部に入り込むことから、SB09に伴う排水施設も兼ねていた可能性が考えられる。

SB09の範囲内から出土した遺物は、陶器・磁器・土師器・土器・金属製品などで、年代は概ね18～19世紀代のものが多く見られる。

SB09 出土遺物 (第107図)

107-1・2は陶器である。107-1は京都・信楽系の端反形小碗で、胴部は強く稜線が入り、白色釉で貫入が入る。年代は18世紀代のものである。107-2は在地(布志名)の蓋付鉢の蓋で、外面は布志名特有の緑色釉が掛かる。年代は19世紀代のものである。

107-3～6は磁器である。107-3は瀬戸・美濃の端反形小碗で、器壁が非常に薄手である。染付は外内面に見られ、草花文をモチーフとした文様が全面に配される。また、断面に焼継ぎの痕跡が残る。19世紀代のものである。107-4・5は肥前で、107-4は白磁紅小皿である。口径6.2cm、高台径2.2cm、



第105図 南西屋敷 第3遺構面遺構配置図

器高 2.2cm の小形品で、型押成形により外面に蛸唐草文の陽刻が見られる。九陶Ⅴ期（1850～60）に限定できる。107-5 は丸形中碗蓋で、つまみ径が 5.4cm とやや大きい。染付は外面に松文、器文、見込みには岩波文が描かれる。九陶Ⅴ期（1820～60）のものである。107-6 は口径 12.4cm、高台径 7.9cm、器高 6.3cm を測る大形広東碗である。染付は外内面に見られ、風景文などが描かれる。大形の広東碗は九陶Ⅴ期（1780～1810）頃に作られる。

107-7・8 は在地系の土師器で、底部に回転糸切り痕が残る。107-7 は全面が黒く変色しており、灯明皿として使い込んだものと思われる。107-8 は口径 12.4cm の中皿である。

107-9 は土器で、火消壺の蓋と思われる。輪状つまみが付く形状で、口径 18.8cm を測る大形品である。天井部内面に煤が付着していることから、長期的に使用されていたことが窺える。

107-10・11 は金属製品で、鉄製の角型釘である。107-10 は長さ 5.7cm、107-11 は長さ 8.2cm を測る。

第3項 SB10（第106図）

SB10 は SB09 の南側に位置する礎石建物跡である。建物の構造、軸、礎石の残存状況などは SB09 とほぼ同一で、規模は東西 10 間以上（19.6m・柱間 1.96m）、南北 4 間以上（5.3m・柱間 1.3～2.0m）で、南北方向の間数が変則的な状態である。SB09 と同一軸ながら、SB10 は南側にずれる様相であるので、別の建物として提示した。

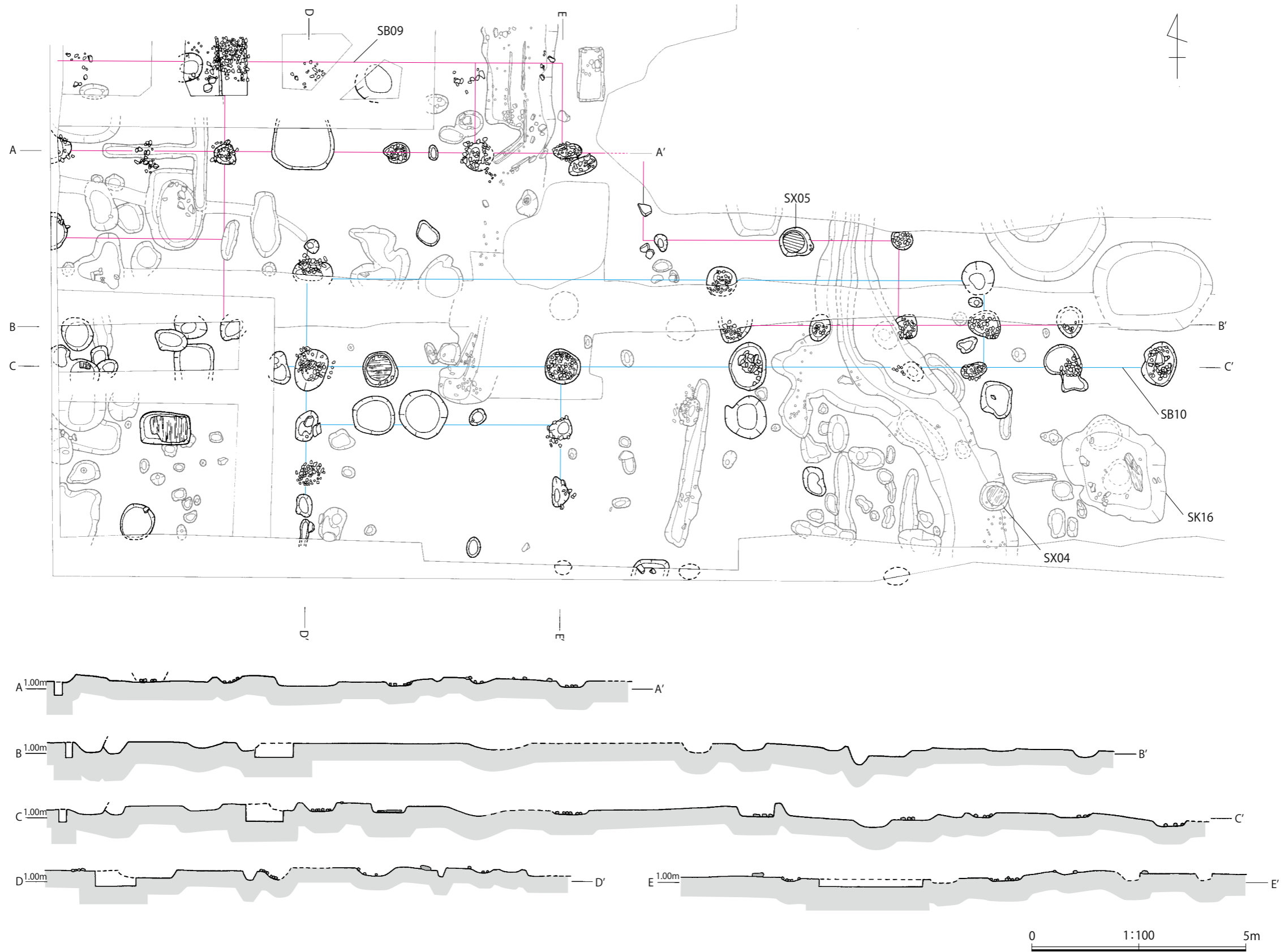
SB10 の範囲内から出土した遺物は陶器・磁器・土師器などで、年代は SB09 とほぼ変わらない 18～19 世紀代を示すが、若干古手の陶磁器も出土している。

SB10 出土遺物（第108図）

108-1～3 は陶器である。108-1 は肥前陶器の丸形小皿で、底部は兜巾・三日月高台である。見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2 期（1594～1610）のものである。108-2 は香炉に似た器である。筒形を呈し、口径 6.5cm、高台径 6.0cm、器高 5.2cm を測る。外面は荒く面取りされ、その上からヘラ描きによる草花文が見られる。高台部分は 4ヶ所に半月状の抉りが見られ、底部外面には工具で削った痕跡が残されている。産地については、瀬戸・美濃系か関西系の可能性が考えられる。108-3 は在地（布志名）の鉢で、口縁端部は玉縁状を呈する。年代は 19 世紀代のものである。

108-4～11 は肥前磁器で、108-4・5 は有田の大皿である。108-4 は復元口径 29.3cm を測る折縁形大皿で、口縁部～体部の破片である。染付は外内面に見られ、草花文などが描かれる。108-5 は復元口径 23.9cm、高台径 15.7cm、器高 2.3cm を測る丸形大皿で、扁平な形状を呈する。染付は外内面に見られ、口縁部内面に牡丹唐草文、外面に花唐草文がそれぞれ全周する。108-4・5 の年代は九陶Ⅲ期（1660～70）にほぼ特定できる。また、いずれにも被熱痕が顕著に残る。

108-6・7 は中碗である。108-6 は浅半球形で、外内面に直径約 4.0cm の菊花文を連続して配し、その間を斜格子文で埋めている。九陶Ⅴ期（1810 年）に大量に作られる器である。108-7 は腰部分が強く張り出す形状で、高台は小さく低い。染付は、外面に山水文と紅葉文、口縁部内面に四方襷文、見込みに圏線 2 条と五弁花文が描かれる。形状や染付から九陶Ⅳ期（1740～80）の特徴を凝縮し



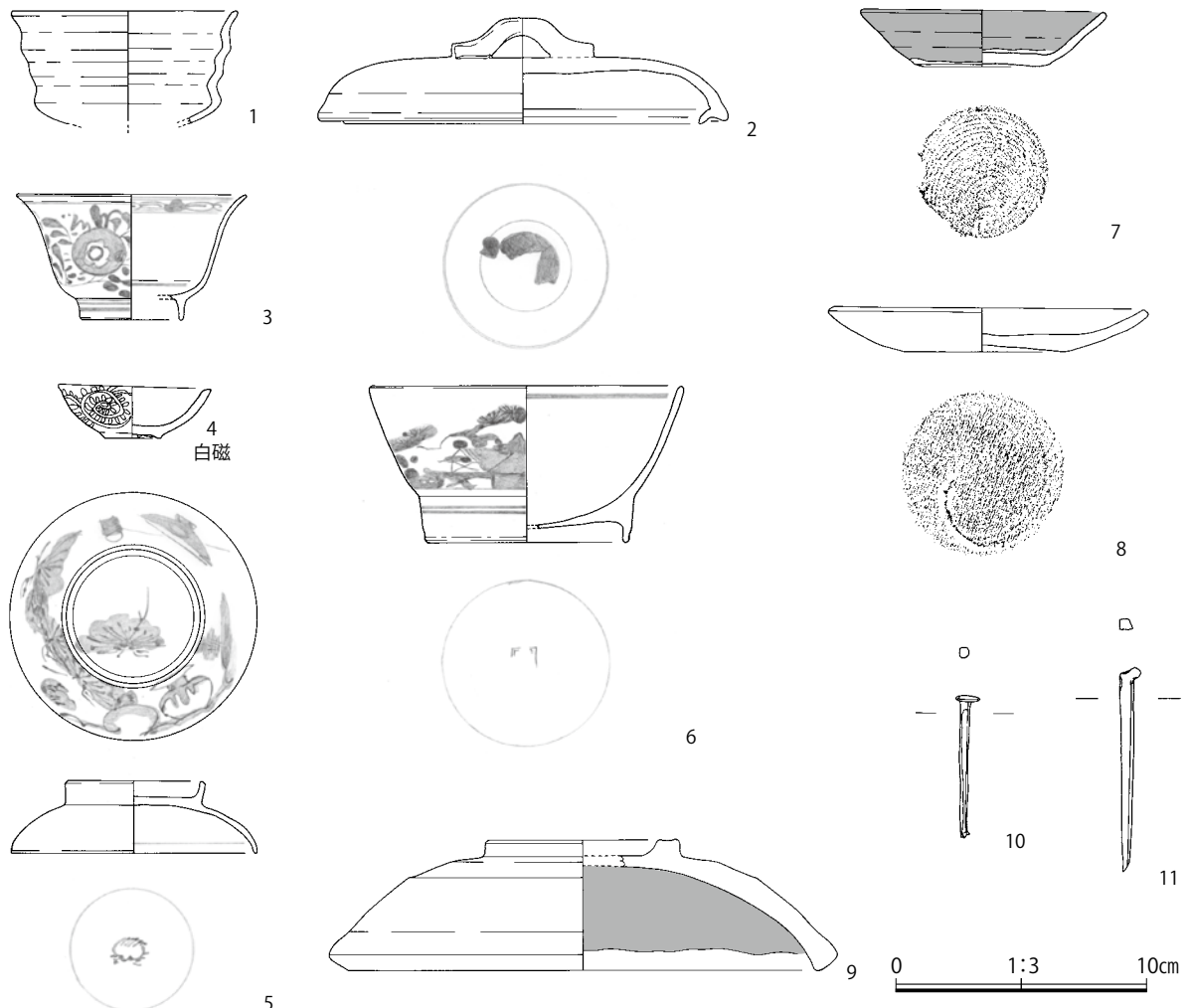
第106図 SB09・10平面図・断面図

た器である。108-8は蛇ノ目凹型高台の丸形小皿で、型押成形によるものである。内面に葡萄の蔓が描かれ、外面には唐草文が見られる。九陶Ⅳ期（1690～1780）に該当する。108-9は白磁仏花瓶の口縁部片で、端部は大きく外反して開く。九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780）頃のものである。108-10は丸形中碗蓋で、口縁部はわずかに内湾気味である。染付は外内面に見られ、外面に連続する蝶文、口縁部内面に四方禪文、見込みには圈線2条と草花文が描かれる。九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。108-11は合子の蓋で、口径4.7cm、器高1.0cmを測る小形品である。外面は型押成形により紗綾形文が象られ、四方に染付で色を加えられている。九陶Ⅴ期（1780～1860）に該当する。

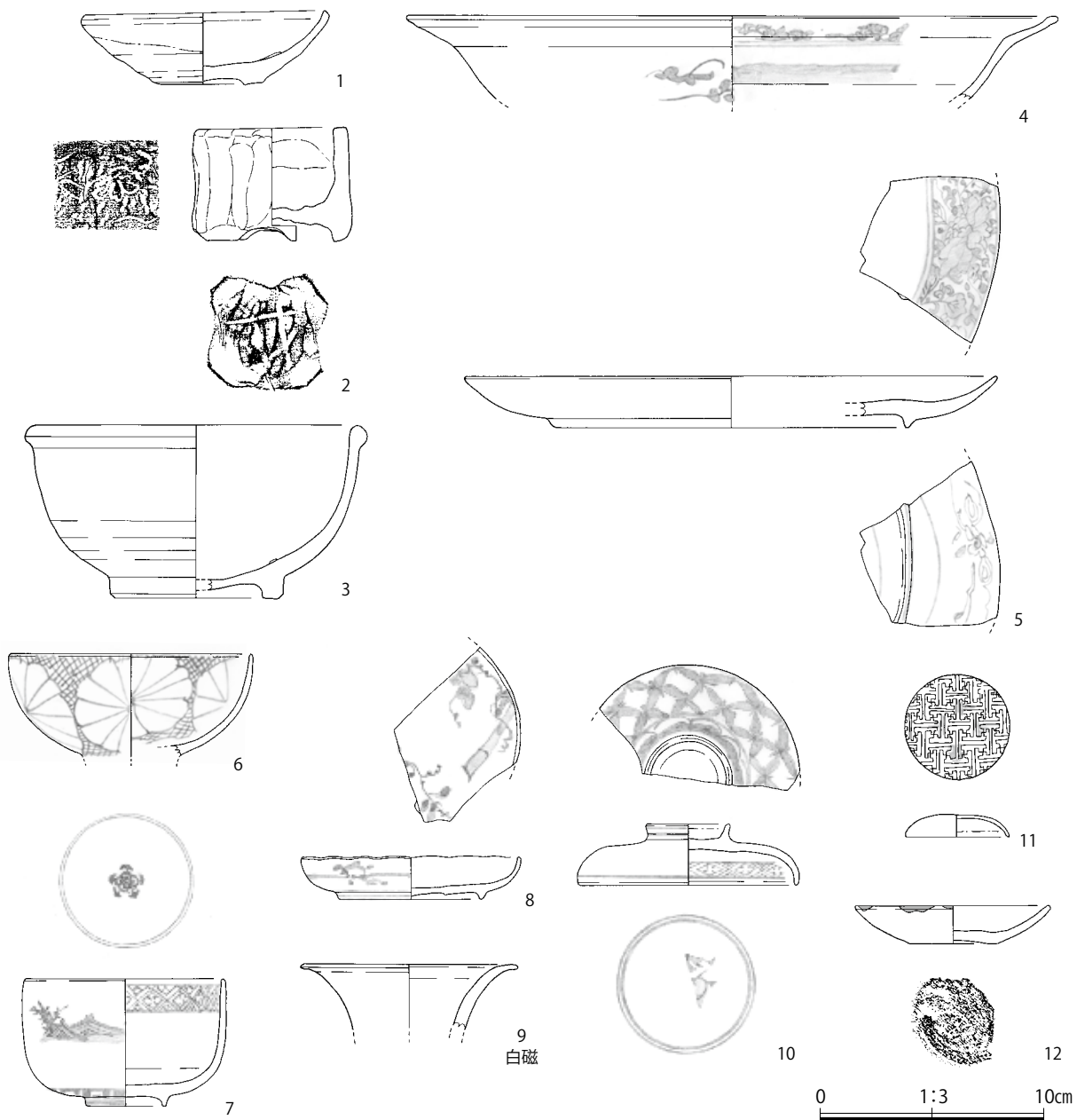
108-12は在地系土師器の極小皿で、底部に回転糸切りが残る。口縁端部に油煙痕が付着することから、灯明皿として使用されたものである。

第4項 SK16（第109図）

SK16は礎石建物跡SB10の東端付近に位置する土坑で、いびつな方形状を呈する。東西辺2.2m、南北辺2.15m、深さ約0.3mを測り、底面は平坦である。土坑内には板材や小石などが混入し、出土遺物は少ない。SK16の性格は現時点では不明であるが、廃棄土坑の可能性も考えられる。また、SB09・10との関係性についても、その新旧関係を含め不明である。



第107図 SB09出土遺物



第108図 SB10出土遺物

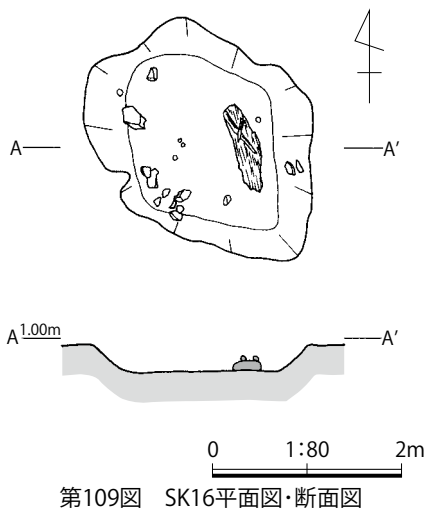
遺物は陶器・磁器・土師器が少量出土しており、いずれも 19 世紀代の年代観を示す。

SK16 出土遺物 (第 110 図)

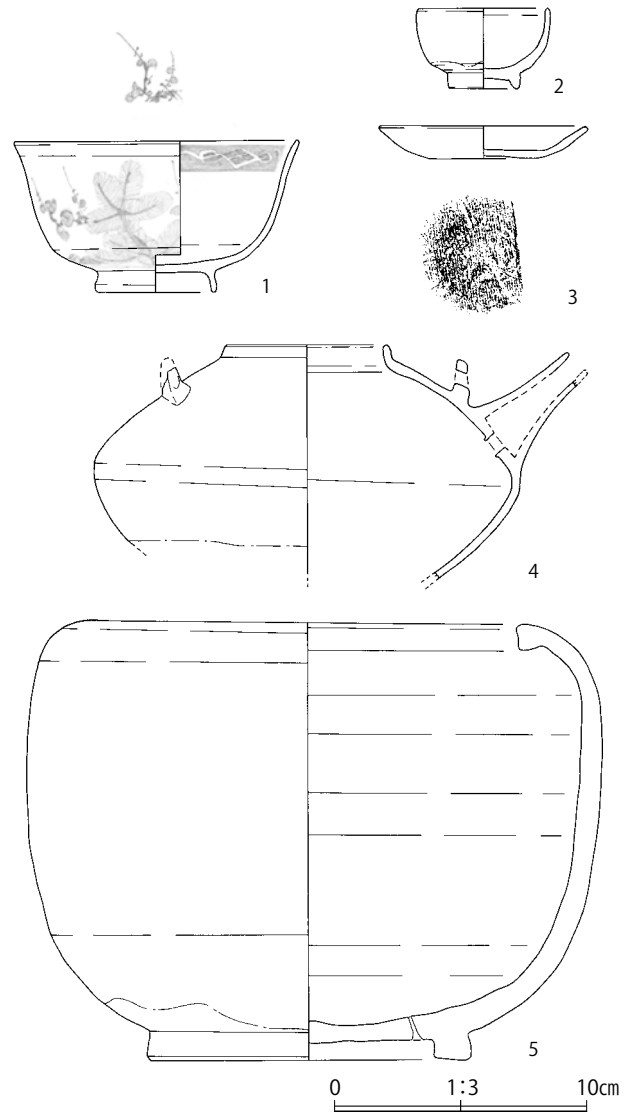
110-1 は肥前磁器の端反形中碗である。器壁は薄手で、口縁部は緩やかに外反する。染付は外内面に見られ、外面に松竹梅文、見込みに梅文が描かれる。九陶V期 (1820 ~ 60) のものである。

110-2・4・5 は陶器で、110-2 は瀬戸・美濃の小坏、110-4 は在地の土瓶、110-5 は在地 (布志名) の植木鉢である。110-4 は算盤状で、底部外面は黒く変色する。110-5 は口径 17.1cm、高台径 12.6cm、器高 17.5cm を測る大形品で、底部に直径 2mm の穿孔が 3ヶ所に見られることから、植木鉢と考えている。年代はいずれも 19 世紀代のものである。

110-3 は底部に回転糸切り痕が残る在地系の土師器で、口径 8.1cm を測る。



第109図 SK16平面図・断面図



第110図 SK16出土遺物

第5項 SX04 (第111図)

SX04はSB10の範囲内で検出した桶埋設土坑である。掘り方は直径約0.7mを測る円形で、内部に直径約0.5m、残存高0.55mの桶が置かれている。桶は幅10.0cmの板材を組んで作られており、底部付近と胴部が^{たが}箍で縛られている。桶内の埋土は2層構造である。この中から少量の遺物が出土しており、陶器小皿・土師器極小皿・金属製品などである。

SX04 出土遺物 (第112図)

112-1は在地陶器で、口径8.8cm、高台径3.6cm、器高2.4cmを測る小皿で、口縁端部は外反する。112-2は在地系の土師器で、口径6.6cm、底径4.1cm、器高1.1cmの極小皿である。底部に回転糸切り痕が残る。112-3は金属製品で、煙管の雁首である。最大長6.1cm、火皿径1.2cmを測る。

第6項 SX05 (第113図)

SX05はSB09の範囲内で検出した桶埋設土坑で、SX04とよく似た遺構である。直径0.6～0.8mの円形土坑内に、直径0.6mの底板のみが残る。土坑の深さは約0.4mで、厚さ2cmの板材が丸く加工され、水平状に置かれている。

SX05内からの出土遺物は少量で、陶器・磁器のみである。

SX05 出土遺物 (第114図)

114-1～3は磁器である。114-1は肥前の白磁中皿で、体部～高台の残存である。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが残り、九陶Ⅳ期(1690～1780)である。114-2は中国磁器(景德鎮窯)の端反形小

坏で、外面に草花文が描かれる。114-3 は肥前磁器の端反形小坏で、外面にコンニャク印判による紅葉文が描かれる。114-4 は山口（須佐）の播鉢で、口縁部～胴部の破片である。内面に9本単位のスリ目が入る18世紀代のものである。

第7項 遺構外出土遺物・陶器（第115図）

115-1～11は陶器である。115-1～3は中碗で、115-1は口縁端部がわずかに外反する。胴部～口縁部にかけては薄手で、高台はやや厚く接地面を持つ。外内面に銅緑釉が掛かることから、肥前（内野山）の器であり、九陶Ⅲ期（1650～90）に該当する。115-2は肥前で、外内面に鉄釉が掛かり、高台部分が非常に厚手で露胎である。九陶Ⅱ期（1610～50）のものである。115-3は山口（須佐）の陶器で、外内面に青磁釉が掛かる。腰部が強張り出す形状で、外内面に稜線が多数見られる。年代は17世紀後半～18世紀代のものである。

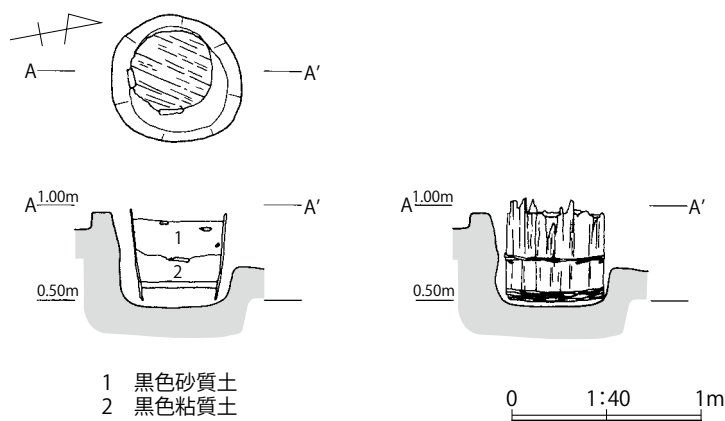
115-4・5は小形品である。115-4は在地（布志名）の筒丸形小坏で、全面に黄色釉が掛かる19世紀代のものである。115-5は京都・信楽系の扁平筒形小鉢で、年代は18世紀代である。

115-6～8は皿である。115-6は在地（布志名）の折縁形小皿で、型押成形により作られる。115-7は肥前（内野山）の丸形中皿で、釉薬は乳白色を呈し、見込みに砂目痕が残る。九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。115-8は腰折形中皿で、115-4と同一の黄色釉が掛かった在地（布志名）であり、内面に鉄絵で竹（笹か）が描かれる19世紀代のものである。115-9は山口（須佐）の播鉢で、底部～高台の破片である。115-10は産地不明の鉢で、口径26.2cm、底径10.4cm、器高10.8cmを測る大形品である。外内面ともに稜線が多数入り、口縁端部は水平に突出する。115-11は備前の蓋で、直径約11.0cm、厚み1.6cmを測る。上部にはつまみが付いていた痕跡が確認できる。年代は17世紀代のものである。

遺構外出土遺物・磁器（第115～117図）

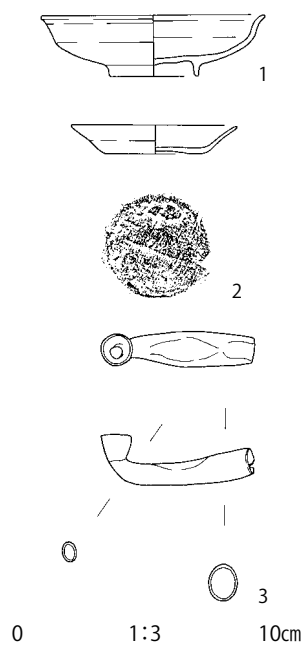
115-12～19、116-1～15、117-1は磁器である。このうち115-13は瀬戸・美濃、116-4は肥前系、116-6は中国（景德鎮窯）で、それ以外は肥前磁器である。

115-12は筒丸形小坏で、外面にコンニャク印判による桜文

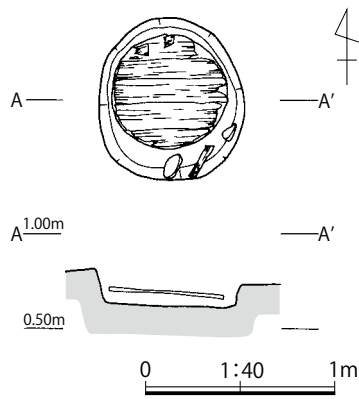


1 黒色砂質土
2 黒色粘質土

第111図 SX04平面図・土層断面図・立面図



第112図 SX04出土遺物



第113図 SX05平面図・断面図

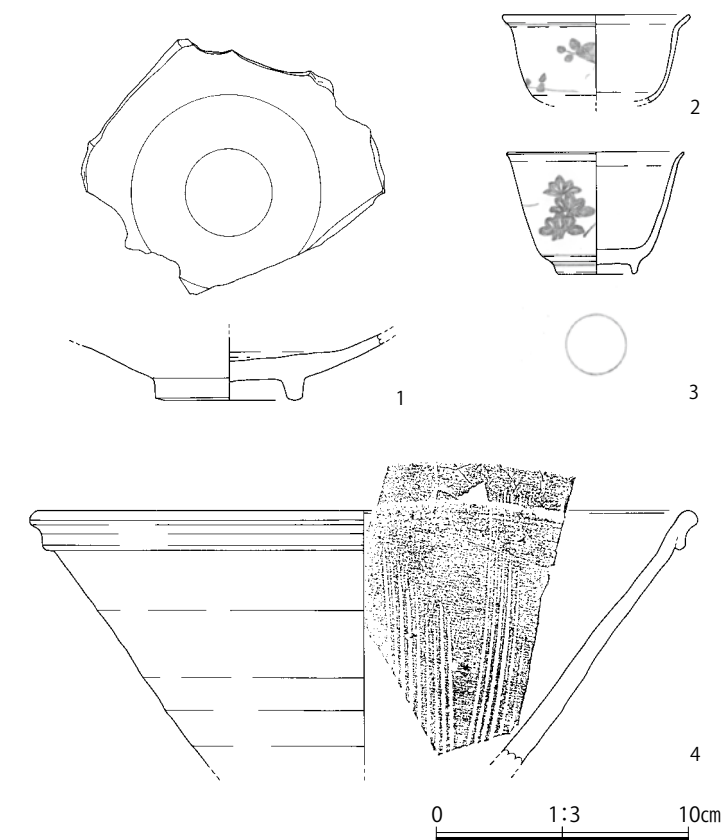
が見られる。115-13は瀬戸・美濃の端反形小碗で、染付は形骸化した草花文が描かれる。19世紀代のものである。115-14～19は中碗で、115-14は九陶Ⅱ-1期（1610～30）のものである。外面に菊花唐草文が描かれる。

115-15は有田・柿右衛門窯の型押成形による中碗で、口縁端部に口さびが塗られ、外内面に染付が見られる。外面には花文と波濤文、口縁部内面に花文が描かれる。九陶Ⅲ期（1670～80）のものである。115-16も有田の白磁碗である。内面は型打陽刻による区割りと同藤文が象られている。1670年代のものである。115-15・16の断面

には漆継ぎの痕跡が残る。

115-17は九陶Ⅲ期（1650～90）の丸形中碗で、外面に見られる染付が小さい花文と圏線のみという、シンプルな柄の器である。高台内には1条の圏線と「福」銘が入る。115-18・19は端反形中碗で、115-18の染付は区割り内に草花文が描かれ、口縁端部は塗りつぶす圏線が外内面に見られる。115-19は外面によるけ縞文、見込みに宝文が描かれる。115-18・19の断面に焼継ぎの痕跡が残る。九陶Ⅴ期（1820～60）のものである。

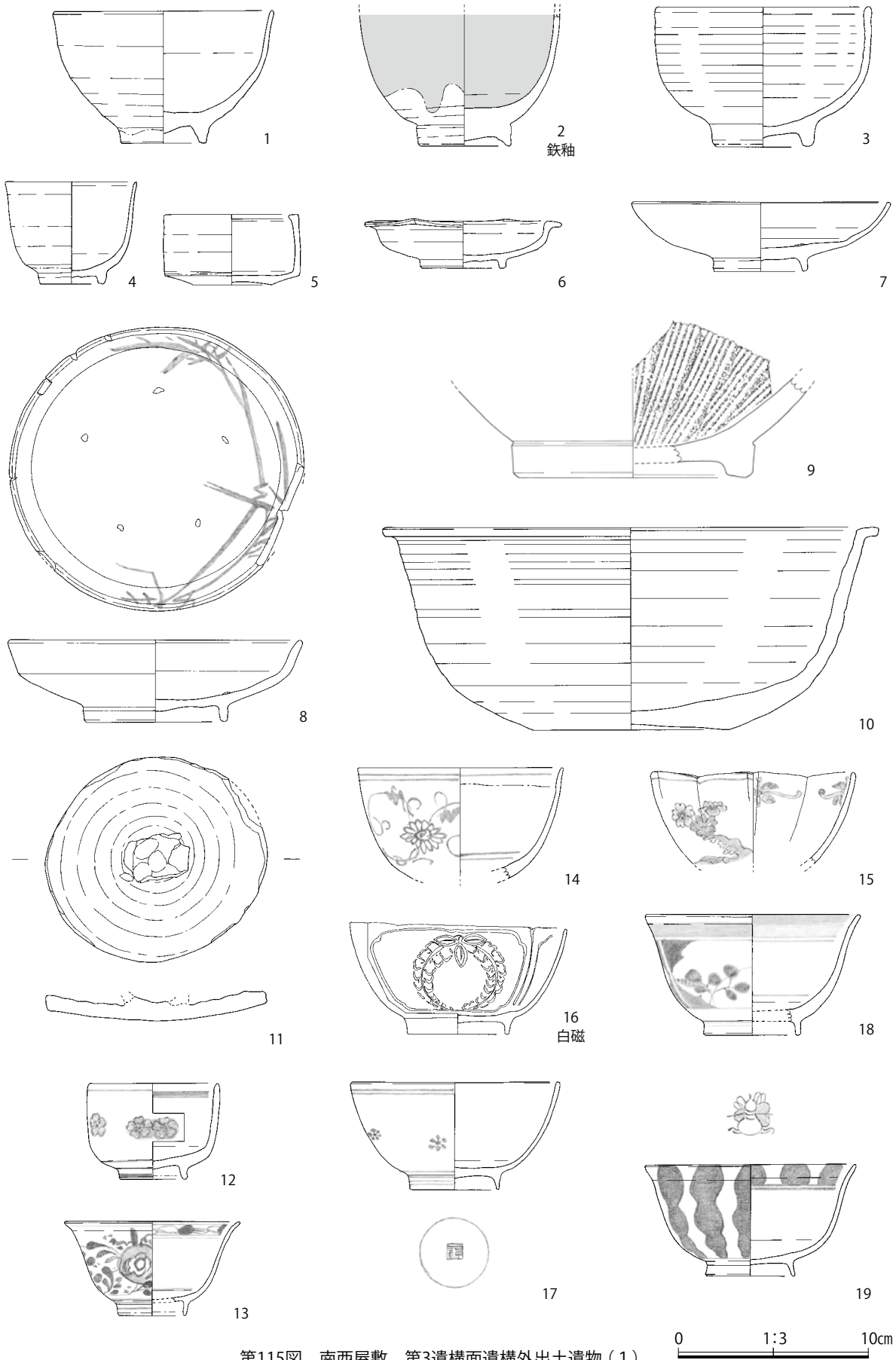
116-1・2はセット品で、116-1は蓋、116-2は端反形



第114図 SX05出土遺物

中碗である。いずれも同一の文様が描かれ、外面は3ヶ所に鶴、その間に破れ亀甲文と花唐草文が融合したデザインである。口縁部内面には雷文が廻り、見込みは2条の圏線と松竹梅文が描かれる。116-3は中碗蓋で、染付は四方禪文と櫛歯文が描かれる。116-1～3は九陶Ⅴ期（1820～60）のものである。

116-4は肥前系の丸形大碗で、口径12.2cm、高台径5.4cm、器高6.5cmを測る。染付は外内面に見られ、線描きで非常に丁寧に描かれる。外面には形骸化した草花文と鋸歯文、櫛歯文、口縁部内面には雷文が描かれる。見込みに2条の圏線と草花文、高台内は1条の圏線と4文字の銘が入るが、どのような銘か判断できない。



第115図 南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(1)

116-5 は^{うれしの}嬉野・^{しだがま}志田窯の丸形中皿で、口径 22.0cm、高台径 13.8cm、器高 3.1cm を測る。染付は外内面に見られ、口縁部内面は区割りされた中に花唐草文と草花文、見込みに草花文が描かれ、外面は唐草文が巡る。九陶Ⅴ期（1780～90）のものである。

116-6 は中国磁器（景德鎮窯）の小皿で、見込みに獅子の親子が描かれ、高台内には「道光年製」銘が入る。清朝時代（1821～50）のものである。

116-7～9 は蓋付鉢で、いずれも扁平形を呈し、口縁端部内面は無釉である。116-7 は横縞文、116-8 は葡萄と蔓、116-9 は白磁で、胴部に明確な沈線を 1 条巡らせる。116-10～12 は小皿で、116-10 は糸切り細工・貼付高台の白磁皿である。全体的に薄手で、内面は型打陽刻による文様が象られている。116-11 は丸形小皿で、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが残る。内面には圏線と簡単な草文が巡る九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。116-12 は有田の色絵腰折形小皿で、高級磁器である。口径 11.3cm、高台径 8.6cm、器高 2.2cm を測り、染付・色絵は外内面に見られる。口縁端部には口さびが塗られ、見込み下方から上方に向けて牡丹文が、上方には羽ばたく蝶が描かれる。草花文の葉は緑色、花は赤色、蝶は黄・赤色で色が入る。また、外面は牡丹唐草文が全周し、高台内は 1 条の圏線のみが巡る。116-12 は少なくとも 3 客の同一個体を確認していることから、セット品であったことが分かる。また、被熱痕も確認している。年代は九陶Ⅲ期（1650～60）のものである。116-13 も有田の青磁蓋付鉢の蓋である。復元口径 16.2cm を測る大形品で、外面は型打陽刻による唐草文が象られる。全面に被熱痕が顕著であることから、二次的に火を受けたものと思われる。年代は九陶Ⅲ期（17 世紀後半頃）で、116-12 同様高級磁器である。116-14 は波佐見の青磁中皿で、足が 3ヶ所に付く。口縁部は強く外折する形状で、外面にへら彫りの圏線が 4 条引かれる。また、足にもへら彫りが施される。波佐見Ⅴ期（1680～1740）頃のものである。116-15 は輪高台形の仏飯器で、外面に連続輪宝文が描かれる。九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。117-1 は有田の色絵大皿で、復元高台径 20.8cm を測る大形品である。染付と色絵は外内面に見られ、いずれも極彩色で赤色を多く使用する。高台内は圏線 1 条が巡るもので、年代は 18 世紀後半代である。

遺構外出土遺物・土師器・土器・土製品・石製品・金属製品・銭貨・木製品・瓦（第 116・117 図）

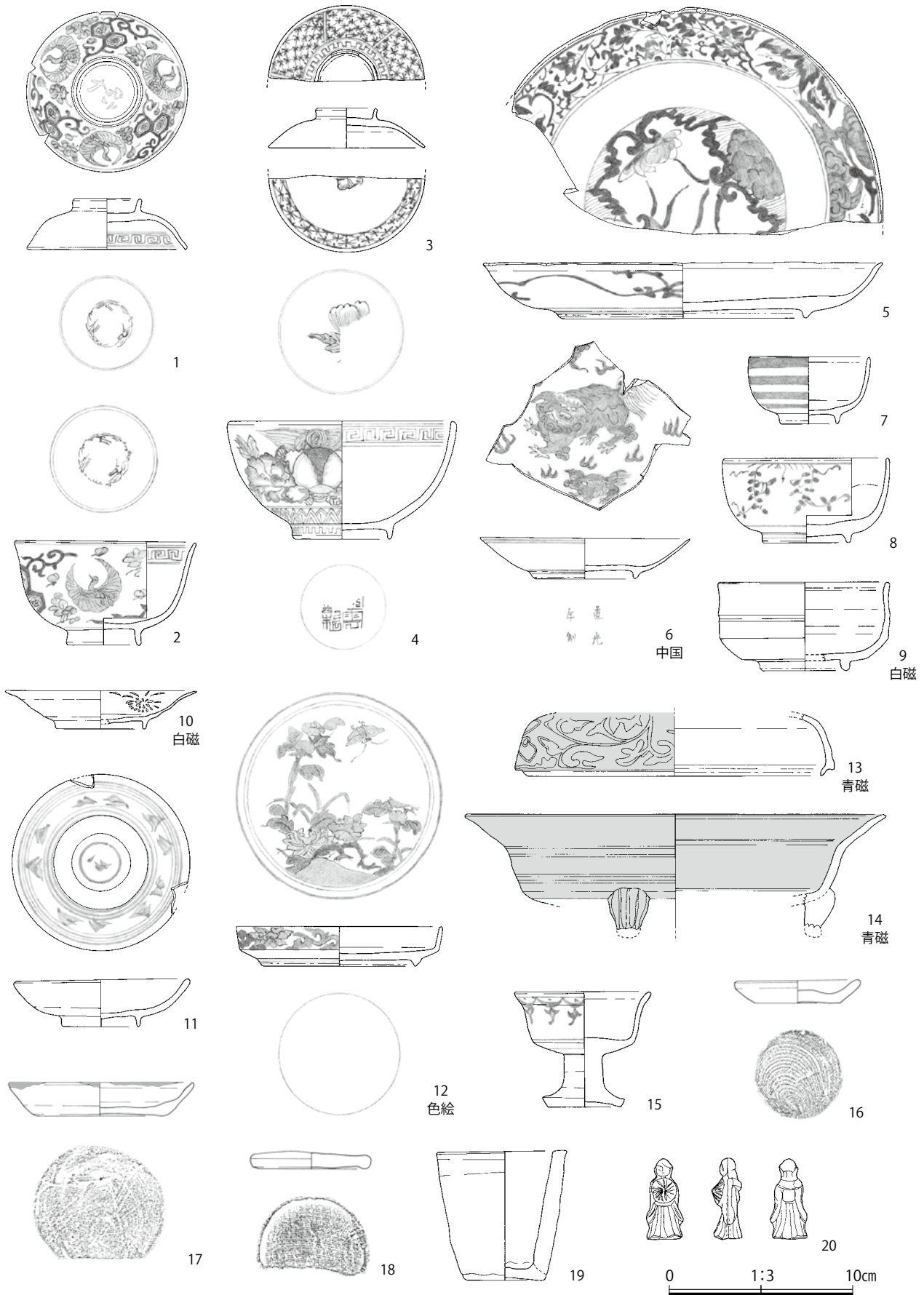
116-16・17 は在地系の土師器で、116-16 は口径 6.7cm の極小皿、116-17 は口径 10.2cm の小皿である。口縁端部に油煙痕が付着しており、灯明皿として使用されたものである。

116-18・19 は土器で、焼塩壺の蓋と身である。116-18 は直径 5.8cm で、内面に布目痕が残る。116-19 は焼塩壺の身で、底部が充填されている様相が顕著である。いずれも 18 世紀後半代のものである。

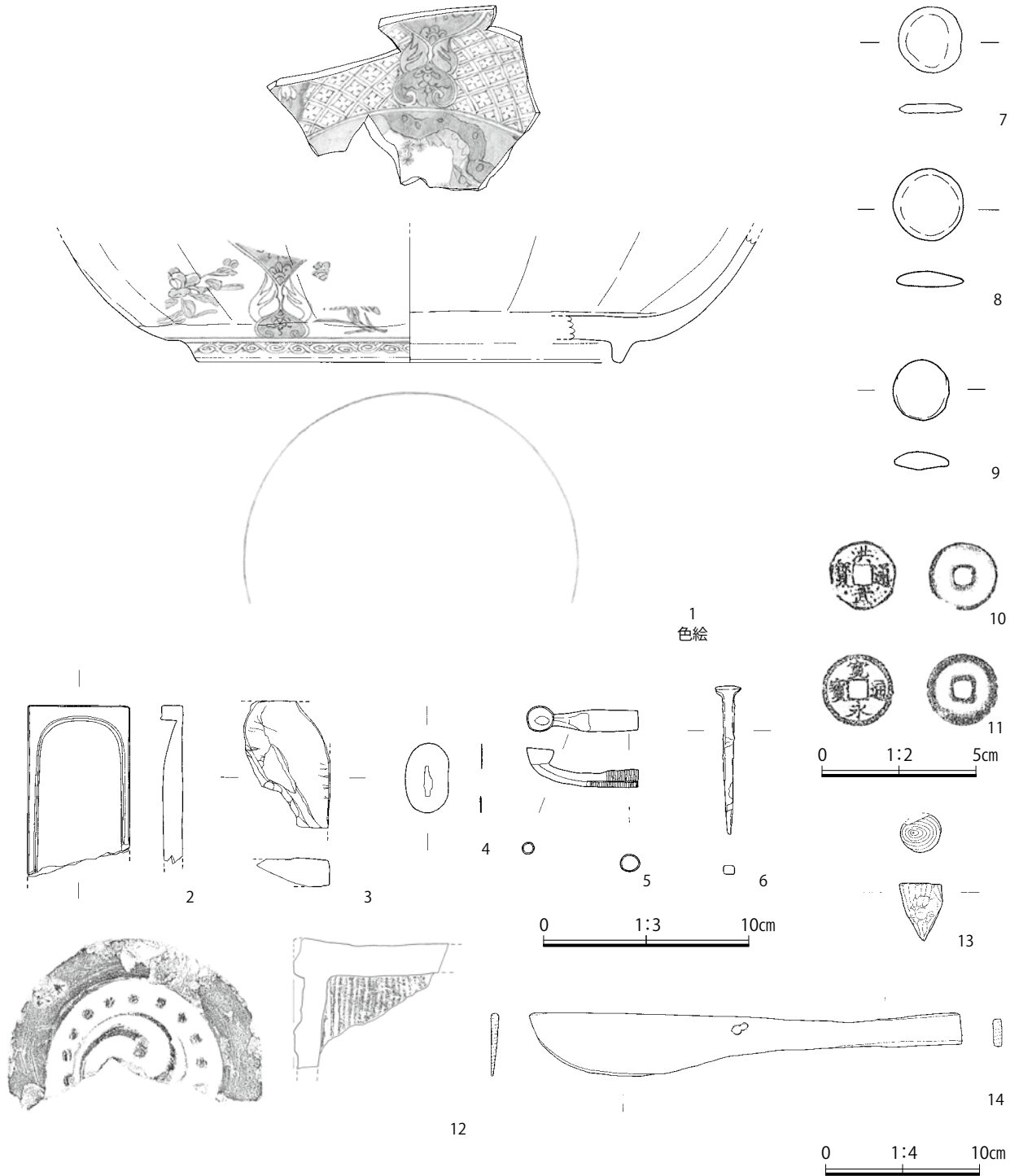
116-20 は土製品で、僧侶立像を象った人形である。最大長 4.4cm、最大幅 2.0cm を測る小形品で、袈裟姿で両手に傘を持つ。底部中央に穿孔が 1ヶ所開いており、棒などを刺していたと思われる。

117-2・3・7・8 は石製品である。117-2 は残存長 8.5cm、幅 5.0cm を測る小形の硯である。117-3 は砥石、117-7・8 は黒色の基石である。117-9 は石製品ではなく土製品であるが、基石を象ったものである。

117-4～6 は金属製品である。117-4 は切羽、117-5 は煙管の雁首、117-6 は頭部が付く方形釘である。



第116図 南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2)



第117図 南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(3)

117-10・11は銭貨で、117-10は「洪武通寶」、117-11は「寛永通寶」の古寛永である。

117-12は軒丸瓦の瓦当部分の破片で、外径15.8cm、残存珠文は11個、三巴文は左巻である。

117-13・14は木製品である。117-13は円錐形の栓で、直径2.6cm、下方に向かって円錐状となり先端は尖る。117-14は最大長28.1cm、厚み0.6cmを測る片刃箆である。製品の中心部分に直径0.5cmの孔が2つ重なって開いている。

第6章 南西屋敷

遺物番号	面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾	法量:cm(残存値)			生産地	九陶(年代)	備考
								口径	底径	器高			
116-14	3	遺構外	磁器	中皿	折縁形	ヘラ彫り	青磁	(23.0)	(15.6)	6.3	肥前(波佐見)	V(1680~1740)	足3(残存1)
116-15	3	遺構外	磁器	仏飯器	輪高台形	輪宝文	染付	(7.3)	4.0	6.4	肥前	IV(1690~1780)	畳付無軸
116-16	3	遺構外	土師器	極小皿	在地系	—	—	6.7	4.7	1.3	在地	—	底部:回転糸切り
116-17	3	遺構外	土師器	小皿	在地系	—	—	10.2	7.5	1.9	在地	—	底部:回転糸切り/口縁端部:油煙痕
116-18	3	遺構外	土器	焼塩壺蓋	断面三角形	—	—	5.8	—	1.0	—	18世紀後半代	内面:布目痕
116-19	3	遺構外	土器	焼塩壺	断面方形	—	—	7.1	4.2	7.2	—	18世紀後半代	底部:充填
116-20	3	遺構外	土製品	人形	僧侶立像	—	—	長4.4	幅2.0	厚1.6	在地	19世紀代	型押成形/底部中央:穿孔1
117-1	3	遺構外	磁器	大皿	—	外:如意頭文・草花文・渦文 内:如意頭文・四方舞文	染付・色絵	(20.8)	(6.3)	—	肥前(有田)	18世紀後半代	畳付無軸

表14 南西屋敷 銭貨観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	質量/直径	備考
99-12	1	遺構外	永楽通寶	16.0	6.0	1.0	2.72	100	0.17	天正~慶長頃
99-13	1	遺構外	元祐通寶	16.5	7.0	1.0	3.63	100	0.22	北宋1086年(模鑄銭)
99-14	1	遺構外	祥符元寶	17.0	7.0	1.0	3.29	100	0.19	北宋1009年(模鑄銭)
117-10	3	遺構外	洪武通寶	14.5	6.0	1.0	2.22	95	0.15	明 1368年(模鑄銭)
117-11	3	遺構外	寛永通寶	15.5	6.0	1.0	2.68	100	0.17	又貝寶(古寛永)

表15 南西屋敷 金属製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	形状	材質	法量		備考
						大きさ(cm)	重量(g)	
99-1	1	遺構外	煙管	雁首	真鍮	長さ3.4/火皿φ1.4/小口φ0.90	5.44	
99-2	1	遺構外	煙管	雁首	真鍮	長さ4.7/火皿φ1.4/小口φ0.90	4.49	
99-3	1	遺構外	煙管	吸口	真鍮	長さ4.5/小口φ1.0/口付φ0.4	2.22	
99-4	1	遺構外	切羽	—	—	長さ4.4/幅2.6/厚さ0.1	2.83	
99-5	1	遺構外	裝飾品	襖の把手	—	長さ5.8/幅4.2/厚さ0.1	15.80	底部と体部は摘みを溶接
99-6	1	遺構外	釘	—	鉄	長さ4.4/幅1.3/厚さ0.4	3.46	角釘/頭部あり
99-7	1	遺構外	釣針	—	—	長さ4.3/幅0.4/厚さ0.2	1.36	穿孔1
99-8	1	遺構外	匙	—	—	長さ18.2/幅2.2/厚さ0.1	14.08	
99-9	1	遺構外	小柄	柄	—	長さ9.8/幅1.3/厚さ0.1	24.53	無文
99-10	1	遺構外	小柄	刃	鉄	長さ20.0/幅1.2/厚さ0.3	20.49	
107-10	3	SB09	釘	—	鉄	長さ5.7/幅1.0/厚さ0.4	4.92	角釘/頭部あり
107-11	3	SB09	釘	—	鉄	長さ8.2/幅0.8/厚さ0.4	5.71	角釘
112-3	3	SX04	煙管	雁首	真鍮	長さ6.1/火皿φ1.2/小口φ1.5	14.32	
117-4	3	遺構外	切羽	—	—	長さ3.4/幅2.1/厚さ0.05	1.88	鋸歯状
117-5	3	遺構外	煙管	雁首	真鍮	長さ5.4/火皿φ1.3/小口φ0.95	7.1	
117-6	3	遺構外	釘	—	鉄	長さ7.3/幅1.3/厚さ0.5	7.02	角釘/頭部あり

表16 南西屋敷 石製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	材質	法量:(残存値)		備考
					大きさ(cm)	重量(g)	
89-5	1	SB06	基石	白	長さ2.4/幅2.2/厚さ0.4	3.01	貝製
89-6	1	SB06	基石	黒	長さ2.4/幅1.8/厚さ0.7	5.11	
98-20	1	遺構外	硯	—	長さ(9.9)/幅5.9/厚さ1.1	110.80	一部欠損
98-21	1	遺構外	砥石	—	長さ(8.6)/幅6.0/厚さ1.8	133.21	4面使用痕
98-22	1	遺構外	基石	黒	長さ2.3/幅2.0/厚さ0.5	3.90	
103-13	2	SX03	基石	黒	長さ2.4/幅2.2/厚さ0.8	7.00	
103-14	2	SX03	土製品	土錘	長さ2.4/幅1.1/孔径0.4	2.22	
104-18	2	遺構外	硯	小形	長さ7.9/幅4.0/厚さ1.0	50.99	墨の痕跡
117-2	3	遺構外	硯	—	長さ8.5/幅5.0/厚さ1.1	80.33	
117-3	3	遺構外	砥石	—	長さ(6.3)/幅(4.0)/厚さ1.4	35.45	4面使用痕
117-7	3	遺構外	基石	黒	φ2.1/厚さ0.3	2.45	
117-8	3	遺構外	基石	黒	φ2.3/厚さ0.5	3.73	
117-9	3	遺構外	土製品 基石	—	φ1.8-2.0/厚さ0.6	1.75	

表17 南西屋敷 木製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	各称部位	法量:cm(残存値)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
92-3	1	SK07	独楽	—	7.6	φ4.9	—	—	—	上面:墨書「○」
95-15	1	SD15	漆器	椀	12.7	6.8	5.8	—	—	外面:黒/内面:朱/無文
95-16	1	SD15	篋(片刃)	—	15.2	1.5-2.9	—	0.3	—	榫目
95-17	1	SD15	栓	—	8.8	3.4	—	2.9	—	榫目 上部:穿孔1
95-18	1	SD15	柄杓か	底板	φ7.6-7.7	—	—	0.7	—	榫目
95-19	1	SD15	箸	—	28.8	0.8	—	0.5	—	榫目 白木
99-23	1	遺構外	将棋	駒	3.2	3.2	—	0.9	—	— 墨書文字「金将」
103-15	2	SX03	栓	—	5.4	2.7	—	2.5	—	榫目 円錐形
103-16	2	SX03	墨書木簡	—	25.3	1.9	—	0.8	—	— 片面墨書:「長谷川半右衛門」
103-17	2	SX03	杓文字	—	22.0	5.5	—	0.7	—	板目 劣化のため表面が波打つ
103-18	2	SX03	折敷	底板	23.4	(9.2)	—	0.4	—	榫目 穿孔1
117-13	3	遺構外	栓	—	3.8	φ2.6	—	2.3	—	板目 円錐形
117-14	3	遺構外	篋(片刃)	—	28.1	1.8-4.1	—	0.6	—	榫目 中央:大小の穿孔2

表18 南西屋敷 瓦観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	法量:(残存値)		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
99-11	1	遺構外	軒丸瓦	瓦当部:外径14.8/内径10.9/丸瓦厚2.1	280	連珠三巴文/左巻/残存珠文11
117-12	3	遺構外	軒丸瓦	瓦当部:外径(15.9)/内径(11.4)/丸瓦厚2.0	680	連珠三巴文/左巻/残存珠文11

第7章 北東屋敷

北東屋敷は、新宮庁舎調査区の北東にあり、西側を屋敷境 A、東側を屋敷境 B により区画された屋敷地である。以下、その詳細を説明する。

第1節 基本層序 (第118図)

北東屋敷の土層堆積状況の観察を行った結果、旧地表面と3面の遺構面を確認した。なお、以下で説明する基本層序(第118図)については、第3章第2節で示した基本層序と共通するものであり、土層の呼称については対応する層名を付した。また、旧地表面(I a層)以下の説明は検出標高のみを記載し、詳細は割愛する。

北東屋敷の基本層序は、調査区北壁土層の一部分を掲載している(第119図 A-A')。以下、各遺構面の土層堆積状況について、下層から上層の順に説明する。

旧地表面以下の自然堆積層(Ⅱ・Ⅲ層) 標高 0～0.1m 層厚 30cm 以上

旧地表面(I a層) 標高 0.15～0.2m 層厚 10～20cm

第1遺構面(A層) 標高 0.3～0.4m 層厚 10～20cm

A層は城下町初期造成土と考えられるもので、I a層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土である。北東屋敷の第1遺構面基盤層である。ここでは、他屋敷で見られた島状整地のような、部分的な厚い盛土は見られない。

第2遺構面(B-1層) 標高 0.8～1.0m 層厚 40～70cm

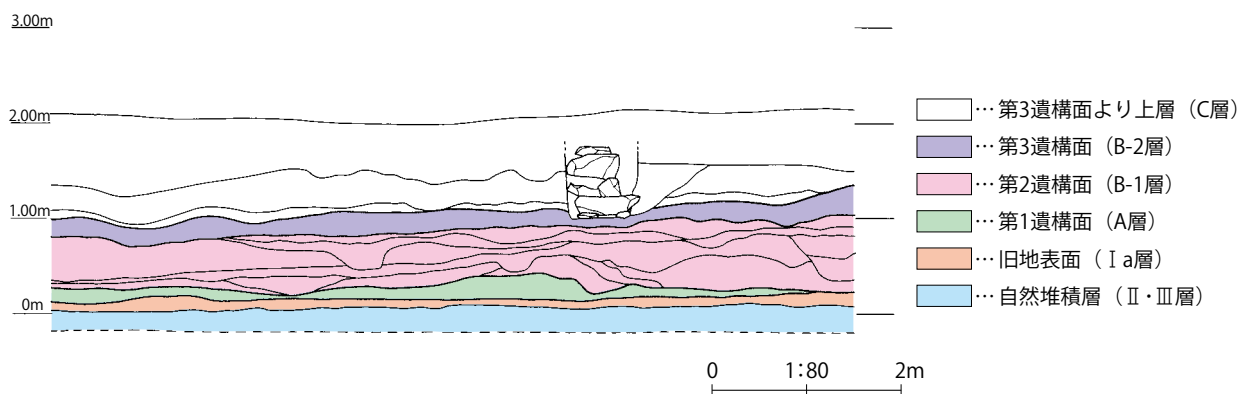
B-1層は北東屋敷の第2遺構面基盤層で、淡灰色砂質土を呈する。

第3遺構面(B-2層) 標高 1.0～1.3m 層厚 20～25cm

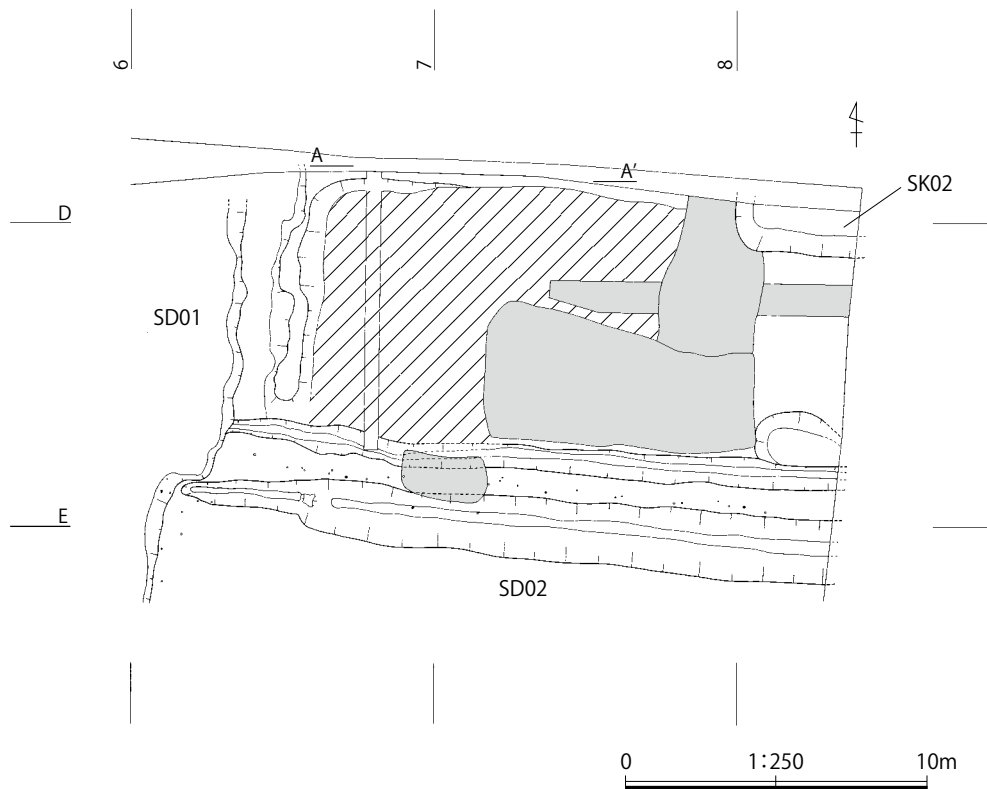
B-2層は北東屋敷の第3遺構面基盤層で、黄色シルト質の山土である。

第3遺構面より上層(C層) 標高 2.1～2.2m 層厚 90～110cm

C層は攪乱層である。近現代の陶磁器やガラス片、コンクリート片が混じる。



第118図 北東屋敷 基本層序土層断面図



第119図 北東屋敷 第1遺構面遺構配置図

第2節 第1遺構面

第1項 遺構面の概要 (第119図)

第1遺構面は、標高0.3～0.4mで検出し、遺構面を形成するA層は層厚10～20cmを測る。第1遺構面は、自然堆積層である旧地表面（I a層）に盛土（A層）を施して造成された最初の遺構面であるが、北西屋敷（第60図）、南西屋敷（第86図）、南東屋敷（第127図）に比べて造成土の厚みが薄い。また、第119図の斜線部分は、A層・I a層を掘り込んだ浅く広範囲な落ち込みで、一面黒褐色土を検出したものである。この黒褐色土を耕作土として解釈するならば、屋敷裏の畑地などであった可能性が考えられる。同時期に造られた屋敷境は、西側はSD01、南側はSD02である。

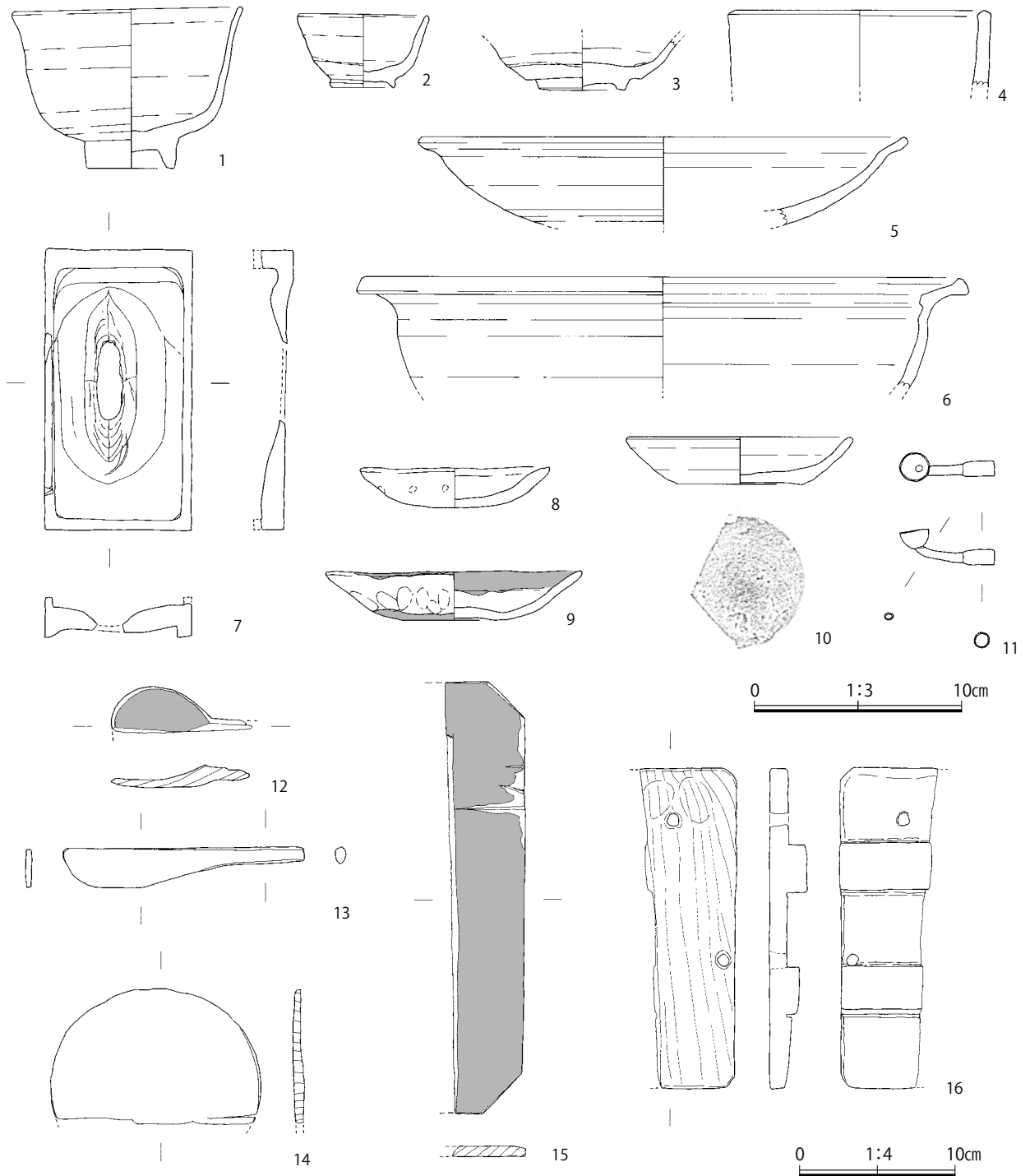
遺物は、国産陶器・土師器・金属製品・石製品・木製品・瓦などが出土している。出土量は少なく、このうち陶器は肥前（九陶I-2～II期・1594～1650）が最も多く、その他瀬戸・美濃（黒織部）の碗（16世紀末～17世紀初頭）が出土している。磁器は中国・国産ともに出土していない。土師器は京都系と在来系が混ざり合う状況であるが、京都系が多く見られる。

第1遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、城下町造成以前の旧地表面上に盛られたA層を基盤とする最初の遺構面であることを根拠として、17世紀初頭～17世紀前半頃を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺物について詳細を述べる。

第2項 遺構外出土遺物 (第120図)

120-1～6は陶器で、このうち120-4以外は肥前陶器である。120-1は中碗で、口縁部は緩やかに外反し、腰部が強く張り出す形状である。120-2は口径6.2cmを測る小坏である。120-1・2は九



第120図 北東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物

陶Ⅱ期（1610～50）に該当する。120-3は小皿で、体部～高台の破片である。見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2期（1594～1610）のものである。120-4は瀬戸・美濃（黒織部）で、^{くつがた}杢形碗の口縁部と思われる。全面に黒色釉が掛かるもので、16世紀末～17世紀初頭のものである。120-5は折縁形中皿で、復元口径23.3cmを測る。内面に鉄絵などは見られない。九陶Ⅰ-2～Ⅱ期（1594～1610）のものである。120-6は片口鉢で、復元口径29.0cmを測る大形品である。口縁部は強く外折し、内面には明確な段が付く。120-6は九陶Ⅰ～Ⅱ期（1600～20）のものである。

120-8～10は土師器で、120-8・9は手づくね成形による京都系、120-10は底部に回転糸切り痕が残る在地系である。120-9は口縁部と底部に油煙痕が付着することから、灯明皿として使用された

ものと思われる。

120-7 は石製品で、中央付近に楕円形の孔が開いている硯である。長さ 13.6cm、幅 7.2cm、最大厚 2.0cm を測るもので、中心よりやや左側に使用過多によるものか、楕円形状の孔が開いている。

120-11 は金属製品で、煙管の雁首である。

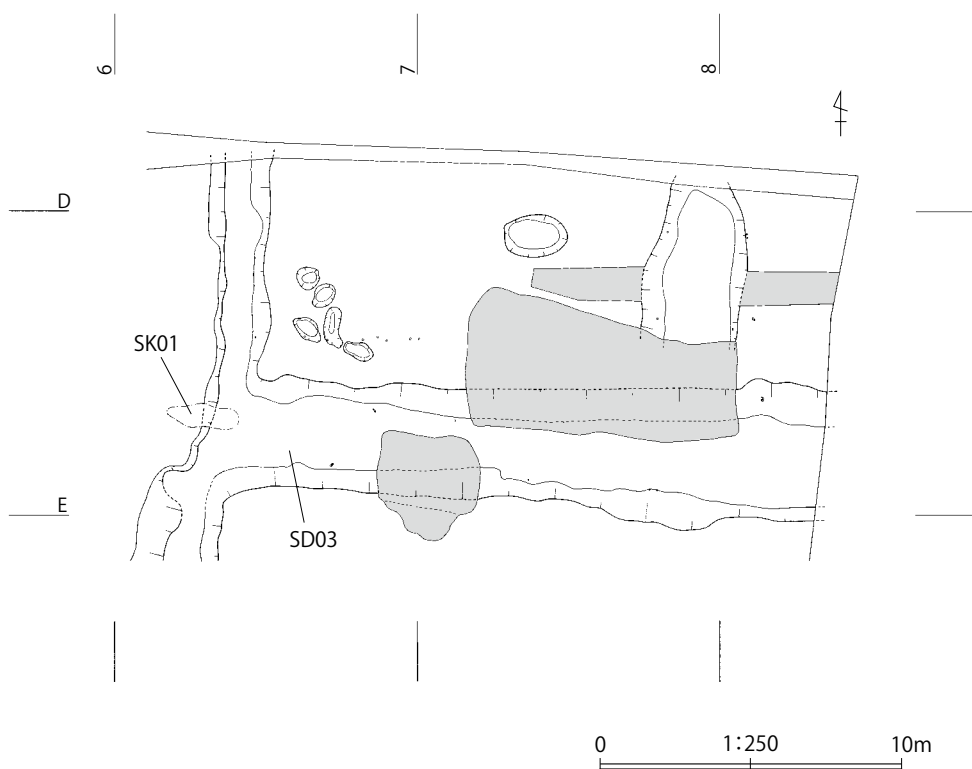
120-12 ～ 16 は木製品である。120-12 は匙状の形をした製品で、内面に黒漆が塗られている。120-13 は片刃筥で、最大長 15.5cm、最大幅 2.4cm、厚み 0.7cm を測る。120-14 は曲物容器の底板か蓋で、直径 13.5cm を測る。柄杓などの底板か。120-15 は折敷の破片で、一辺 27.8cm を測る正方形のものである。四隅は斜めに切り落とされた形状で、内面に黒漆が塗られている。120-16 は角型連歯下駄で、後歯が磨り減っている。

第3節 第2遺構面

第1項 遺構面の概要 (第121図)

第2遺構面は、標高 0.8 ～ 1.0m で検出し、遺構面を形成する B-1 層は層厚 40 ～ 70cm を測る。北東屋敷の第2遺構面は、他の屋敷に比べて造成土が厚い。第1遺構面と同じく主立った遺構は見られないが、土坑などを少数検出している。調査範囲が屋敷裏に当たると思われ、遺構が少ないことから、屋敷地の中で空間地であった可能性が想定される。同時期に造られた屋敷境は、西側・南側ともに SD03 が対応する。

遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・木製品・銭貨・瓦などが出土している。出土量は少なく、陶器は肥前（九陶Ⅱ～Ⅲ期・1610～90）が多く、その他産地不明のミニチュア製品が入り込む。磁器は肥前（九陶Ⅱ-2～Ⅲ期・1630～90）が主で、中国磁器（景德鎮窯）がわずかに出土している。



第121図 北東屋敷 第2遺構面遺構配置図

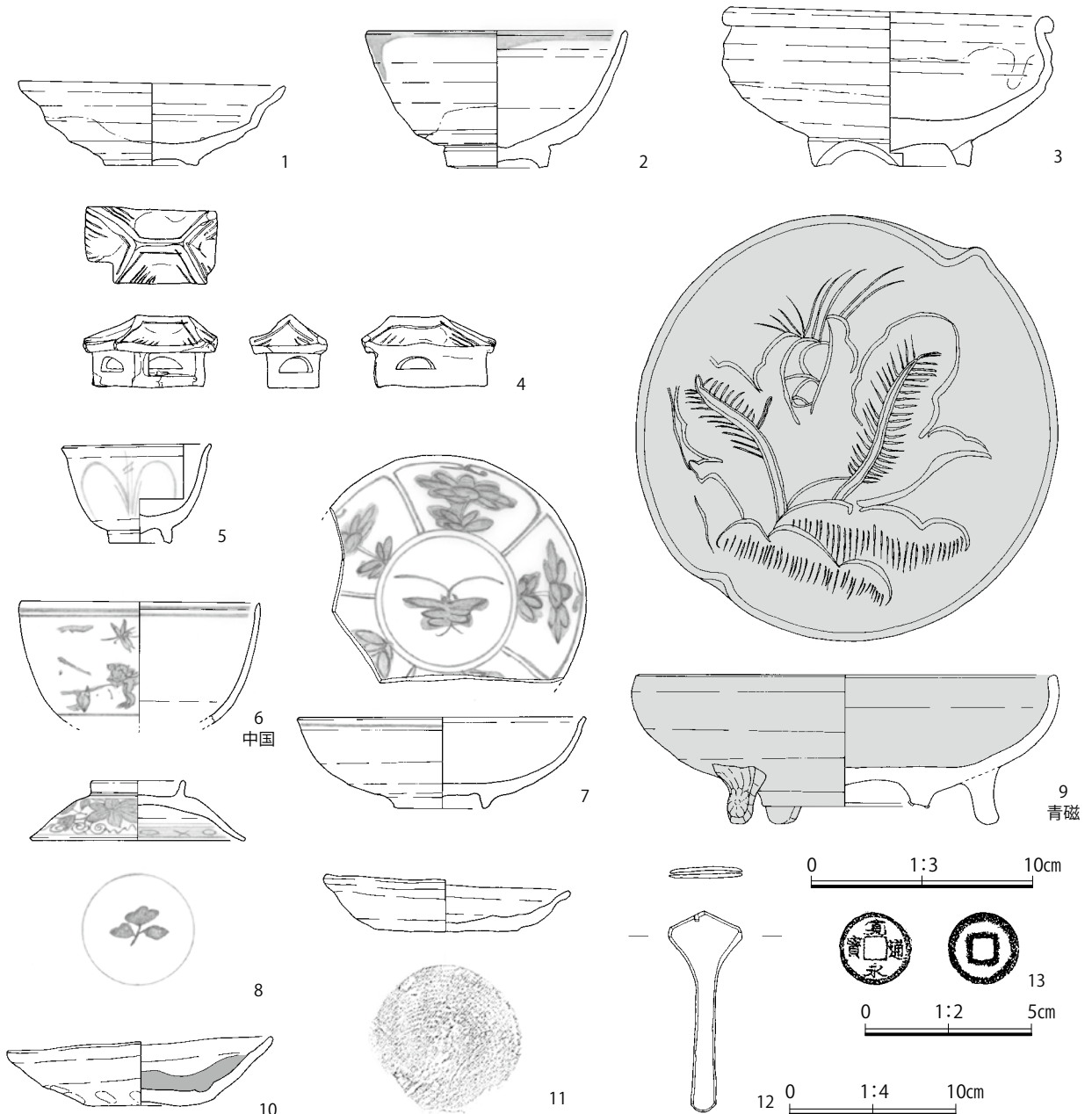
土師器は京都系と在地系が混ざり合う状況である。

第2遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、第1遺構面を埋め立てた上面に造成された遺構面であることを根拠として、17世紀後半～18世紀頃を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 遺構外出土遺物 (第122図)

122-1～4は陶器である。122-1～3は肥前で、122-1は折縁形小皿である。見込みに胎土目痕が残ることから、九陶Ⅰ-2期(1594～1610)のものである。122-2は丸形中碗で、口縁端部に鉄釉が塗られており、九陶Ⅱ期(1610～50)のものである。122-3は火入れで、口縁部は玉縁状を呈し外反し、高台に半月状の挟りが3ヶ所見られる。外面は二彩手として釉薬が掛け分けられており、九陶Ⅲ期(1650～90)頃のものである。122-4は産地不明で、家屋を象ったミニチュア製品である。



第122図 北東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物

屋根は寄棟形^{よせむねがた}で、部屋部分には半月状の窓が3方に開けられている。

122-5～9は磁器である。このうち122-6は中国(景德鎮窯)の丸形中碗で、復元口径10.8cmを測る。外面の染付は昆虫などが描かれ、17世紀前半頃のものである。

122-5は外面に蘭文が描かれる小坏で、九陶Ⅱ-2期(1630～50)に比定される遺物である。122-7は丸形小皿で、高台が小さい形状から九陶Ⅱ-1期(1610～30)に当たる。内面の染付は全面に見られ、見込みに蝶、体部は区割りされ、中に草花文が描かれる。122-8は中碗蓋で、端部はやや端反る形状である。外面は渦巻き文と桔梗文、内面は○×文が巡り、見込みには1条の圏線と草花文が描かれる。122-8は他の出土遺物よりも新しく、九陶Ⅳ期(1690～1780)頃のものである。122-9は肥前(波佐見)の青磁大皿で、ほぼ完存する製品である。型押成形による形状で、底部には獣足が3ヶ所に付く。見込みに型押ししかへら彫りによる葉文が刻印される。波佐見Ⅲ期(1630～50)に該当する。

122-10・11は土師器で、122-10は手づくね成形による京都系、122-11は底部に回転糸切り痕が残る在地系である。122-10は底部内面に油煙痕が付着する。

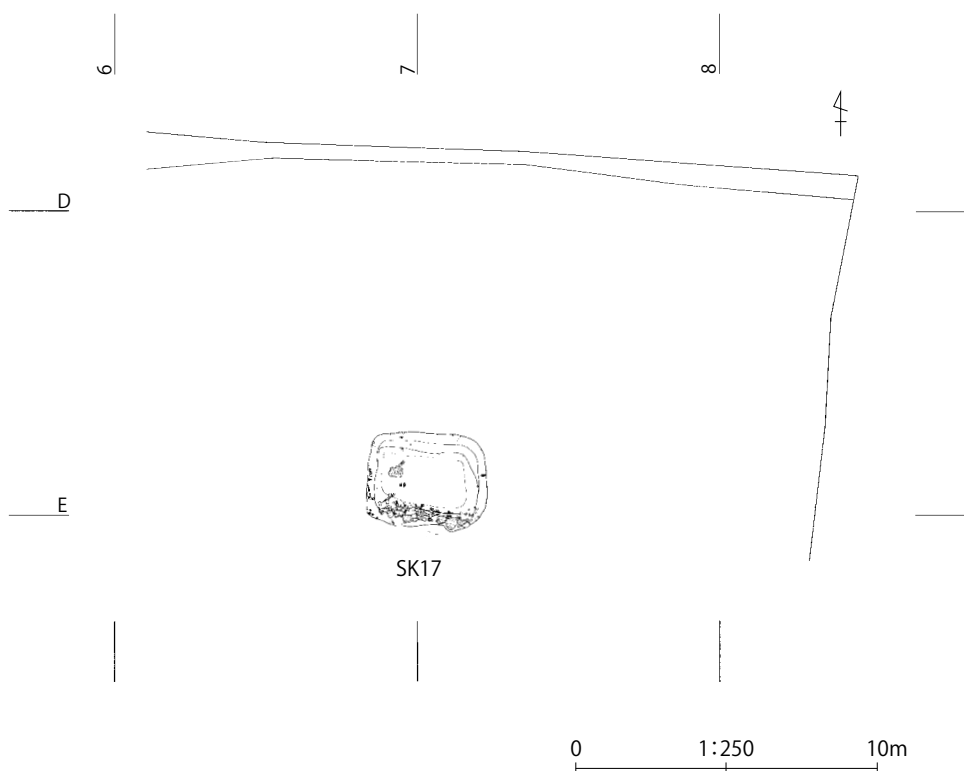
122-12は木製品で、刷毛の柄部分である。最大長12.1cm、最大幅4.4cmを測る小形品で、刷毛を挟む部分は菱形状を呈する。また、毛を挟んで縛れるような作りになっている。

122-13は銭貨「寛永通寶」で、新寛永である。

第4節 第3遺構面

第1項 遺構面の概要

第3遺構面は、標高1.0～1.3mで検出し、遺構面を形成するB-2層は層厚20～25cmを測る。



第123図 北東屋敷 第3遺構面遺構配置図

第3遺構面検出時、隣接する北西屋敷の東半部を含めた広範囲に攪乱を受けており、後述するSK17（第124図）以外の遺構は検出していない。また、近現代の攪乱が非常に多く見られたため、攪乱箇所の図化が不可能であった。よって、遺構配置図（第123図）にはSK17のみの掲載となった。

対応する屋敷境は検出できていないため、北東屋敷という区画の有無も確証を得ない状態であるが、ここでは便宜的に屋敷地は存続しているものとして報告する。その上での推測ではあるが、下面のSD03上にSK17が存在することから、南側を区切る屋敷境については基礎以南へ移動した可能性が考慮される。

遺物は、国産陶磁器・土師器・金属製品・銭貨・瓦などが出土している。このうち陶器は肥前（九陶Ⅲ～Ⅳ期・1650～1780）が多く、瀬戸・美濃、京都・信楽系、山口（須佐）、在地（布志名）などがほぼ均等に出土している。磁器は肥前が主で、九陶Ⅳ～Ⅴ期（1690～1860）のものが占める傾向にある。土師器は京都系と在地系が混ざり合う状況である。

第3遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、第2遺構面の上面に造成された遺構面であることから、17世紀末～19世紀代を想定している。

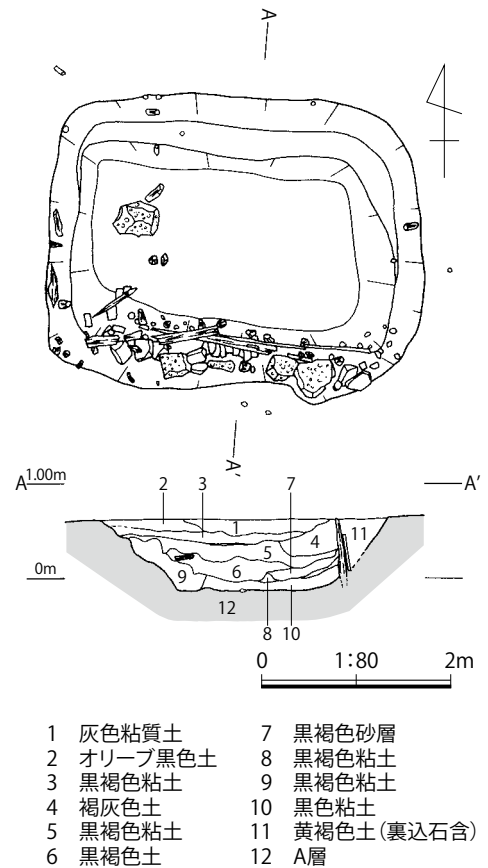
以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 SK17（第124図）

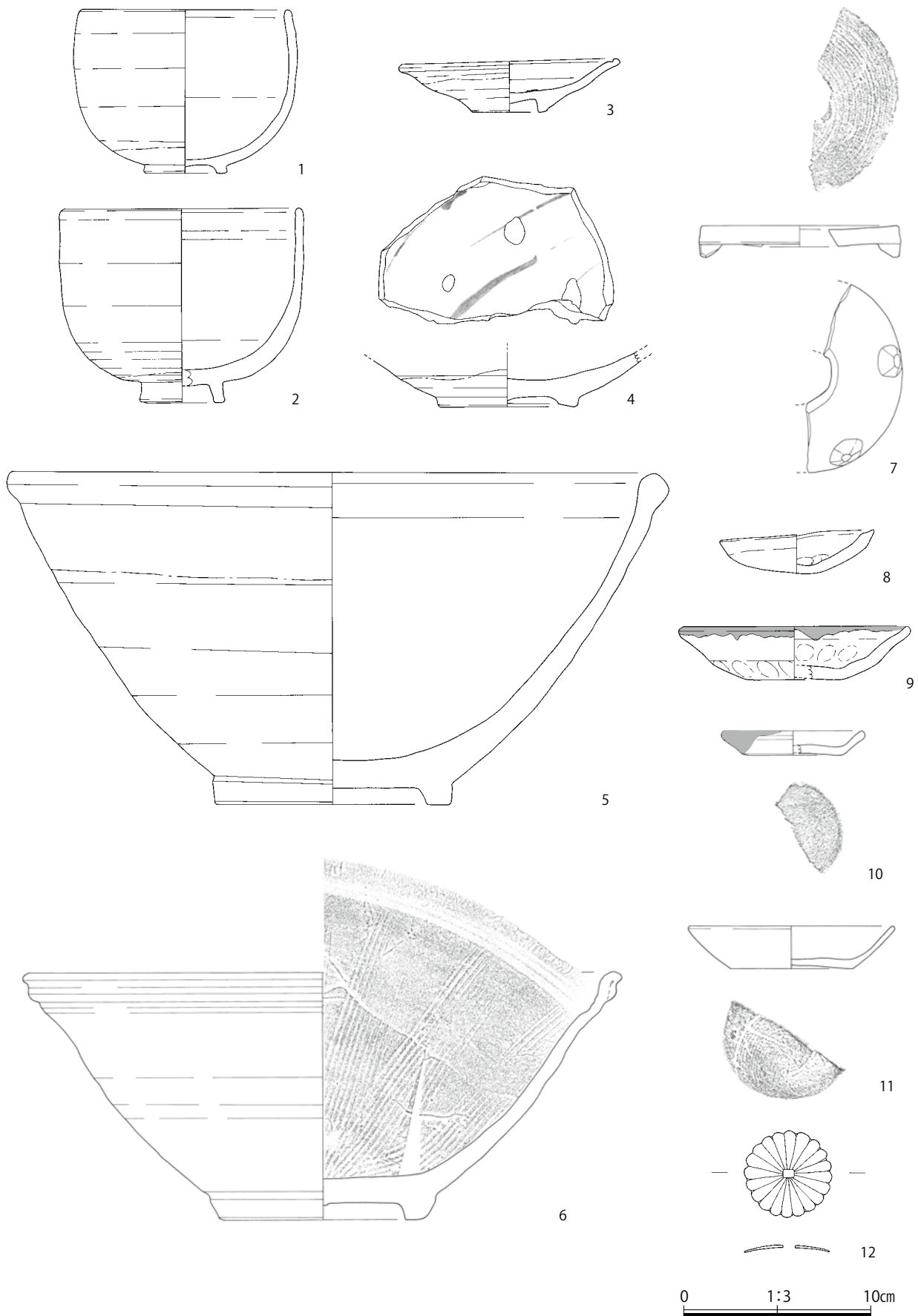
SK17は北東屋敷のほぼ中央に位置する遺構で、第2遺構面では屋敷境溝SD03（第14図）の東西溝が存在していた場所の真上に造られている。SK17は東西方向に長い長方形土坑で、東西長約4.0m、南北長約3.0m、深さ0.78mを測る。土坑の南側には木枠の痕跡を検出しており、長さ0.6～0.8m、直径6～10cmの木杭が一定間隔で差し込まれ、その間に厚み2～4cmの大きな板材を立てることで木枠が造られていた。板材の裏側には裏込め石と思われる小石が多数入れられていた。南側しか残存していないが、おそらく4面とも同じような形態で造られていたと推定する。

SK17の性格は、出土遺物が多量で種類も豊富であったことなどから、廃棄土坑として使用されていた可能性を考えている。

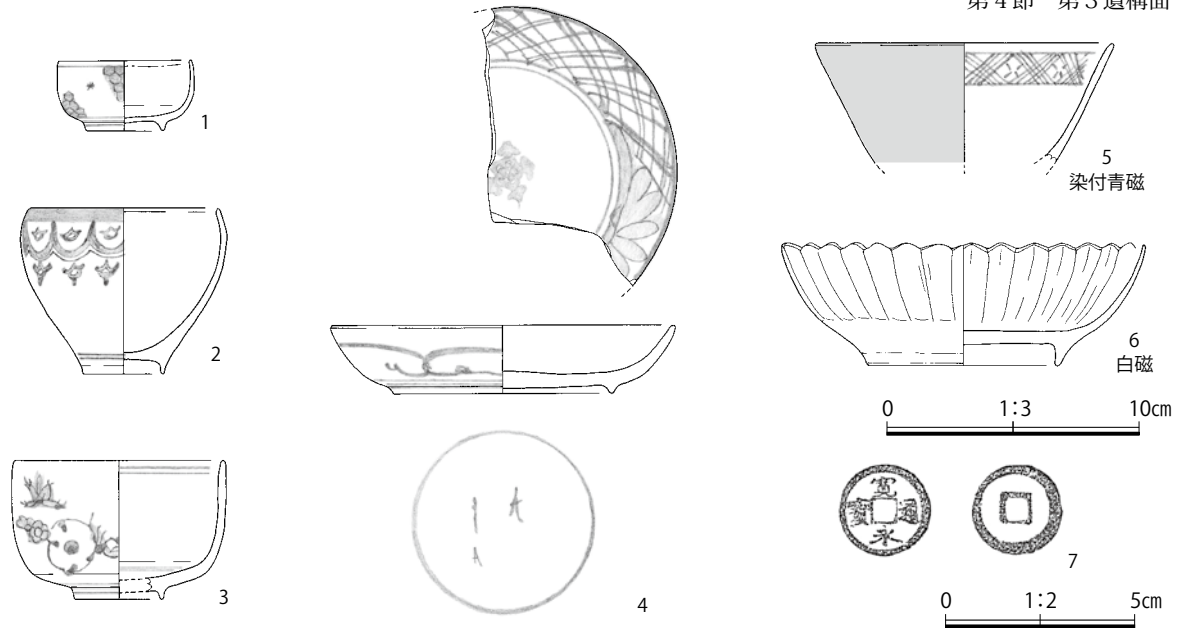
出土遺物は、陶器は九陶Ⅰ-2～Ⅱ期の古手のものが混じるが、主は瀬戸・美濃、山口（須佐）、在地（18～19世紀代）などである。磁器は九陶Ⅳ～Ⅴ期（1690～1860）が主流で、土師器は京都系と在地系が混在している。



第124図 SK17平面図・土層断面図



第125図 SK17出土遺物(1)



第126図 SK17出土遺物（2）

SK17 出土遺物（第 125・126 図）

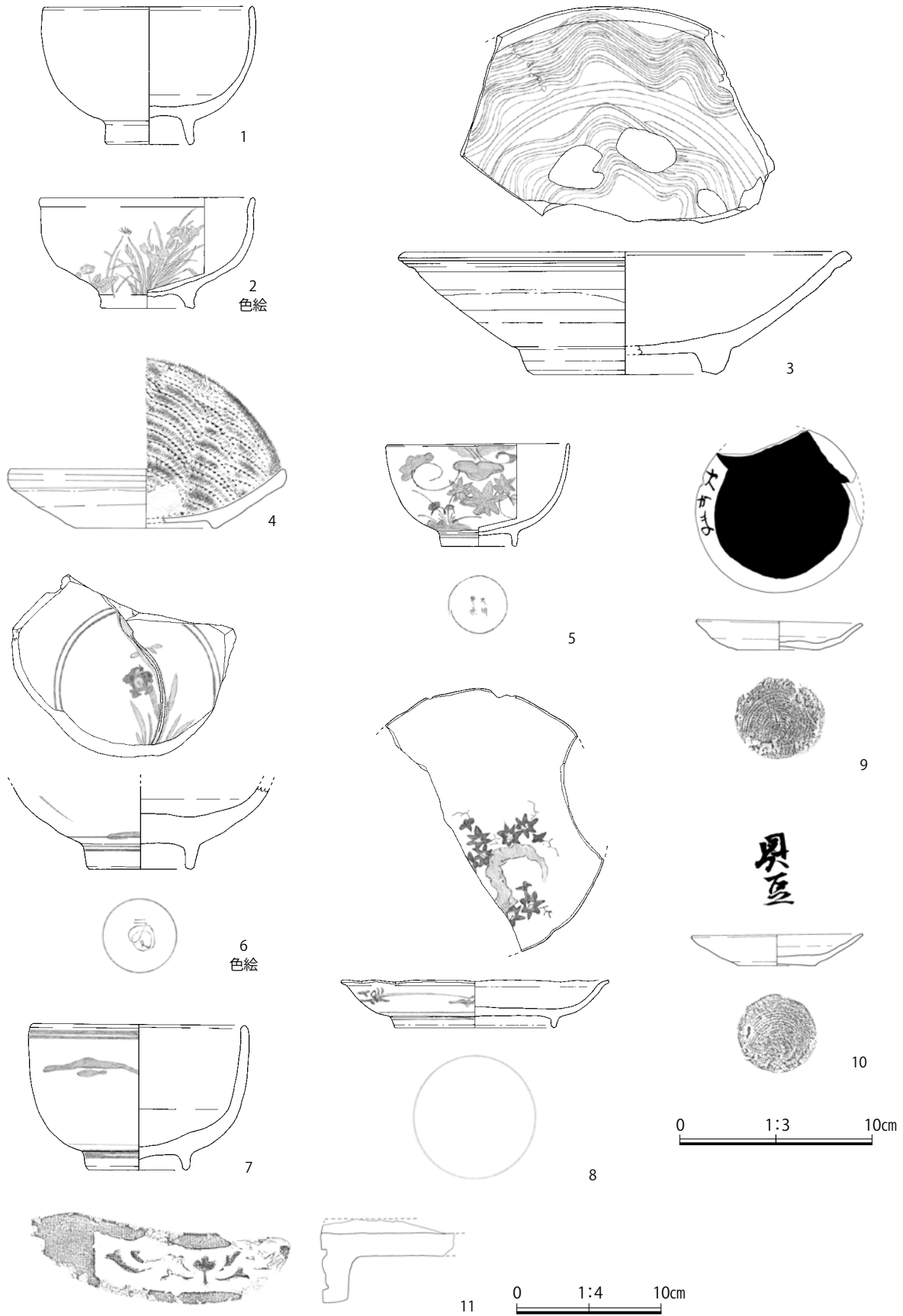
125-1～7は陶器である。125-1は在地（布志名）の中碗で、胴部は球体に近い丸みを持つ。125-2は瀬戸・美濃の大碗で、口径 12.7cm、高台径 4.5cm、器高 10.5cm を測る。いずれも 18～19 世紀代に該当する。125-3は肥前の溝縁皿で、見込みに砂目痕が残ることから、九陶Ⅱ期（1610～50）のものである。125-4も肥前の中皿で、見込みに鉄絵と胎土目痕が残ることから、やや古く九陶Ⅰ-2期（1594～1610）のものである。125-5は在地（布志名）で、口径 34.8cm、高台径 12.6cm、器高 17.9cm を測る大鉢である。口縁端部は玉縁状を呈するもので、19 世紀代に該当する。125-6は山口（須佐）の播鉢で、内面に 10 本単位の摺目が放射状に入る 18 世紀代のものである。125-7は窯道具で、中央に孔が開いた輪ドチであり、足が 5ヶ所に付いている。

125-8～11は土師器で、125-8・9は手づくね成形による京都系、125-10・11は底部に回転糸切り痕が残る在地系である。このうち 125-9・10の口縁端部に油煙痕が付着しており、灯明皿として使用されていたものと思われる。

125-12は金属製品で、菊花文を象った装飾品である。直径 4.7cm の菊花形で、中心に方形の孔が開けられている。

126-1～6は肥前磁器である。126-1は小形蓋付鉢で、外面に破れ亀甲文が描かれる。九陶Ⅴ期（1780～1860）である。126-2は口縁部が強めに内湾する独特の形状で、口縁部外面に輪宝文^{りんぼう}が全周する。九陶Ⅴ期（1780～1810）のものである。126-3は小丸形中碗で、腰部が強く張り出す形状を呈する。九陶Ⅴ期（1780～18世紀前半）のものである。126-4は丸形小皿で、口縁端部は口さび、内面に菊花文と斜格子文、見込みに五弁花文、外面には唐草文が描かれる。また、高台内は 1 条の圏線と「大明年製」銘が入る。九陶Ⅳ期（1730～40）に該当する。126-5は染付青磁碗で、外面は青磁釉、内面には四方禪文が全周する九陶Ⅳ期（1760～80）のものである。126-6は有田・南河原^{なんがわらがま}窯の白磁中皿で、型押成形で菊花状を呈する。九陶Ⅳ期（1690～1730）頃に当たる。

126-7は銭貨「寛永通寶」で、古寛永である。



第127図 北東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物

第3項 遺構外出土遺物（第127図）

127-1～4は陶器である。127-1は肥前の呉器手碗で、高台は高く饅頭芯状を呈し、九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。127-2は山口（須佐）の中碗で、外面に色絵が描かれる珍しい遺物である。絵柄は菖蒲の花と草花文で、葉の部分は緑色、菖蒲の花は紫色で表現されている。年代は17世紀後半～18世紀代にかけてのものである。127-3は肥前の大皿で、内面に象嵌・白化粧土の装飾が施される九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。また、見込みに砂目痕が残る。127-4は在地（布志名）の下ろし皿で、内面全面に下ろし金状の痕跡が付けられる。

127-5～8は肥前磁器で、127-5は丸形中碗である。染付は外面のみに見られ、コンニャク印判による紅葉文と草花文が描かれ、高台内は1条の圏線と「大明年製」銘が入る。127-6は波佐見の大碗で、胴部～高台の破片である。高台径5.6cmを測る。くらわんか碗の一種である。見込みには2条の圏線と五弁花文、高台内には1条の圏線と「渦福」が入る。年代は波佐見Ⅴ期（1680～1860）のものである。127-6で特筆すべき点は、見込みに入った割れを色絵で補修している点である。使用途中で割れた部分を漆やガラスで焼継ぎする作業とは異なり、製品を出荷する前にヒビが入ったものを、窯元で色絵を使って補修している⁽³⁸⁾。このような工程が分かる遺物はあまり出土例が無く、貴重なものである。その作業としては、割れ口を緑色でなぞることで草花の茎とし、葉の部分は赤色で絵柄として描き込んでいる。さらに、元々見込みにあった五弁花文を花として見立て、割れ口を茎や葉と違和感無く一致するように仕上げている。127-7は陶胎染付の中碗で、染付は色が薄い絵柄である。九陶Ⅳ期（1690～1780）に該当する。127-8は口径14.0cm、高台径8.6cmを測る中皿で、型押成形による形状である。染付は外内面に見られ、見込みに紅葉文、外面は唐草文、高台内には1条の圏線のみが巡る。九陶Ⅲ期（1650～90）のものである。

127-9・10は在地系の土師器で、底部に回転糸切り痕が残る小皿である。どちらの内面にも墨書文字が書かれており、127-9は口縁端部内面の一部分に「火かま」とあり、底部内面にかけて直径7.0cmの範囲で墨により黒く塗り潰されている。「火かま」と黒い塗り潰しの範囲がどのような意味合いを持つものか判断しかねるが、127-9と同一形態の小皿を少なくとも3枚確認している。祭祀的な行事などで使用した器か。127-10は見込みに「貝豆」と縦書きされたものである。「貝豆」とは、インゲン豆に属する食用の豆である⁽³⁹⁾。

127-11は軒平瓦で、瓦当部分の破片である。顎面には唐草文が象られる。

表19 北東屋敷 陶磁器・土師器観察表

遺物番号	面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾	法量:cm(残存値)			生産地	九陶(年代)	備考
								口径	底径	器高			
120-1	1	遺構外	陶器	中碗	端反形	—	全面施釉	11.0	4.3	7.8	肥前(嬉野)か	Ⅱ(1610～50)	畳付・無釉・砂
120-2	1	遺構外	陶器	小坏	丸形	—	薄桃色釉	6.2	3.2	3.6	肥前	Ⅱ(1610～50)	胴部～高台・無釉
120-3	1	遺構外	陶器	小皿	—	—	—	—	4.0	(2.4)	肥前	I-2(1594～1610)	体部～高台・無釉/胎土目4
120-4	1	遺構外	陶器	中碗	杏形	—	黒色釉	(12.0)	—	(3.7)	瀬戸・美濃(黒織部)	16世紀末～17世紀初	★重要
120-5	1	遺構外	陶器	中皿	折縁形	—	—	(23.3)	—	(4.3)	肥前	I-2～Ⅱ(1594～1610)	
120-6	1	遺構外	陶器	片口鉢	—	—	—	(29.0)	—	(5.4)	肥前	I～Ⅱ(1600～20)	
120-8	1	遺構外	土師器	極小皿	京都系	—	—	(9.2)	4.8	1.9	在地	—	手づくね成形
120-9	1	遺構外	土師器	小皿	京都系	—	—	(12.4)	(4.9)	(2.4)	在地	—	手づくね成形/外内面・煤・油煙痕
120-10	1	遺構外	土師器	小皿	在地系	—	—	(10.7)	(6.0)	2.3	在地	—	底部・回転糸切り
122-1	2	遺構外	陶器	小皿	折縁形	—	—	12.0	4.3	3.8	肥前	I-2(1594～1610)	体部～高台・無釉/胎土目
122-2	2	遺構外	陶器	中碗	丸形	—	鉄絵	(11.8)	(4.6)	6.2	肥前	Ⅱ(1610～50)	胴部～高台・無釉
122-3	2	遺構外	陶器	火入れ	玉縁状	—	二彩手	(14.4)	(7.2)	7.2	肥前	Ⅲ(1650～90)	体部～高台・無釉/高台挟り3

第7章 北東屋敷

遺物番号	面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾	法量:cm(残存値)			生産地	九陶(年代)	備考
								口径	底径	器高			
122-4	2	遺構外	陶器	家屋	ミニチュア	—	—	高3.3	幅3.5	長6.0	在地	18~19世紀代	
122-5	2	遺構外	磁器	小杯	端反形	蘭文	染付	6.7	2.7	4.5	肥前	II-2(1630~50)	底部~高台・無釉
122-6	2	遺構外	磁器	中碗	丸形	昆虫文	染付	(10.8)	—	(5.5)	中国(景德鎮窯)	17世紀前半	
122-7	2	遺構外	磁器	小皿	丸形	蝶文・区画文・草花文	染付	(12.9)	4.3	4.2	肥前	II-1(1610~30)	畳付・無釉・砂
122-8	2	遺構外	磁器	中碗蓋	端反形	渦巻文・桔梗文・○×文/見込:草花文	染付	9.6	つまみ 4.1	2.7	肥前	IV(1690~1780)	つまみ端部・無釉
122-9	2	遺構外	磁器	大皿	内湾形	葉文(ヘラ彫り)	青磁	18.8	7.6	6.8	肥前(彼佐見)	III(1630~50)	型押成形/畳付・無釉・砂/足3/漆継ぎ
122-10	2	遺構外	土師器	小皿	京都系	—	—	12.0	5.3	3.2	在地	—	手づくね成形/内面:油煙痕・煤
122-11	2	遺構外	土師器	小皿	在地系	—	—	11.1	6.6	2.6	在地	—	底部:回転系切り
125-1	3	SK17	陶器	中碗	腰張形	—	白色釉	11.0	4.5	8.8	在地(布志名)	19世紀代	底部~高台・無釉
125-2	3	SK17	陶器	大碗	腰張形	—	薄緑色釉	(12.7)	(4.5)	10.5	瀬戸・美濃	18世紀代	底部~高台・無釉
125-3	3	SK17	陶器	小皿	溝縁形	—	—	11.5	4.0	2.9	肥前	II(1610~50)	体部~高台・無釉/砂目3
125-4	3	SK17	陶器	中皿	—	—	鉄絵	—	7.6	(3.0)	肥前	I-2(1594~1610)	底部~高台・無釉/胎土目4
125-5	3	SK17	陶器	大鉢	玉縁形	—	薄緑色釉	34.8	12.6	17.9	在地(布志名)	19世紀代	体部~高台・無釉/871-8と接合
125-6	3	SK17	陶器	搦鉢	—	—	—	(31.5)	11.2	13.4	山口(須佐)	18世紀代	スリ目単位10本
125-7	3	SK17	陶器	竈道具	足付輪下チ	—	—	φ(10.6)	—	1.7	在地	—	両面:回転系切り/足5(残存2)
125-8	3	SK17	土師器	極小皿	京都系	—	—	8.2	3.1	2.4	在地	—	手づくね成形
125-9	3	SK17	土師器	小皿	京都系	—	—	(12.2)	(5.4)	2.8	在地	—	手づくね成形/口縁端部:油煙痕
125-10	3	SK17	土師器	極小皿	在地系	—	—	(7.4)	(5.6)	1.3	在地	—	底部:回転系切り/口縁端部:油煙痕
125-11	3	SK17	土師器	小皿	在地系	—	—	(11.0)	(6.6)	2.3	在地	—	底部:回転系切り 口縁端部・底部内面:油煙痕
126-1	3	SK17	磁器	蓋付鉢	腰張形	破れ亀甲文	染付	5.3	3.1	2.9	肥前	V(1780~1860)	口縁端部・畳付・無釉
126-2	3	SK17	磁器	小杯	内湾形	輪宝文	染付	(7.6)	3.2	(6.6)	肥前	V(1780~1810)	畳付・無釉
126-3	3	SK17	磁器	中碗	小丸形	草花文	染付	(8.3)	(3.5)	5.6	肥前	V (1780~18世紀前半)	畳付・無釉
126-4	3	SK17	磁器	小皿	丸形	斜格子文・菊花文・唐草文 見込:五弁花文/高台内:大明年製	染付 口さび	(13.8)	(8.8)	2.8	肥前	IV(1730~40)	畳付・無釉・砂
126-5	3	SK17	磁器	鉢	端反形	四方禪文	染付青磁	(11.8)	—	(4.8)	肥前	IV(1760~80)	
126-6	3	SK17	磁器	中皿	菊花形	—	白磁	14.4	7.7	4.9	肥前 (有田・南河原窯)	IV(1690~1730)	型押成形/畳付・無釉・黒色
127-1	3	遺構外	陶器	中碗	呉器形	—	—	(11.0)	4.5	7.3	肥前	III(1650~90)	畳付・無釉・砂/饅頭芯
127-2	3	遺構外	陶器	中碗	腰張形	菖蒲文・草花文	色絵	(11.2)	(5.0)	5.8	山口(須佐)	17世紀後半~18世紀代	底部~高台・無釉
127-3	3	遺構外	陶器	大皿	—	刷毛目文	象嵌 白化粧土	(23.0)	(10.4)	6.5	肥前	III(1650~90)	砂目6(残存3)
127-4	3	遺構外	陶器	下ろし皿	—	—	—	14.2	7.4	3.1	在地(布志名)	19世紀代	
127-5	3	遺構外	磁器	中碗	丸形	草花文・紅葉文(コンニャク印版) 高台内:大明年製	染付	9.5	4.0	5.4	肥前	IV(1690~1782)	畳付・無釉
127-6	3	遺構外	磁器	大碗	—	見込:五弁花文/高台内:渦福くずれ	染付	—	5.6	(4.4)	肥前(彼佐見)	V(1680~1860)	畳付・無釉・砂 漆継ぎ:継いだ後色絵で装飾を施す
127-7	3	遺構外	陶器	中碗	腰張形	—	陶胎染付	(11.0)	5.1	7.7	肥前	IV(1690~1780)	畳付・無釉・砂
127-8	3	遺構外	磁器	中皿	端反形	唐草文/見込:紅葉文	染付	(14.0)	(8.6)	2.5	肥前	III(1650~90)	型押成形/畳付・無釉/ハリ支え
127-9	3	遺構外	土師器	極小皿	在地系	—	—	8.6	4.5	1.6	在地	—	底部:回転系切り 内面:墨・墨書文字「火かま」
127-10	3	遺構外	土師器	極小皿	在地系	—	—	(8.8)	4.0	1.7	在地	—	底部:回転系切り 底部内面:墨書文字「貝豆」

表20 北東屋敷 銭貨観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	質量/直径	備考
122-13	2	遺構外	寛永通寶	13.5	6.0	1.0	1.93	100	0.14	八貝寶(新寛永)
126-7	3	SK17	寛永通寶	16.0	6.0	1.0	3.42	100	0.21	又貝寶(古寛永)

表21 北東屋敷 金属製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	形状	材質	法量		備考
						大きさ(cm)	重量(g)	
120-11	1	遺構外	煙管	雁首	真鍮	長さ4.6/火皿φ1.4/小口φ0.7		4.20
125-12	3	SK17	裝飾品	菊花形	—	長さ4.7/幅4.1/厚さ0.15		16.37

表22 北東屋敷 石製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	材質	法量		備考
					大きさ(cm)	重量(g)	
120-7	1	遺構外	硯	—	長さ13.6/幅7.2/厚さ2.0		263.72

表23 北東屋敷 木製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	各称部位	法量:cm(残存値)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
120-12	1	遺構外	匙	—	(8.8)	2.9	—	1.1	—	内:黒
120-13	1	遺構外	篋(片刃)	—	15.5	2.4	—	0.7	—	—
120-14	1	遺構外	曲物容器	底板か蓋	13.5	(8.7)	—	0.7	—	—
120-15	1	遺構外	折敷	—	27.8	(5.1)	—	0.7	—	内:黒
120-16	1	遺構外	下駄	角型連歯下駄	20.6	(6.2)	2.4	1.4	—	指の痕跡あり
122-12	2	遺構外	刷毛	—	12.1	4.4	—	0.7	—	刷毛部:毛を挟む構造

表24 北東屋敷 瓦観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	法量(残存値)		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
127-11	3	遺構外	軒平瓦	上弦幅(18.0)/下弦幅(14.0)/瓦当高(4.8)/平瓦厚1.6	500	唐草文

第8章 南東屋敷

南東屋敷は、新宮庁舎調査区の南東にあり、北側を屋敷境 B、西側を屋敷境 D により区画された屋敷地である。以下その詳細を説明する。

第1節 基本層序 (第128図)

南東屋敷の土層堆積状況の観察を行った結果、旧地表面と3面の遺構面を確認した。なお、以下で説明する基本層序(第128図)については、第3章第2節で示した基本層序と共通するものであり、土層の呼称については対応する層名を付した。また、旧地表面(I a層)以下の説明は検出標高のみを記載し、詳細は割愛する。

南東屋敷の基本層序は、調査区北壁土層の一部分を掲載している(第129図 A-A')。以下、各遺構面の土層堆積状況について、下層から上層の順に説明する。

旧地表面以下の自然堆積層(Ⅱ・Ⅲ層) 標高 0.15m 層厚 30cm 以上

旧地表面(I a層) 標高 0.25m 層厚 15cm

第1遺構面(A層) 標高 0.55～0.9m 層厚 20～60cm

A層は城下町初期造成土と考えられるもので、I a層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土である。南東屋敷の第1遺構面基盤層である。

第2遺構面(B-1層) 標高 0.95～1.1m 層厚 10～45cm

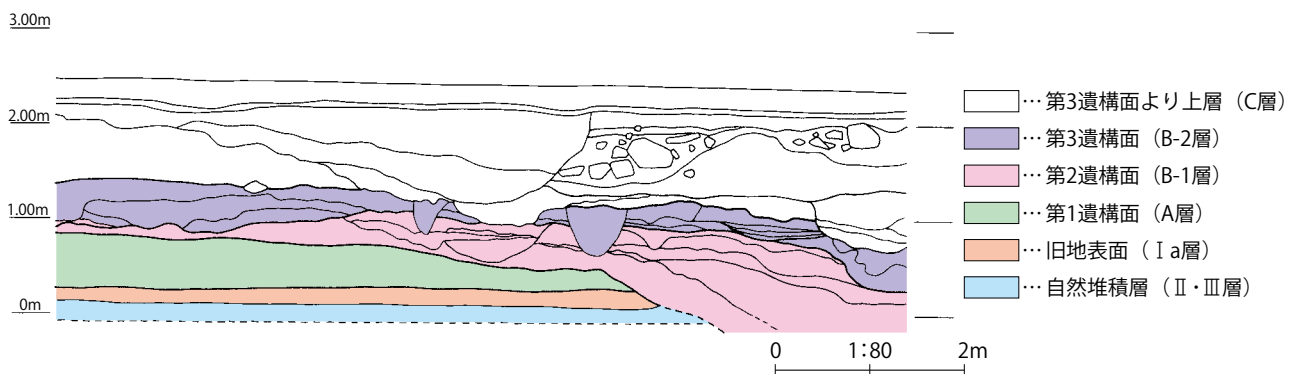
B-1層は南東屋敷の第2遺構面基盤層で、淡灰色砂質土を呈する。

第3遺構面(B-2層) 標高 1.25～1.4m 層厚 20～40cm

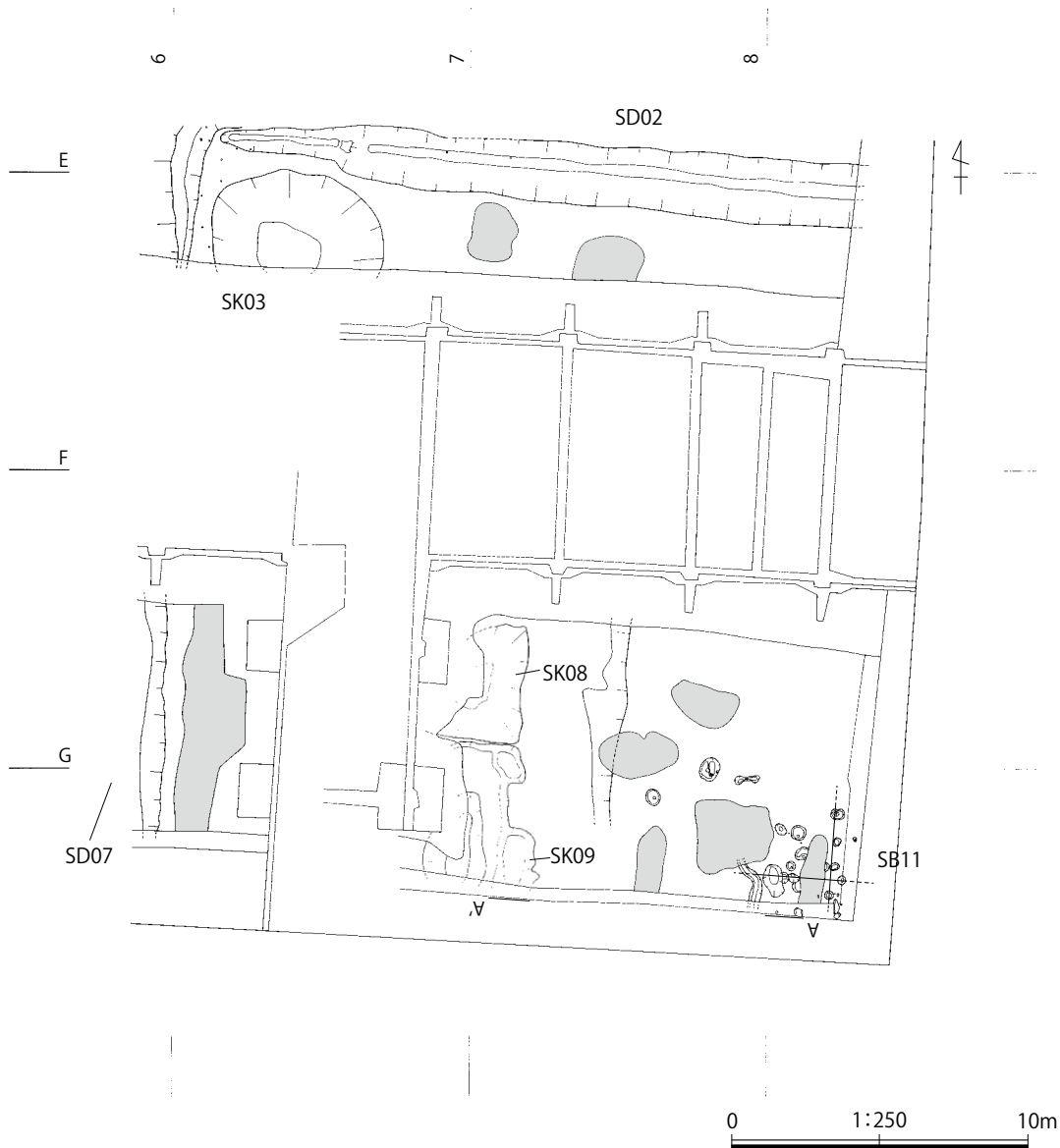
B-2層は南東屋敷の第3遺構面基盤層で、黄色シルト質の山土である。

第3遺構面より上層(C層) 標高 2.4～2.5m 層厚 105～110cm

C層は攪乱層である。近現代の陶磁器やガラス片、コンクリート片が混じる。



第128図 南東屋敷 基本層序土層断面図



第129図 南東屋敷 第1遺構面遺構配置図

第2節 第1遺構面

第1項 遺構面の概要 (第129図)

第1遺構面は、標高0.55～0.9mで検出し、遺構面を形成するA層は層厚20～60cmを測る。

第1遺構面では、掘立柱建物跡1棟 (SB11)、土坑3基 (SK03・08・09)、その他小規模の土坑などを検出した。同時期に造られた屋敷境は、北側はSD02、西側はSD07・08が対応する。

遺物は、土師器のみが出土しており、京都系・在地系どちらも見られる。

第1遺構面の年代は、出土遺物が少なく確証を得ないが、城下町造成以前の旧地表面上に盛られたA層を基盤とする最初の遺構面であることを根拠として、17世紀初頭以降を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

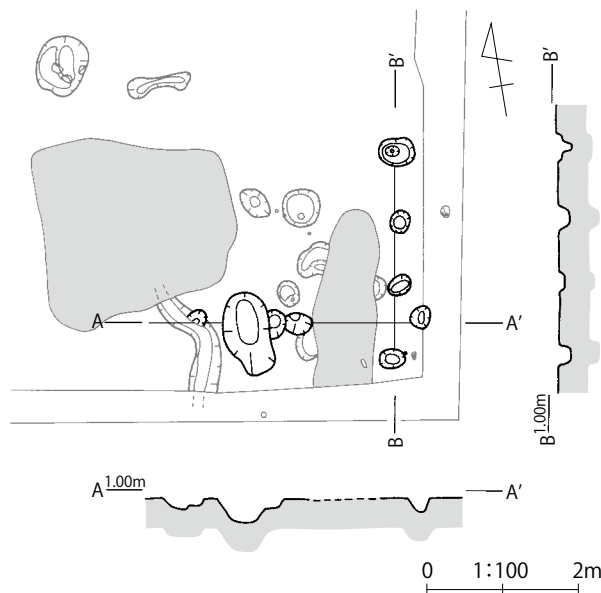
第2項 SB11 (第130図)

SB11は、南東屋敷地の東角で検出した直交する2列の柱列から復元した掘立柱建物跡である。柱列は南北方向に1列、東西方向に1列が見られ、位置的にもずれがあるため、同一の建物ではない可能性もある。

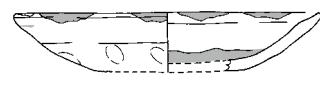
SB11の規模は、南北方向に3間以上(2.8m以上・柱間1.0m)、東西方向に2間以上(3.0m以上・柱間1.0~2.0m)である。南側と東側は調査地外へ続くと思われる、北側では柱穴などの遺構を検出していないことから、北側に向かって建物は広がらないことが想定できる。なお、西側は近代の攪乱などで破壊された部分が多く、建物の続きと思われる遺構は検出できなかった。

SB11を構成する柱穴は、直径0.3~0.5m、深さ0.1~0.4mを測るもので、明確に列が確認できたのは南北方向のB-B'のみであった。B-B'は1間1.0m間隔で並ぶ柱列である。他の屋敷地で検出した建物跡は、そのほとんどが1間1.9~2.0mの間隔で並んでおり、間に束柱(もしくは束石)を置いたものが多かったことから、B-B'も1間2.0mで、束柱を持つ形態であったことが想定される。

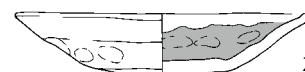
SB11範囲内からは遺物は出土していない。



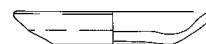
第130図 SB11平面図・断面図



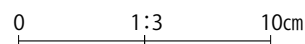
1



2



3



第131図 南東屋敷
第1遺構面遺構外出土遺物

第3項 遺構外出土遺物 (第131図)

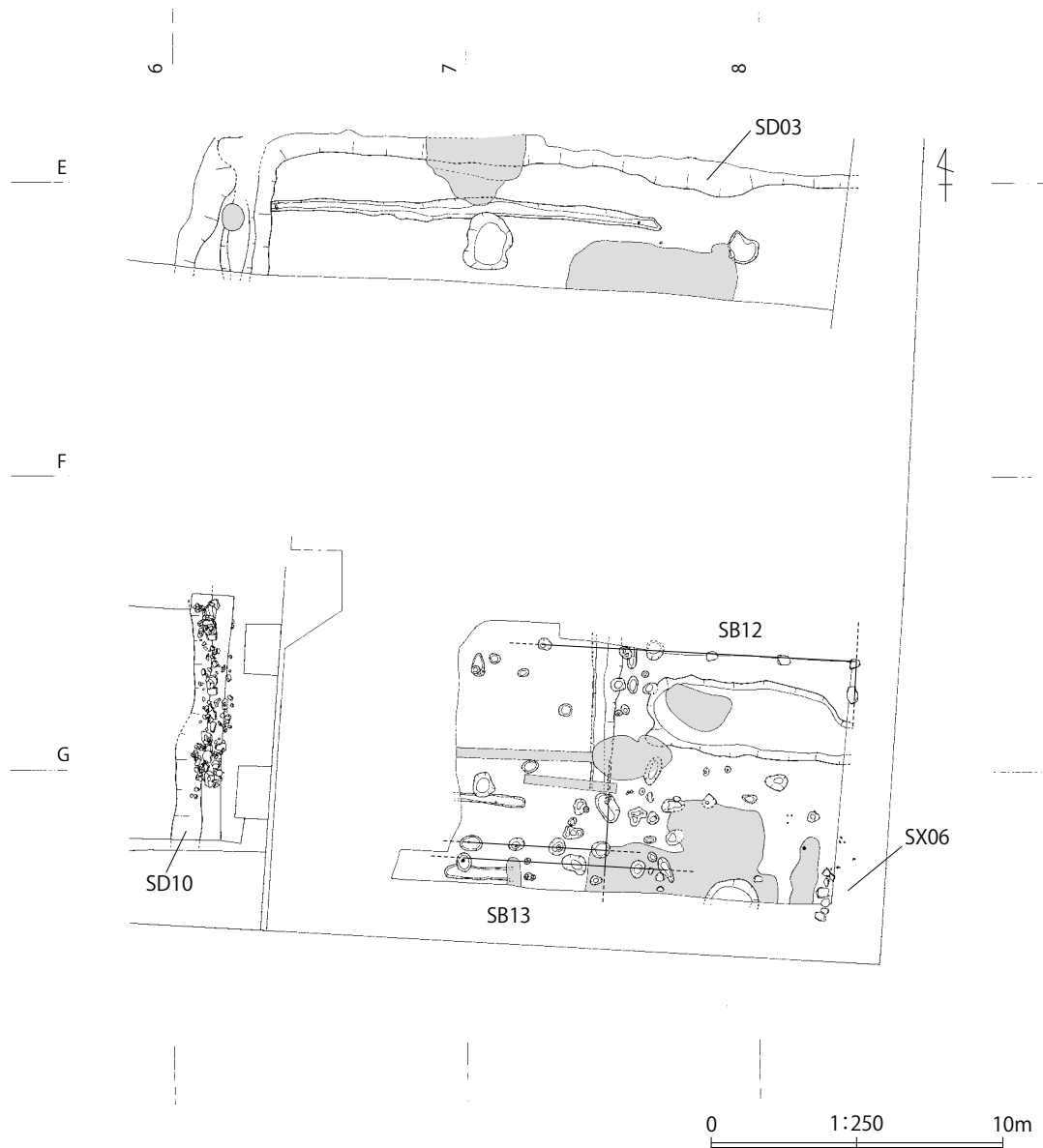
131-1~3は土師器で、131-1・2は手づくね成形による京都系、131-3は底部に回転糸切り痕が残る在り系である。131-1・2の底部外面には指痕が顕著に残り、また、口縁端部や底部内面に油煙痕と煤が付着する。特に131-2の底部内面は、全面がタール状の黒色に変化している。131-3は口径7.7cmを測る極小皿で、口縁端部が膨らみを持つ形状である。

第3節 第2遺構面

第1項 遺構面の概要 (第132図)

第2遺構面は、標高0.95~1.1mで検出し、遺構面を形成するB-1層は層厚10~45cmを測る。第2遺構面で検出した主な遺構は、礎石建物跡1棟(SB12)、掘立柱建物跡1棟(SB13)、石列1基(SX06)などで、その他土坑等を検出した。なお、遺物を伴わない不明確な遺構についての個別説明は割愛する。対応する屋敷境は、北側はSD03、西側はSD10である。

遺物は、国産陶器・中国磁器・土師器・木製品などが出土している。出土量は少なく、このうち陶



第132図 南東屋敷 第2遺構面遺構配置図

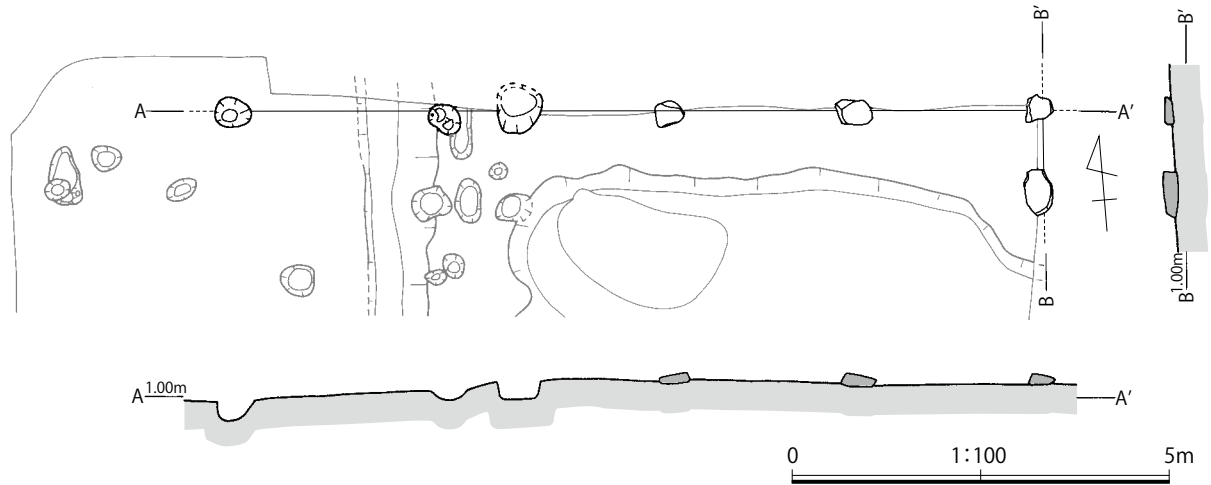
器は肥前（九陶 I -2～II期・1594～1650）のみ、磁器は中国磁器（景德鎮窯・17世紀前半）のみの出土である。土師器は京都系と在り系が混ざり合う状況である。

第2遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、城下町造成以前の旧地表面上に盛られたA層の上面に造成された遺構面であることを根拠として、17世紀前半頃を想定している。

以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。

第2項 SB12（第133図）

SB12は南東屋敷地の西部分に位置する礎石建物跡である。SB12の規模は、東西方向に4間以上（10.8m以上・柱間2.5m）、南北方向に0.5間以上（1.0m以上・柱間2.2m）であり、東側で直角に交わる並びである。A-A'の東側礎石は残存しているが、西側は土坑の状態を検出している。これは、元々存在した礎石が抜き取られたものと考えている。礎石は0.4～0.6mと大きく、天端は全て標高1.3mで揃えられている。A-A'の北側は建物基礎攪乱で大きく破壊されているおり、東側も調査区外



第133図 SB12平面図・断面図

となることから、SB12の全容は不明とせざるを得ない。

SB12の範囲内からは遺物がごくわずかに出土したが、いずれも土師器の小片で図化できなかった。

第3項 SB13 (第134図)

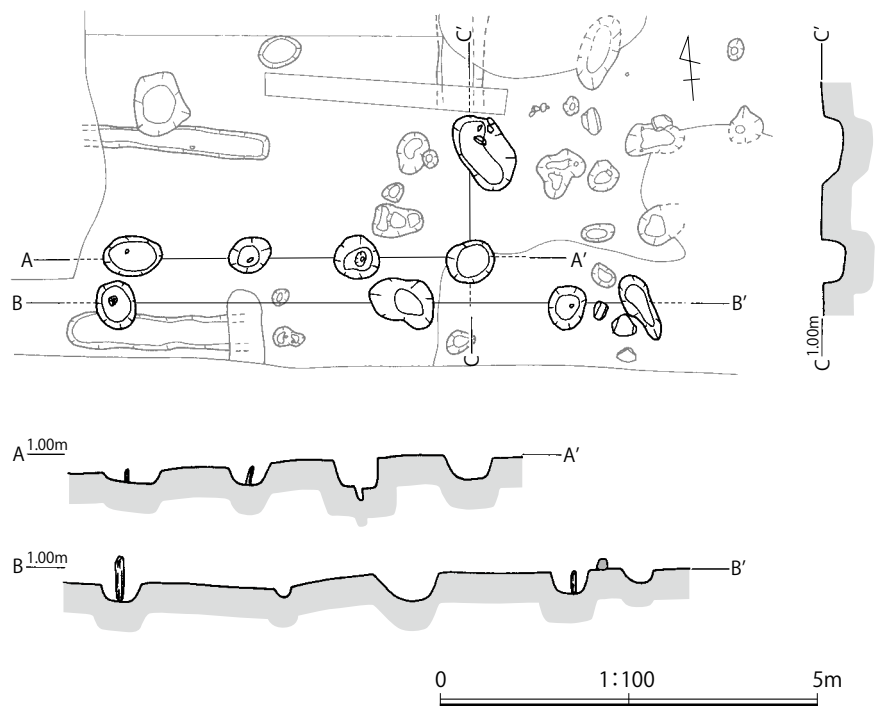
SB13は、SB12から約13m南西側に位置する掘立柱建物跡である。A-A'・C-C'は1間1.5m間隔で並んでおり、同軸であることから同一の建物と思われる、東西3間以上(4.5m以上・柱間1.5m)、南北1間以上(1.5m以上・柱間1.5m)である。B-B'は東西方向に3.5間以上(7.0m以上・柱間約2.0m)を測る。柱穴の規模は、直径0.5～1.1m、深さ0.2～0.6mを測る。

A-A'・C-C'とB-B'の建物軸は合っているが、柱間の間隔が異なることから、1棟の建物ではない可能性や建て替えの可能性も考えられるが、決定付けることが困難であるため、同一の図面で掲載した。

第4項 SX06 (第135図)

SX06は、SB13から東へ約5.0mの位置、南東角で検出した石列である。石列は南北方向に石が6個並んでいる状態で、石の天端は標高1.25～1.30mで合っている。

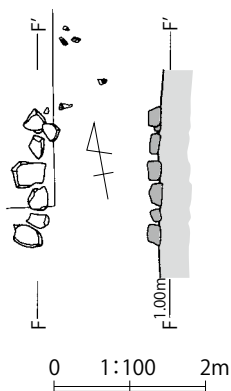
SX06の性格については不明と言わざるを得ないが、屋敷地内に造られた遺構であることから、建物に関連する



第134図 SB13平面図・断面図

遺構の可能性を考えている。

SX06 から遺物は出土していない。



第135図
SX06平面図・断面図

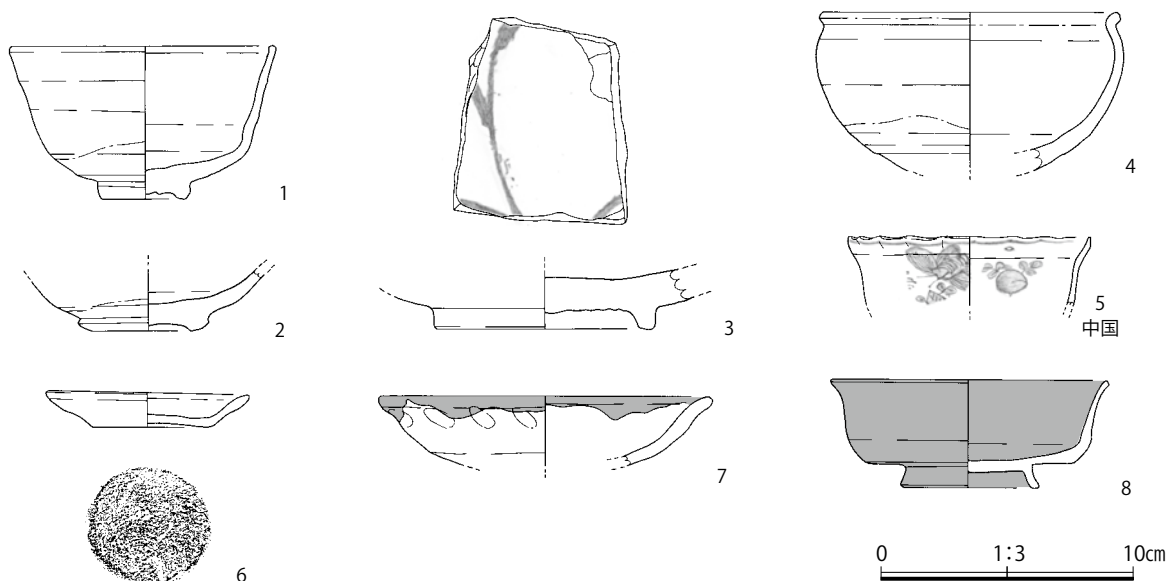
第5項 遺構外出土遺物(第136図)

136-1～4は肥前陶器である。136-1は中碗で、口縁端部がごくわずかに内傾する。底部は兜巾・三日月高台である。136-2は小皿で、体部～高台の破片である。見込みに目跡は見られない。136-3は高台径8.8cmを測る大皿で、見込みに鉄絵による草花文が描かれる。136-4は片口鉢で、口縁端部は強く外反し、胴部は丸みを持つ。片口部分は残存していない。136-1～4はいずれも九陶Ⅰ-2～Ⅱ期(1594～1610)の間におさまるものである。

136-5は中国磁器(景德鎮窯)の向付で、口径9.7cmを測る。口縁部は型押成形により波打つ形状である。染付は外内面に見られ、外面には昆虫(蝶か)、内面には草花文が描かれる。17世紀前半代のものである。

136-6・7は土師器で、136-6は底部に回転糸切り痕が残る在地系の極小皿、136-7は手づくね成形による京都系の小皿である。136-7の口縁端部には油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたものと思われる。

136-8は漆製品で、口径11.0cm、高台径5.6cm、器高4.3cmを測る漆器碗である。口縁部はやや強めに外反する端反形で、腰部分が直角気味に折れる形状である。外内面ともに黒色の漆が塗られている。



第136図 南東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物

第4節 第3遺構面

第1項 遺構面の概要 (第137図)

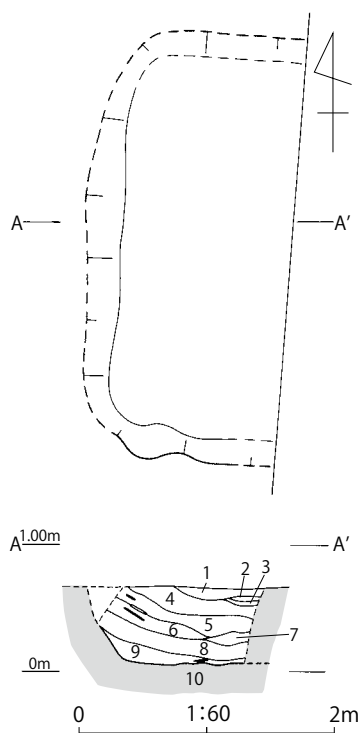
第3遺構面は、標高 1.25 ～ 1.4m で検出し、遺構面を形成する B-2 層は層厚 20 ～ 40cm を測る。第3遺構面で検出した遺構は、土坑 1 基 (SK18)、礎石建物跡 1 棟 (SB14)、石列 1 基 (SX07) などで、その他土坑などの遺構を検出し、また、近現代の攪乱が多数見られた。なお、遺物を伴わない不明確な遺構についての個別説明は割愛する。対応する屋敷境は、北側は攪乱により残存しておらず、西側は SD11 である。

遺物は、国産陶磁器・中国磁器・土師器・金属製品・石製品・木製品・銭貨などが出土している。このうち陶器は肥前 (九陶Ⅱ～Ⅲ期・1610～90) が多く、その他少数で山口 (須佐) が出土している。磁器は肥前 (九陶Ⅲ～Ⅳ期・1650～1780) が主で、中国磁器 (景德鎮窯) もわずかに出土する。土師器は、京都系と在地系が混ざり合う状況である。



第137図 南東屋敷 第3遺構面遺構配置図

第3遺構面の年代は、出土遺物の年代観と、第2遺構面の上面に造成された遺構面であることから、17世紀後半～18世紀代を想定している。以下、この遺構面で検出した遺構・遺物について詳細を述べる。



- | | |
|-----------|------------|
| 1 C層 | 6 黒色土 |
| 2 黒褐色土 | 7 灰オリーブ粘質土 |
| 3 オリーブ黒色土 | 8 オリーブ黒色土 |
| 4 灰色土 | 9 暗オリーブ灰色土 |
| 5 オリーブ黒色土 | 10 オリーブ黄色土 |

第138図 SK18平面図・断面図

第2項 SK18 (第138図)

SK18は南東屋敷地の西側寄りに位置し、屋敷境溝SD11に隣接する位置に掘り込まれた土坑である。SK18の東側は建物基礎攪乱範囲があることから、土坑の規模は検出範囲のみからの判断となるが、南北残存長2.8m、東西残存幅1.3m、深さ0.6mを測る土坑で、東側は調査地外へ続いている。検出した範囲では土坑の角に当たる部分を確認したことから、方形状を呈していた可能性も考えられる。

土層の堆積状況は、第1～10層全てがほぼ水平に積み重なっている。いずれも黒色系の土層が多く、木片や有機物を含んでいる。

SK18からは多量の遺物が出土している。陶器・磁器・土師器・木製品など多様で、この中でも特筆すべきは荷札木簡140-1・2(第140図)である。これらに書かれていた「永田源五兵衛」という人物は実在していたことが判明している。永田源五兵衛が住んでいた屋敷は、この南東屋敷としている範囲に建っていたことも、『屋敷割

帳⁽⁴⁰⁾や『列土録⁽⁴¹⁾』などの記述を細かく読むことで導き出された。

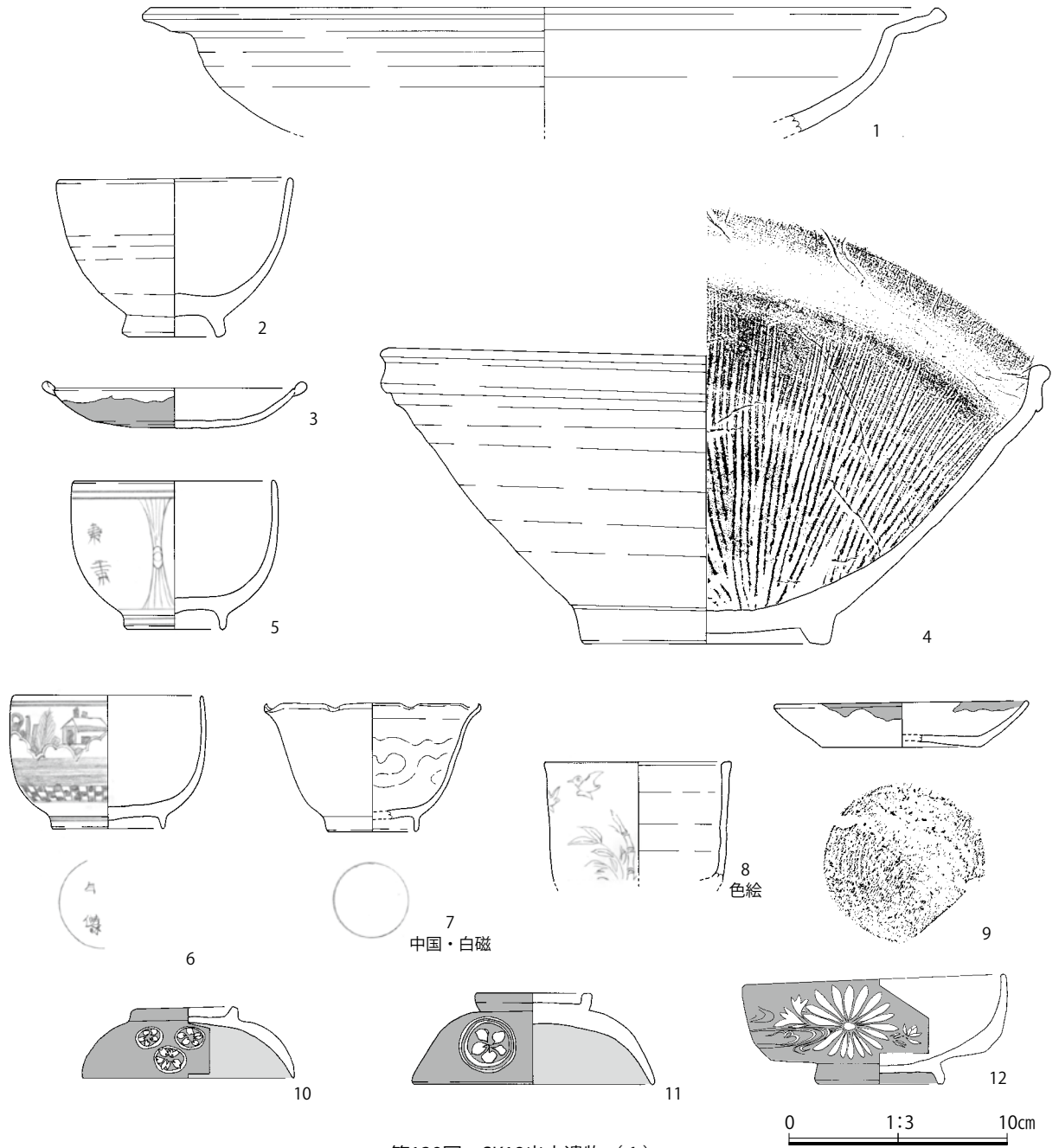
SK18の性格については、その土層や出土遺物の傾向等から、廃棄土坑であった可能性が考えられる。

SK18 出土遺物 (第139・140図)

139-1～4は陶器である。139-1・2は肥前陶器で、139-1は復元口径36.4cmを測る折縁形大皿で、口縁部～体部の破片である。口縁部は明確に外折し、内面には二彩手仕様の緩やかな刷毛目文が入る。この形状などから九陶Ⅲ期(1650～90)のものと思われる。139-2は呉器手碗で、全面に黄色釉が掛かる九陶Ⅲ～Ⅳ期(1650～1780)のものである。139-3は備前の皿で、対角となる位置につまみが付いている。口径11.1cm、器高2.1cmを測る小皿で、底部外面は黒く変色している。18世紀代のものか。139-4は山口(須佐)の播鉢で、口径30.0cm、高台径11.5cm、器高13.6cmを測る大形品である。摺目は放射状だがあまり隙間が無く、7本単位の摺目が全面に付けられている18世紀代のものである。

139-5～8は磁器である。このうち139-7は中国(景德鎮窯)の向付である。口縁部や胴部の形状は型押成形によるもので、薄手で精巧な作りである。また、高台内に圏線が1条引かれるのみで、17世紀初頭頃のものである。

139-5・6・8は中碗であり、139-5は区割りされた中に寿文が入る。139-6は腰張形で、胴部上

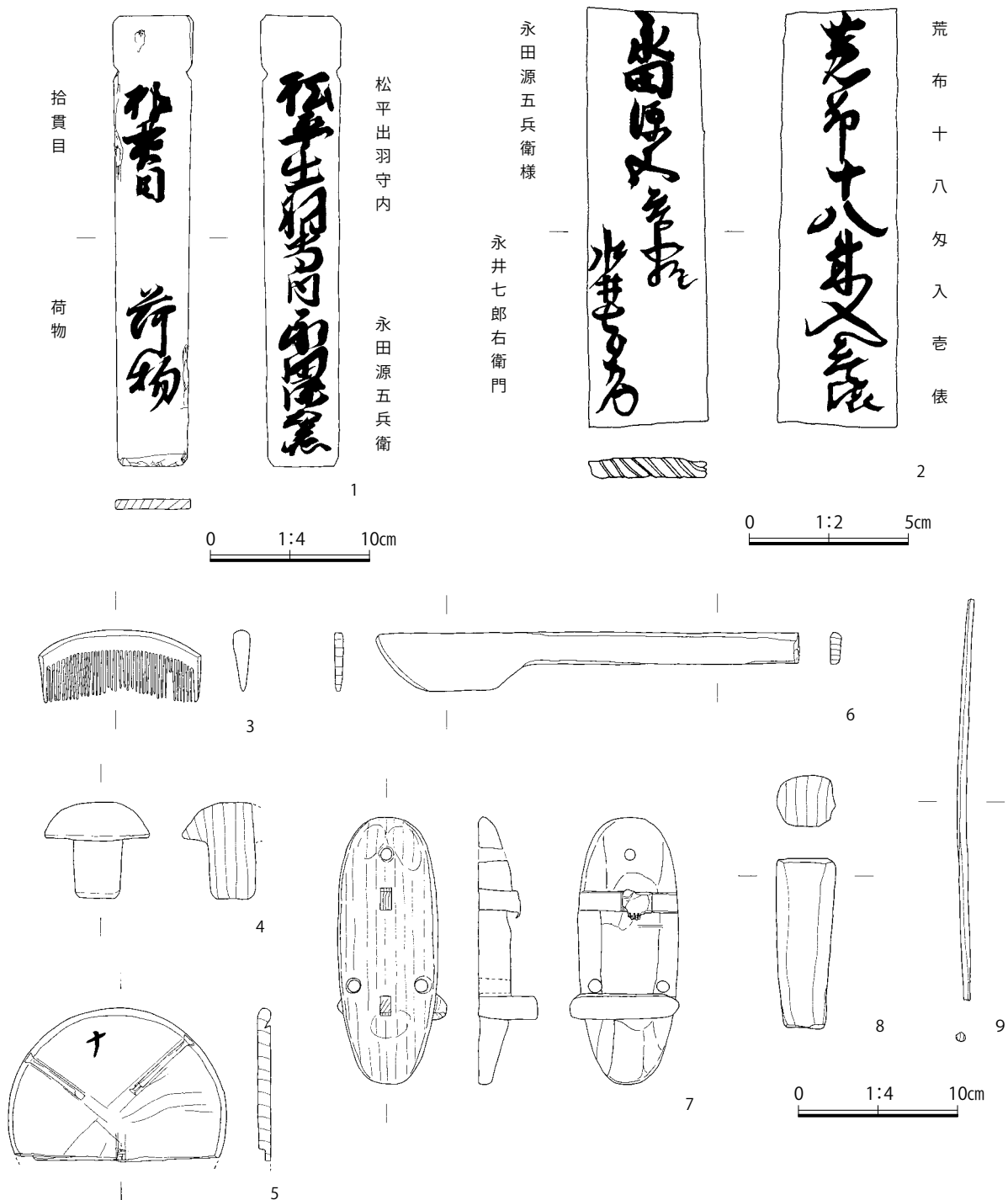


第139図 SK18出土遺物（1）

方に家屋や木などの風景文、下方に市松文が描かれる。高台内には1条の圈線と銘が入る。139-8は筒形碗で、口縁端部は膨らみ、口さびが塗られる。外面に赤絵具で2羽の鳥と竹（笹）が描かれる。139-5・6・8は九陶Ⅲ期（1650～90）に収まる。

139-9は在地系の土師器皿で、底部に回転糸切り痕が残る。口縁端部に油煙痕が付着していることから、灯明皿として使用されていたものと思われる。

139-10～12、140-1～9は木製品である。139-10～12は漆製品で、139-10・11は蓋、139-12は浅形碗である。139-10・11はいずれも外面に黒色、内面に朱色の漆が塗られており、外面に五弁花文の家紋風文様が銀色で描かれる。139-12は外内面とも黒漆で塗られており、外面に直径約3.5cmの菊花文、その周囲に流水文が銀色で描かれている。



第140図 SK18出土遺物(2)

140-1・2は荷札木簡である。140-1は最大長28.4cm、最大幅5.0cm、厚み0.6cmを測る大形品で、長方形を呈し、上端の左右に切り込みを入れる。表裏面とも丁寧に整形されており、墨書文字も鮮明に残存する良好な状態である。

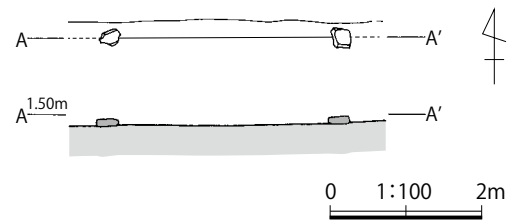
表面には「^{まつだいらでわのかみうち}松平出羽守内 ^{ながたげんごべえ}永田源五兵衛」と書かれている。「松平出羽守内」は、松江藩主・松平氏のことを示している。「永田源五兵衛」は『列士録』に記載が見られる松平直政(初代)から仕えた人物で、延宝4年(1676年)に御用人役となり、その後、江戸御留守居御番頭⁽⁴²⁾の役目を果たした人物である。また、古絵図上では確認されなかったが、『屋敷割帳』から、南東屋敷地が永田源五兵衛の屋敷であったことが記されている。裏面には「^{じっかんめ}拾貫目 ^{にもつ}荷物」と書かれている。これらのことか

ら 140-1 は、当時江戸で働いていた永田源五兵衛の本屋敷（南東屋敷地）に届けられた荷物に括り付けられていた荷札と考えている。なお、「拾貫目」は現在の単位に換算すると約 37kg の重さとなる。

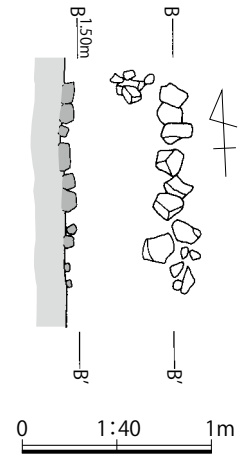
140-2 は最大長 13.1cm、最大幅 3.7cm、厚み 0.6cm を測る荷札木簡で、短冊形を呈し、目立った欠損は見られない。140-1 同様良好な状態で残存している。表面には「永田源五兵衛様 なが いしちろう う えもん 永井七郎右衛門」と書かれ、裏面には「荒布十八匁入壺俵 あら め じゅうはちもんいりいびょう」と書かれている。永田源五兵衛は 139-1 に書かれた者と同一人物と思われる。裏面に書かれた「荒布」は海藻のアラメを示し、「十八匁入壺俵」は 18 匁入りの俵が 1 つ、と読み解ける。これらのことから 140-2 は、永井七郎右衛門から永田源五兵衛へ、1 俵のアラメが送られた際に添付された荷札であろうと考えている。なお、「永井七郎右衛門」は松平家家臣中にその名を見出せていない。

140-3 は櫛、140-4 は栓、140-5 は曲物容器の底板で、片面に墨書文字「ナ」が書かれている。文字の一部である可能性も考えられる。

140-6 は片刃篋で、最大長 26.6cm を測る大形品である。140-7 は長さ 16.7cm の丸型差歯下駄である。140-8 は円柱形の栓、140-9 は長さ 25.2cm を測る白木の箸である。



第141図 SB14平面図・断面図



第142図 SX07 平面図・断面図

第3項 SB14 (第141図)

SB14 は第2遺構面で礎石建物跡 SB12 (第133図) を検出したほぼ同一位置に見られる礎石建物跡である。検出したのは礎石 2 個のみであり、その間隔は 3.0m である。SB12 の上層面で検出したこともあり、残存状況は良くないが、礎石建物跡と判断している。なお、SB14 付近で遺物は出土していない。

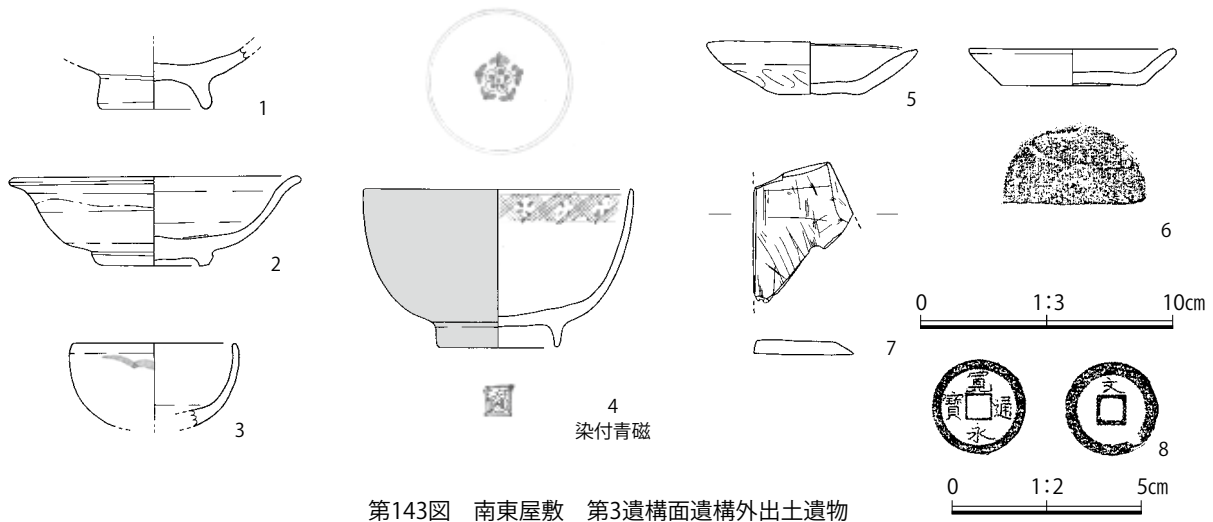
第4項 SX07 (第142図)

SX07 は、SB14 から南西に約 6.0m の位置で検出した石列である。石列は南北方向に 13 個の石が並んでおり、その並びは直線的ながらもランダムで、石の大きさも 6 ~ 15cm とまばらである。石の天端は、標高 1.45 ~ 1.5m で合っている。

SX07 の性格については不明とせざるを得ないが、第2遺構面で検出した SX06 (第135図) とよく似た形態を持つ遺構である。SX07 から遺物は出土していない。

第5項 遺構外出土遺物 (第143図)

143-1・2 は肥前陶器で、143-1 は黄色釉が掛かる呉器手碗の胴部~高台の破片である。高台内が饅頭芯状を呈しており、九陶Ⅲ期 (1650 ~ 90) のものである。143-2 は端反形小皿で、見込みに



第143図 南東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物

砂目痕が残る九陶Ⅱ期（1610～50）のものである。

143-3・4は肥前磁器で、143-3は簡素な染付が描かれる丸形小坏、143-4は染付青磁中碗である。外面は青磁釉、内面は口縁部に四方禪文、見込みに二重の圏線と五弁花文、高台内に「渦福」が入る。いずれも九陶Ⅳ期（1690～1780）のものである。

143-5・6は土師器皿で、143-5は手づくね成形による京都系、143-6は底部に回転糸切り痕が残る在地系である。

143-7は砥石で、5面に使用痕が残る。143-8は銭貨の「寛永通寶」で、新寛永である。

表25 南東屋敷 陶磁器・土師器観察表

遺物番号	面	遺構名	種別	器種	器形	文様	装飾	法量cm(残存値)			生産地	九陶(年代)	備考
								口径	底径	器高			
131-1	1	SB11	土師器	小皿	京都系	—	—	(12.2)	(5.8)	2.3	在地	—	手づくね成形/口縁端部:油煙痕
131-2	1	SB11	土師器	小皿	京都系	—	—	11.8	5.3	2.5	在地	—	手づくね成形/内面:煤
131-3	1	SB11	土師器	小皿	在地系	—	—	(7.7)	(4.8)	1.3	在地	—	底部:回転系切り
136-1	2	遺構外	陶器	中碗	腰張形	—	—	(10.3)	3.5	6.1	肥前	I-2~II (1594~1610)	胴部~高台:無釉
136-2	2	遺構外	陶器	小皿	—	—	—	—	4.8	(2.5)	肥前	I-2~II (1594~1610)	体部~高台:無釉
136-3	2	遺構外	陶器	大皿	—	草花文	鉄絵	—	(8.8)	(2.4)	肥前	I-2~II (1594~1610)	底部~高台:無釉
136-4	2	遺構外	陶器	片口鉢	内湾形	—	—	(11.8)	—	(6.4)	肥前	I-2~II (1594~1610)	胴部~高台:無釉
136-5	2	遺構外	磁器	向付	折縁形	昆虫文・草花文	染付 芙蓉手	(9.7)	—	(2.8)	中国(景德鎮窯)	17世紀前半代	型押成形
136-6	2	遺構外	土師器	極小皿	在地系	—	—	7.9	4.8	1.5	在地	—	底部:回転系切り/外面:油煙痕
136-7	2	遺構外	土師器	小皿	京都系	—	—	(13.2)	—	(2.8)	在地	—	手づくね成形/口縁端部:油煙痕
139-1	3	SK18	陶器	大皿	折縁形	刷毛目文	二彩手	(36.4)	—	(5.7)	肥前	III(1650~90)	
139-2	3	SK18	陶器	中碗	異器形	—	黄色釉	(10.8)	4.8	7.3	肥前	III~IV(1650~1780)	畳付:無釉・砂
139-3	3	SK18	陶器	小皿	丸形(肥手付)	—	—	(11.1)	(4.0)	2.1	備前	18世紀代か	外面:回転ヘラ削り・煤
139-4	3	SK18	陶器	掃鉢	—	—	—	30.0	11.5	13.6	山口(須佐)	18世紀代	スリ目単位7本
139-5	3	SK18	磁器	中碗	丸形	区画文・寿文	染付	9.2	4.4	6.9	肥前	III(1650~90)	畳付:無釉・砂
139-6	3	SK18	磁器	中碗	腰張形	風景文・市松文	染付	(8.6)	(5.2)	6.1	肥前	III(1650~90)	畳付:無釉・砂/高台内:□□年製
139-7	3	SK18	磁器	向付	端反形	高台内:摺線	染付・白磁	(9.8)	(4.0)	5.9	中国(景德鎮窯)	17世紀初頭	型押成形/畳付:無釉/漆継ぎ
139-8	3	SK18	磁器	中碗	筒形	鳥文・竹文(笹)	色絵 口さび	(8.6)	—	(5.5)	肥前	III(1650~90)	
139-9	3	SK18	土師器	小皿	在地系	—	—	11.8	7.4	2.2	在地	—	底部:回転系切り/口縁端部:油煙痕
143-1	3	遺構外	陶器	中碗	異器形	—	黄色釉	—	4.4	(2.5)	肥前	III(1650~90)	畳付:無釉・砂/饅頭芯
143-2	3	遺構外	陶器	小皿	端反形	—	—	11.4	4.4	3.6	肥前	II(1610~50)	体部~高台:無釉/砂目3
143-3	3	遺構外	磁器	小坏	丸形	—	染付	(6.4)	—	(3.3)	肥前	IV(1690~1780)	
143-4	3	遺構外	磁器	中碗	丸形	四方禪文/見込五弁花文 高台内:「渦福」	染付青磁	10.6	4.8	6.3	肥前	IV(1690~1780)	畳付:無釉
143-5	3	遺構外	土師器	極小皿	京都系	—	—	8.3	3.1	2.1	在地	—	手づくね成形
143-6	3	遺構外	土師器	極小皿	在地系	—	—	(8.4)	(5.6)	1.5	在地	—	底部:回転系切り

表26 南東屋敷 銭貨観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	残存率(%)	質量/直径	備考
143-8	3	遺構外	寛永通寶	17.0	6.0	1.0	2.82	100	0.17	八貝寶(新寛永)

表27 南東屋敷 石製品観察表

遺物番号	面	遺構名	種類	材質	法量		備考
					大きさ(cm)	重量(g)	
143-7	3	遺構外	砥石	—	長さ4.8/幅4.0/厚さ0.6	17.48	5面使用痕

表28 南東屋敷 木製品観察表

※墨書読み/は改行を表す。

遺物番号	面	遺構名	種類	名称部位	法量cm(残存値)				木取り	備考
					長さ(口径)	幅(底径)	高さ(器高)	厚さ		
136-8	2	遺構外	漆器	椀	11.0	5.6	4.3	—	—	外内面:黒/精巧な作り/漆の残存がかなり良い
139-10	3	SK18	漆器	蓋	(9.7)	つまみ(4.5)	3.3	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:銀丸に五弁花文(銀)
139-11	3	SK18	漆器	蓋	(11.0)	5.3	4.2	—	—	外面:黒/内面:朱/外面:銀二重丸に五弁花文(銀)
139-12	3	SK18	漆器	椀	11.9	5.2	5.0	—	—	外内面:黒/外面:菊花文・流水文(銀)
140-1	3	SK18	荷札木簡	—	28.4	5.0	—	0.6	梃目	両面墨書:「松平出羽守内 永田源五兵衛」 「拾貫目 荷物」
140-2	3	SK18	荷札木簡	—	13.1	3.7	—	0.6	梃目	両面墨書:「永田源五兵衛様/永井七郎右衛門」 「荒布十八匁入老儀」
140-3	3	SK18	櫛	—	4.1	10.2	—	1.0	—	
140-4	3	SK18	栓	—	6.0	6.6	—	4.5	梃目	
140-5	3	SK18	曲物容器	底板	φ13.6	—	—	0.8	梃目	片面墨書:「ナ」
140-6	3	SK18	篋(片刃)	—	26.6	3.6	—	0.6	梃目	
140-7	3	SK18	下駄	丸型差歯下駄	16.7	6.9	3.7	2.0	—	ホソ穴前後1/指の痕跡あり
140-8	3	SK18	栓	—	10.7	3.8	—	3.2	梃目	円柱形
140-9	3	SK18	箸	—	25.2	0.6	—	0.6	梃目	白木

第9章 総括

第1節 はじめに

今回の調査は、4つの屋敷地について、その裏側に当たる範囲を対象とするところとなった。第4～8章で述べた通り、各屋敷地は屋敷境で区切られ、それぞれの屋敷地ごとに造成が行われた結果、屋敷地ごとに各時期の遺構面が形成される様子が窺えた。本章では、前述した各屋敷地における遺構・遺構面ごとの年代観や、対応する屋敷境との関係から、4つの屋敷地における概ね同時期の画期が見出せる遺構群を摺り合わせ、想定される調査区全体の様子を古い順に第1～6期に分けて概観し、総括とすることとしたい。

第2節 第1期

1. 遺構の概要（第144図）

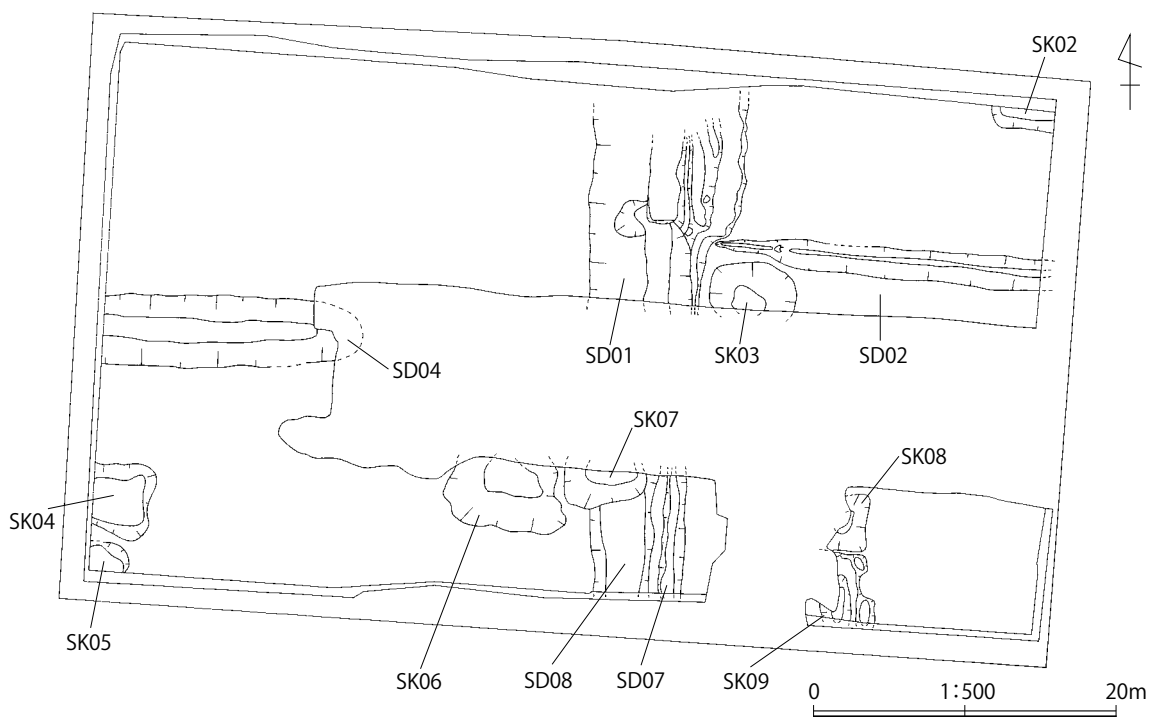
各屋敷地において、第1遺構面としたもののうち旧地表面に対して造作された最初の遺構群で、屋敷境溝と大形の土坑が点在する状況を切り出したものである。城下町の最初の町割りと敷地の高上げ造成が行われる過程における初期の段階と想定され、ここでは第1期と位置付けた。

以下に主な遺構について列記する。

屋敷境A…SD01, 屋敷境B…SD02, 屋敷境C…SD04, 屋敷境D…SD07・08

北西屋敷（第1遺構面以前）…遺構なし, 南西屋敷（第1遺構面①）…SK04～07

北東屋敷（第1遺構面①）…SK02, 南東屋敷（第1遺構面①）…SK03・08・09



第144図 屋敷地と屋敷境溝の変遷図（1）

2. 年代観

当該期は、概要で説明した通り、旧地表面への最初の造作に関わる遺構群を取り上げたものであり、基本的に掘削段階の様子を示したものであるため、この段階に確実に伴う遺物は抜き出せないものである。ただし、当該期の遺構の埋土中遺物は、概ね九陶Ⅰ～Ⅱ期（1590～1650）に収まるものであった。歴史資料と照らし合わせて類推すれば、前述の出土遺物における生産地での年代観よりやや遅れるものの、堀尾氏が広瀬から松江に移転し、松江城及び城下町形成を開始した江戸時代初頭（17世紀初頭）に当てはめられるものと考えられる。

なお、ここで取り上げた段階は、後述する第2期の年代観とも勘案すると、かなり短期間の過渡的段階であると想定している。

3. 様相

ここで特筆されるのは、城下町形成に際して最初に行われたであろう、屋敷の区割りを示す素掘りの屋敷境溝（SD01・02・04・07）の検出状況である。建物基礎の攪乱により部分的に不明確ではあるものの、それぞれの屋敷境溝は連結せず、規格に統一性が無いもので、概ね大形（SD01）、中形（SD04）、小形（SD02・07）の3種類に分かれるものであった。このことは、城下町形成当初の屋敷境が、藩の統制下で造作された画一的な施設という、安易に予想していた姿とは異なるもので、屋敷境が初期の段階から、各屋敷地で区割りに従って個別に造作された可能性も考慮されるものであった。ただし、小形の溝（SD02・07）はその狭小さから仮設的な様相を呈しているものと想定でき、これらが初現期の屋敷境の姿と考えると、中形・大形の屋敷境部分では溝の造り替えにより掘り飛ばされた可能性も考慮されるため、今後検証すべき課題も多い。いずれにせよ、屋敷境という共用施設がかなり初期の段階から屋敷ごとに手を加えられた様子が窺え、どのような規則でいずれの屋敷地が掘削・管理するのかなど、類例の増加を待って検証したい。また、城下町遺跡における発掘調査において、町割区画の背割部分を調査した例は少なく、4屋敷の接点部分となると今回の調査が初めてのものであった。特に、ここで第1期として扱った初期造成段階での屋敷境溝は、城下町全体の形成過程を復元する上で非常に貴重な起点となる資料と評価される。

屋敷境と共に、造成初期に見られる遺構として大形の土坑が挙げられる。SK02～09は北西屋敷を除く3屋敷から検出しており、いずれも素掘りの大形土坑であった。これら土坑及び屋敷境から掘り上げられた土は、自然堆積層であるⅠa層・Ⅱ層・Ⅲ層の混和土となる。これは、次に述べる第2期の基盤を形成するA層を構成するもので、大形の土坑や屋敷境の溝は、各屋敷地造成に必要な盛土の供給源としても掘り込まれた遺構であったと考えられる。

第3節 第2期

1. 遺構の概要（第145図）

各屋敷地において第1遺構面としたもののうち、北西・南西屋敷地で家屋の建設などが開始されたと思われる遺構の出現を契機と捉え、第2期と位置付けた。なお、北東・南東屋敷に関しては、当期に相当する明確な家屋建設の痕跡は検出されなかったが、屋敷地裏に当たる部分であるため、建物

が建つ範囲ではない場所であったと考えている。

以下に主な遺構について列記する。

屋敷境A…SD01, 屋敷境B…SD02, 屋敷境C…SD04, 屋敷境D…SD07

北西屋敷（第1遺構面①）…島状整地, 掘立柱建物跡SB01, 礎石建物跡SB02, 塀跡SA02～04,
道状遺構SX01, SK10～14

南西屋敷（第1遺構面②）…島状整地, 礎石建物跡SB06, SD15, SK06・07

北東屋敷（第1遺構面②）…畑地か（A層・I a層を浅く掘り込んだ落ち込み状の遺構）

南東屋敷（第1遺構面②）…掘立柱建物跡SB11

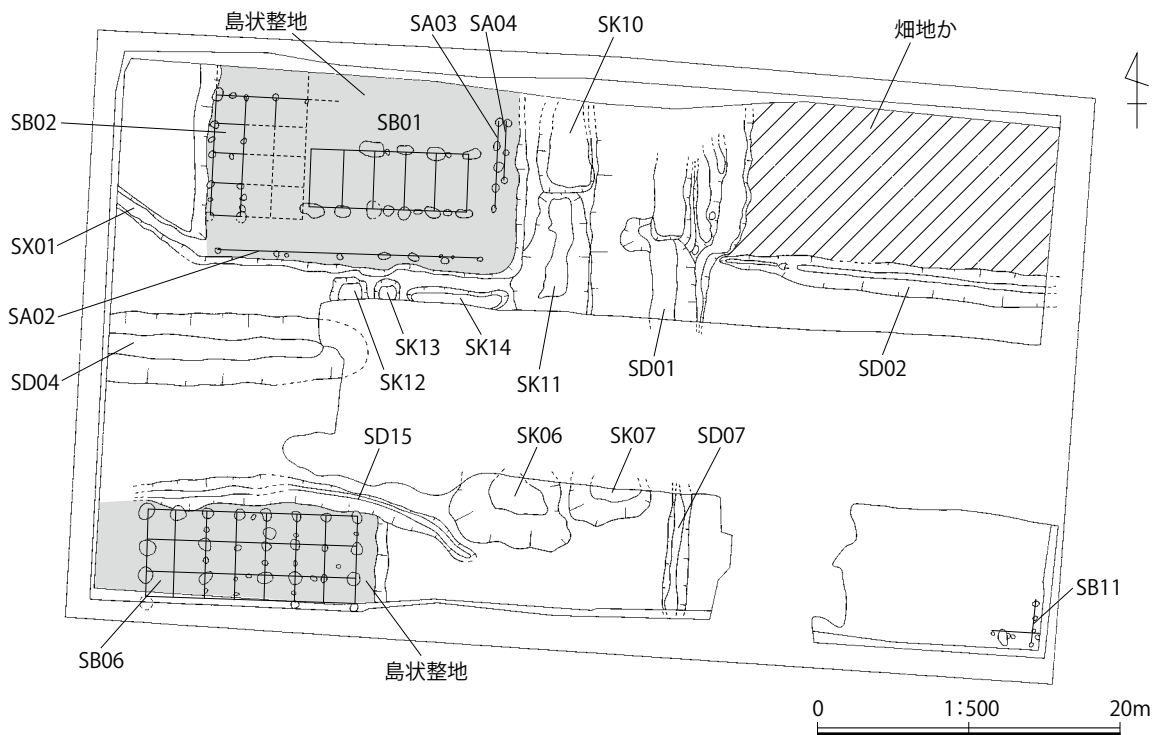
2. 年代観

北西・南西屋敷の島状整地後の遺構面、及び第2期で扱う遺構内から出土した遺物は、概ね九陶Ⅰ～Ⅱ期（1590～1650）に収まるものであった。第1期同様、歴史資料と照らし合わせて類推すれば、堀尾氏による城下町形成の初期段階と捉えられ、江戸時代初頭（17世紀初頭）に当てはめられるものとする。

3. 様相

第1期において溝で区画された屋敷地の空間に、北西・南西屋敷では島状整地を基盤とした建物建設が開始される様子が確認できた。ここでは、当該期における北西・南西屋敷での建物建設の過程についてまとめることとしたい。

まず、北西屋敷では、北側は調査区外に広がる可能性があるものの、東西約20m、南北約12.5mの範囲で島状整地を確認した。この整地面上の南東寄りにSB01、西側にSB02が、また、島状整地の



第145図 屋敷地と屋敷境溝の変遷図（2）

南辺、東辺を縁取るようにSA02とSA03・04が検出され、この他にも島状整地南東辺と屋敷境A・Cとの空間地にはSK10～14の土坑が掘られていた。

次に、南西屋敷では、南側は調査区外に広がる可能性があるものの、東西約16m、南北約6.5mの範囲で島状整地を確認した。この整地面の範囲にほぼ重なるようにSB06が検出され、北辺には溝SD15が掘られていた。

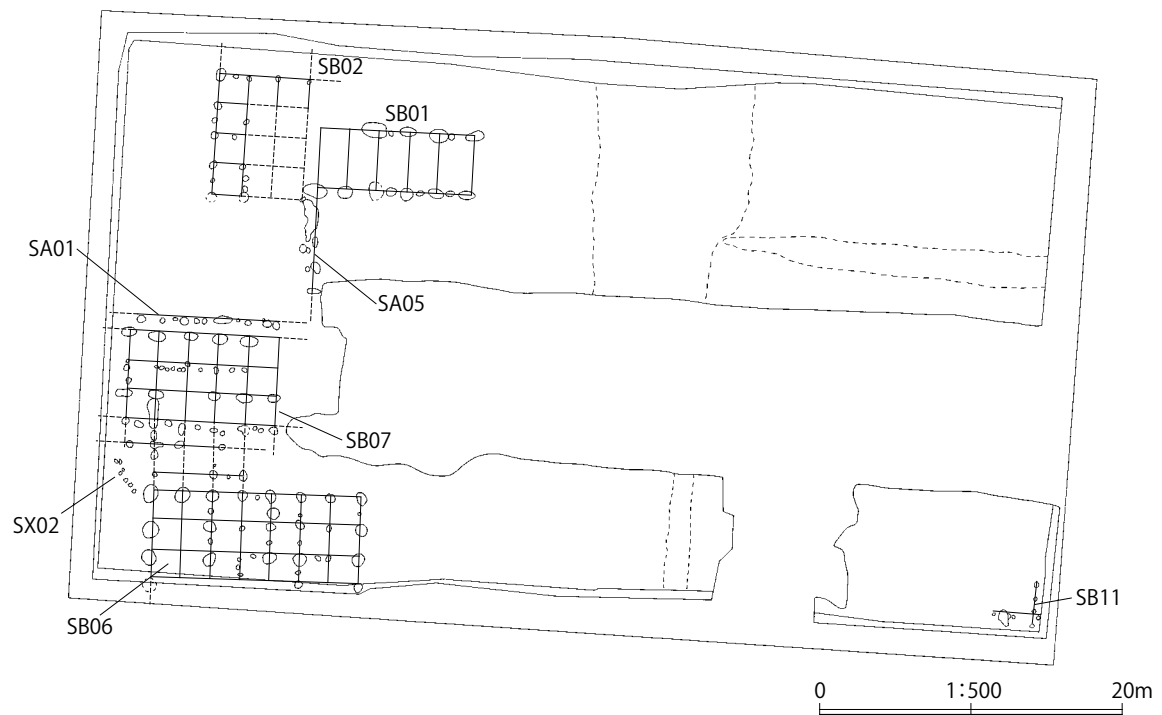
これら島状整地は、前節で説明したように屋敷境溝や大形土坑の掘削土により形成されたと考えられ、初期造成と一連の造作であったものと推測できる。しかし、これらの造成は既に敷地内における建物の配置・規模を概ね反映して形成されているものと考えられ、第1期における屋敷境溝の掘削状況からも想定した通り、城下町全体にかかる初期造成において、屋敷地の造成工事はかなり早い段階で屋敷の作事と一体に屋敷地ごとに担われていたものと推察された。なお、島状整地周辺に落差があり、敷地としてはやや不完全な状態ではあるが、SD04やSK11等から出土する遺物には既に茶器や中国磁器が含まれ、当該期から武家屋敷として機能していた可能性が考えられる。

第4節 第3期

1. 遺構の概要 (第146図)

第3期は、屋敷境CにおいてSD04が埋められ、その真上にSA01が造られることや、北西・南西屋敷の島状整地周辺が嵩上げされてほぼ段差が解消される段階と位置付けた。なお、屋敷境A・B・Dにおいては第2期まで機能していた屋敷境溝が継続していたかどうかの判断が困難であるため、破線表現とした。また、北東・南東屋敷では第1期から目立った変化は無いものと考えている。

以下に主な遺構について列記する。



第146図 屋敷地と屋敷境溝の変遷図 (3)

屋敷境A…SD01, 屋敷境B…SD02, 屋敷境C…SA01, 屋敷境D…SD07

北西屋敷（第1遺構面②）…掘立柱建物跡SB01, 礎石建物跡SB02, 塀跡SA05

南西屋敷（第1遺構面③）…礎石建物跡SB06, 掘立柱建物跡SB07, 飛び石状遺構SX02

北東屋敷（第1遺構面②）…畑地か（※第2期と同じ）

南東屋敷（第1遺構面②）…掘立柱建物跡SB11

2. 年代観

当該期から出現するSA01、SB07や、島状整地による段差を解消する整地層上面から出土した遺物は、概ね九陶Ⅱ-2期（1630～50）に収まるもので、後述する第4期の年代観とも勘案すると、江戸時代前半（17世紀前半）に当てはめられるものと考えられる。なお、第3期から肥前磁器が出現するようになり、肥前磁器の初期段階の流通を考える上で興味深い事象である。

3. 様相

ここで注目されるのは、第2期段階まで屋敷境Cにおいて、溝状の屋敷境（SD04）が存在していた場所が当該期では埋め立てられ、塀状施設（SA01）や掘立柱建物（SB06）が建設されていることである。本文中ではSA01を屋敷境と理解して紹介したが、ここではもう一つの可能性があること記述しておきたい。

この屋敷境溝が塀状の施設に変わる様相は、松江城下町遺跡（殿町297外）の調査でも前例が確認されている。そこでは、古絵図の状況から、屋敷境がその場所から無くなると推察され、堀尾期から京極期への変化に伴う可能性があることを指摘している。当遺跡においても、古絵図上では堀尾期から京極期への変化に伴い、屋敷境Cの位置がやや南に移動する様子が読み取れる（第3図参照）。これは、堀尾期においては北西屋敷「竹俣久左衛門」は300石、南西屋敷「長谷川角左衛門」は400石とほぼ同様の石高であるのに対し、京極期では北西屋敷「百々太郎左衛門」が500石、南西屋敷「近藤才兵衛」が350石と、北西・南西屋敷間で石高にかなりの差が生じていることから想定できる。当然、測量図ではない絵図上での表現であり、また実際と居住者が異なる可能性があるが、前例にならって評価するならば、当遺跡で屋敷境としたSA01は、SB06・07を含めて南西屋敷地に属する施設の一部で、当該期の屋敷境Cの位置は、南側の調査区外に存在する可能性も考慮される。ただし、次の第4期の年代観で述べるように、南西屋敷のSX03から堀尾家家臣の名前が記された荷札木簡が出土しており、前述の絵図に見える人物と名前こそ異なるが姓は同じく「長谷川」であることから、第4期まで堀尾期が継続する可能性が高い。現段階では当該期は、SA01を屋敷境とする堀尾期の段階と評価したい。

第5節 第4期

1. 遺構の概要（第147図）

第4期は、屋敷境A・BにおいてT字状の溝SD03が現れ、各屋敷地の第1遺構面基盤層（A層）の上に第2遺構面基盤層（B-1層）が盛られ、SB06を残して各屋敷地で大きな改変が確認されること等を契機として位置付けた。概ね各屋敷において第2遺構面としたものが摺り合ったものと判断している。

以下に主な遺構について列記する。

屋敷境A・B…SD03, 屋敷境C…SA01, 屋敷境D…SD09・10

北西屋敷（第2遺構面）…礎石建物跡SB03, 溝状遺構群

南西屋敷（第2遺構面）…礎石建物跡SB06, 礎石建物跡SB08, 礎敷遺構SX03, 溝状遺構群

北東屋敷（第2遺構面）…小規模土坑

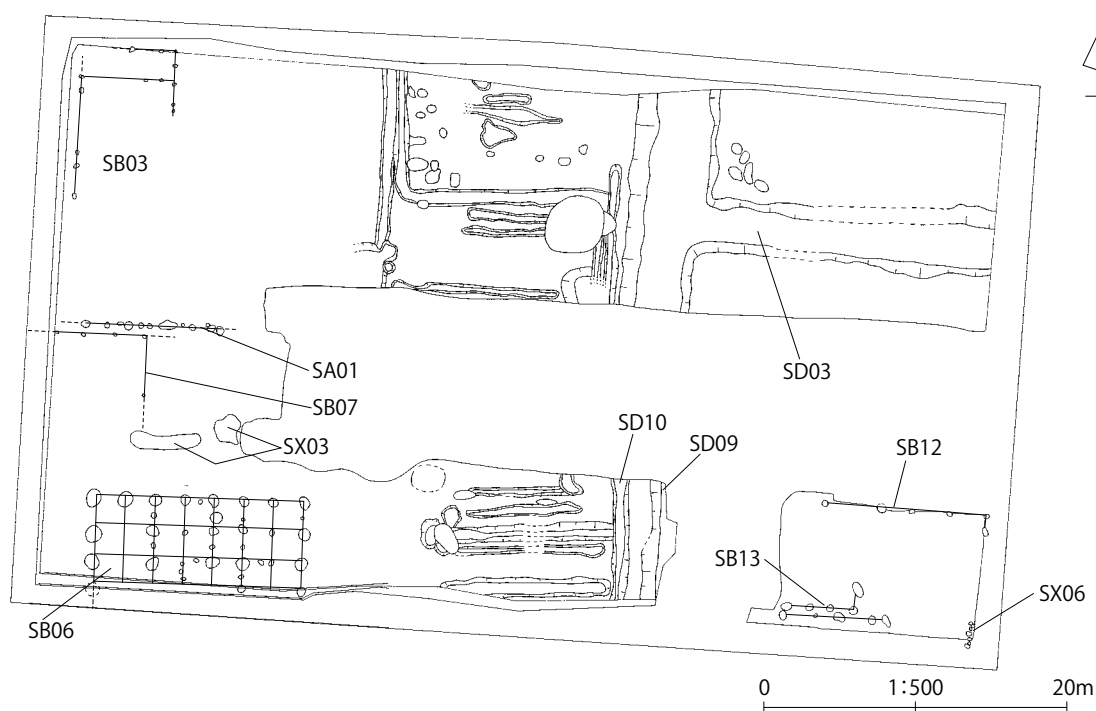
南東屋敷（第2遺構面）…礎石建物跡SB12, 掘立柱建物跡SB13, 石列遺構SX06

2. 年代観

屋敷境溝、各屋敷地の遺構面、及び遺構内から出土した遺物は、概ね九陶Ⅱ-2～Ⅲ期（1630～90）に収まるものであり、江戸時代中頃（17世紀中頃）に当てはめられるものと考えている。なお、第6章第2節で述べた通り、南西屋敷のSX03から堀尾家家臣である「長谷川半右衛門」という人名が記された木簡が出土しており、堀尾期（1611～33）を含む遺構面と理解される。

3. 様相

第4期になると、各屋敷地でB-2層とした造成土により全体的な嵩上げが行われ、南西屋敷のSB06は存続したものと考えたが、その他では屋敷境A・BでT字状の溝SD03が掘り込まれるなど、屋敷内での遺構の様相が大きく変化している。また、遺構の配置上SA01の存続の可能性を表示しているが、SA01の検出面は当該遺構面の下層であり、当該期には屋敷境Cが調査区内に存在しない可能性も考えられる。このことから、第3期の「3. 様相」において可能性を示した、絵図から類推する京極期への変化が当該期であるとも考えられ、当該期に京極期が該当する可能性も考慮する必要がある。



第147図 屋敷地と屋敷境溝の変遷図（4）

ただし、前述の年代観や前節で述べた木簡の出土状況を積極的に評価すると、当該期は堀尾期の様相も含むものとも理解される。現段階では確定的ではないが、以上の状況から当該期は堀尾期から京極期を含む段階である可能性が高いものとする。

第6節 第5期

1. 遺構の概要（第148図）

攪乱のため、土層的には一連性が不確かな部分が多いものの、各屋敷地の第2遺構面基盤層（B-1層）の上に第3遺構面基盤層（B-2層）が盛られ、北西・南西屋敷では新たな建物跡が確認できることから当該期を位置付けたもので、概ね各屋敷の第3遺構面としたものが摺り合ったものである。なお、上面が攪乱を受けて消失しているSD03についても、出土遺物から想定される遺構の存続期間から当該期に位置付けた。ただし、その廃絶後に造られるSK01も当該期に属するものと捉えており、屋敷境A・Bにおいては、当該期内にSD03が存在する時期と、攪乱のため不明ではあるが、少なくともSK01に重なる範囲には屋敷境が存在しないという2時期以上を含んでいる。

以下に主な遺構について列記する。

- 屋敷境A・B…SD03（上層：SK01），屋敷境C…SD05，屋敷境D…SD11
- 北西屋敷（第3遺構面）…礎石建物跡SB04，掘立柱建物跡SB05，溝SD14
- 南西屋敷（第3遺構面）…礎石建物跡SB09・10
- 北東屋敷（第3遺構面）…小規模土坑（攪乱の可能性あり）
- 南東屋敷（第3遺構面）…掘立柱建物跡SB13，SK18

2. 年代観

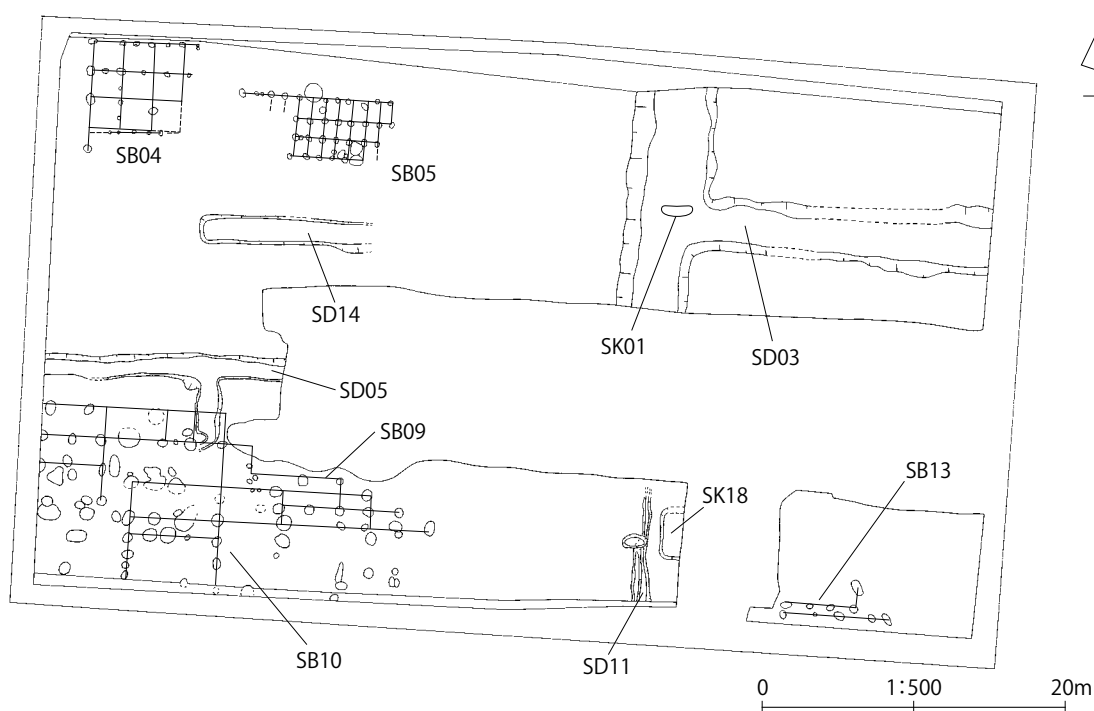
屋敷境溝、各屋敷地の遺構面及び遺構内から出土した遺物は、攪乱層直下で検出された部分も含んでおり、九陶Ⅲ～Ⅴ期（1650～1860）の時期幅の広いものであった。また、実年代を示すものとして、第8章第4節で述べた通り、南東屋敷のSK18から松平家家臣である「永田源五兵衛」（1624～96）という人物の名前が記された木簡が出土しており、文献資料から松平期初頭に南東屋敷に住んでいた人物であることが判明している。これらのことから当該期の年代観は漠然と成らざるを得なかったが、江戸時代後半（17世紀中頃～19世紀初頭）に当てはめられるものと考えられる。

3. 様相

第5期における特記事項としては、SD03上層において、南北・東西溝の交わる地点SK01で出土した磁器（第4章第28～37図）がある。ここから出土した一括資料には、肥前・有田（柿右衛門窯）の染付大皿や中皿、同じく有田（山辺田窯）の初期色絵祥瑞手大皿や変形皿、その他、肥前の優品磁器、中国（景德鎮窯）の色絵中皿・芙蓉手中皿・小碗・手塩皿、同じく中国（漳州窯）の染付大皿などがあり、1枚のみの製品や、1セット20客の同一器種19セットで構成されていたものと推測された。また、これら遺物の年代観は、概ね九陶Ⅲ期（1650～90）に収まるものであった。さらに、出土磁器のほとんどに被熱痕が見られ、製品の割れ方などにも被熱による特徴が表れており、熱で溶着した破片も多数見られた。このような遺物の状態から、火災などにより損傷した磁器群を一括廃棄し

たものと思われるが、SK01出土遺物の年代観に合う時代（17世紀後半頃）に、本調査地周辺では「母衣町大火（延宝6年：1678年）」と呼ばれる火災が起こったことが文献資料から読み取れる。おそらくSK01出土遺物は、この火災による被災磁器群と想定され、SK01の実年代を示すものと考えられた。また、全国的にも稀にみる高水準の磁器群が、地方の中級武家屋敷地から出土したことも注目される。今後、歴史資料の調査も交えて、その所有者像が明らかになることを期待したい。

次に注目されるのは、ほぼ同質の黄色シルト層から成る第3遺構面基盤層（B-2層）で、攪乱された北東屋敷地を除く全域が比較的厚く造成されていることである。この黄色シルトによる造成は、松江城下町遺跡の調査において概ね同時期の造成土として広く確認されており、大量の土砂の採掘や屋敷地をまたぐ嵩上げなど、城下町の広域に及ぶ大規模な造成が行われたことを予想させるものである。造成土の土質から遺構面の年代を導き出すことは困難であるが、前述した年代観から勘案すると、本調査においては少なくとも「永田源五兵衛」の没年（1696年）以前に造成された可能性が高いものと考えられる。このような大規模な造成が藩主交代に伴う家臣団の入れ替えを契機としたものとするならば、藩主が交代した1638年（京極氏から松平氏）が候補として挙げられよう。ただし、造成の契機が洪水対策などによる可能性も十分に考えられる。これらの可能性が今後の検証により確定され、この黄色シルト層が松江城下町遺跡における実年代を示す鍵層となることに期待したい。



第148図 屋敷地と屋敷境溝の変遷図（5）

第7節 第6期

1. 遺構の概要（第149図）

第6期は、近現代の大規模な攪乱の中から、屋敷境C及び北東屋敷において見出せたわずかな遺構を取り上げたものであり、各屋敷地ともにほとんど状況が分からない。ただし、第5期以降の状況を垣間見せるものであるため、ここに設定した。

以下に主な遺構について列記する。

屋敷境A…不明，屋敷境B…不明，屋敷境C…SD06，屋敷境D…SD12

北西屋敷（第3遺構面上層）…不明，南西屋敷（第3遺構面上層）…不明

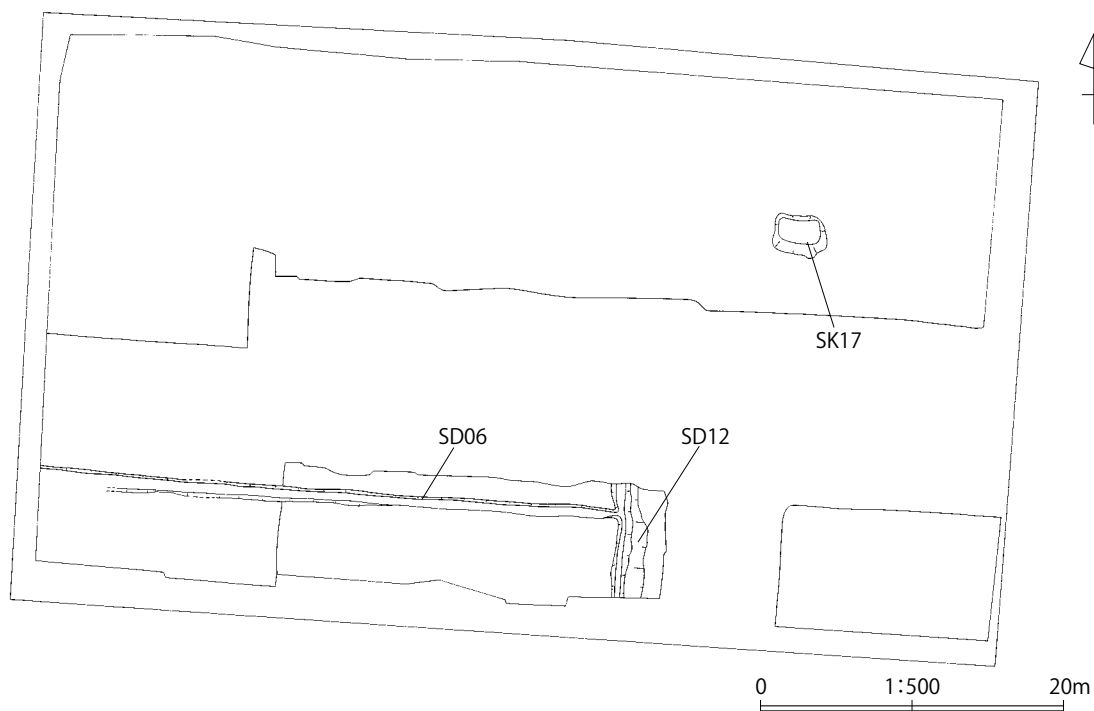
北東屋敷（第3遺構面）…SK17，南東屋敷（第3遺構面上層）…不明

2. 年代観

屋敷境溝SD06・12、及び北東屋敷の土坑SK17から出土した遺物は、概ね九陶Ⅳ～Ⅴ期（1690～1860）に収まるものであった。大半が不明な状態ながら、江戸時代後半～幕末期（18世紀初頭～19世紀代）の遺構の一端が残存していたものと考えられる。

3. 様相

第6期についてはほとんどが攪乱で消失しており、全容は不明と言わざるを得ない。ただし、屋敷境Cでは、第1～5期において屋敷境が造られた場所から南へ大幅に動いた位置に、T字状の溝SD06を検出した。また、屋敷境Bの位置では、第4～5期にSD03の東西溝が掘られた場所にSK17が造られている。江戸時代後半～幕末期という大まかな年代観の中ではあるが、屋敷境の比較的大幅な移動があったことが推察された。



第149図 屋敷地と屋敷境溝の変遷図（6）

第8節 結語

前節までにおいて、第1～6期に分けて調査区全体を概観した。概略すると、第1・2期は堀尾期の初期造成の過程から屋敷地の開始時期を、第3期は堀尾期の状態を、第4期では堀尾期から京極期にかけての改変の様子を、第5期では調査区全域に及ぶ造成と松平期初頭以降の様子を、そして第6期では幕末頃の様相と想定できるものを切り出し、各期における現段階での評価を述べてきた。

現在、松江城下町では、松江城大手門から東へ延びる大手前道路拡幅工事に伴う発掘調査が行われ、報告書が随時刊行されている。継続していく松江城下町遺跡の調査において、今回の調査成果が新たな指針と課題を提示するものとなり、松江城下町のさらなる解明の足掛かりになることを期待して結語としたい。

註

- (1) 松江城下町遺跡発掘調査報告書（松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団）は現在までに7冊刊行されている。平成23年度刊行：『松江城下町遺跡（殿町287番地）・（殿町279番地外）』『松江城下町遺跡発掘調査報告書1』/平成24年度刊行：『松江城下町遺跡（母衣町100外）』『松江城下町遺跡（母衣町127-2）（母衣町128）（母衣町198-1）』『松江城下町遺跡発掘調査報告書2』/平成25年度刊行：『松江城下町遺跡発掘調査報告書3』『松江城下町遺跡発掘調査報告書4』
- (2) 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』島根県教育委員会（2003）
- (3) 「雲陽大数録」『新修島根県史』史料篇2・近世上（1965）
- (4) 『松江市ふるさと文庫6 堀尾吉晴—松江城への道—』松江市教育委員会（2009）
- (5) 岡宏三「中世のプレ松江」『松江藩の時代』山陰中央新報社（2008）
- (6) 『島根県史9 藩政時代（下）』島根県内務省島根縣史編纂掛（1930）「かくて城地移転を徳川秀忠將軍に出願し其許可を得たるは実に慶長八年なりき」と記されているが、慶長8年に征夷大將軍となったのは徳川家康であり、慶長10年4月まで勤め同月2代將軍秀忠が就任している。現段階ではこれ以外に根拠とする新史料は見つかっていない。
- (7) この年代根拠については『堀尾古記』に記載されている慶長13年の条「松江越 十月二日」による。
- (8) 平成24年5月の松江城下町遺跡検討会において示された城下町土層解釈の基準。このうちB層は遺跡の調査地点によって堆積状況が様々であり、共通層ではない。現段階では、B層以外の土層について共通の認識ができてきたという状況にある。
- (9) 松江城下町造成以前の旧地表面である黒褐色～茶褐色系を呈する粘質土（I層）は、灰色～青灰色細砂層の上面にほぼ均一の厚さで水平堆積している。検出される標高は場所によって異なるが、松江城下町の広い範囲に同様の層序で検出されていることから、鍵層としている。
- (10) 香道において使用される器のこと。香炉の中の香りを当てる遊びであり、その行為を「聞香」と呼称する。
- (11) 胎土・製作技法ともに、朝鮮半島李朝のものと同様と酷似しているとの指摘を大橋康二先生（佐賀県立九州陶磁器文化館 名誉顧問）から受けている。また、李朝の模倣品として国内生産された可能性も考えられる。
- (12) 同様の形状・絵付けの台付皿は松江城下町遺跡内でも出土例が確認されている。
- (13) 「布袋香炉」に関しては乗岡 実氏（岡山市教育委員会）にご教示して頂いた。
- (14) 焼塩壺については、阿部賢治氏が作成された分類「松江城下町遺跡（殿町287番地・殿町279番地外）出土の焼塩壺について」を参考にさせて頂いた。
- (15) 29-1は中国磁器（景德鎮窯）とほぼ大差無い形状・染付であるが、肥前で模倣品を作っていた例があるとの指摘を大橋先生から受けている。
- (16) 磁器が被熱によって割れる場合、器の中心部分から放射状の破片となって割れる。
- (17) 「祥瑞手」とは中国祥瑞の影響を色濃く受けたもので、肥前においては有田・鍋島などでのみ使用された。素地には染付で基本となる丸文が連なって描かれ、内部に松竹梅文などを色絵で描く技法である。また、見込みには花鳥風月を表した花や鳥などが描かれる。
- (18) 高台に線描き櫛歯文を描くのは有田・柿右衛門窯の特徴であり、それが塗り潰されると鍋島の影響を受けているとされている。
- (19) 30-3・31-1・32-1は、染付の絵柄が異なるセット品として製作される大皿であるとの指摘を大橋先生から受けている。
- (20) 「九角手」とは、九角形状を呈する大皿で、主に肥前・山辺田窯で生産されたものである。
- (21) (17) に同じ。
- (22) 34-1と同種類の初期色絵大皿は、加賀藩前田家で出土例が確認されている。

- (23) 近年の発掘調査成果において、有田・山辺田窯で初期色絵の生産が行われていたことが分かってきている。『山辺田遺跡発掘調査概要報告書』「日本の色絵磁器技術始まりの美術史的・考古学的研究」調査団有田町教育委員会（2014）
- (24) 神田淡路町二丁目遺跡（東京都）でも、初期色絵の大皿の破片が出土している。『東京都千代田区 神田淡路町二丁目遺跡』淡路町二丁目西部地区市街地再開発組合株式会社四門（2011）
- (25) 35-4に書かれている漢詩「睡起莞然成独笑 数声漁笛在滄浪」は『千家詩/卷三』（宋・蔡確）の七言絶句「紙屏石枕竹方牀 手倦抛書午夢長 睡起莞然成独笑 数声漁笛在滄浪」からの引用である。「睡起せば莞然として独笑を成し 数声の漁笛滄浪に在り」と読み下せる。
- (26) 36-1と同様の皿が東京国立博物館に展示されている。この皿は「南京赤絵樹下人物皿」とも呼ばれている。
- (27) 「ぼてぼて茶碗」とは、島根県松江市において19世紀代～現代に至るまで使用されている器である。
- (28) 75-8の高台は高く、外面に線描きの櫛歯文が描かれる。これらは柿右衛門窯のみで生産された器に見られる特徴である。
- (29) 大海崎石は、松江市東部に位置する大海崎町及び大井町で算出される角閃石粗面安山岩の通称である。
- (30) 吹墨技法とは、染付の際に釉薬を吹き付けて絵柄とする技法である。1820～60年代にこの技法を用いていたのは有田であるとの指摘を大橋先生から受けている。
- (31) 『北山伏町遺跡』新宿区北山伏町遺跡調査会（1989）
- (32) 『白鷗 都な市白鷗高校内埋蔵文化財発掘調査報告書』都市学校遺跡調査会（1990）
- (33) 『下本多遺跡』金沢市埋蔵文化財センター（1999）
- (34) 胞衣容器とは、後産の際胎盤やへその緒などを入れるための容器であり、これを土中に埋納する風習によるものである。
- (35) 肥前陶器には通常象嵌・白化粧土技法が用いられるが、95-2は象嵌の後黒化粧土を施している珍しい碗である。
- (36) 露胎部分が濃い茶色を呈する胎土であるのは肥前ではなく、福岡（上野・高取系）の可能性があると指摘を大橋先生から受けている。
- (37) 「長谷川半右衛門」と同姓同名の人物が堀尾家臣内に見出され、1,000石の江戸詰めであったことが『松江藩列土録』から判明しているが、103-16に書かれた人物と同一人物かどうかの判断はできていない。
- (38) 出荷前に起こった不備（ヒビ割れなど）を色絵で補修したものを製品として出荷した、という貴重な出土品である。
- (39) 「貝豆」とはインゲン豆の品種名で、主に北海道地方で栽培されている。名の由来は、豆の模様が貝殻の渦状に見えることから付けられた。
- (40) 『御家中屋敷割帳』を参考にした。
- (41) 『松江藩列土録』を参考にした。
- (42) 「御用人役」とは、武家の職制の1つで、主君に仕え、庶務等を司ることを役目とする職である。
- (43) 「御留守居番頭」とは、藩主が藩邸に不在の場合に藩邸の守護に当たることを主な役目とする職である。

参考文献

- 『富田川河床遺跡発掘調査報告書』島根県能義郡広瀬町教育委員会富田川河床遺跡調査団（1977）
- 『富田川 飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告(4)』島根県教育委員会（1984）
- 『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』大橋康二 ニュー・サイエンス社（1989）
- 『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』大橋康二 理工学社（1994）
- 『図説 江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会 柏書房株式会社（2001）
- 『萩城跡(外堀地区) I』財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化センター（2002）
- 『大手前通りの歴史を調べる会 調査結果報告書』大手前通りの歴史を調べる会（2004）
- 『シリーズ1種類 古伊万里の見方』佐賀県立九州陶磁文化館（2004）
- 『シリーズ2成形 古伊万里の見方』佐賀県立九州陶磁文化館（2005）
- 『シリーズ3装飾 古伊万里の見方』佐賀県立九州陶磁文化館（2006）
- 『シリーズ4窯詰め 古伊万里の見方』佐賀県立九州陶磁文化館（2007）
- 『大坂城址Ⅲ 大阪府警察本部棟新築2期工事に伴う発掘調査報告書』財団法人大阪府文化財センター（2006）
- 『広瀬向窯跡』有田町教育委員会（2009）
- 『古伊万里 磁器のパラダイス』青柳恵介・荒川正明 新潮社（2009）
- 『東京都千代田区 四番町遺跡Ⅱ』東京急行電鉄株式会社・東急建設株式会社・株式会社四門（2010）
- 『発掘調査のてびき 集落遺跡発掘編』文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 同成社（2010）
- 『文様別 そば猪口図鑑』大橋康二 青幻舎（2011）
- 『文様別 小皿・手塩皿図鑑 佐賀県立九州陶磁文化館 柴田夫妻コレクション』大橋康二 青幻舎（2014）
- 『東京都千代田区 神田淡路町二丁目遺跡』淡路町二丁目西部地区市街地再開発組合株式会社四門（2011）
- 『松江城下町遺跡(殿町287番地)・(殿町279番地外)発掘調査報告書』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団（2011）

- 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書1 松江城下町遺跡(母衣町68)・(南田町77-1外)・(南田町52-32外)・(南田町52-7外)・(南田町52-1外)』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団(2012)
- 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書2 松江城下町遺跡第1ブロック(西側)第3・4ブロック』松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団(2013)
- 『城山北公園線都市計画街路事業に伴う松江城下町遺跡発掘調査報告書3 松江城下町遺跡第1ブロック(東側)第6～10・12ブロック』松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団(2014)
- 『山辺田遺跡発掘調査概要報告書』「日本の色絵磁器技術始まりの美術史的・考古学的研究」調査団有田町教育委員会(2014)
- 『第42回山陰考古学研究集会 山陰の近世城郭と城下町』第42回山陰考古学研究集会事務局 浜田市教育委員会文化振興課(2014)

版 圖



調査地遠景（北東から）※上は宍道湖



調査地遠景（北から）※上は松江城

図版2



調査地遠景（上空から：写真上方が南）



調査地全景（上空から：写真上方が南）



屋敷境A SD01 (北から)



屋敷境A SD01土層断面 (南から)

図版4



屋敷境B SD02
(北西から)



屋敷境B SD02土層断面
(北西から)



屋敷境A・B SD03
(北西から)



屋敷境A SD03 (北から)



屋敷境A・B SD03 (東から)



屋敷境B SD03 (東から)

図版6



屋敷境A SD03土層断面
(北から)



屋敷境B SD03土層断面
(西から)



屋敷境A・B SD03漆器椀
(25-7) 出土状況



屋敷境C SD04遠景（北から）



屋敷境C SD04土層断面（北東から）



屋敷境C SD05 (北から)



屋敷境C SD05 (北から)



屋敷境C SD05 (西から)



屋敷境C SD06 (東から)



屋敷境D SD07・SD08 (南から)



屋敷境D SD10 (南から)



屋敷境D SD10 (北から)



屋敷境D SD10石垣除去後 (北から)



屋敷境D 土層断面
(北から)



屋敷境D 土層断面
(北西から)



屋敷境E SD13
(西から)



北西屋敷 第1遺構面SB01（北東から）



北西屋敷 第1遺構面遠景（東から）



北西屋敷 第1遺構面SD01・SK10・SK11（北から）



北西屋敷 基本層序土層断面（南から）



北西屋敷 第1遺構面SX01（東から）



北西屋敷 第2遺構面（北西から）



北西屋敷 第3遺構面（東から）



北西屋敷 第3遺構面SB04 (東から)



北西屋敷 第3遺構面SB05 (北から)



北西屋敷 第3遺構面SD14 (西から)



SD14出土遺物 (81-5)



SD14出土遺物 (81-14)



SD14出土遺物 (82-10)



SD14出土遺物 (83-10)



南西屋敷～北西屋敷遠景（南東から）※左上は松江城



南西屋敷 第1遺構面（南東から）



南西屋敷 第1遺構面
SK06 (南東から)



南西屋敷 第1遺構面
SK07 (南東から)



南西屋敷 第1遺構面
SK04 (南西から)



南西屋敷 第1遺構面SB06 (南東から)



SB06近景 (南西から)



SB06栗石検出状況接写 (南から)



SB06礎石・栗石検出状況接写 (南から)



SB06栗石検出状況接写 (南から)



南西屋敷 第1遺構面SD15 (南から)



SD15土層断面 (南東から)



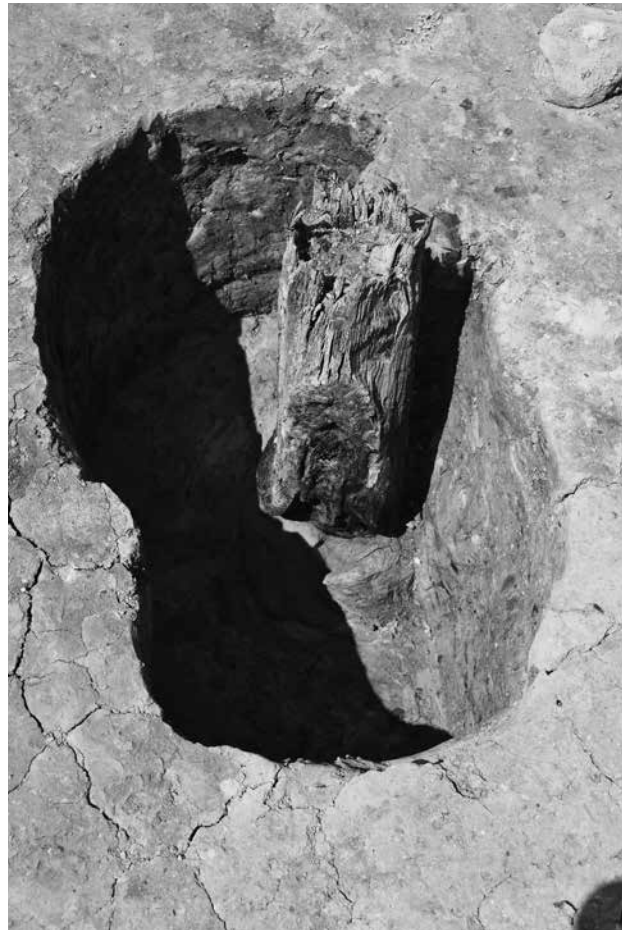
SD15全景 (南東から) ※左上は松江城



南西屋敷 第1遺構面SB07 (西から)



SB07柱穴・礎盤石検出状況接写 (北から)



SB07柱穴・柱材検出状況接写 (東から)



南西屋敷 第1遺構面
SX02 (西から)



南西屋敷 第2遺構面
(南西から)



南西屋敷 第2遺構面
SX03 (西から)



南西屋敷 第3遺構面 (南東から)



南西屋敷 第3遺構面SB10 (西から)



南西屋敷 第3遺構面SB10 (東から)



南西屋敷 第3遺構面SX04 (西から)



北東屋敷 第1遺構面 (東から)



北西屋敷～北東屋敷 第1遺構面 (北西から)



北東屋敷 第2遺構面 (南東から)



北東屋敷 第3遺構面 (東から) ※上は松江城



北東屋敷 第3遺構面SK17 (北から)



北東屋敷 第3遺構面SK17 (東から)



南東屋敷～北東屋敷
第1遺構面（南から）



南東屋敷 第1遺構面
（東から）



南東屋敷 基本層序土層断面
（北西から）



南東屋敷 第1遺構面
SB11 (東から)



南東屋敷 第2遺構面
(東から)



南東屋敷 第3遺構面
(北西から)



10-1



13-1



13-3



10-2



13-2

SD01 出土遺物

SD02 出土遺物



16-1



16-2



16-3



16-4



16-5



16-6



16-7



16-10



16-12



16-13



16-14



16-16



16-17



16-18



16-19

SD03 出土遺物 (1)

图版26



SD03 出土遺物 (2)



17-10



17-6



19-1



19-3



19-4



19-2



19-5



19-6



19-7



19-10



19-11



19-8



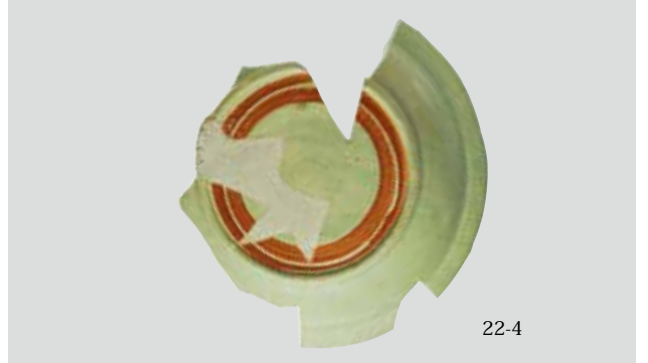
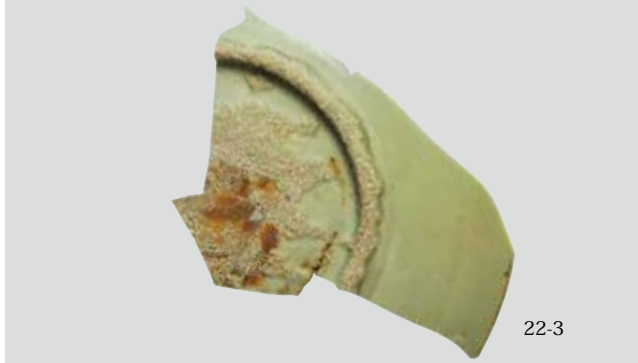
19-9



19-12



SD03 出土遺物 (4)





SD03 出土遺物 (6)



25-1



25-2



25-3



25-4



25-5



25-6



25-7



25-8



25-12



25-13



25-14•15



25-9



25-10



25-11



25-18



25-19



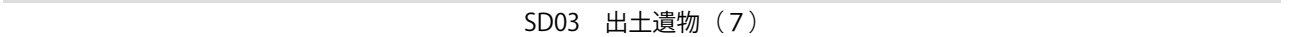
26-1



26-2



26-3

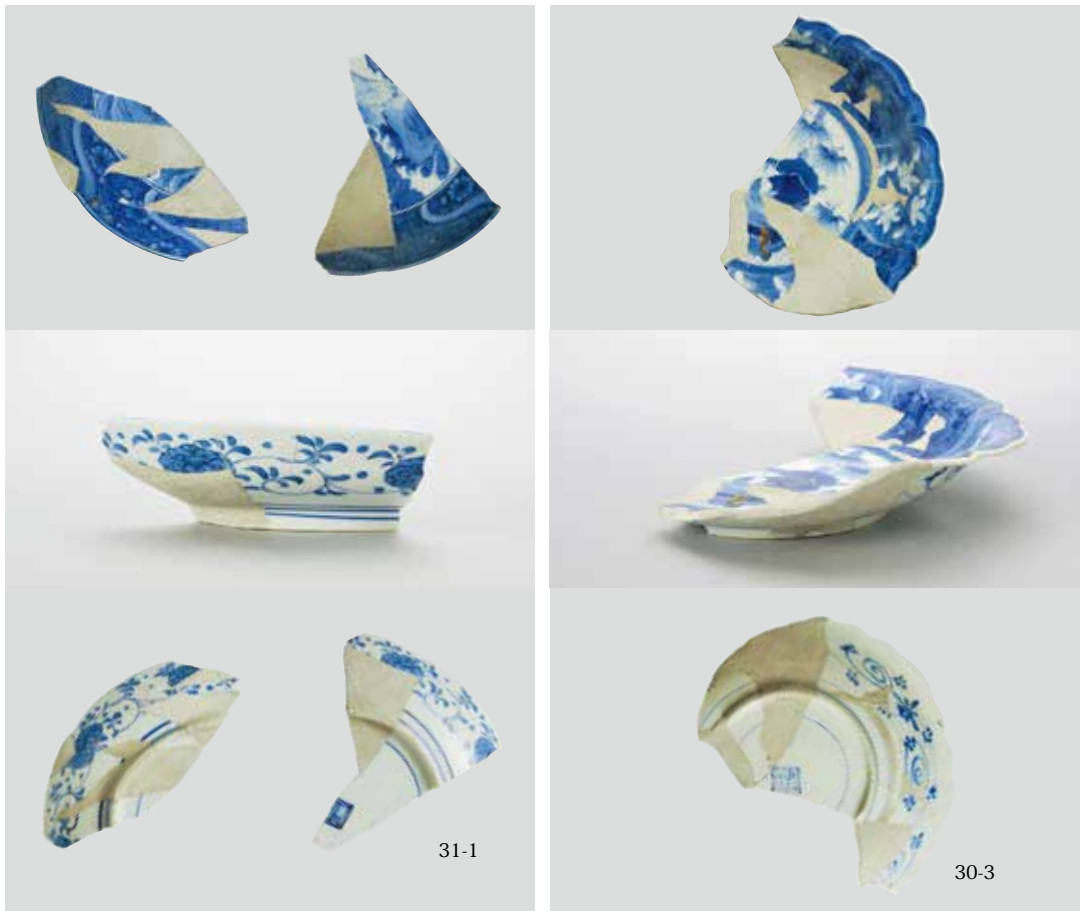


26-4

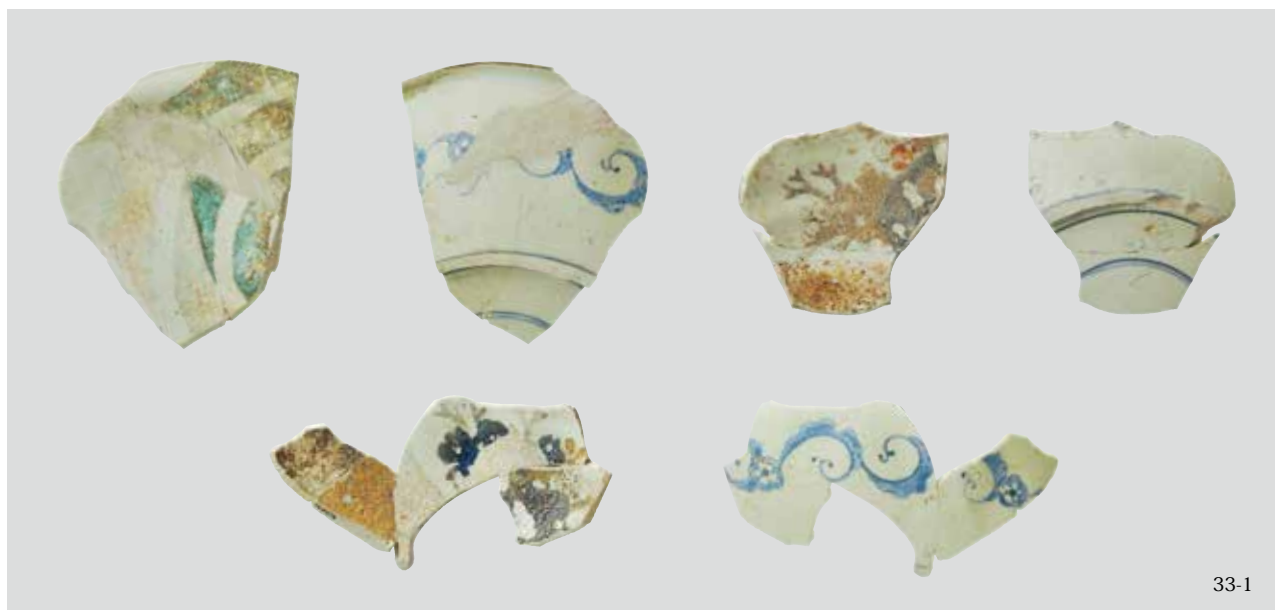
SD03 出土遺物 (7)



SK01 出土遺物 (1)



SK01 出土遺物 (2)



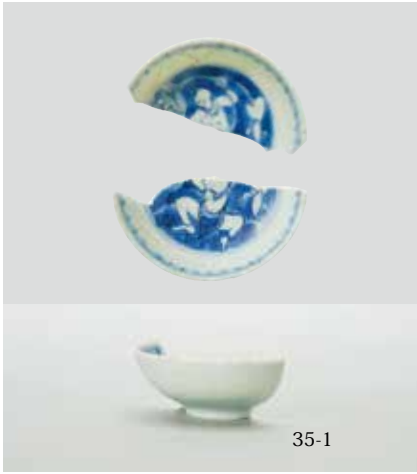
33-1



33-2



34-1



35-1



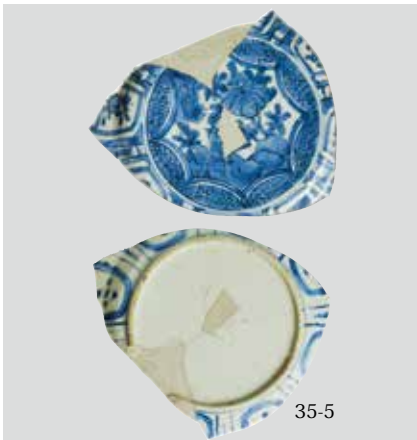
35-2



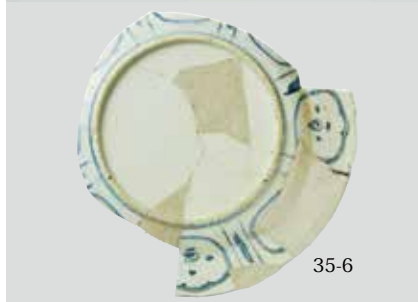
35-4



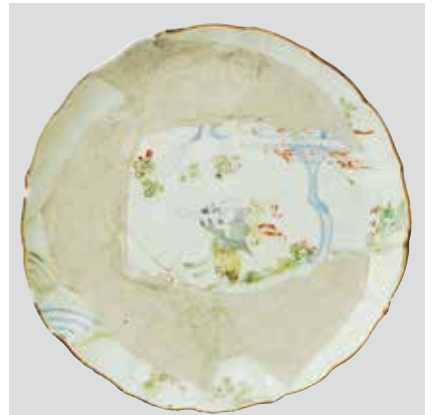
35-3



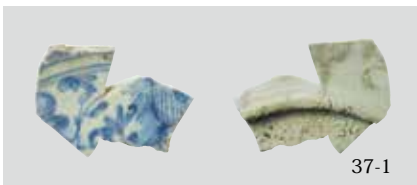
35-5



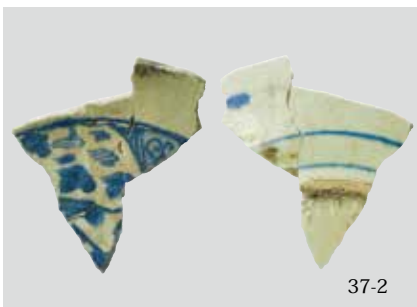
35-6



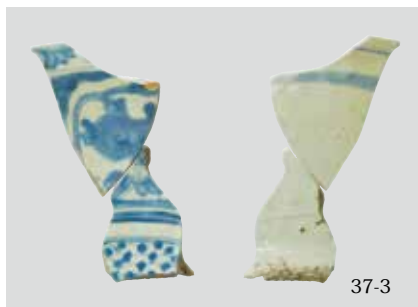
36-1



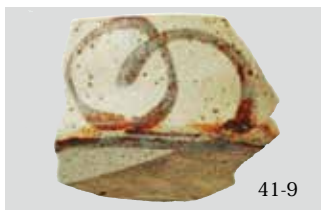
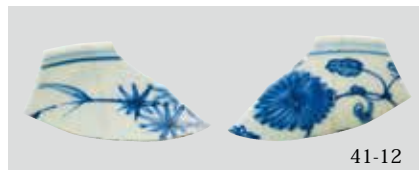
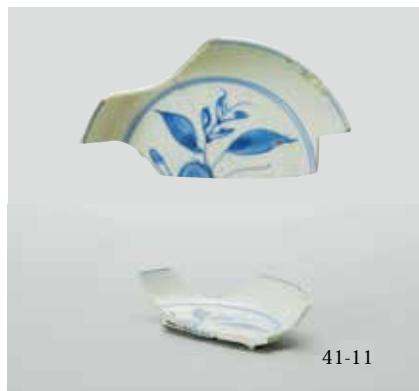
37-1



37-2



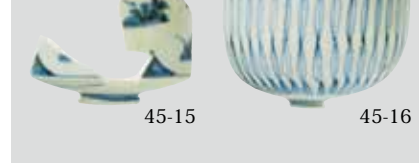
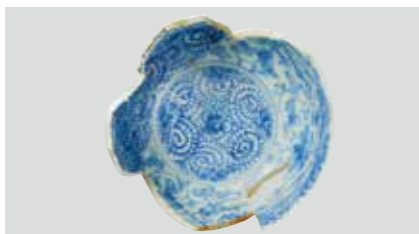
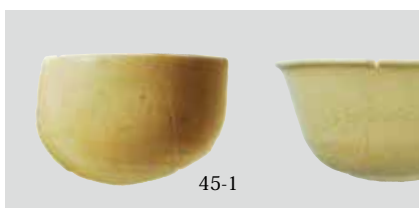
37-3



SD04 出土遺物



SD05 出土遺物 (1)



SD05 出土遺物 (2)



SD05 出土遺物 (3)



50-1



50-2



50-4



50-3



50-6



50-5



50-9



50-8



50-7



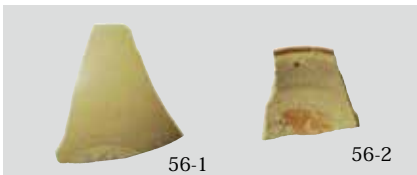
50-11



53-1

SD08 出土遺物

SD06 出土遺物



56-1

56-2



56-4



56-3

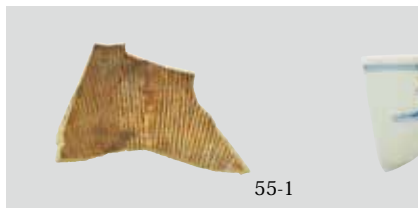
SD10 出土遺物



54-1



55-2



55-1



55-3



55-4

SD09 出土遺物

图版40



57-4



57-5



57-8



57-2



57-6



57-10



57-2



57-7



57-9



57-1

57-3



59-1



57-13



57-12

SD12 出土遺物



59-1

SD13 出土遺物



64-1

SK10 出土遺物



64-2



65-1



65-2



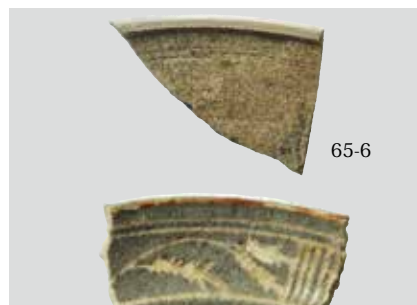
65-5



65-3



65-4



65-6



65-7



65-8



65-9



65-10



65-14



65-11



65-13



65-16

65-17

65-18

65-19

65-20

SK11 出土遺物



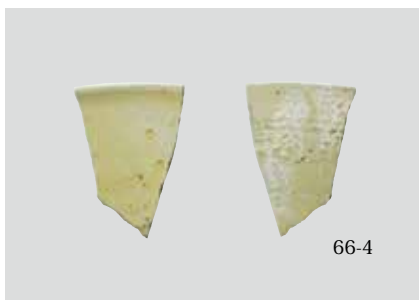
66-1



66-2



66-5



66-4



66-3



68-1

SK12 · 13 出土遺物

SB01 出土遺物



北西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物



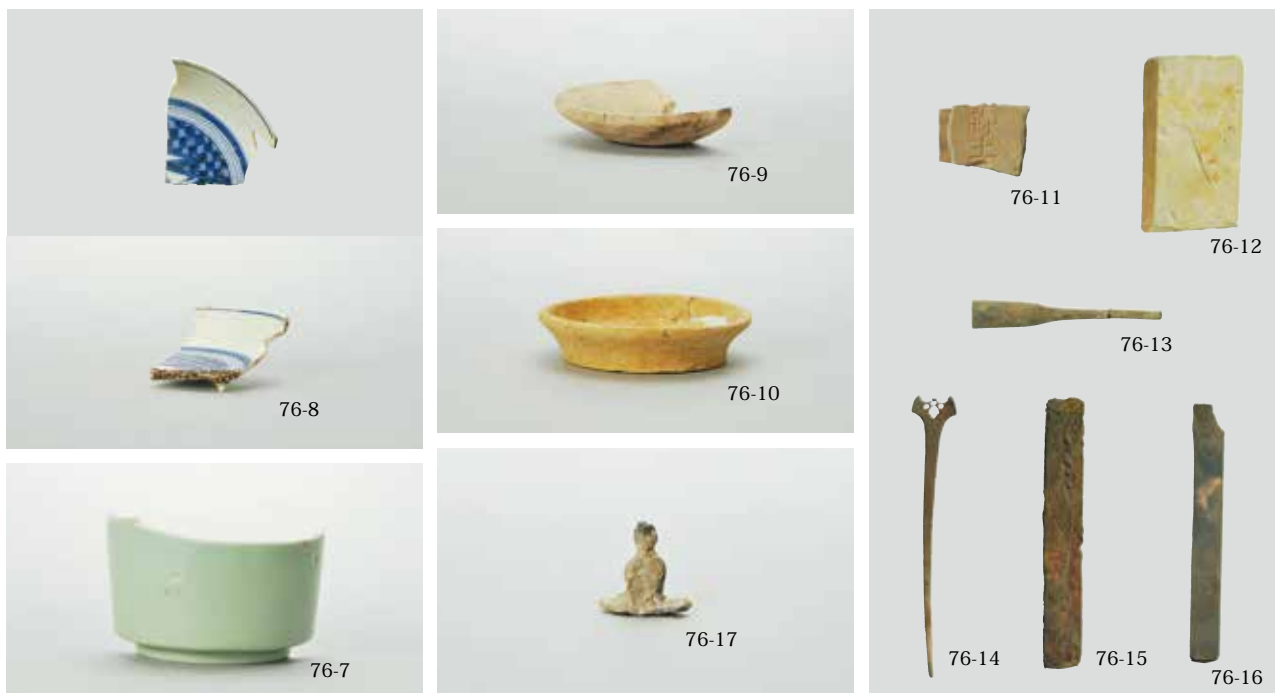
SK15 出土遺物 (1)



SK15 出土遺物 (2)



北西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物 (1)



北西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物 (2)



SD14 出土遺物 (1)



81-10



81-15



81-16



81-17



81-18



81-19



81-20



81-22



81-21



82-1



82-2



82-5·6



82-3



82-4



82-7



82-8



82-9



82-13



82-15



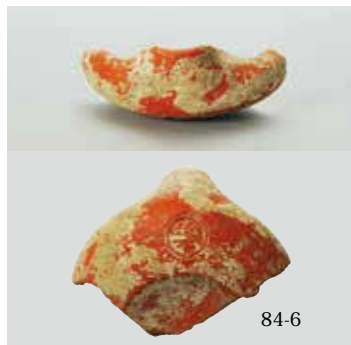
82-16



SD14 出土遺物 (3)



SD14 出土遺物 (4)



北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物 (1)

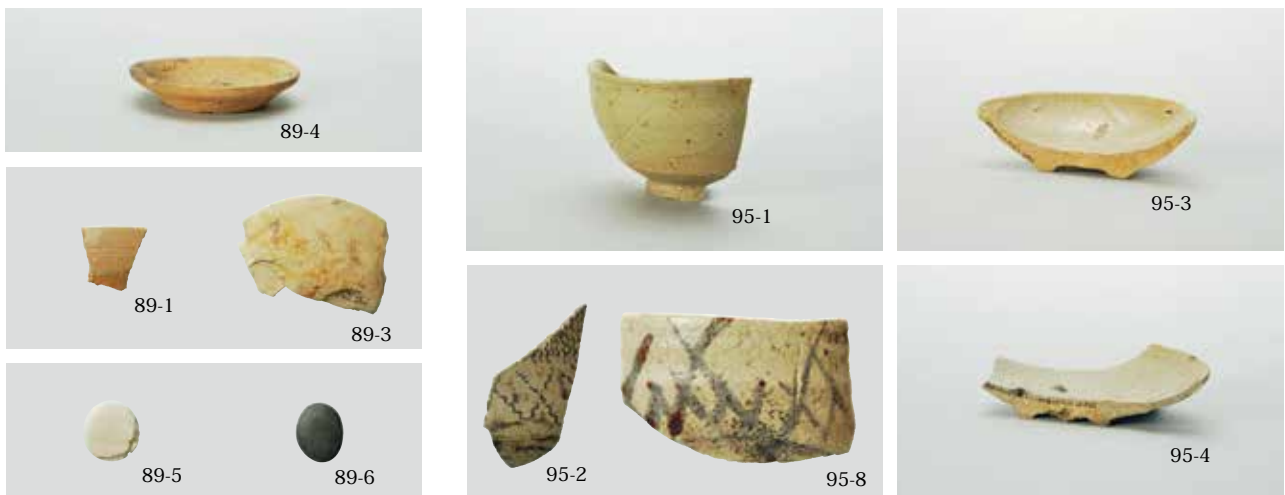


北西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物 (2)



SK06 出土遺物

SK07 出土遺物



SB06 出土遺物

SD15 出土遺物 (1)



SD15 出土遺物 (2)



SB07 出土遺物



南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物 (1)



南西屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(2)



103-1



103-2



103-5



103-3



103-9



103-10



103-4



103-6



103-12



103-7



103-8



103-11



103-13



103-14



103-15



103-17



103-18



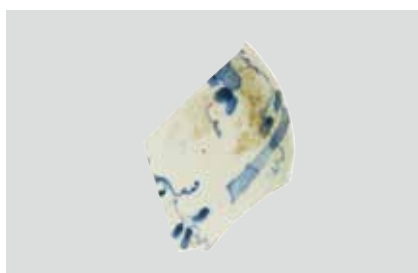
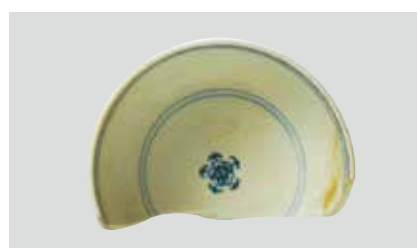
103-16



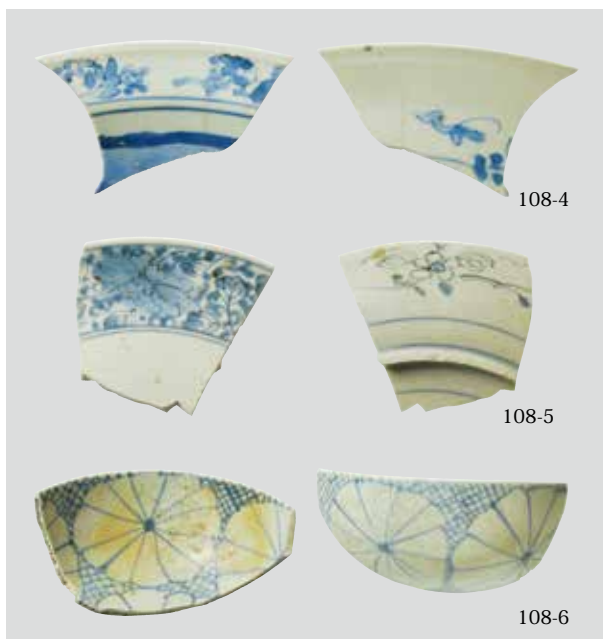
南西屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物



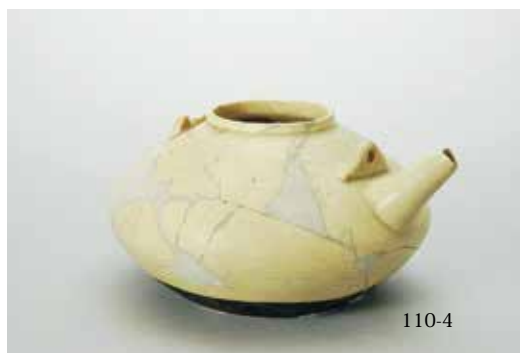
SB09 出土遺物



SB10 出土遺物 (1)



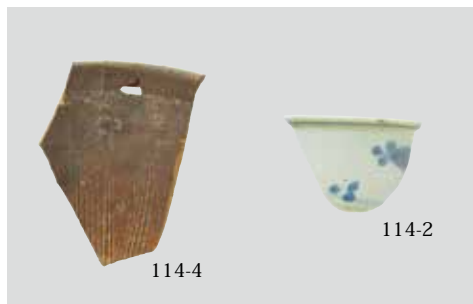
SB10 出土遺物 (2)



SK16 出土遺物



SX04 出土遺物



SX05 出土遺物



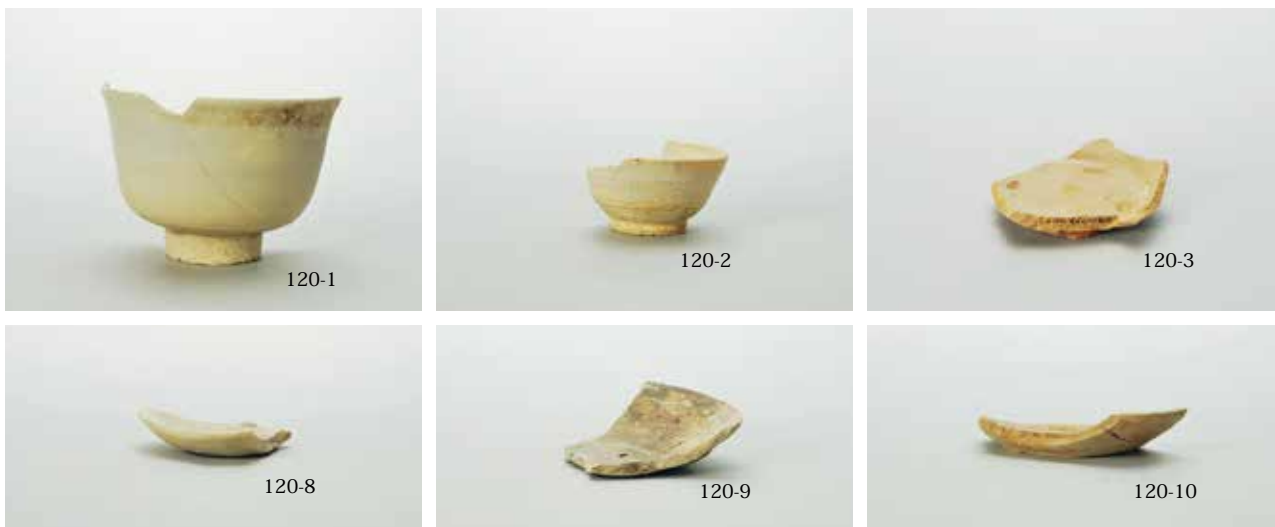
南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(1)



南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物(2)



南西屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物 (3)



北東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物 (1)



北東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物(2)



北東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物(1)



122-10



122-11



122-12

北東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物(2)



125-7



125-1



125-2



125-3



125-4



125-9



125-10



125-5



125-6



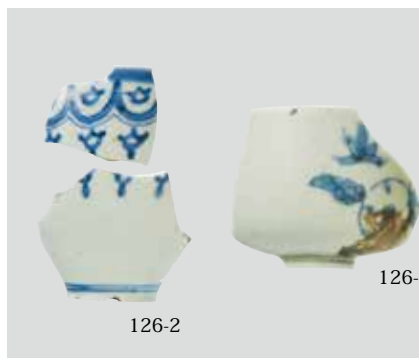
126-1



126-6



126-4



126-2

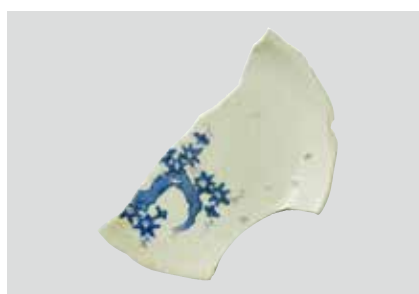


126-5



125-12

SK17 出土遺物



北東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物



131-1



131-2



131-3

南東屋敷 第1遺構面遺構外出土遺物



136-1



136-2



136-6



136-8



136-3

136-4

136-5

136-7

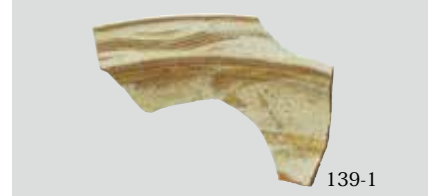
南東屋敷 第2遺構面遺構外出土遺物



139-2



139-3



139-1



139-5



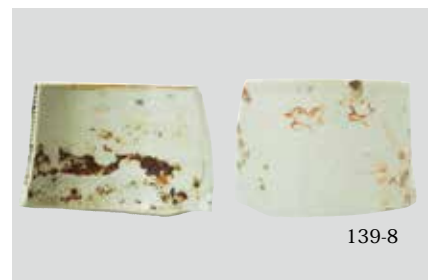
139-4



139-6



139-7



139-8

SK18 出土遺物 (1)



SK18 出土遺物 (2)



南東屋敷 第3遺構面遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まつえじょうかまちいせき（ほろまち68）						
書名	松江城下町遺跡（母衣町68）						
副書名	広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所合同庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第164集						
編著者名	秦 愛子						
編集機関所在地	島根県松江市教育委員会 （松江市 歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室） 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL：0852-55-5284						
	公益財団法人松江市スポーツ振興財団（埋蔵文化財課） 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL：0852-85-9210						
発行年月	2015年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
まつえじょうかまちいせき 松江城下町遺跡 （ほろまち68）	しまねけん 島根県 まつえし 松江市 ほろまち 母衣町 ほんち 68番地	32201	D1026- 45	35° 28' 26"	20111107 ～ 20121130	2,674㎡	裁判所新営 庁舎建設
				133° 03' 22"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
まつえじょうかまちいせき 松江城下町遺跡 （ほろまち68）	城下町遺跡	江戸時代 ～ 明治時代	屋敷境溝 大形土坑 掘立柱建物跡 礎石建物跡 溝 堀跡 土坑		陶器 磁器 土師器 土器 銭貨 木製品 金属製品 石製品 瓦	近世の武家屋敷の一 部を調査し、屋敷境 溝・建物跡・土坑・ 堀跡などを検出した。	

松江市文化財調査報告書 第164集

広島高等裁判所松江支部・松江地方・家庭・簡易裁判所
合同庁舎新営工事に伴う発掘調査報告書

松江城下町遺跡
(母衣町68)

平成27(2015)年3月

編集・発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印 刷 有限会社 黒潮社
島根県松江市向島町182-3